

ユーラシア草原地帯東部の初期騎馬遊牧文化の展開 過程

戴, 玥

<https://hdl.handle.net/2324/2235993>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (文学) , 課程博士
バージョン :
権利関係 :



博士学位論文

ユーラシア草原地帯東部の初期騎馬遊牧文化の展開過程

戴 珮

九州大学大学院人文科学府

平成31年1月

目 次

序 章 ユーラシア草原地帯東部における諸文化の展開.....	6
第一章 先行研究における課題と本研究の目的、方法.....	6
第1節 初期騎馬遊牧文化の展開過程に関する研究動向.....	6
1. 小地域単位の文化動態に関する研究.....	6
2. 広域間の地域関係に関する研究.....	10
第2節 青銅器の型式分類と編年の研究.....	16
1. 青銅短剣の型式分類と編年.....	16
2. 青銅刀子の型式分類と編年.....	19
3. 青銅鏃の型式分類と編年.....	23
4. 青銅轡の型式分類と編年.....	25
第3節 問題の所在.....	28
1. 初期騎馬遊牧文化の展開過程の研究における問題点.....	28
2. 青銅器の型式分類と編年の研究における問題点.....	30
3. 本論の問題の所在.....	33
第4節 資料・方法・目的.....	34
1. 本研究が扱う資料.....	34
2. 方法.....	35
3. 本論の目的.....	38
第二章 青銅短剣の展開と地域間関係.....	40
第1節 型式分類.....	42
1. 型式分類.....	42
2. 型式変化.....	46
第2節 編 年.....	47
1. 墓葬一括遺物での検討.....	47
2. 時期の設定.....	51
第3節 分布状況.....	53

1. 第Ⅰ期.....	53
2. 第Ⅱ期.....	54
第4節 青銅短剣の展開と地域間関係.....	57
第三章 青銅刀子の展開と地域間関係.....	60
第1節 型式分類.....	60
1. 型式分類.....	60
2. 型式変化.....	66
第2節 編年.....	66
1. 墓葬一括遺物での検討.....	66
2. 時期の設定.....	72
第3節 分布状況.....	74
1. 第Ⅰ期.....	74
2. 第Ⅱ期.....	75
第4節 青銅刀子の展開と地域間関係.....	78
第四章 青銅鏃の変遷にみる武器の機能的変化.....	81
第1節 型式分類.....	82
1. 型式分類.....	82
2. 型式変化.....	85
第2節 編年.....	88
1. 墓葬一括遺物での検討.....	88
2. 時期の設定.....	94
第3節 分布状況.....	96
1. 第Ⅰ期.....	96
2. 第Ⅱ期.....	96
3. 第Ⅲ期.....	97
第4節 青銅鏃の地域性と変遷.....	100
第5節 青銅鏃の変遷にみる武器の機能的変化.....	101
第五章 青銅轡の変遷にみる馬具の機能的変革.....	103
第1節 型式分類.....	104
1. 銜の型式分類.....	104

2. 鑣の型式分類.....	108
3. 銜と鑣との組み合わせ.....	109
第2節 編年.....	111
1. 墓葬一括遺物での検討.....	111
2. 時期の設定.....	117
第3節 分布状況.....	119
1. 第Ⅰ期.....	119
2. 第Ⅱ期.....	119
3. 第Ⅲ期.....	120
第4節 青銅轡の地域性と変遷.....	123
第5節 青銅轡の変遷にみる馬具の機能的変革.....	125
第六章 考察 ー初期騎馬遊牧文化の展開過程ー	127
第1節 青銅器の型式相互の時間的關係.....	127
1. 複数型式の一括遺物の検討.....	128
2. 時期の設定.....	130
第2節 青銅武器と馬具の展開過程.....	132
1. 第Ⅰ期ーカラスク文化の終末期とタガール文化の形成期ー.....	132
2. 第Ⅱ期ータガール文化の拡張ー.....	135
第3節 青銅武器と馬具にみる地域間関係.....	141
1. 第Ⅰ期（紀元前9～前7世紀）.....	141
2. 第Ⅱ期第1段階（紀元前6～前5世紀）ー東漸説の再検討ー.....	144
3. 第Ⅱ期第2段階（紀元前4～前3世紀）ー西漸説の再検討ー.....	148
第4節 初期騎馬遊牧文化の展開の要因.....	150
1. 環境の変動の概観.....	150
2. 社会の変革.....	154
3. 環境・社会と人間集団の移動.....	155
終章 結論 ーユーラシア草原地帯東部における初期騎馬遊牧文化の変遷過程ー	160

図版出典.....	166
表出典.....	170
参考文献.....	170

図版目次

第1-1図 ユーラシア大陸における草原地帯東部の位置.....	1
第1-2図 草原地帯東部の各段階における主要な議論.....	2
第1-3図 紀元前4千年紀以降の草原地帯における主要な考古学文化.....	4
第2-1図 紀元前1千年紀の草原地帯東部における主要な考古学文化.....	7
第2-2図 スキタイ集団の東方起源説における地域間関係の模式.....	14
第2-3図 東漸説における地域間関係の模式図.....	15
第2-4図 西漸説における地域間関係の模式.....	15
第2-5図 初期騎馬遊牧文化の遺跡位置.....	36
第3-1図 草原地帯東部における周辺地域の銅剣.....	41
第3-2図 青銅短剣の大別分類.....	42
第3-3図 カラスク式短剣の型式分類.....	44
第3-4図 アキナケス式短剣の型式分類.....	45
第3-5図 青銅短剣の編年図(縮尺不同).....	52
第3-6図 第Ⅰ-1期における青銅短剣の分布状況.....	55
第3-7図 第Ⅰ-2期における青銅短剣の分布状況.....	55
第3-8図 第Ⅱ-1期における青銅短剣の分布状況.....	56
第3-9図 第Ⅱ-2期における青銅短剣の分布状況.....	56
第3-10図 カラスク式短剣の展開の模式図.....	59
第3-11図 アキナケス式短剣の展開の模式図.....	59
第4-1図 青銅刀子の大別分類.....	61
第4-2図 カラスク式刀子の型式分類.....	63

第4-3図	タガール式刀子の型式分類.....	64
第4-4図	タガール式と玉皇廟式刀子の型式分類.....	65
第4-5図	青銅刀子の編年図.....	73
第4-6図	第Ⅰ-1期における青銅刀子の分布状況.....	76
第4-7図	第Ⅰ-2期における青銅刀子の分布状況.....	76
第4-8図	第Ⅱ-1期における青銅刀子の分布状況.....	77
第4-9図	第Ⅱ-2期における青銅刀子の分布状況.....	77
第4-10図	青銅製刀子の展開の模式図(1).....	80
第4-11図	青銅製刀子の展開の模式図(2).....	80
第5-1図	草原地帯東部における中原系の銅鏃.....	81
第5-2図	型式分類のための属性のバリエーション.....	84
第5-3図	草原地帯東部出土の銅鏃.....	87
第5-4図	銅鏃の編年図.....	95
第5-5図	第Ⅰ期における銅鏃の分布状況.....	98
第5-6図	第Ⅱ-1期における銅鏃の分布状況.....	98
第5-7図	第Ⅱ-2期における銅鏃の分布状況.....	99
第5-8図	第Ⅲ期における銅鏃の分布状況.....	99
第6-1図	銜と鑣を合わせて一体にした金属轡.....	104
第6-2図	馬具および金属製銜の構造.....	107
第6-3図	属性変異模式図(1).....	107
第6-4図	属性変異模式図(2).....	108
第6-5図	金属製轡の型式分類.....	110
第6-6図	金属製轡の編年図.....	118
第6-7図	第Ⅰ期における金属製銜と鑣の分布状況.....	121
第6-8図	第Ⅱ-1期における金属製銜と鑣の分布状況.....	121
第6-9図	第Ⅱ-2期における金属製銜と鑣の分布状況.....	122
第6-10図	第Ⅲ期における金属製銜と鑣の分布状況.....	122
第6-11図	金属製轡の展開の模式図.....	124

第7-1図	青銅武器と馬具の編年対応図.....	132
第7-2図	青銅武器と馬具の分布状況(第Ⅰ期第1段階).....	139
第7-3図	青銅武器と馬具の分布状況(第Ⅰ期第2段階).....	139
第7-4図	青銅武器と馬具の分布状況(第Ⅱ期第1段階).....	140
第7-5図	青銅武器と馬具の分布状況(第Ⅱ期第2段階).....	140
第7-6図	紀元前9～前7世紀における墓葬の中の青銅器組成と階層性.....	144
第7-7図	紀元前6～前5世紀における墓葬の中の青銅器組成と階層性.....	148
第7-8図	堆積物の調査が実施される湖(沼地)分布図.....	152
第7-9図	クトゼコヴォ湖にわたる湖底堆積物からみた気候変動.....	158
第7-10図	ルゴヴォエ沼地にわたる堆積物からみた気候変動.....	159
第8-1図	草原地帯東部の騎馬遊牧文化の展開過程.....	163

表目次

第2-1表	主要な青銅短剣の分類案.....	18
第2-2表	主要な青銅刀子の分類案.....	22
第3-1表	草原地帯東部における青銅短剣の諸型式の共伴関係.....	49
第4-1表	草原地帯東部における青銅刀子の諸型式の共伴関係.....	69
第5-1表	南シベリア・新疆における銅鏃の諸型式の共伴関係.....	91
第5-2表	長城地帯における銅鏃の諸型式の共伴関係.....	93
第6-1表	属性相関.....	108
第6-2表	銜と鏃の共伴関係.....	113

序 章 ユーラシア草原地帯東部における諸文化の展開

表題に掲げたユーラシア草原地帯（以下、草原地帯）とはドナウ川流域のハンガリー平原から東へ中国東北部の大興安嶺に至るユーラシア大陸の中央部に位置する地理的空間を指す。ここでは、草原地帯という用語は北の森林地帯の辺縁および南のモンゴル高原南縁、天山山脈、シル川、カフカス山脈に囲まれた地域を示す。草原地帯と呼ばれるものの、この空間は変化に乏しくて単調なものではなく、山岳と溪谷が起伏し、草原と砂漠が織り交ざり、多様な地域単位からなる非常に広大な地域であるといえる。したがって、こうした広大な地域は検討の便宜のためにさらに細分する可能性が存在する。本論では、草原地帯は地理的、文化史的にヴォルガ川、ウラル山脈の諸地理単位を中心に大きく東部と西部に二分する考え方が妥当と思われるから[藤川繁彦 1999]、ここでは藤川繁彦氏にしたがって西のウラル山脈から東の大興安嶺に至るまでに及ぶ空間を草原地帯東部に定義づけておきたい（第1-1図）。当然、このように定義づけされた草原地帯東部の範囲は静止なものではなく、時代によって絶えなく変化する動的なものである。



第1-1図 ユーラシア大陸における草原地帯東部の位置

もうひとつに表題に掲げた初期騎馬遊牧文化とは、ユーラシア大陸の草原地帯で青銅器時代末期から初期鉄器時代に転換する過程において、ミヌシンスク盆地、トゥバ地域、アルタイ山脈を中心として広範に出現した、馬に乗りながら遊動的牧畜という生業を営む人間集団の文化を指す。草原地帯の騎馬遊牧集団の考古学研究では、この時代は青銅器時代後期を嚆矢とする遊牧社会の形成から遊牧国家の成立（匈奴＝サルマタイ時期）に移る、紀元前1千年紀以降におけるスキタイ時期と呼ばれる騎馬遊牧文化の形成期に位置づけられる（第1-2図）。

年代		主要な議論
前4-前2千年紀	青銅器時代	新しい技術の伝播・人間集団の移動 (馬の家畜化・車両・青銅器)
前1千年紀	初期鉄器時代 (スキタイ時期)	騎馬遊牧社会の形成 (スキタイ三要素・大型墳墓)
前3世紀-2世紀	匈奴=サルマタイ時期	騎馬遊牧国家の出現 (大型墳墓・景観調査)

第1-2図 草原地帯東部の各段階における主要な議論

第1-3図は草原地帯における諸地域の考古学文化の併行関係を表現したものである。まず、草原地帯における青銅器文化の起源と系譜の検討は紀元前4千年紀以降の草原地帯における考古学文化という時空間の枠組みの中で行った。具体的には、こうした形成過程のなかで、馬の家畜化・軽い車両の出現・青銅器の伝播について論じた。これらの物質文化の要素は西あるいは南から東方へ伝播した。そして、物質文化の要素の広がり人間集団の拡散と関連すると考えられる。

家畜化の馬の広がりに関しては、草原地帯における牧畜農耕民が後期新石器時代～青銅器時代の黒海沿岸から馬に乗りながらヨーロッパ大陸へ広がってきたというギムブタスの有名な学説がある[Gimbutas 1970]。この学説に対しては、ドニエプル川下流域のデレイフカ遺跡から検出されたおびただしい馬の骨を踏まえ、ギムブタス学説を考古学的に支持できるとするものもあった[Anthony, Brown 1991]。もうひとつは、家畜化された馬が紀元前4千年紀前半における黒海沿岸から東へカザフスタン北部のボタイ遺跡

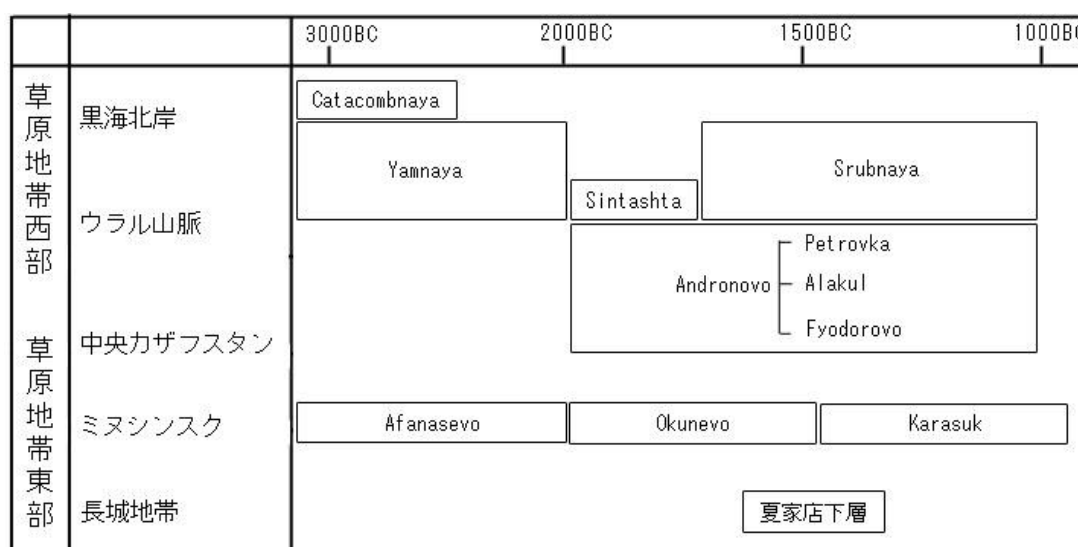
(Botai-Tersek 文化) を経て南シベリアへ広がってきたというアンソニーらの学説である [Anthony, Brown 2011]。この学説に対しては、馬の下顎骨と第二臼歯の病理学的な観察や脂肪の検出を踏まえ、ボタイ＝テルセク文化の馬が食肉・搾乳・牽引・騎乗などの多様な利用に使われてきたことが明らかになった [Olsen 2003, Travis 2008, Outram et al. 2009]。

車両・青銅器の広がりに関しては、軽い戦車を乗りながら青銅武器をもった戦士集団が紀元前 2 千年紀前半にヨーロッパ大陸へ広がってきたこととする学説が存在している [Anthony, Vinogradov 1995, Zdanovich, Zdanovich 2002, Kuznetsov 2006, Hanks, Epimakhov, Renfrew 2007]。戦士集団の移動の証拠とするのは、長い距離に移動することが可能になったスポーク式の軽い車両、二枚の鋳型で製作した青銅武器、防衛的な壁に囲まれた鋳造工房などがウラル山脈付近に位置するシンタシタ文化から検出された。

ところが紀元前 2 千年紀の草原地帯東部においても、草原地帯の青銅器文化の東方への拡張が広く展開する。こうした青銅器文化の拡張の問題は歴史展開の基盤とする東アジア初期青銅器文化の二項対立的構造の枠組みの中で検討した [小林青樹 2014]。いわゆる二項対立的構造とは、紀元前 2 千年紀後半に殷王朝や周王朝という新しい社会システムは、草原地帯との関連が強い新疆や長城地帯の牧畜型農耕社会と青銅礼器を中心とする農耕社会との対立に生まれる [宮本一夫 2005]。こうした草原地帯との関連性を表現した青銅器とする、有蓋矛・一端がラッパ状に呈してもう一端が尖った耳飾りなどのセイマ・トルビノ青銅器文化圏やユーラシア冶金圏の伝播は、新疆、長城地帯で農耕社会へ欠落的に広がり、二項対立的構造に対応することとする [宮本一夫 2008b, 松本圭太 2011]。また、ミヌシンスク盆地では紀元前 2 千年紀後期からカラスク文化が成立する。こうしたカラスク文化と関連を示した短剣・刀子の存在は、中原地域や黒海北岸、ウラル山脈においても確認される [高浜秀 1982, 松本圭太 2011]。ミヌシンスク盆地から草原地帯全体にわたるカラスク文化的な一体性が発生することとする [林俊雄 2000, 松本圭太 2016]。

次に、草原地帯における初期鉄器文化（騎馬遊牧文化）の検討は地域集団ないしは民族の勃興として古代史を理解しようとしたものである。詳しくは黒海北岸でのスキタイ→サウロマタイ→サルマタイ、中央アジアでのサカといったギリシャ・アッシリアに記された古族が草原地帯で並立していたと主張した。ヘロドトスによれば、スキタイは紀元前 7 世紀頃に黒海北岸のキンメリオイを駆逐して西アジアに進出し、紀元前 7 世紀末～前 6 世紀初頭に西アジアから北カフカスへ帰還し、ドン川からドナウ川に至る黒海北岸を支配した。サルマタイは紀元前 4 世紀にヴォルガ川からドン川下流域までいるサウロマタイを駆逐

し、前2世紀初頭にドン川を越えて黒海北岸を支配した。このような地域文化の民族歴史を復元しようとした枠組みの中で、馬・戦車・冶金術といった青銅器文化の展開を嚆矢として、本格的な騎馬遊牧が草原全体で快速に広がってきたもとに紀元前1千年紀以降に急劇に文化的・社会的変化が起きた[雪嶋宏一 1999, Koryakova, Epimakhov 2007]。こうした変化は、青銅武器、金属馬具、動物文様、鍔、鈕付き鏡といった相似する物質文化の要素が草原地帯全体にわたって広がってきたこと、飛び抜けて豊かな副葬品をもった大型墳墓が草原地帯の複数の地域で現れてきたことに表現された。



第1-3図 紀元前4千年紀以降の草原地帯における主要な考古学文化

武器、馬具、動物文様といった物質文化の要素の拡散に関しては、騎馬遊牧集団（スキタイ集団）の起源とその拡張と関連するという見方がある。そして騎馬遊牧集団（スキタイ集団）の起源は、草原地帯西部よりも、東部のほうが早かったと考えられる。これらの物質文化の要素は紀元前1千年紀以降に東から西方へ伝播した。有名な学説は、草原地帯東部で形成していた埋葬形態、埋葬礼儀、武器、馬具、動物文様などといった文化要素が黒海北岸に持ち込まれていた、というスキタイ集団の東方起源説である[Bokovenko 1996]。この学説に対しては、草原地帯東部から黒海北岸へ広がってきた人間集団の拡張は気候の変動や人口の増加の背景下で発生したものとする仮説もあった[Geel, Bokovenko et al. 2004, Ludmila Koryakova 2010]。この仮説は騎馬遊牧集団とされる草原地帯東部のタガール文化の起源と関連している[Bokovenko 2005]。

大型墳墓の出現に関しては、集団的な労働力を必要とすることから、巨大な墳丘をもった大型墳墓の存在を指標として草原地帯における初期王権の成立を考える論考がある[高浜秀 2003, Hayashi Toshio 2010]。こうした草原地帯の墳墓は規模の大小や副葬品の質と量で差異が存在しており、地上墓から地下墓へ移行する構造の方面で相同の変化を示している[林俊雄 2003]。こうした埋葬形態や埋葬礼儀の差格に対しては、武器や馬具の副葬から組織化された騎馬遊牧社会を支える戦士階層の形成を考える論考も存在している[Hanks 2002, Ludmila Koryakova 2010]。初期鉄器時代は階層化された騎馬遊牧社会が成立する最も重要な時期と考えられるが、論考がきわめて断片的な情報しか得られない。

いっぽう、紀元前3～紀元2世紀に、長距離の交換や富の集中、墳墓構造の複雑、社会組織の統合に伴い、初期鉄器時代の騎馬遊牧社会の階層化を基礎として初期国家（匈奴）が草原地帯東部に形成する[Honeychurch 2013]。世界史の再構築を目指す歴史学界では、騎馬遊牧の国家組織が何時から如何に生まれたかという問題が取り組まなければならない。歴史的発展の外的視点からみれば、騎馬遊牧国家の出現は草原地帯の騎馬遊牧集団と湿潤地帯の農耕集団が相互に依存する二項対立の結果とするものがある[Lattimore 1940, Barfield 1992]。歴史的発展の内的視点からみれば、騎馬遊牧国家の出現は経済の手段よりも軍事力への階層化を強化した結果とするものも存在している[Barfield 2001, Di Cosmo 2002]。こうした騎馬遊牧国家の出現は歴史学や人類学的分析からは可能性があるが、考古学的には実証的な論証に欠けている。

以上のように遊牧社会の形成～遊牧国家の成立は紀元前4千年紀から草原地帯全体において数千年以上を経て諸要素が、徐々に総合的な役割を果たした結果と考えられる。とくに遊牧社会ないし遊牧国家がはじめて出現した草原地帯東部においては、さまざまな諸文化要素の展開の様相に対する検討の重要性が高い。また、遊牧社会から農耕社会へ過渡する長城地帯を含む草原地帯東部においては、遊牧国家の成立の直前に遊牧文化が紀元前2千年紀前半から既に形成した二項対立的構造をもった歴史展開の過程の中でどのように変化するかという問題の検討は意義がある。すなわち問題の中核となるのは、草原地帯東部における騎馬遊牧集団の文化動態の具体像を検討するものである。こうした文化動態の具体像の研究の中では、遊牧社会の階層化に関連する戦士階層を表現した青銅武器、遠距離の移動が可能となる金属馬具は非常に重要な役割を持ち、草原地帯東部における基礎的動態を把握する指標になりうると考えられる。

第一章 先行研究における課題と本研究の目的、方法

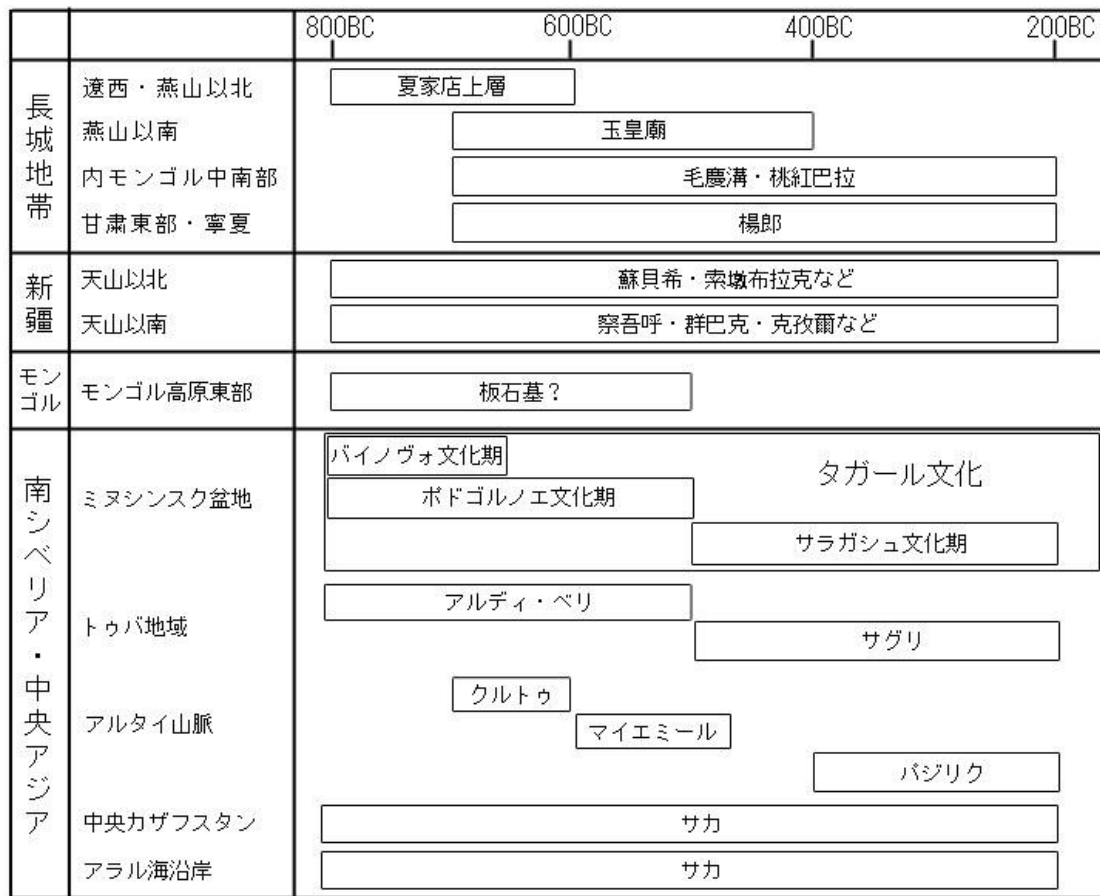
第1節 初期騎馬遊牧文化の展開過程に関する研究動向

1. 小地域単位の文化動態に関する研究

草原地帯東部とは東の大興安嶺から西へウラル山脈に至るまで広がっている広い地域と指しており、詳しく述べれば、長城地帯、新疆ウイグル族自治区（以下、新疆）、モンゴル高原、南シベリア、中央アジアなどのいくつかの小地域を含んでいる。初期騎馬遊牧文化の考古学的研究の出発点に立ってもう一度に必要な研究史の展開の過程を理解するため、何よりもまず各地域の文化動態の整理をしなければならない。草原地帯東部を研究対象とした全体規模の時空的枠組みがこれまで構築されていなかったが、各国の学者は異なる学史、資料、方法によって各自の小地域単位において考古学文化といった研究の枠組みを築いてきた。一般に、いわゆる考古学文化とは土器をはじめとした青銅器や墓葬構造などのさまざまな物質文化の相似性と差異性によって、研究の枠組みとしての時・空間的軸を築くために設定するものを指す〔松本圭太 2013〕。草原地帯東部においては、各地域の考古学文化の編年研究のため、青銅器を含んでいた各種各様の物質文化の形態的特徴が既に検討された。現在、初期騎馬遊牧民文化の研究史を振り返っていけば、これらの考古学文化を単に付け加えていく概観的で包括的な記述が多い〔Мошкова 1992, Davis-Kimball 1995, 藤川繁彦 1999, Christian 1998〕。こうした概観的で包括的な記述を踏まえて草原地帯東部の初期騎馬遊牧民文化と認められた考古学文化を第2-1図のように整理する。

（1） 長城地帯における文化動態の研究

長城地帯においては青銅器時代以降の考古学文化を扱った概観的で包括的な記述には烏恩岳斯図の研究がある〔烏恩岳斯図 2007〕。初期鉄器時代以降の考古学文化は物質文化の相似性と差異性を踏まえて遼西地域の夏家店上層文化、燕山山脈の玉皇廟文化、内蒙古中南部の毛慶溝/桃紅巴拉文化、甘粛東部・寧夏南部の楊郎文化に分けられている。考古学文化の編年学位置からみると夏家店上層文化の相対年代が最も古いと考えられる。ほかの玉皇廟文化、毛慶溝/桃紅巴拉文化、楊郎文化の相対年代がやや新しい。



第 2-1 図 紀元前 1 千年紀の草原地帯東部における主要な考古学文化

夏家店上層文化以降、長城地帯の地域的特質の顕著化に伴い、燕山山脈、内モンゴル中南部、甘肅東部から寧夏にかけての隴山地域といった三つの大きな地域の内部においては、青銅器と副葬土器の型式学的分析によって個々の地域の対象資料（墓葬が主体である）が細分された可能性がある[宮本一夫 1999a, b]。あるいは、これらの対象資料は青銅器をはじめとした物質文化の地域的特質を踏まえて二つの大きな地域およびいくつかの小さいグループに分けられており、これらの小さいグループは燕や趙、秦国の長城の南北に沿って分布していたことから長城地帯内部における重層構造も指摘された[林漢 2008, 楊建華 2009, 単月英 2015]。もちろん、これらの対象資料を古代典籍に記載されていた部族名に当てはめることで長城地帯の考古学文化の形成とその展開を検討する内容も少なくない[林漢 2008, 楊建華 2009, 単月英 2015]。

(2) 新疆ウイグル自治区における文化動態の研究

新疆においては青銅器時代以降の考古学文化を扱った概観的で包括的な検討が多い[水涛 2001, 韓建業 2007, 邵会秋 2007, 郭物 2012]。初期鉄器時代以降の考古学文化は同じく物質文化の相似性と差異性を踏まえて天山以北の蘇貝希文化や墩索布拉克文化などおよび察吾呼文化、群巴克文化、克孜爾文化などにおもに分けられている。しかし、これらの初期鉄器時代以降の考古学文化がよく一つの総体とされて分析が進んでおり、新疆全体規模の考古学文化の時期区分が十分検討されていなかった。

新疆の考古学文化の研究は考古学文化といった時空的枠組み下で小地域間の交流や影響関係をめぐって進んでいる。とりわけ、新疆周辺の地域と相似する文化要素の存在を踏まえて何らかの交流や影響の関係を示唆するものがとても多い[水涛 2001, 韓建業 2007, 邵会秋 2007, 郭物 2012]。たとえば、蘇貝希文化の動物文飾板や察吾呼文化の馬具などの文化要素は新疆以北の草原地帯の考古学文化からの影響を強く受容していたこと[韓建業 2007, 2008, 邵会秋 2007]、あるいは青銅製鍔などの大型容器は隣接するセミレチェ地域から新疆のイリ河流域へ広がりながら、逆に木製容器、金属製刀子、羊の骨といった副葬品セットは新疆のイリ河流域から隣接するセミレチェ地域へ拡張してきたことがある[Mei Jianjun 2000, 田中裕子 2013]。

(3) モンゴル高原・ザバイカリエにおける文化動態の研究

モンゴル高原・ザバイカリエにおいては、考古学文化といった時空間的な枠組みとともに遺物の型式分類と編年の研究においても、科学的な発掘例が少なかったり盗掘されたりしており、あるいは青銅器などの具体的な物質資料の形態的特徴および共伴関係が公開されていないことから、これらの地域の研究は長城地帯ないしはミヌシンスク盆地に比べて遅れたものと考えられる。モンゴル高原における物質資料の形態と年代がほとんど不明瞭であるといえる。しかも、初期騎馬遊牧文化の勃興した時期、すなわち紀元前1千年紀初期頃においては、この地域には、ヘレクスール、板石墓という二種類の遺構が知られている。それらがそれぞれ異なった文化に属するのかどうかは明らかになっていないが、少なくともツビクタロフ氏によってヘレクスールと板石墓は分布地域がいくぶん相違していることから別々の文化に属することは問題がないだろう。ツビクタロフ氏の研究によれば、ヘレクスールはモンゴル高原の西部に、板石墓はモンゴル高原の東部に分布し、両者の分

布地域がモンゴル高原の中部で重なっているものおよび、ヘレクスールと板石墓との年代が大体同じで前2千年紀の後半から紀元前6世紀頃に至るものと指摘した[Цыбиктаров 1998]。しかし、近年放射性炭素年代測定の結果によれば、ヘレクスールの年代が比較的古いもの、典型的な板石墓が比較的に新しいものと考えられている[宮本一夫 2016a]。また、モンゴル高原の西部を中心に分布するヘレクスールについて、ツビクタロフ氏は円形の石積みのヘレクスールを取り囲んでいる列石をアルジャン1号墳のものなどと比較しているが[Цыбиктаров 1998]、ヘレクスールとモンゴル高原周辺に位置するミヌシンスク盆地やアルタイ山脈の墓葬構造との関係が検討されていない。とりわけモンゴル高原の西北部のウランゴムにおいても、トゥバ地域の考古学文化ときわめて相似したものが見られている。いっぽう、モンゴル高原の東部と南部、そしてザバイカリエを中心に分布する典型的な板石墓について、宮本一夫氏はソスノフスキーによる分類案の上で墓葬の系譜的な変遷やその地域間関係に着目して検討を行った[宮本一夫 2016a]。

(4) 南シベリア・中央アジアにおける文化動態の研究

青銅武器（短剣・三翼鏃）、金属馬具（鐙形銜・鐙）、スキタイ風動物文様といったいわゆるスキタイの3要素(Scythian Triad)の方面での相似性によってミヌシンスク盆地、トゥバ地域、アルタイ山脈、中央カザフスタン、アラル海沿岸といった広い地域における初期騎馬遊牧文化がスキタイ系文化あるいはスキタイ＝シベリア文化とも呼ばれる。本来、スキタイといった用語は、アッシリア、ギリシャ、ローマ史料に記載された、紀元前7世紀後半から紀元後3世紀にかけて、北カフカスから黒海北岸の草原で遊牧国家を経営して近隣の諸民族を支配する、単なる古代の民族名のみとも指す。ここでは、いわゆるスキタイ系文化あるいはスキタイ＝シベリア文化は、これらの地域の初期騎馬遊牧文化を古代の文献に記載された民族名に当て嵌めており、スキタイという用語の広義の意味を用いるものである。しかも、現今の学史的な観点から配慮するなら、このように草原地帯の騎馬遊牧文化を農耕地域における古代の典籍に記載された民族名に当て嵌めることが問題があるかどうか検討する余地がある[Bashilov, Yablonsky 2000]。

いっぽう、これらの騎馬遊牧文化の様相には地域性を示すと考えられるさまざまな特質的なものが存在すると認められる。各地域の考古学文化においては、物質文化の形態的特徴の比較を踏まえて考古学文化の時期区分がそれぞれ行われる（第2－1図）。現在、南

シベリア考古学で一般に使用されている騎馬遊牧文化の時期区分はグリャズノフ氏の編年案である。グリャズノフ氏はミヌシンスク盆地の資料を基礎としてタガール文化を4期に区分する〔Грязнов 1968〕。タガール文化の前半はバイノヴォ期、ポドゴルノエ期、後半はサラガシュ期、テシ期とされる。また最新の放射性炭素年代測定の結果によれば、従来に物質文化の形態的特徴の比較に基づく年代観を溯る観点が多い〔Aleksseev, Bokovenko etc. 2001〕。各期の年代については、バイノヴォ期が紀元前10世紀末～前8世紀、ポドゴルノエ期が紀元前8～前6世紀、サラガシュ期が紀元前6～前3世紀、テシ期が紀元前2～紀元1世紀と考えられる〔Bokovenko 2005〕。最近の放射性炭素年代測定の結果によれば、ポドゴルノエ期の始まりは紀元前10世紀末～前8世紀に遡る場合もある〔Kuzmin 2008〕。しかしながら、資料の数量と出土状況の情報が乏しいため、物質文化の形態的特徴に関してもその詳しい検討は現在に至って相変わらず沈黙の状況にあるといわざるを得ない。先行研究では各期における物質文化の発展過程の解明を目指し、墓制、副葬品を含む発掘資料を中心に概観的な検討を行っているが、そのうち各期の間の文化の連続性については多様な見解がある。ボコヴェンコ氏は墓制の連続性によって、タガール文化の起源は環境変動と金属製馬具の出現の背景の下で、バイノヴォ期の遺存と在地の後期カラスク文化の連続性に求められることが考えられている〔Bokovenko 2005〕。いっぽう、ラザレトフ氏はバイノヴォ期の遺存を、カラスク文化末期段階の要素を含むバイノヴォ型と、前期タガール文化の要素を含むポドゴルノエ型に分ける。スキタイ風動物文様の有無と副葬土器の形態によって、氏はバイノヴォ型とポドゴルノエ型の文化内容の不連続性を指摘し、タガール文化に従来含められてきたバイノヴォ型の遺存をタガール文化からカラスク文化（ルガフスカヤ Lugavskaya 文化とも呼ぶ）として区別することが主張する。ポドゴルノエ型の遺存がカザフスタンあるいはモンゴル高原西部からの外来要素によるものと考えられている〔Лазаретов 2007〕。

2. 広域間の地域関係に関する研究

紀元前1千年紀とは草原地帯東部全体を覆う諸騎馬遊牧文化の融合や拡散がさまざまな要素において発生した時代である。そのため、長城地帯、新疆、モンゴル高原・南シベリア・中央アジアなどの個々の地域において、各種の物質資料の中にはほかの地域からの文化要素が少なくなくあることが認められる。この現象の中心を占めるのは地域間影響の方向性に関わる問題であり、それは南シベリア（中央アジア）とその以東の長城地帯（中

原地域)を舞台とするのである。大きくは3種類の説が唱えられている。

(1) 騎馬遊牧文化の普及(草原地帯東部⇒黒海北岸)

スキタイ集団が登場する以前の先スキタイ時代には草原地帯東部の文化の遺物はすでに黒海北岸であらわれていた。草原地帯東部の文化の遺物が黒海北岸に流入している指標として、ミヌシンスク盆地の後期カラスク文化の遺物とされる短剣、刀子、戦斧、鹿石、銅鍔などをあげられる。まずはカラスク文化の短剣に特徴的なキノコ形の柄頭をもつ青銅剣(銅柄鉄剣)がウクライナとウラル川上流域のスルブナヤ遺跡で発見されている。これらの青銅剣が草原地帯西部の先スキタイ時代の剣の祖型と考えられる[Тереножкин 1975]。次に後期カラスク文化ータガール文化移行期とされる半円形の柄頭をもつ刀子は北カフカス、ドン川下流域、ヴォルガ川中流域などから発見されており、カラスク文化の戦斧はモスクワ地域西北部で出土している[高浜秀 1979]。また表面にカラスク型の短剣が彫り込んである鹿石はウラルから黒海北岸にかけての先スキタイ時代の遺跡で検出されている。北カフカスの遺跡にも西周時代後期の中国北方と類似した銅鍔が発見されている[雪嶋宏一 1999, 林俊雄 2000]。これらの遺物は草原地帯東部から伝わったものと考えられている。

先スキタイ時代には黒海北岸の文化の遺物がチェルノゴロフカ型とノヴォチェルカッスク型に区分されている。両者の遺物の差は青銅鏃と銜に示されている[林俊雄 2000]。両者の鏃はいずれも平面形が菱形あるいは葉形を呈している穂袋式の両翼鏃であるが、前者より後者の穂袋が長いと考えられている。また、チェルノゴロフカ型とノヴォチェルカッスク型の青銅銜はいずれも二枝式であるが、前者の外環は鐙形を呈しており、後者の外環は8字形を呈している。両文化の起源について、研究者はチェルノゴロフカ型を在地のキンメリオイ集団の遺物とみなし、ノヴォチェルカッスク型を東方から来たスキタイ集団の遺物とするが[Тереножкин 1965]、前者と南シベリアのアルジャン古墳出土の遺物との相似性に着目し、チェルノゴロフカ型をスキタイ集団の遺物とする説もある[Иессен 1953]。

前期スキタイ時代の有名な学説として、スキタイ集団の東方起源説は、草原地帯東部で形成したスキタイ文化、すなわち騎馬遊牧文化が紀元前8～前7世紀に黒海北岸へ広まったと考える[Bokovenko 1996](第2-2図)。このような騎馬遊牧文化が草原地帯東部か

ら草原地帯を通して草原地帯西部へ広まっていたことは、埋葬形態、埋葬礼儀、武器、馬具、動物文様など、物質文化の諸要素の伝播から推測することができる[Bokovenko 1996]。こうした東方から西方にかけての文化要素の伝播は人間集団(南シベリアのスキタイ集団あるいは前期タガール文化)の移動に伴っていたと説明される[Bokovenko 1996, Koryakova 2010]。また、このような紀元前8～前7世紀の草原地帯西部への人間集団の移動が気候の変動と人口の増加と結び付けられる[Bokovenko 2004, 2005, Koryakova 2010]。

人間集団の移動の原因として、気候の変動とは、草原地帯全体が紀元前1000年頃に完新世晩期の乾燥段階から湿潤段階に入ったことを指す[Koryakova, Epimakhov 2007]。紀元前8～前7世紀に南シベリアで気候の湿潤化が始まったことは、太陽活動[Geel etc al.2004]、湖底堆積物、花粉[Zaitseva etc al. 2004, Blyakharchuk, Chernova 2013]、湖水位変動[Gruner etc al.2000, Peck etc al.2002]など、さまざまな古環境復元の資料から推測することができる。環境の変化に伴い、乾燥地域でも降水が多くなり、より広い範囲で家畜を飼うことが可能となった。そのため草原地帯東部の人間集団は、人口と家畜が増えすぎる圧力で、黒海北岸へ移動していったと説明する[Geel etc al.2004, Koryakova 2010]。

(2) 東漸説(南シベリア⇒長城地帯)

紀元前1千年紀に西から東への文化の伝播はみられる(第2-3図)。すなわち、スキタイ文化は南シベリアから東方・南方へ拡散し、長城地帯にも浸透していった。こうしたスキタイ文化が広がったのは、武器・馬具・動物文様など、さまざまな文化要素から推測することができる。これらの武器・馬具・動物文様といったスキタイ三要素の方面において長城地帯から出土した青銅短剣・刀子・飾金具は南シベリアと類似していることを指摘するものは多い[単月英 2015]。この段階に地域間影響の方向性に関わる楊建華氏のモデルをあげられる[楊建華・邵会秋 2015]。具体的にいえば、紀元前8世紀以降の草原地帯東部における文化動態は紀元前8～前6世紀、紀元前5～前3世紀、紀元前3世紀以降の3期に分けられる。紀元前8～前6世紀においては、ミヌシンスク盆地、トゥバ地域からの向い合った鳥頭形の装飾が付けられる青銅短剣と鶴嘴形の青銅斧の分布地域を踏まえ、スキタイ文化が南シベリアから中国北方(長城地帯)の太行山一線へ影響を与えていったと指摘した。紀元前5～前3世紀においては、両地域の動物紋様の相似性を踏まえ、パジ

リク文化がアルタイ山脈からモンゴルを経て中国北方（長城地帯）へ伝播していったと指摘した。紀元前3世紀以降の匈奴時期になると、長城地帯の張家川馬家塬墓地は天山山脈を仲介としてイリ川流域のセミレチェとの関連が生み出し始まると考えられる[楊建華・邵会秋 2015]。これは楊建華氏が紀元前1千年紀の草原地帯東部における南シベリアと長城地帯の間の地域関係に関するモデルである。注意しなければならないのは、楊建華氏の論文の中では器物の形態の分析が言及されていないため、具体的に検証ができないものである。

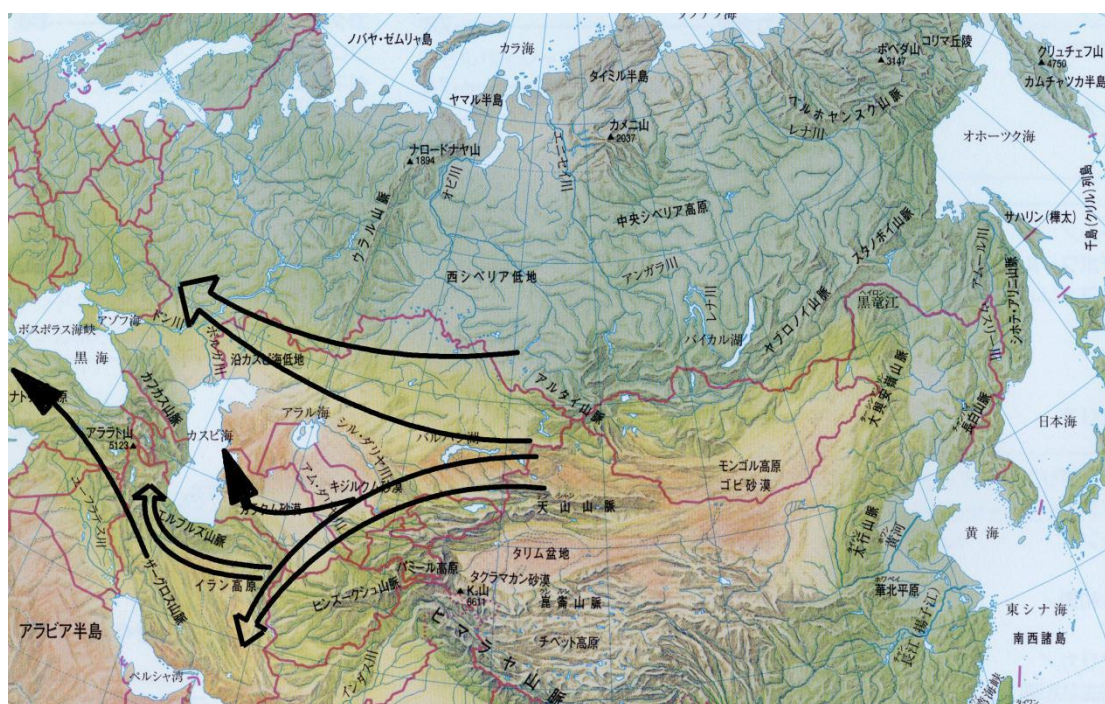
西アジアに生まれた合成獣グリフィンの図像も西方から東方へ伝播した。このグリフィンの図像がアケメネス朝ペルシアの美術で流行したタイプと古典時代のギリシア美術で流行したタイプがあったと考えられる。両タイプは前4～前5世紀にアルタイで合流してから中国へ伝播していった[林俊雄 2006]。

製鉄技術の拡散は前8～前7世紀にカフカス山脈から北方のウラルと東方の中央アジアに伝播し、前5世紀から東方へ伝わっていったと考えられる[Koryakova, Epimakhov 2007]。製鉄技術の拡散から東アジアの地域間関係のモデルを構築する議論もある[宮本一夫 2015a]。宮本一夫氏によれば、製鉄技術の拡散は、西周後期から春秋初期にかけてユーラシア草原地帯から長城地帯へ広がってきた鍛鉄技術と、中原地域の鑄鉄技術から構成されている[宮本一夫 2015a]。そのうち鍛鉄技術の拡散は銅柄などと組み合わさった鍛鉄製鉄剣や鉄戈を指標とする。春秋末・戦国初期になると、鍛鉄技術は地下式炉などとともに川西高原沿に中国西南部へ広がってきたものと考えられる。いっぽうで、中国東北地方には長城地帯へ広がった鍛鉄技術の存在も認められる。

（3） 西漸説（中原地帯⇒南シベリア）

草原地帯東部において東から西への文化の伝播もみられる（第2-4図）。これは、スキタイ文化で流行した文化要素は長城地帯あるいは中原地域の青銅器文化で先行することが示唆される。すなわち、南シベリアのスキタイ文化も長城地帯や中原地域の影響を強く受けたと考えられる。このように東から西へ広がったのは、容器・装身具・動物文様などの文化要素から推測することができる。銅剣の柄頭に飾った鳥頭、立っている野獣、背中が丸まる虎などの動物文様はスキタイ時代の以前に中原地域で存在していた青銅器文化の社会の中から生まれたと説明されていた[Watson 1971, Bokovenko 2004]。スキタイ文化

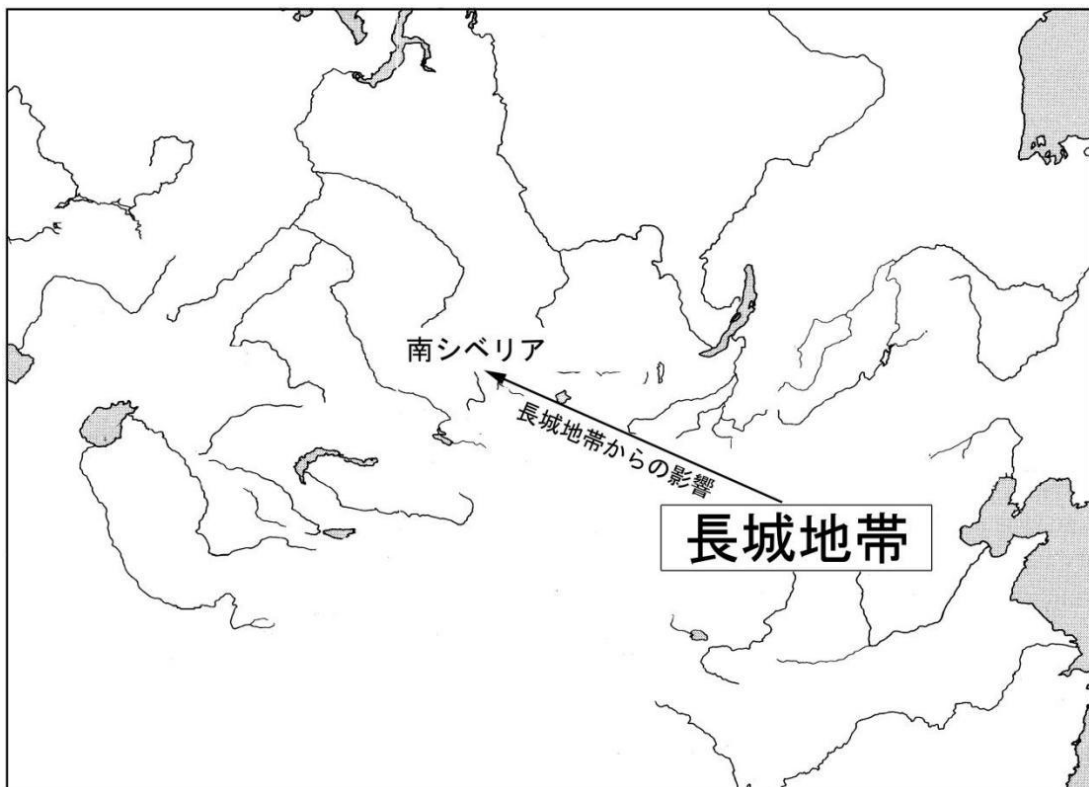
の鈴付きの竿頭飾や動物形の竿頭飾は殷代後期～西周時期の長城地帯に溯られる[高浜秀 1993, 2015]。また中原地域の関中平原の北縁に生まれた青銅鍔は春秋中期～戦国早期に新疆に入ってその東部からミヌシンスク盆地のタガール文化にまで達したと考えられる[郭物 1999]。なお鑄造法や鑄型製作技法の差異をもとにした型式分類とその分布状況から、帯飾板は前6～前5世紀に内蒙古中南部に生まれ、次第に長城地帯の隴山地域からさらにモンゴル高原へ広がっていったこともみられる[宮本一夫 2014]。



第2-2図 スキタイ集団の東方起源説における地域間関係の模式図



第2-3図 東漸説における地域間関係の模式図



第2-4図 西漸説における地域間関係の模式図

第2節 青銅器の型式分類と編年の研究

本節は、初期騎馬遊牧民文化の基礎を担ってきた青銅器に焦点を当て、青銅武器（剣・刀・鏃）と馬具（轡）に対する型式学的研究の成果と、それらを総合する形で構築されつつある編年との相互関係を整理するものである。本節の目的は、現時点における青銅器の型式学・編年学両方の到達点を紹介するものである。本節では、これらの主要な品目の型式学の研究現状を本論で検討する順序に沿って種類別に次々紹介し、次に編年学との対応関係について略述する。

1. 青銅短剣の型式分類と編年

草原地帯東部の青銅短剣の淵源は、内蒙古の朱開溝遺跡から出土した紀元前 2000 頃の短剣に求めることができる。朱開溝遺跡の短剣は、剣身の基部に切り込みを入れたもので、このような短剣はミヌシンスク盆地にも伝わって用いられたが、紀元前 2 千年紀後半に入るとミヌシンスク盆地の影響によってカラスク式短剣が草原地帯東部の長城地帯と草原地帯西部の黒海北岸で広く使われるようになる[松本圭太 2009, 2016]。草原地帯西部では先スキタイ文化の剣がキノコ形の柄頭と十字形の柄をもつ鉄剣（銅柄鉄剣）である。これらの鉄剣（銅柄鉄剣）が草原地帯東部のカラスク式短剣の系統から引くものと考えられている[Тереножкин 1975]。紀元前 1 千年紀に至ると、タガール文化の短剣（アキナケス型の短剣）はカラスク式短剣に代わってミヌシンスク盆地で流行し、さらに、モンゴル高原を通じて長城地帯へ流入する[楊建華・邵会秋 2015]。こうしたタガール文化の短剣は黒海北岸のスキタイ文化のアキナケス型の剣と似た形を呈しており、その起源が先行するカラスク式短剣に求められると考えられている[Членова 1967]。草原地帯西部ではアキナケス型の剣が短い刃部のヴェテスフェルド型（Vettersfelde Type）、長い刃部のシャメイコ型（Shumeyko Type）などに区分されている[Topal,Golec 2017]。タガール文化の短剣は鏢が心葉形となるヴェテスフェルド型の短剣に相当している。これらのアキナケス型の剣が黒海北岸で中期スキタイ時代と編年されている[Topal,Golec 2017]。しかし、紀元前 1 千年紀以降の青銅短剣の研究は、詳細な分類を目的にしたものではなく、大きな文化の伝播の動態を把握するとした研究である。本論の初頭で言及されたように、これらの研究の多くは前 2 千年紀後半から前 1 千年紀を対象として扱ったものであるが、ここでは、本論で設定する研究対象と時期にしたがって単なる紀元前 1 千年紀以降における青銅短剣

のみに関する型式学的研究の成果を整理する。

南シベリアのミヌシンスク盆地においては、青銅短剣を含むタガール文化の編年がチレノヴァにより行われたが[Членова 1967]、これらの青銅短剣の多くは収集されたり採集された遊離的資料であることから、厳密な分類が行われていなかったといえる。したがって以下で型式学的研究の整理は長城地帯で出土した青銅短剣の成果が主要である。

まずは中国北方出土の青銅短剣だけではなく、中国全体出土の短剣の集成がすでに町田章氏により行われた[町田章 2006]。その時期における発掘資料のほぼ全部の青銅短剣が時期ごと地域ごとに集成されているといえるが、同一の基準での型式分類の作業が行われていなかった。したがって、ここでは中国北方全体出土の青銅短剣を研究対象として同じ基準での分類とその編年を行った先行研究を扱い研究史を整理したい。詳しくいえば青銅短剣の型式分類、各型式間の系譜関係、青銅短剣の編年という三部分の内容を含んでいる。

(1) 青銅短剣の型式分類

青銅短剣の型式分類について、先行研究では分類基準を設定する方法は二つがある。ひとつは、青銅短剣の単一特徴を型式差を示す指標とするものである。もうひとつは柄頭を含む柄、鏑などの複数の特徴から着目するやり方である。長城地帯出土（採集）の青銅短剣の主要な分類案を整理すれば第2-1表のようなものになる。第2-1表の左側は単一の特徴を型式差を示す指標とするものである。これらの分類案は青銅短剣の柄頭を分類基準とするものがほとんどである。早くは江上波夫・水野清一氏による分類がある[江上波夫・水野清一 1935]。その後、田広金・郭素新氏、烏恩氏、李剛氏などの研究者も類似した分類の基準を採用した[田広金・郭素新 1986, 烏恩岳斯図 2008, 李剛 2011]。分類の対象からみるなれば、江上波夫・水野清一氏は1930年代頃に綏遠・包頭などの中国北方で購入した青銅短剣を主とする。田広金・郭素新氏の分類はオルドス付近で出土した青銅短剣あるいはオルドス博物館の収蔵品を対象として行ったものである。しかし、これらの研究者はどうしても青銅短剣の柄頭が型式差を基礎としての時期差と地域差を示す重要な特徴であるとする。

第2-1表の右側は典型的な柄頭・柄・鏑など複数の属性から着目する分類案である。マックス＝レール氏による分類はソーヤーコレクションを中心として行ったものである。そして青銅短剣の文様と中原系青銅器の文様を比較した。また詳細な分類案として、高濱

秀氏は当時におけるほぼ全ての出土品・収集品を分類し、青銅短剣の各型式の年代位置とその分布地域を明確する[高濱秀 1982]。氏の分類の上で、八木聡氏の研究では近年増加する発掘資料を中心に中国北方系青銅短剣の各型式間の系譜関係、各序列内の前後関係を一括遺物の検証により明らかにした[八木聡 2014]。

第2-1表 主要な青銅短剣の分類案

型 式 分 類	単一特徴(柄頭)による分類案			複数特徴(柄頭・柄・鐔)による分類案			
	江上・水野(1935)	田・郭(1986)	李(2011)	Loehr(1949)	高濱(1982)	松本(2013)	八木(2014)
					C類(突起形鐔)	B3類(カラス式)	B型(カラス式)
	触角形首	C型(触角形首)	甲C(鳥首)	双鳥首 触角形首	F類(鳥首)		I型(触角形首)
	獣首	D型(変形触角形首)	甲B(獣首)	複雑な装飾	H類(獣首)		
	棒状首		甲F(T字形)		G類(八字形鐔)	B2類(カラス式)	
	蛇首						C型(同心円首) H型(八字形鐔)
	環首	E型(環首)					
		G型(三角形環首) F型(扁環首)			I類(環首)		

(2) 各型式間の系譜関係

前2千年紀末～前1千年紀初には、青銅短剣の系譜関係は先行するカラス式短剣との関係が焦点となっている。高濱秀はカラス式短剣を柄の断面が中空で溝が開くBⅠ類、柄の断面が平たくて透し孔が開くBⅡ類に分け、BⅠ類からBⅡ類への変化を想定した。小さな突起があって鐔を形成する夏家店上層文化出土の青銅短剣はカラス式短剣BⅡ類の伝統を受け続いて形成した新しい型式と考える[高濱秀 1982]。八木聡は、氏の研究に基づいて切り込みを入れたような鐔をもつ夏家店上層文化出土の青銅短剣を直接にカラス式短剣の一部分として取り扱った[八木聡 2014]。また、以上の夏家店上層文化の青銅短剣、鐔が柄に対して斜めに付いてその全体が帯状になり、柄と鐔は区分されるタガール文化の青銅短剣を先行するカラス式短剣まで溯るという見解もあるようで、諸文化の関係が問題となる。松本圭太は、この段階に諸文化の青銅短剣の地域差が明瞭化してきたという指摘をしている[松本圭太 2013]。

夏家店上層文化以降の青銅短剣は、北京や河北北部の玉皇廟文化と、秦や趙国長城の北辺沿いに内蒙古中南部から寧夏中南部・甘肅東南部に至るまでに展開する毛慶溝や楊郎文化などから出土している。前者は玉皇廟文化出土の短剣であり、後者は向い合った鳥頭や動物など文様を施すもの、楕円形の環頭で柄の中央に縦の透しを入れるものなどアキナケ

ス型と言われる短剣である。

玉皇廟文化出土の青銅短剣は、八木聡氏に柄頭と鏑によって柄頭に同心円を二つ表現するものと鏑が八字形をなすものに型式大別され、さらに柄頭の形状によって鏑が八字形をなす短剣を、柄頭に胴体が二つに分かれる蛇を表現するもの、柄頭に背中を丸めて向かい合う動物を表現するものに細分された。その上で、柄頭に背中を丸めて向かい合う動物を表現する短剣は、柄部の文様の相似性によって夏家店上層文化の青銅短剣の影響を受けながら、八字形をなす鏑から配慮するとミノシンスク盆地からの影響を受けたことも看取された[八木聡 2014]。

アキナケス型とも呼ばれた短剣は、高濱秀氏の分類案で柄頭と鏑の形状によって柄頭に鳥頭の文様をもったもの、柄頭と鏑に動物やその頭が付けられたもの、柄頭に楕円形の環が付けられたものに分類された。これらの青銅短剣の明確な区別が存在するかは疑問があるが、これらの長城地帯出土のアキナケス型短剣はタガール文化出土の青銅短剣と関連性があることが明確である[高濱秀 1982]。

(3) 青銅短剣の編年

長城地帯出土の青銅短剣の編年について、夏家店上層文化出土短剣から次の玉皇廟文化、毛慶溝文化、楊郎文化といった、考古学文化の枠組みに明確された年代的位置は疑問がない。ただ、高濱秀氏の編年案では、玉皇廟文化出土の短剣に関連した当時の収蔵資料が若干の小群に細分されたが、いずれでも同時代にほぼ併行して使われたものと看取された[高濱秀 1982]。また、燕山地域の北方青銅器文化墓の編年を検討するため、小田木治太郎は玉皇廟や葫蘆溝、西梁堖墓地から出土した青銅短剣を柄頭や鏑の形態、柄断面から着目して分類する。楕円形の中央が括れる鏑は早くから存在し、八字形を成す鏑はその後で加わることも指摘された[小田木治太郎 2012]。したがって、実は玉皇廟文化出土の青銅短剣だけではなく、夏家店上層文化、毛慶溝文化、楊郎文化から出土したものを含み、青銅短剣の編年は精度と確度の向上が求められる点で型式内の前後関係とその型式間の相対関係の編年学的検討を進め続けることはまだ行われていない。

2. 青銅刀子の型式分類と編年

草原地帯東部の青銅器の内最も数の多いのは青銅刀子といえる。青銅短剣に同じく、青

銅刀子が典型的器物としてその型式分類の研究も活発に進められてきたが、紀元前1千年紀以降における青銅刀子を取り上げて型式分類を行う専論が多いといえない。

南シベリアのミヌシンスク盆地においては、青銅刀子が青銅短剣と一緒にタガール文化の年代的特徴としてチレノヴォ氏により集成された。チレノヴォ氏の研究によると、タガール文化の青銅刀子には二種類があるという。ひとつは柄と刀身の部分が区別されており、柄頭に装飾が付くものである。これらの青銅刀子は先行するカラスク文化の伝統を受け継いだものと考えられる。もうひとつは柄と刀身の部分が区別されていなく、柄頭に装飾がないものである。これらの青銅刀子は中央アジア、カザフスタン、ウラル地域文化の伝統を受け継いだものと考えられる[Членова 1967]。これらのチレノヴォ氏により扱われた青銅刀子の資料は発掘品だけではなく、収集品も含んでいるものである。個々に検討を経てすべての図版を載せたものではなく、単なる時期ごとに青銅刀子の特徴のみを述べたことから、タガール文化の青銅刀子の型式分類が行われていなかった。したがってここでは長城地帯出土の青銅刀子の型式学的研究の成果を中心として整理を行いたい。注意しなければならないのは、紀元前1千年紀以降の青銅刀子を取り上げた専論が少ないことから、これらの整理は長城地帯出土の紀元前2千年紀における青銅刀子も含んでいる点である。紀元前1千年紀以降の青銅刀子について、本論で扱いたい研究対象として、その型式分類の研究成果は本部分の最後でまとめられる。

(1) 青銅刀子の型式分類

長城地帯出土の青銅刀子は、実に多様であり、系統的理解には分類が不可欠である。長城地帯における青銅刀子の分類研究は柄断面、柄頭、全体形態などの属性を各自の分類基準として行ったものが多い。

まずは早くから青銅刀子の分類属性を注目するのは江上波夫・水野清一氏である。青銅刀子の分類属性が柄断面、柄頭、刀身を含んでいると指摘する。たとえば青銅刀子の柄断面には扁平なもの、エ字形のものがあ、柄頭は突帯を付くもの、環状のもの、孔だけを開くものを含んでおり、刀身にはまっすぐのもの、内側に湾曲するもの、外側に湾曲するものがある。ただ、江上波夫・水野清一氏はここで柄断面、柄頭といった分類属性によって長城地帯で購入した資料を中心とする青銅刀子を分類する[江上波夫・水野清一 1935]。この分類の方法はまず柄断面で青銅刀子を二つの種類に型式大別してから、さらに柄頭の

装飾で型式細別を行ったものである。また江上波夫・水野清一氏の分類方法に類似しており、田広金・郭素新氏の研究も同じく柄断面によってオルドス地域における青銅刀子を二分してから、柄頭で細分するものである[田広金・郭素新 1986]。これは柄断面を基準として青銅刀子の分類方法である。

もうひとつの青銅刀子の分類方法は柄頭の装飾といった属性を使って型式分類を行うものである。たとえば、李剛氏は柄頭の装飾によって紀元前 2 千年紀後半以降の青銅刀子をキノコ形を付くもの、鈴形を付くもの、獣形を付くもの、環状を付くもの、孔を開くものに分類する[李剛 2011]。そして烏恩氏、呂学明氏の分類方法は時期ごとに柄頭によって中国北方または中原、北方の両方を含む地域で出土した青銅刀子に対して分類が行う[烏恩岳斯図 2008, 呂学明 2010]。

なお、青銅刀子の全体形態を基準として分類を行うものもある。たとえば、鄭紹宗氏は青銅刀子の全体形態に着目すると、長城地帯とくに河北省付近の発掘資料やコレクション資料を、全体が内側に湾曲して刀身がまっすぐであるもの、全体も刀身も内側に湾曲するもの、全体が内側に湾曲して刀身の先端が外側に湾曲するもの、全体も刀身もまっすぐであるものに大別する[鄭紹宗 1994]。

以上で言及された柄断面、柄頭、全体形態などの属性の以外、青銅刀子の製作技術や柄の文様によって分類を行うものもある[Loehr 1951]。

以上、簡単にではあるがこれまでの青銅刀子の型式分類の研究を振り返ってきた。しかし、注意しなければならないのは、先行研究では柄断面、柄頭、全体形態を基準として分類を行うのが可能であるが、各型式内の系譜関係や各型式間の派生関係などの問題が全く触れられていなかったのである。

(2) 青銅刀子の編年

先行研究では長城地帯出土の青銅刀子の分類と編年を検討するものが中心である。ただ、青銅刀子の型式数が多く、加えて先行研究で分類の基準とされた柄頭と全体形態などの属性は使用された時間が非常に長いから、青銅刀子の編年に向ってあらためて柄頭と全体形態を分類基準とした属性抽出の有効性を検討する必要がある。したがって中国北方出土の青銅刀子の編年研究は厳密に型式分類を行った上でつねに精度と確度の向上が求められることに至らなかった。当然、遺構単位での一括遺物の資料が乏しいから、各型式間の併

行関係の検討が容易ではない。これは青銅刀子の編年研究の枠組みが築かれていない原因のひとつであるかもしれない。

ただし、青銅刀子の主要な形態特徴によって現在の基本的な年代位置づけは確立されたことが疑わない。高濱秀氏に指摘されたように、柄の断面がエ字形を呈する刀子の年代が商代後期に遡れること、その後に動物文様などを表現した夏家店上層文化刀子が主流を占めるようになっていたこと、全体の形態がまっすぐで柄頭に三角形あるいは円形の孔が開く刀子が最後まで残ることが明確である[高濱秀 1980]。したがって、高濱秀の指摘を踏まえて以上の「青銅刀子の型式分類」の部分で紹介した型式学的研究から紀元前1千年紀以降の青銅刀子の結果を抽出して第2-2表に整理する。表の横の部分は個々の分類案の間で各型式の対応関係を示している。

また、燕山地域の北方青銅器文化墓の編年を検討するため、小田木治太郎氏は同じく柄頭の形状によって玉皇廟や葫蘆溝、西梁堖墓地出土の青銅刀子の型式分類を行ったが、大型の環頭をもったものと、柄が環頭に被さるものとの消長関係は時期的転換を示す有効な指標と指摘した。詳しくいえば、無紋あるいは柄に幾つかの突線を表現する刀子は春秋中期から減少して春秋後期まで姿が消えておりながら、柄が環頭に被さる刀子は春秋後期から漸く増加していくという[小田木治太郎 2012]。

第2-2表 主要な青銅刀子の分類案

分 類 基 準						
型 式 分 類	柄頭			柄断面		全体形態
	烏(2008)	呂(2010)	李(2011)	江上・水野(1935)	田・郭(1986)	鄭(1994)
	環首	円環首(乙a類)		扁平(第一類)	扁平(A類)	全体も刀身もまっすぐ(C類)
		二つの環を付く(乙c類)				
	獸首	立獸首(乙m類)				
		円い孔を開く(乙q類)				
		三角形の孔を開く(乙r類)				
		不規則形の孔を開く(乙s類)				
		突帯を付く(乙t類)				
	孔を開く	円い孔を開く(乙q類)	孔を開く			

3. 青銅鏃の型式分類と編年

青銅鏃は草原地帯全体の初期遊牧民文化において年代的位置を示す最も重要な指標として重視されていた。とりわけ草原地帯西部の黒海北岸の初期遊牧民文化においては、メリューコヴァ氏がスキタイ式青銅鏃とされた袋穂鏃の編年の位置づけから黒海北岸のスキタイ文化の年代的な位置づけを行ったように[Мелюкова 1964]、その編年的な重要度が高いと考えられる。のみならず、黒海北岸のスキタイ式青銅鏃の編年研究は同じく新疆出土の青銅鏃の年代的位置を確立する基本的な依拠とも考えられる[田中裕子 2011]。

黒海北岸においては、先スキタイ時代の青銅鏃は翼の平面形が菱形や葉形となる両翼鏃である。これらの黒海北岸の青銅鏃は草原地帯東部のミヌシンスク盆地のタガール文化の青銅鏃と似た形を呈している。テレノシュキン氏は黒海北岸の青銅鏃の起源を草原地帯東部に求め、これらの青銅鏃に似たものが南シベリアのアルジャンから出土していることを示している[Тереножкин 1975]。いっぽう、モンゴル高原、長城地帯、朝鮮半島を含む東北アジアにおいては、宮本一夫氏はこれらの地域出土の袋穂青銅鏃の型式分類とその編年学的位置の確立を踏まえ、長城地帯とモンゴル高原、南シベリアとの共有特徴と固有特徴および朝鮮半島へ広がっていた過程を明らかにした[宮本一夫 2013]。

(1) 青銅鏃の型式分類

しかしながら、草原地帯東部の初期遊牧民文化における青銅鏃全体を概観するならば、とりわけ袋穂鏃だけではなくて有茎鏃も含んでおり、意外と青銅鏃を取り上げて専論的に論じにものが少ない。また、草原地帯西部の黒海北岸の青銅鏃がもともと本論で取り扱いたい対象であるわけではないものの、ミヌシンスク盆地、アルタイ山脈、新疆北部、モンゴル高原においても少なくない発見があることから、草原地帯西部の黒海北岸のスキタイ式青銅鏃の型式学と編年研究も触れなければならない。したがって以下に青銅鏃の型式分類と編年の位置に関する研究の整理は、草原地帯西部を含む草原地帯全体を対象として行うことにしたい。

草原地帯西部の黒海北岸において、スキタイ式袋穂鏃の最も代表的な分類案は以上に言及されたメリューコヴァ氏により行われた[Мелюкова 1964]。具体的な作業の手順は、鏃身部の断面形で大別を行い、さらに鏃身部の平面形で型式を設定し、型式の内部においてほかの要素で細分を行う。詳しくいえば、型式分類の結果としては、鏃身部の断面の形状

によって両翼鏃・三翼鏃・断面三角形鏃・断面四角形鏃に分類し、鏃身部の平面の形状によって両翼鏃を6型式に、三翼鏃を11型式に、断面三角形鏃を10型式に、断面四角形鏃を1型式にそれぞれ設定し、さらにサイズそのほかを配慮して各型式を細分する、といった研究方法を採っている。

中央アジアのアラル海沿岸において、南タギスケン墓地の編年的位置を確定するため、青銅鏃を含むさまざまな遺物が整理された[Итина, Полонский 1997]。そのうち、これらのサカ式鏃と言われた青銅鏃の型式分類について、その具体的な手順は、鏃と矢柄の接続方式で大別を行ってから、鏃身部の断面形で型式を設定し、さらに鏃身部の平面形で細分を行う。詳しくいえば、型式分類の結果としては、鏃と矢柄の接続方式によって袋穂鏃・有茎鏃に大別し、鏃身部の断面の形状によって、袋穂鏃を両翼鏃・三翼鏃・断面三角形鏃・断面四角形鏃に、有茎鏃を両翼鏃・三翼鏃・断面三角形鏃に分類し、鏃身部の平面の形状によって以上のこれらの型式を細分する、というようにまとめることができる。

新疆出土の鏃について、田中裕子氏の分類案の手順は材質→鏃と矢柄の接続方式→鏃と矢柄の接続形態→鏃身部の断面形→鏃身部の平面形といった順で行った[田中裕子 2011]。以上で言及されたこれらの新疆出土鏃の属性を詳しくみると、材質には青銅製、鉄製、骨製があり、鏃と矢柄の接続方式と形態には袋穂無凸、袋穂管釜、有茎扁平茎、有茎円茎があり、鏃身部の断面の形状には円形、両翼、三翼、断面三角形、断面四角形がある。その上で鏃身部の平面の形状によって型式を行った。

モンゴル高原、長城地帯において、宮本一夫氏の青銅鏃の型式分類はこれらの地域出土の袋穂鏃を中心として外モンゴル、内蒙古、遼西といった地域ごとに鏃身部の断面形、鏃身部の平面形に基づいて行った[宮本一夫 2013]。具体的な手順としては、まず鏃身部の平面の形状によって袋穂青銅鏃が両翼鏃と三翼鏃といった大別され、さらに鏃身部の平面の形状によって両翼鏃の細分を行いながら、鏃と矢柄の形態によって三翼鏃の細分を行う。

(2) 青銅鏃の編年

草原地帯全体の青銅鏃の編年研究は以上で言及された個別地域の型式分類の上で進められる。

黒海北岸の編年研究については、いわゆるスキタイ式青銅鏃の年代的位置の確立は共伴するギリシャ陶器の編年で行った[Мелюкова 1964]。そして、草原地帯西部の黒海北岸に

における初期遊牧民文化の時期区分を先スキタイ期（紀元前 8 世紀）、スキタイⅠ期（紀元前 7 世紀中・後半～紀元前 6 世紀前半）、スキタイⅡ期（紀元前 6 世紀後半～紀元前 5 世紀前半）、スキタイⅢ期（紀元前 5 世紀後半～紀元前 4 世紀初頭）、スキタイⅣ期（紀元前 4 世紀中～紀元前 3 世紀前半）に設定した。また、先スキタイ期には両翼鏃が主として用いられており、スキタイⅠ期からスキタイⅢ期に至るまでには三翼鏃が主体となり、スキタイⅣ期には断面三角形鏃が主となることが指摘された。

アラル海沿岸の編年研究については、いわゆるサカ式青銅鏃の年代的位置の決定はスキタイ式青銅鏃とサウロマタイ式青銅鏃（紀元前 6 ～前 5 世紀）に比較する上で行った[Итина, Полонский 1997]。袋穂青銅鏃はサウロマタイや黒海北岸のスキタイにも類例がみられることから、これらの青銅鏃の編年によって青銅鏃出土の墓葬が紀元前 8 世紀末～紀元前 6 世紀前半と、紀元前 6 世紀後半～紀元前 5 世紀初頭といった二つの編年グループに分類された。

新疆出土鏃の編年研究については、青銅鏃の編年学的位置は黒海北岸のスキタイ式青銅鏃と形態比較の上で年代決定を行った[田中裕子 2011]。その上で、新疆出土鏃の時期区分は紀元前 9 世紀以前、紀元前 8 ～前 7 世紀、紀元前 6 ～前 5 世紀、紀元前 4 ～前 3 世紀、紀元前 2 ～前 1 世紀といった五つの時期に設定された。そして第 1 期には砲弾形の袋穂鏃や両翼袋穂鏃、両翼有茎鏃が主体として使われており、第 2 期から三翼有茎鏃、三翼袋穂鏃、断面三角形鏃、断面四角形鏃を加えて青銅鏃の種類が増加しており、鉄製鏃の出土が第 4 期からはじまって第 5 期に至って主体となることも指摘された。

モンゴル高原、長城地帯の編年研究については、モンゴル高原や内蒙古中南部の資料が採集資料を主としたところから、青銅鏃の編年の検証は遼西地域や燕山山脈の墓葬単位の一括遺物に基づいて行った[宮本一夫 2013]。その結果、モンゴル高原、長城地帯における青銅鏃の型式学的変遷の過程はその固有の地域性を持ちながら草原地帯全体の青銅鏃の変化の流れに一致しており、すなわち両翼鏃から三翼鏃へ変わっていたことが明らかになった。

4. 青銅轡の型式分類と編年

馬の利用に不可欠な道具として、馬具の重要性はいうまでもない。草原地帯東部の馬具の起源は、紀元前 2000 年頃の南ウラルで盛行していた有機物製の円盤状の鏢と、紀元前 1000 年頃の黒海北岸のスキタイ式の馬具に求めることができる。紀元前 1500 年頃の西ア

ジアにおいても、一本の棒状の銜が円盤状の鑣を通す金属製の轡が知られている。このような金属製の轡は、中央の孔がほかの二孔と垂直の方向に開けられる有機物製の鑣とともに、西方から中国まで、きわめて広い地域に広まったと考えられる[張允禎 2008, 高濱秀 2014]。いっぽう、紀元前 9 ～ 前 4 世紀のスキタイ式の馬具は二本の銜枝をもった銜と棒状の鑣が組み合わせた轡であり[山本忠尚 1972]、この種の轡は中国でも盛行していたが、詳細な伝播の方向の研究について議論がある。張允禎氏は、二孔の棒状の鑣を銜の外環に挿入して使用する轡は、戦国時代に入ると北方の遊牧民の影響によって中国で使われるようになり、漢代にかけて盛行し、さらに、朝鮮半島を通じて日本列島へ流入したと考える[張允禎 2008]。高濱秀氏は、この種の轡は西周から春秋前期に中国で出現し、南シベリアより中国のほうが早く、中国から南シベリアへ影響を及ぼしたと考える[高濱秀 2014]。しかし、以上の研究は、西方から中国にかけて大まかな馬具の伝播の様相を検討するものであるが、部品の細部の形態に主眼をおく、型式学的・機能的な考察を行うことは、課題として残されているといえよう。

金属製の轡を概観するならば金属製銜と金属製（有機物製）鑣を主体的に取り上げた馬具の型式学的研究が極めて少ないといわざるを得ない。しかし、金属製銜、金属製（有機物製）鑣の型式分類と編年の問題が決して重視されていないわけではない。なぜなら中央アジア考古学では金属製銜の型式が初期遊牧民文化の年代的位置を決めた重要な指標と考えられる。たとえば、1966 年には金属製銜と金属製（有機物製）鑣を含む中央カザフスタンのタスモラ文化の編年が発掘者と命名者としてのカドゥルバーエフにより組まれる[Кадырбаев 1966]。したがって、こうした点からみると金属製馬具の重要度が高いと考えられる。金属製銜と金属製（有機物製）鑣の型式分類と編年を検討する意義も存在する。

（１） 青銅轡の型式分類

草原地帯東部の個別地域においては、青銅製銜は外環の形状によって、青銅製（有機物製）鑣は全体形態によって型式分類を行うことがほとんどである。たとえば、以上で言及された中央カザフスタンのタスモラ文化においては、13 点にすぎない青銅製銜は鐙形の環のもの、鐙形の環の内側に小さい孔があるもの、鐙形あるいは方形の環の下に突帯があるもの、円形の環のものに大別され、青銅製（有機物製）鑣は角骨製の三孔式のもの、両

端に孔があつて中央に方形の突起が付くもの、両端に孔があつて中央に両端の孔と垂直した方向の孔があるもの、三環式のもの、鉄製で金が飾られているものに大別される[Кадырбаев 1966, cf. 藤川繁彦 1999]。また、アラル海沿岸のウイガラク墓地においては、青銅製銜の分類は中央カザフスタンのタスモラ文化に相似しているが、鑣は扁平で両端に管状の孔があつて中央に方形の突起が付くもの、青銅製三孔式のもの、角骨製三孔式のもの、三環式のもの、三孔式で中央に方形の孔が開くもの、角骨製で孔がないものに分類された[Вишневская 1973, cf. 藤川繁彦 1999]。

いっぽう、研究の数量が極めて少ないが、長城地帯においても金属製銜の型式分類の方法は、中央カザフスタンやアラル海沿岸の金属製銜の分類と大きな違いがなく、ほとんど金属製銜の外環の形状によって分類を行うものである。たとえば邵会秋氏は中原系の銜を含む中国北方出土の金属製銜を外環の形状によって、水滴形の環のもの、三角形に近い環のもの、円形の環の外側に小さい環が付くもの、円形の環のものに分類する[邵会秋 2004]。新疆出土の金属製銜がトゥバ地域のアルジャン墓葬群、中央アジアのサカ文化、黒海北岸のスキタイ文化に相似していることも指摘された[李剛 2011]。また金属製（有機物製）鑣の型式分類について、新疆などの個別地域を検討対象とした研究もある。艾克拜爾＝尼牙孜氏は、まず鑣を作った材質によって鑣を金属製と有機物製という二種類に分けてから、さらに鑣の孔の形状によって細分を行う[艾克拜爾＝尼牙孜 2014]。

金属製の轡の型式分類には、銜と鑣との連結方式に重点をおいて、形態全体を体系的にとらえた研究もある。川又正智氏は、草原地帯の轡の紹介を通じて、銜と鑣のセットは、銜を鑣に通すまたは手綱を鑣に通すタイプ、鑣を銜に通すタイプ、銜鑣一体型、銜と鑣を別材で結ぶタイプがあることを指摘した[川又正智 1994, 2006]。張允禎氏は、銜と鑣の連結方式を、銜が板状の鑣の中央の孔を通す貫通式、銜の外環に直接鑣をつくりつけた一体式、銜の外環が鑣の孔（環）と連結する結合式、鑣が銜の外環に挿入される挿入式という四つに分類し、中国の馬具は西方の遊牧民の影響を受容しながら独自の変容と改変もみられるものと評価される[張允禎 2008]。しかし、これらの研究は銜と鑣との連結方式から轡の形態全体を体系的にとらえたが、部品の細部の形態に主眼をおいて本格的な型式学的な考察を行わない。

(2) 青銅轡の編年

新疆を含む中国北方出土の金属製轡の編年は形態の相似性の上で中央カザフスタンのタスモラ文化やアラル海沿岸のウイガラク墓地出土の金属製轡の編年を参照して築いたものである。しかしながら中央カザフスタンのタスモラ文化やアラル海沿岸のウイガラク墓地出土の金属製轡の編年の再検討の必要があるだろう。なぜなら編年を行うには金属製轡の外環の形状のみといった単一属性で設定する大雑把な型式分類案を踏まえて金属製馬具の細かな変遷の過程を把握することがほとんど不可能である。具体的にいえば、現在の編年研究は、外環が鐙形を呈する金属製轡は中央カザフスタンで前9～前6世紀に編年されており、方形の環の下に突帯がある金属製轡はアラル海沿岸で前7～前6世紀に編年されたといった年代観に相変わらずとどまってしまったものといわざるを得ない[Итина, Полонский 1997]。したがって先行研究では草原地帯東部の金属製馬具の編年を確立するにはまだ至っていないといえる。

第3節 問題の所在

1. 初期騎馬遊牧文化の展開過程の研究における問題点

以上、草原地帯東部における初期騎馬遊牧文化の研究の到達点を総括した。これらの初期騎馬遊牧文化の研究では、現在に至って研究の枠組みとしての小地域の内部の動態と、地域間関係を目的として検討と分析を進めるものがある。しかし、初期騎馬遊牧文化の展開過程を追求して騎馬遊牧形成期という時代の歴史性の変化を解明し、この草原地帯東部の全体規模の文化動態の検討を行ったものがあまり多くない。遊牧国家の起源地とされた草原地帯東部は、紀元前1千年紀の初期騎馬遊牧文化の展開過程がどのように遊牧国家に向って発生するかという点に、重要な役割を果たした。本論の緒章に論じたように、青銅器時代から遊牧国家の成立にかけて草原地帯東部では、北の遊牧社会と南の農耕社会の対立が歴史展開の原動力になったと指摘した。こうした二項対立の枠組みでは、遊牧社会から農耕社会へ転換する過渡としての長城地帯と南シベリアを中心とする遊牧地帯といった広域の地域間関係の研究の重要性がいうまでもない。

先行研究においては、紀元前1000年頃の物質文化の相似性を草原地帯の遊牧文化の普及と理解し、紀元前5～前4世紀の長距離の交換（貿易）、富の集中化、墓葬構造の複雑

化を政治的統合と初期国家の形成への過程と評価するものがあるが、これは個々の地域を専門とする研究者によってそれぞれ行われる場合が多い。紀元前 1000 年頃から紀元前 3 世紀にかけて、草原地帯東部の全体規模の地域間関係の形成の背景としての通時的な社会変化と特質を、一つの連続な歴史的視座から考える考察は、これまでのところは不足といえる。

草原地帯の考古学では、物質文化の要素の拡散に表現される地域間の関係の形成は人間集団の移動と密接不可分の関係をもったと考えられる。紀元前 1000 年頃から、新たな初期騎馬遊牧文化が草原地帯全体で普及する背景には、物質形態の相似性に基づく草原地帯東部からの文化要素の伝播があり、それは遊牧集団（スキタイ集団）の移動を伴ったと説明されている。システム論の観点から考慮するなら、研究対象の統合体は、経済、社会、物質文化などといった内部の構成要素と、気候、地理、動物、植物からなる外部の構成要素と相互に影響するものと考えられる[Clarke 1968]。そうすれば、遊牧集団の移動は、社会の本質的な変化（経済・社会・文化）と自然環境の変動が関連した相互作用から総合的に評価する必要がある[Frachetti 2011]。しかしながら、本論の第 1 章第 1 節で述べたように、遊牧文化（シベリア＝スキタイ文化、タガール文化）が草原地帯で普及する背景として、遊牧集団（スキタイ集団）の移動に関する研究は、紀元前 1000 年頃の湿潤化という自然環境の変化が重視されるいっぽうで、物質資料が生成し展開する経済的、社会的な変化を追求する視点は乏しかった。遊牧社会の形成から遊牧国家が成立する複雑化の過程においては、家畜飼養に目立った進歩がないことから、生業の変化や牧畜の生産力の発展についても論じられることがなかったが、経済手段よりも軍事力と機動力による戦士階層の形成が本質的な文化・社会の変化を評価する指標とされる見方がある。このように、軍事力と機動力に関連する表現として、草原地帯東部の青銅武器と馬具は本質的な文化・社会の変化の評価という問題を解決する中核になる。

ところが、具体的な研究に立ち戻ってみれば、南シベリアにおいてはむしろ編年研究の基礎資料の蓄積状況が不足していることが否定することができない。ただ、個々の地域の時間軸の確立の研究にせよ、異なる小地域の交流関係の解明の研究にせよ、具体的な検討の手順から言わば、とりわけ時間軸の確立あるいは地域間関係の解明の基礎とした型式学と編年学的検討という点には問題がある。すなわち、考古学文化の研究を時間軸の枠組みとして検討を行った研究においては、個々の小地域におけるさまざまな物質資料の特徴の相似性と差異性が明確されたが、厳密な型式学的な型式分類が行われていなかった。

また、先行研究では、物質資料の拡散に基づいた全般的な情勢の解明も同じく異なる地域の物質資料の形態の比較の上で復元されたものであり、型式学および編年学的検討を基礎としたわけではない。したがって、長城地帯と南シベリアといった大きな地域間関係を検討する際、共有する情報ネットワークの背景の下で構築していた武器や馬具などの多様なレベルの交流関係の解明が相変わらず言及されていなかった。とりわけ楊建華氏らにより唱えられた草原地帯東部の広域間の地域関係のなかでは騎馬遊牧民にとって非常に重要な馬具の位置づけが見当たらなかったといえる。

なお、物質資料の拡散とその全般的な情勢をとらえた検討に加えて、厳密な型式分類とその編年の検証に基づいて分布状況を示す量的な関係という分布論の重要性についてはいうまでもない。しかしながら、以上で言及された先行研究を振り返れば、全般的な様相の検討は量的な分布状況の分析を通して物質資料が時間軸で地域的な展開の過程を復元するものではない。

2. 青銅器の型式分類と編年の研究における問題点

(1) 青銅短剣

以上、草原地帯東部における青銅短剣の型式分類と編年の研究の到達点を述べてきたが、分類属性の設定、型式学的変化の想定、系譜関係、編年学的位置の検証という一連の検討手順の点からみるならば問題がある。

青銅短剣の分類属性の設定について、分類基準としての属性設定の目盛りはけっして固定的なものではなく、つねに精度と確度の向上が求められるものである。したがって青銅短剣の先行研究では柄頭の装飾を型式分類の唯一基準とした有効性の検討が必要であると考えられる。とくに編年の手順に向って獣形の柄頭、鳥形の柄頭といった粗末な精度と確度をもっていた属性設定の有効性である。なぜなら、柄頭の装飾によって青銅短剣に対してある程度に大まかな分類を行うことができるが、ある種類の柄頭の装飾はかなり長い時間に続いて使われた場合もある。そして獣形の柄頭や鳥形の柄頭といった型式分類の範囲の内部でも豊富な個体の差異も存在する。いっぽう、先行研究では柄頭を基準属性として型式分類を行うやり方を除いての柄頭・柄・鏢などの特徴が分類基準とされたものがほとんどである。たとえば、八木聡氏の分類案には同心円形の柄頭を青銅短剣C類に設定す

る基準としながら、八字形の鏢を青銅短剣H類に設定する基準とするものがある。ただし、これらの各自の主要な形態特徴に基づいて行った型式分類は特徴属性以外の情報を共有する可能性がある。それより、分類の結果の方面では煩雑や重複などの問題を存在する危険がある。

いっぽう、青銅短剣の系譜関係については各組列の内部の系列の変化および各組列の間の派生関係を含んでいる。もちろん、これらの各組列の内外の関係の検討は以上に言及された詳細な型式学的変化の設定に基づいておこなったのはいうまでもない。また、いわゆる長城地帯においては先行するカラス式短剣との系譜関係の問題が焦点がしばられているものの、玉皇廟文化出土の青銅短剣やアキナクス型青銅短剣に関する系譜関係の検討は不足しているといわざるを得ない。とりわけ、形態の比較の上で両者の相似性を踏まえて、ミヌシンスク盆地の青銅短剣と長城地帯出土の青銅短剣との関連性は多数の先行研究にすでに指摘されたが、厳密な型式分類を設定する上で両者の関係を検討する必要がある。

青銅短剣の編年研究について、型式学的変化の検討の上で墓葬単位での各型式間の共伴関係やほかの種類の一括遺物などの層位学的情報を踏まえて編年学的位置づけの仮説を検証するのが多いといえない。八木聡氏の編年案においては、ある程度に長城地帯の青銅短剣の型式学的変化を示していたが[八木聡 2014]、編年的位置は直接に青銅短剣を出土する墓葬の年代を利用して確立する。すなわち編年案の妥当性に関する検証が明記されていなかった。たとえば、玉皇廟墓地の一括遺物の資料からみるならば八木聡氏の編年案のHb1類が春秋中期に年代的位置づけられる点には疑問がある。

(2) 青銅刀子

以上で言及された青銅短剣の研究史に類似しており、草原地帯東部の青銅刀子の型式学的研究も同じく分類属性の設定→型式学的変化→系譜関係→編年学的位置の確立という一連の作業の方法論において問題が存在すると考えられる。

前節では草原地帯東部の青銅刀子の型式分類が柄頭の装飾、柄の断面、全体形態によって個々の分類案で行われることがわかった。まずは青銅短剣の型式分類の問題に相似しており、編年の作業に向って柄頭の装飾を型式分類の唯一基準とした有効性の再検討の必要がある。とりわけ呂学明氏の分類案の分類結果においてはその煩雑さや重複さを避けることが課題である。なぜなら柄頭の装飾に基づいて青銅刀子を整理することができるもの

の、柄部や刀身などのほかの属性から観察すれば異なる柄頭の装飾が相同の柄部や刀身の範囲で共有する場合が多い。また単なる柄の断面や全体の形態を唯一の分類基準とした作業に関しては、紀元前二千年後半から紀元前1千年紀に至るまでの青銅刀子の編年的位置の確立には有効であるが、紀元前1千年紀以降における青銅刀子に対して型式分類を行うのが現在まで暗黙であるといえる。

一言でいえば、青銅刀子の基礎な型式の設定さえ行っていなかったから、その上で型式間の共伴関係や相対年代が明確である一括遺物の資料を利用して編年研究を行うことにも至らなかった。

(3) 青銅鏃

以上、個別地域の青銅鏃を検討対象とした型式分類と編年研究の到達点を述べてきた。しかし、注意しなければならないのは草原地帯東部規模で統一した基準で行った型式分類が見当たらない。すなわち、草原地帯東部では広く用いられうる分類案が十分行われていなかったと考えられる。そして草原地帯東部の青銅鏃の研究は型式分類や編年を目的としたものが多く、歴史的な性格を論じる研究は少なかったといえる。

もう一度、個別地域の青銅鏃の型式学的研究を振り返って、黒海北岸のスキタイ式青銅鏃とかアラル海沿岸のサカ式青銅鏃とか、これらの青銅鏃の型式分類は詳しく行われておりながら、標準的な型式は分類されていたものの、その型式の内部における個々の系列の系譜関係は言及されていなかった。したがって、この点からいえば厳密な型式学的分類から編年の確立までにはまだ至っていなかった。

新疆出土青銅鏃の編年研究について、形態上の相似性の比較の上で編年学的位置を決定するものが多い。しかしながら比較された出土事例そのものもその相対年代が不明瞭であったり主観的や恣意的な比較といわれたものもあつたりしたことから、青銅鏃の編年学の検証に問題があるといえる。草原地帯出土の青銅鏃は出土状況が不明瞭であるものが多いが、一括遺物である墓葬単位の資料を検証証拠としたことが不可能であるわけではない。たとえば、近年には南シベリアのアルジャン2号墳葬群[Чуганов 2011]や新疆の薩恩薩伊墓地[新疆文物考古研究所 2013]、莫呼查汗墓地[新疆維吾爾自治區文物考古研究所 2016]の詳細な資料の発表に伴って個々の墓葬単位の共伴関係が載せられており、これらの資料を利用して編年の検証を行うことも可能であるだろう。

(4) 青銅轡

金属製銜・鑣の分類案も型式学的分析について問題点がある。カドルバエフ・邵会秋・李剛らの銜の分類案は多くが銜の外環の形状のみを分類基準とするものである。銜には時間的に変化しやすい属性は少ないものの、土器の方面の論考を参考するなら、このような単一属性における系統変化や段階設定を行うことは、蓋然性や分類単位としての有効性が低いと思われる[田中良之・松永幸男 1984]。従って銜の外環の形状のみを分類基準とする型式学的分析は問題があるといえる。なお金属製銜の型式間の系譜関係の問題も残されたままである。また、艾克拜爾＝尼牙孜の鑣の分類案は金属製・骨角製などの材質や全体形態によって行うものである。材質が異なる鑣の形態は同じなものである可能性があるから、分類上で重複の危険が存在する。そのため、複数の属性からあらためて分類と編年を行う必要がある。

また、ほかの問題としては次のようなものがある。人間の遺物は機能の要求から使用の目的に向かって進む人間行為の集合である[Clarke 1978]。馬の利用の必要性が生まれると、馬を制御するための金属製の轡が作り出される。このようにして金属製の轡はさまざまな機能的属性をもったことが理解できる。轡は銜と鑣の部品の組み合わせからなる複合の道具であるため、材質・形態・重量など轡の全体を構成する属性が多く存在する[諫早直人 2012]。銜のみでは左右に外れてしまうため、銜を留める鑣が作られる。銜を鑣に固定する機能は金属製轡の第一の目的であるといえる。したがって、銜と鑣の連結方式に関する機能的属性が重要なものである。しかしながら、先行研究では銜と鑣の連結方式と形態の関連および、銜と鑣の組み合わせの関係などの検討が不足しており、依然として問題が残されている。

3. 本論の問題の所在

第1節～第3節での先行研究と問題の所在の論述を通して、ここでは本論で解決すべき問題に対して簡単に整理を行いたい。初期騎馬遊牧文化の展開過程に関する先行研究の問題点として、以下の2点があげられる。

[問題点1] 型式学と編年学による草原地帯東部の全体規模の文化動態の検討の欠如

これまでの研究では小地域の内部の動態のみが検討の対象として取り上げられること

が多いが、草原地帯東部の全体規模を通じた騎馬遊牧文化の動態が把握されていない。したがって騎馬遊牧文化の通地域的な変化の過程や具体像が不明である。また、こうした変化の過程と文化動態の具体像の検討は、諸型式の青銅武器と馬具の分布範囲によって示される時期的な変動が基礎となっている。しかしながら、青銅武器と馬具の型式設定、型式変化、墓葬単位の一括遺物の検証という型式学的・編年学的な検討の手順の点からみるならば問題がある。本論では、青銅武器と馬具の型式学的・編年学的な検討から始まり、どのように初期騎馬遊牧文化が展開されたか、その変遷過程と具体像を通地域的・通時期的に解明したい。

〔問題点 2〕 環境の変動に伴う遊牧集団の本質的な社会変化の考察の不足

草原地帯東部の初期騎馬遊牧文化の変遷の要因が不明である。騎馬遊牧文化の変遷の背景としての人間集団の移動は自然環境の変動に基づくことが多く、遊牧集団の本質的な社会変化の考察が課題である。戦士階層の形成が本質的な文化・社会の変化を評価する指標とされる見方がある。しかし、青銅武器と馬具の拡散と青銅器副葬の階層性との関係については検討されたことがない。また、草原地帯東部における初期騎馬遊牧文化の変遷の要因を考察するにあたって、環境の変動と社会の変化から総合的な検討が必要である。

第 4 節 資料・方法・目的

1. 本研究が扱う資料

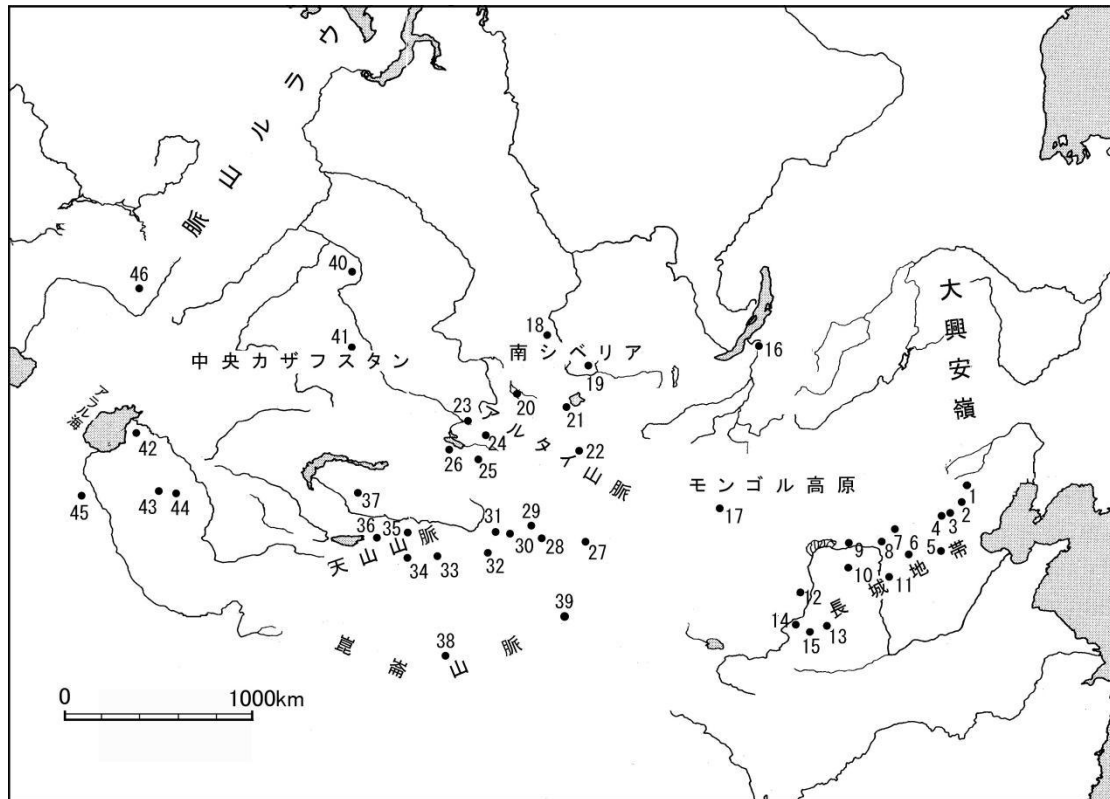
本論が扱う対象資料は、おもに騎馬遊牧文化形成の紀元前 1 千年紀初から匈奴勃興以前の紀元前 3 世紀に至る草原地帯東部において出土（採集）した青銅短剣、青銅刀子、金属製馬具、銅鏃である。これらの資料はおもに長城地帯、新疆、ミヌシンスク、トゥバ、アルタイ、天山、中央カザフスタンなどの地域から出土（採集）したものである。散在する遺跡の位置は第 2－5 図のとおりである。そのうち、ミヌシンスク、トゥバ、アルタイ、中央カザフスタンなどの旧ソ連の資料は、『Степная полоса Азиатской части СССР в скифо-сарматское время（ソ連草原のアジア部分におけるスキタイ＝サルマタイ時期）』が載せたデータを基礎として、可能なかぎりその後発表された資料を追加するものである。

しかし、具体的な出土場所を明確に記載する資料があまり多くないため、第2－5図にはこれらの出土場所の大体の位置を示している。いっぽう、長城地帯、新疆北部、天山山脈などの中国国内の資料は、簡単に墓葬とその副葬品の状況を発表する大量の報告および、正式に出版する少量の報告書の中のデータを集成・分類したものである。

2. 方法

(1) 型式論

前章節の型式学的研究の問題点の部分では、分類基準の設定、変化組列の想定、編年的位置の検証という一連の検討の手順の点に問題があるという点を指摘した。こうした型式学的分析は基本的に対象とする地域での青銅器の型式分類から始めざるを得ない。ただし、長城地帯以外の草原地帯東部において詳しく青銅器の出土状況を記載する資料が多いといえない。また、これらの青銅器の中には似通ったものも少なく、すなわち青銅器の個体間には多様なバリエーションを有する。それ故、草原地帯東部の全体規模の青銅器の分類は容易であるわけではない。多様な情報を圧縮する効果を得られるため、まずは本論の第二章から検討の対象とする青銅短剣、青銅刀子の分類は、可能なかぎり多い個体の間に似通された必要な属性を抽出し、不必要な情報と認められるものを切り捨てたのである。このように、第二章で対象とする青銅短剣の型式分類は鐔の部分进行分类基準とするものであり、第三章で対象とする青銅刀子の型式分類は刀身の断面进行分类基準とするものである。つぎは個々の型式の連なりを順序づけられる組列、すなわち型式変遷の方向を推定するものである。ここでは、青銅短剣に関する変遷の順序の推定は、鐔の部分とその周辺、柄頭の装飾などという痕跡器官を踏まえ、形の似たものを近いところに、形の似ていないものを遠いところに置くことによって行うものである。また、個々の青銅刀子の型式の変遷は刀身の形状を踏まえて順序を推定する。



第2-5図 初期騎馬遊牧文化の遺跡位置

1. 内蒙古寧城 2. 河北承德 3. 北京延慶 4. 河北張家口 5. 河北石家荘 6. 山西渾源 7. 内蒙古烏蘭察布 8. 内蒙古呼和浩特 9. 内蒙古包頭 10. 内蒙古鄂爾多斯 11. 山西原平 12. 内蒙古阿拉善左旗 13. 甘肅慶陽 14. 寧夏中衛 15. 寧夏固原 16. バイカル湖 17. ウムノゴビ 18. ミヌシンスク 19. トゥバ 20. パジリク 21. ウラーンゴム 22. クルガン湖 23. エルティシ 24. マイミール 25. 新疆塔城 26. チリクタ 27. 新疆哈密 28. 新疆吐魯番 29. 新疆吉木薩爾 30. 新疆烏魯木齊 31. 新疆呼図壁 32. 新疆和静 33. 新疆輪台 34. 新疆拜城 35. 新疆伊犁 36. イッシク湖 37. ベスシャトル 38. 新疆和田 39. 新疆且末 40. ボリシェレチエ 41. タスモラ 42. ジェトウ・アサル 43. タギスケン 44. ウイガラク 45. サカル・チャガ 46. グマロヴォ

第四章では銅鏃について具体的な分類、編年の作業を行いたい。銅鏃の分類は矢柄との接続の方式、鏃身部の断面形や平面形などによって型式を大きく設定する。その後、個々の型式の組列の想定は、銅鏃の武器的機能の痕跡を辿りながらより改良された型式ほど新しい型式という手順にしたがって行う。

第五章から検討の対象となる金属製の馬具の分類、とりわけ金属製の銜の分類は銜と鏢の連結方式や外環の形状、銜枝の形態という機能的属性の相関を踏まえて型式を設定し、工夫・改良の跡を辿りながらより改良された型式ほど新しい型式と考え、型式の変遷の順

序を想定した。また鑣の分類は銜と鑣の連結方式に関する中央の孔の形態ないしは有無で行う。

(2) 年代論

型式学的方法によって編成された型式組列は、そのままでは机上で作られた作業仮説にすぎないから、出土状況によって検証されなければならない。しかし、草原地帯の大部分において墓葬単位の一括遺物の状況が不明瞭である場合が多い。型式間の複数が共伴する事例がきわめて少ないといえる。それより、出土状況を踏まえて青銅器の型式学の組列を検証するのが困難であるといわざるを得ない。ただ、幸いなのは、長城地帯、新疆においてこれらの草原地帯の青銅器は相対年代が比較的明確である燕国系あるいは中原系の青銅容器や青銅武器と一緒に出土することから、この地域の青銅器の型式組列の順序の想定を検証することが可能になるものである。また、前節の先行研究に述べたように近年からミヌシンスク、トゥバにおける墳墓に関する議論については放射性炭素年代測定結果を踏まえて墳墓を判断するものがだんだん増加している。草原地帯東部における大部分の青銅器の出土状況が不明であるため、型式の組列を検証する際には、これらの青銅器を出土する墓葬の放射性炭素年代測定の結果も参考する。

(3) 分布論

前章節の初期騎馬遊牧文化の動態研究の問題点の部分には、厳密な型式分類とその編年学の検証に基づいて分布状況を示す量的な関係という分布論の検討は問題があるという指摘した。ここでは、型式論・年代論に基づき、時期ごとに具体的な短剣・銅刀・銅鑣・馬具の分布の様態をそれぞれ明らかにし、これらの青銅器が草原地帯東部で展開する様相を把握する必要がある。詳しい作業あるいは分析の手順としては時期ごとにドットマップを使って分布の状況の検討を行う。また、草原地帯の考古学では、物質文化の要素の分布の様態を把握する際、文化の拡散の動態を人間集団の動きと関係する見方がある。とりわけ、文化の拡散が大規模な人間集団の移動に伴うという点では、草原地帯東部における地域間関係の説明として有力な議論となっている。それより、これらの文化の拡散の動態として存在していた草原地帯東部の地域間関係の形成過程とその形成要因をある程度把握できるだろう。

3. 本論の目的

本論の目的は、青銅武器と馬具の基礎な考古学的研究の各自の立場から草原地帯東部の遊牧文化動態の具体像を考察することである。草原地帯東部の騎馬遊牧文化動態の具体像については、具体的な内容としては大きく二つの点に分けられる。

まず、紀元前1千年紀における草原地帯東部の全体規模の地域間関係の具体像という点である。この問題に関連する考古学現象としては、共有の属性を持ちながら地域の特徴がある、草原地帯東部で広域に分布する武器（短剣、銅刀、銅鏃）、馬具があげられる。物質資料が広域に伝播する際、多種多様の機能をもった各種類の物質資料が同様な在り方で伝播してきたのではない。具体的な物質資料の種類とその情報の意味には何らかの差異が存在する。したがって、本論は個々の物質資料の拡散の在り方を検討することとしたい。これらの考古学現象が地域全体、時期全体を通じて整合的に説明されることが必要であると考える。

次に、第二の論点は、紀元前1千年紀において草原地帯東部の全体規模の地域間関係の形成要因である。本論では、こうした地域間関係の形成要因の検討は、人間集団の大規模な移動を背景として、自然環境の変動に伴って本質的な文化・社会の変化という視点から行う。

人間集団の動態を自然環境の変動と結び付けてみると、農耕集団の興亡には、文明の発展⇒人口の増大⇒森林の破壊⇒土壌の劣化⇒突発的な気候の悪化⇒食料不足⇒疾病の蔓延⇒人口の激減⇒民族の移動⇒文明の接触・交流⇒新たな世界観の形成⇒文明興亡といったプロセスがあると考えられる[安田喜憲 2004]。すなわち、人間集団の移動と自然環境の変動との間に、食料生産を阻害する気候変動が起きると、人間集団が人口の維持によって食料生産に有利な環境を求めて移動しなければならないといった因果関係は存在している。具体的な状況が異なるかもしれないが、遊牧集団にとってはこの因果関係が大体同じ過程を繰り返す。遊牧集団は遊牧活動によって一般的に人口の増加が認められる。増加する人口を維持するための家畜の生産の必要性があるが、家畜の食料となる牧草生育が障害される時期、すなわち高温、旱魃、積雪、害虫などの牧草生育に不利する気候変動が起きた場合、遊牧集団は食料不足（家畜数量の減少）によって牧草地を求めて移動しなければならない。

いっぽう、この人間集団の移動の過程のなかで、技術的変革と社会組織の変革が引き起

こされる。技術的変革は物質文化の機能的な形態の変化から推測することができる。本論では、遊牧集団に軍事的優位性を与える武器の変化と、情報・物資・人間を快速に移動させる馬具の改良があげられる。このような機能的な武器と馬具の形態の変化は、人間集団の大規模な移動とともに、社会統合に向けて重要な要素となっている軍事力と機動力の変革と結び付けている。

第二章 青銅短剣の展開と地域間関係

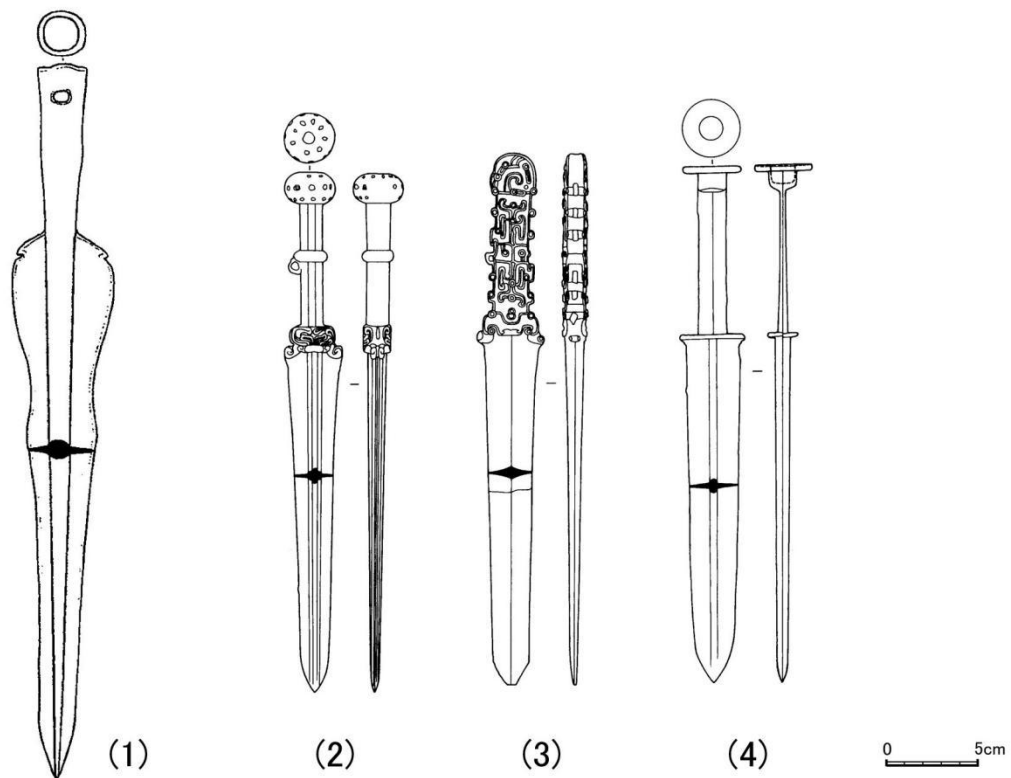
草原地帯東部における初期騎馬遊牧文化の動態を論ずる際に、紀元前1千年紀以降における南シベリアと長城地帯という地域間関係の具体像がアキナケス式短剣の展開の様相からとらえられると考える。これらの青銅短剣は紀元前1千年紀にミヌシンスク盆地から長城地帯に至るまできわめて広い地域で分布している。青銅短剣の形態の変遷に伴い、個々の型式の青銅短剣の分布様態は南シベリアと長城地帯という地域間関係の具体像に関する議論において焦点となるものと考えられる。

ところが、遊牧草原から農耕中原へ転換する長城地帯における銅剣を概観するならば、草原地帯の固有の銅剣の以外、遼寧式曲刃剣、秦式剣（花格剣、獣面型短剣とも呼ばれる）、中原系の銅剣、草原地帯の周辺地域と関連する各種各様の銅剣は長城地帯においても存在している。中国東北部の遼寧式曲刃剣は剣身と柄を別々鑄造するのが特徴であるが、秦国地域からよく検出された秦式剣は鏢に複雑な中原的文様を飾る銅剣である。また、柄に縷を巻き付けて仕上げる春秋・戦国時代の中原の銅剣と関連するものは、北京北部の軍都山墓地にも認められる（第3-1図）。これらの周辺地域との関係を示す銅剣は長城地帯を含む草原地帯から検出されているが、草原地帯の固有の銅剣を論じることから、本章では触れないことにする。

前述の先行研究に述べたように、紀元前1千年紀初における草原地帯東部の青銅短剣の様相は、紀元前2千年紀後半の後期カラスク文化の一体性から個々の地域における独自の青銅短剣文化あるいは地域性の発生へ変わってきたものである[宮本一夫 2007, 松本圭太 2013]。このような先行研究を踏まえ、本章ではミヌシンスク、トゥバ、アルタイ、モンゴル、長城地帯など広域を対象地域に、青銅短剣や青銅短剣の形態に一致する少量の鉄剣を対象資料に、紀元前1千年紀初から紀元前3世紀に至るまで通時的な青銅短剣の形態の変遷の過程、分布の状況を検討し、草原地帯東部、とりわけ南シベリアと長城地帯という地域間関係の具体像を明らかにしたい。

具体的な分析は、青銅短剣の型式分類から始め、変化の方向性の想定の上で型式の序列を検証していくという手順を踏まざるを得ない。ただし、墓葬単位における型式の間の共伴関係があれば、矛盾なく対応する型式間の共伴関係により、型式の序列の検証が可能であるが、短剣が墓葬から1点ずつ検出されたことから、今回対象とする資料がほとんど不可

能である。したがって、草原地帯東部においては、墓葬単位の一括遺物の検証は、相対年代が明確にできるほかの遺物群の編年や年代観および、炭素年代測定の結果によって行わざるを得ない。本章はその方法を妥当な分析の手段として、青銅短剣の年代的な位置とその型式変化を考えていきたい。



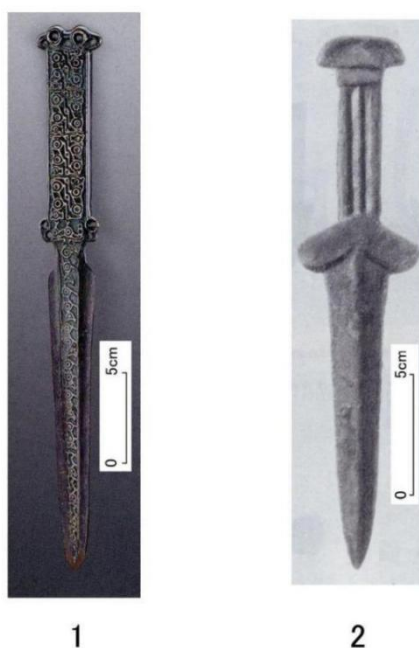
第3－1図 草原地帯東部における周辺地域の銅剣

1. 遼寧式曲刃剣（小黑石溝 8601 号墓） 2～3. 秦式剣（玉皇廟 102 号墓・玉皇廟 18 号墓）
4. 中原系短剣（玉皇廟 148 号墓）

第1節 型式分類

1. 型式分類

従来の大別分類では柄頭の属性が重視されてきたが、ここでは鐔の形態に注目し鐔形態のみを対象とした型式分類を試みたい。大別分類では、一組列に含まれる型式群からなる通時的な様式を見出すことができる。ここでは柄と鐔が区別されるかによって青銅短剣はおもにカラスク式銅剣とアキナケス式 (akinakes) 銅剣に分けることができる (第3-2図)。いわゆるカラスク式短剣は柄と鐔が区別されず、剣身基部を切り込むような形で鐔が形成され、鐔が剣身と垂直方向に広がるものである。アキナケス式銅剣は柄と鐔が区別され、剣身基部に切り込みを持たず、鐔が剣身に対して斜めに付いて心葉形になるものである。さらに、具体的な鐔の形状によってカラスク式銅剣とアキナケス式銅剣に対してそれぞれ細別分類を行う。結果としては、順にA類からD類までの4型式に分けることができる。



第3-2図 青銅短剣の大別分類

1. カラスク式銅剣 2. アキナケス式銅剣

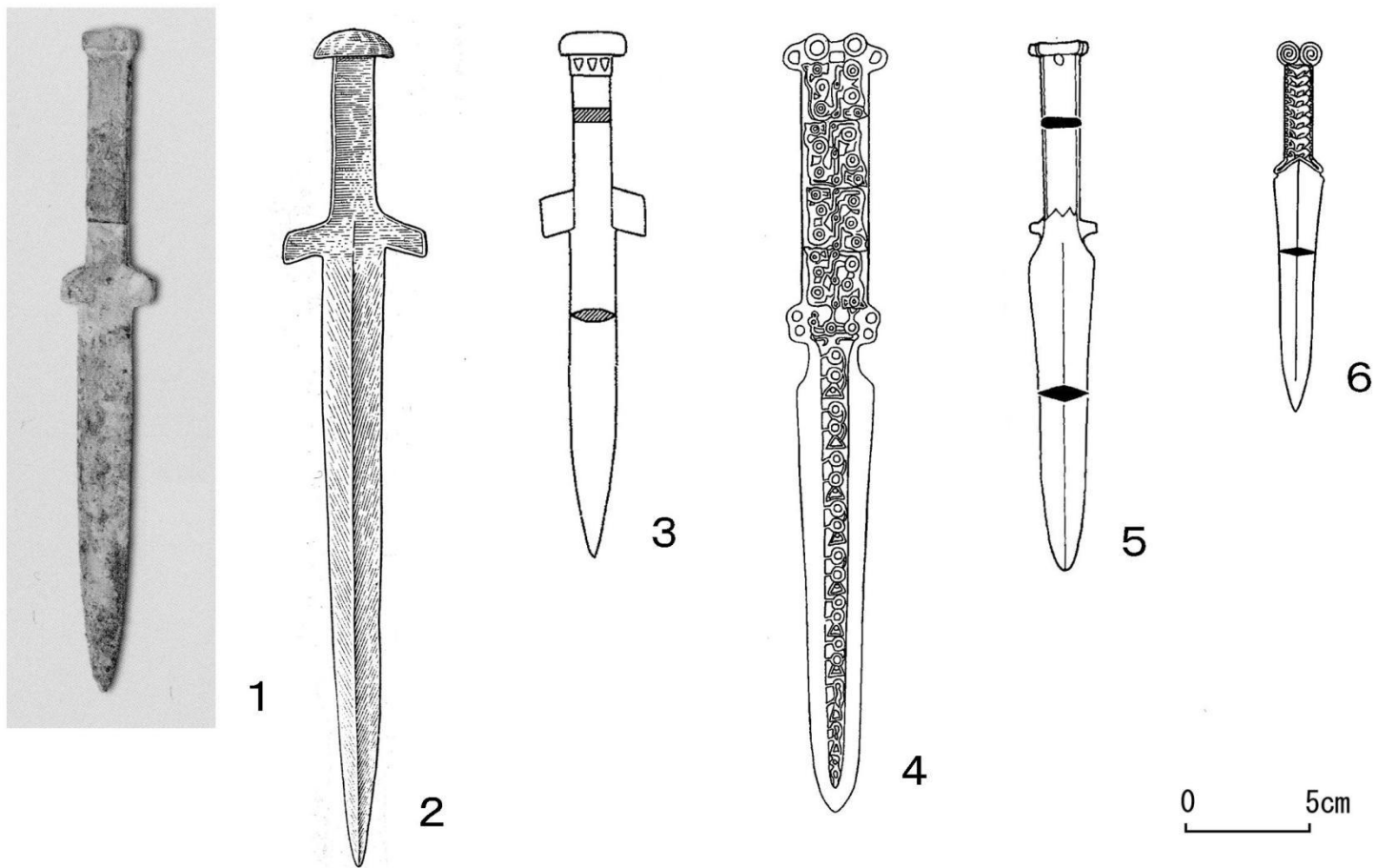
A類：柄と鐔が区別されなく、剣身の基部に切り込みを持たず、方形の鐔部が剣身の外側に延びて翼形となるものである (第3-3図：1-3)。カラスク式銅剣としてA類を典型的なカラスク式銅剣と積極的に結び付けるのはミヌシンスク盆地の採集品があげられ

る（第3-5図：1）[Членова 1967]。こうした銅剣は柄にスリットが入る典型的なカラス式銅剣の特徴を持ちながら、本論のA類のような翼形の鐔が認められることから、鐔の形態からみると本論のA類は典型的なカラス式銅剣から派生したものと考えられる。

B類：柄と鐔が区別されなく、剣身の基部に切り込みをもつものである（第3-3図：4-6）。鐔の形状によって、B類をa・bという二つの型式に細分することができる。Ba型は剣身の基部に棒状の鐔が浮かび上がるが、棒状の鐔の下に切り込みの状態が残っているものである（第3-3図：4-5）。八木聡氏が中国北方B類銅剣としたものに相当している[八木聡 2014]。剣身の基部に切り込みをもつ鐔の形状からみると、本論Ba類は典型的なカラス式銅剣と結び付けられる。また、剣身の中央部に柱状の脊をとおすBa類は同じく典型的なカラス式銅剣に類似している（第3-5図：4）。Bb類は剣身の基部に小さい突起があつて鐔をなし、切り込みが小さく目立たないものである（第3-3図：6）。本論のC1類（第3-4図：1）と比較すれば、ある程度に両者の鐔の形状は類似するものの、Bb類の鐔が柄と区別されない。高濱秀氏が中国北方C類銅剣としたものに相当している[高濱秀 1982]。剣身の基部に切り込みを持て鐔となるのからみると、本論Bb類は同じく先行する典型的なカラス式銅剣と結び付けられると考えられる[高濱秀 1982、八木聡 2014]。

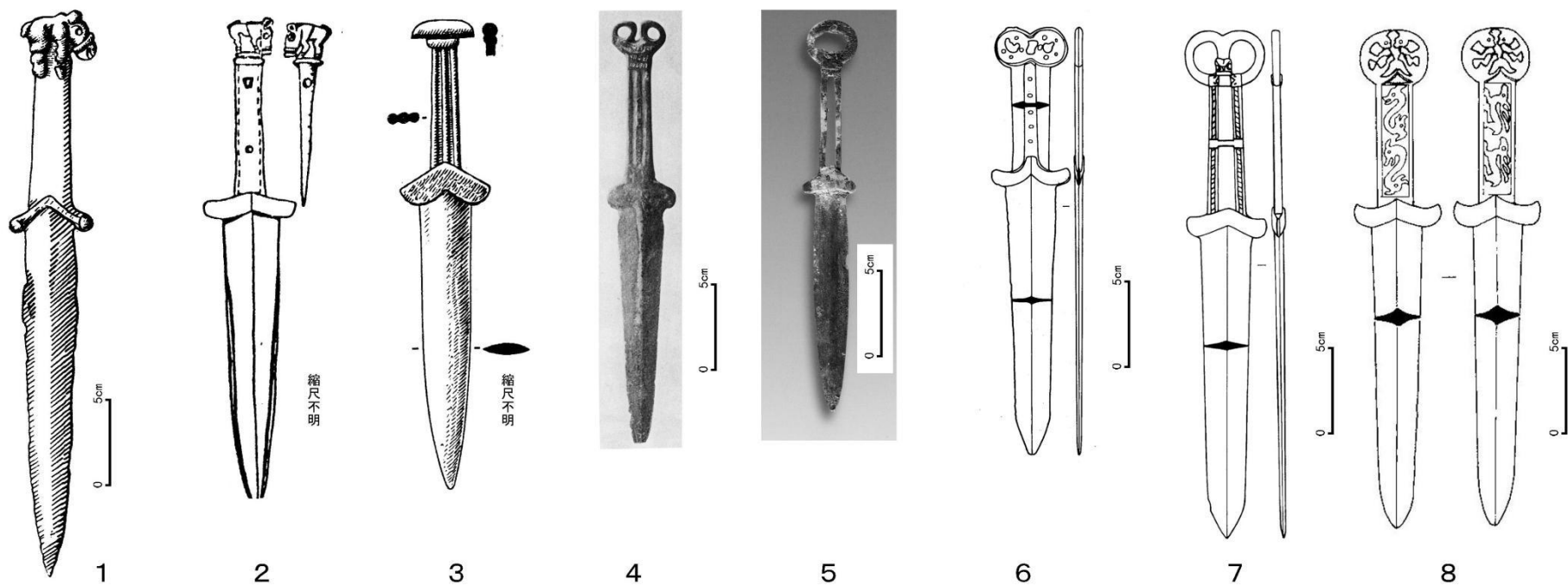
C類：黒海北岸のスキタイのアキナケスと似た形を呈する古式アキナケス式銅剣である。典型的なカラス式銅剣の形態に対して、C類は、柄と鐔が区別され、剣身の基部に切り込みを持たなく、鐔の全体が鐔の両側の部分を結んで心葉形となるものである（第3-4図：1-5）。環頭や傘形（キノコ形）から変化した一字形の柄頭は典型的なカラス式銅剣との関係を示しているが[高濱秀 1999、松本圭太 2013]、柄と鐔が区別される鐔の形態からみると、C類は典型的なカラス式銅剣から脱却し、古式アキナケス式銅剣と呼ばれることができるだろう。また、柄頭の形態は本論B類と同様に一字形や猪の装飾があるが、B類の一字形の柄頭の下に小さい孔を開けていなく、猪の装飾は脚を垂直に伸ばして爪先立つものであり、これらの柄頭の形態はB類と相違している。

D類：柄と鐔が区別され、剣身の基部に切り込みを持たなく、鐔の両端がやや反り上がる八の字形となるものである（第3-4図：6-7）。八の字形の鐔は古式アキナケス式銅剣と比較が可能である。鐔の形状からみると、D類が本論C類の地域と交流の中で出現したと考えられる[八木聡 2014]。鐔の形状の類似から、本論C類の影響を受け、D類が古式アキナケス式銅剣に繋がると考えるべきである。



第3-3図 カラスク式短剣の型式分類

(1. A1 類 2~3. A2 類 4~5. Ba 類 6. Bb 類)



第3-4図 アキナクス式短剣の型式分類

(1~2. C1類 3~4. C2類 5. C3類 6. D1類 7~8. D2類)

2. 型式変化

以上の4型式に、諸属性の変化で型式の変化をとらえられるのはA類、C類、D類がある。

A類：鏝や柄頭からさらにA1類・A2類に分類できる。A1類は鏝がやや外へ広がり、柄頭が一字形をなすものである（第3-5図:2）。A2類は方形の鏝が非常に外へ広がり、柄頭が台形のキノコ状をなすものである（第3-5図:3）。A1類→A2類の変化では鏝や柄頭が肥大化する変化が認められる。

C類：鏝からさらにC1類・C2類・C3類に分類できる。C1類は鏝が八の字形に近い形をなすものである（第3-5図:7）。C2類は鏝が心葉状となるものである（第3-5図:8）。柄頭の形態は双鳥首、環首、棒状がある。柄の表面には1-3本の沈線を施し、あるいは長方形の透し孔を開いている。C3類は心葉状の鏝の下が括れなくて崩れてきたものである（第3-5図:9）。柄頭の形態はC2類と同様に双鳥首や環首、棒状の装飾も含める。したがって、C1類→C2類→C3類の変化では鏝が肥大化してから衰退する変化が認められる。

D類：柄頭からさらにD1類・D2類に分類できる。D1類は柄頭が同心円状をなすものである（第3-5図:10）。柄頭には明瞭な縁があり、縁の中は小孔がめぐる。同心円状の中央にも小孔を開けている。D2類は同心円状の中央の小孔が広がって双環状に近い形をなすものである（第3-5図:11）。柄の表面には双頭のS字形の夔龍文、鹿など草食動物の脚を前後から折りたたむもので飾られることがある（第3-4図:8）。したがって、D1類→D2類の変化では、柄頭が同心円から双環状へ変化する過程が認められる。

第2節 編年

1. 墓葬一括遺物での検討

第3-1表は青銅短剣がほかの遺物群と一緒に墓葬単位から検出された出土例である。一括遺物の情報が認められる青銅短剣の出土事例の数量はきわめて少ないが、ミヌシンスク盆地やトゥバ地域においては青銅短剣が草原地帯の固有の遺物と共伴すること、長城地帯においては青銅短剣が一定量の中原系や燕国系の遺物と共伴することがわかった。先行研究においては草原地帯の固有の遺物群の型式学的編年が不十分であることから、青銅短剣に伴う一括遺物の年代観の確定はミヌシンスク盆地やトゥバ地域において炭素年代測定の結果によって行わざるを得ない。長城地帯においては青銅短剣が青銅容器の鼎や銅、青銅武器の戈と共伴している。青銅容器の年代観は朱鳳瀚の礼器の編年を基礎とする[朱鳳瀚 1995]。青銅武器の年代観は林巳奈夫や宮本一夫の編年を主要な参考とし[林巳奈夫 1972、宮本一夫 1985]、井中偉の銅戈の編年も参照する[井中偉 2011]。

短剣 A 類はアルタイ山脈からよく検出されたが、地点や状況の情報が明確できるのは今まで2点のみがある。短剣 A1 類は本論の第三章で検討した A 類刀子と、短剣 A2 類は本論で検討した I1 類銅鏃と共伴する。本論の第三章で述べたように、A 類刀子はミヌシンスク盆地のカザノフカ（Казановка）-II 墓地 5 号墓から検出されたことがわかった。炭素年代測定の結果によってこの墓の年代が 900-790BC と編年された[Зайцевой 2005]。また、本論の第四章で検討したように、I1 類銅鏃はグマロヴォ（Гумарово）1 号墳 3 号墓から検出された事例がある。この墓の年代が前 7 世紀初と編年された[Исмагилов 1988]。したがって、短剣 A 類は前 9 世紀から前 7 世紀初頭の間に存続している。

第3-1表に示したのが、短剣 Ba 類は河北の平泉東南溝 6 号墓や遼寧の寧城県瓦房中 791 号墓から青銅戈と一緒に検出された。短剣 Bb 類は寧城県南山根 101 号墓から青銅戈と一緒に検出された。これらの墓から出土した銅戈は、援鋒が三角形を呈しており、西周後期から春秋早期の特徴に一致している。また、寧城県南山根 101 号墓から鼎・簋・簠が検出された[遼寧省昭烏達盟文物工作所ほか 1973]。これらの中原系の遺物は、西周後期から春秋早期の墓葬と考えられる三門峽虢国墓地 1612・1657・1052・1820 号墓の出土事例と似ている[中国科学院考古研究所 1959]。したがって、短剣 Ba 類、Bb 類は、同様な年代的位置を示し、西周後期から春秋早期（前 8 世紀）のものにとらえておく。

また、玉皇廟墓地からは短剣 D1 類が 250 号墓で青銅銅や銅戈と、短剣 D2 類が 156 号・

171 号墓で青銅劍と共伴する。年代の定点となるものとして、胴部の様態から考量するならば、250 号墓の青銅劍と 156 号墓の青銅劍の間に形態的差異が認められる。171 号墓の青銅劍の様態が春秋後期の墓葬と編年された長治分水嶺 269 号墓出土の青銅劍[山西省文物工作委员会晋東南工作組 1974]と類似している。いっぽう、銅戈が 250 号墓から出土しており、春秋中期の前 7 世紀に位置付けられる。したがって短劍 D1 類と短劍 D2 類の間には相対的な年代差が示される。

短劍 C1 類がトゥバ地域のアルジャン 1 号墳から検出された。炭素年代測定の結果により、この墓の年代が前 9－前 8 世紀と編年された[Грязнов 1980]。また、第 3－1 表にみられるように、短劍 C1 類がティギル＝タイドゼン（Тигир Тайджэн）-IV 地点 1 号墓地 1 号墓から検出された。短劍 C2 類がアルジャン 2 号墳 5 号墓から検出された。ティギル＝タイドゼン（Тигир Тайджэн）-IV 地点 1 号墓地 1 号墓の ^{14}C 測定年代が BC1000－830 年である。アルジャン 2 号墳 5 号墓の ^{14}C 測定年代が BC619－608 年である。短劍 C2 類も河北の懷来北辛堡 1 号墓から検出された。懷来北辛堡 1 号墓では鼎、豆、壺、缶、戈などを出土しており、鼎の足は細長くなった春秋後期から戦国前期の特徴を示すといえる。したがって、短劍 C1 類と短劍 C2 類は、想定された型式変化に対して矛盾なく対応することが示された。さらに、第 3－1 表に示されるように、短劍 C3 類が長城地帯の寧夏や甘肅から青銅戈と一緒に出土する事例はある。こうした青銅戈は、援鋒が弧線を呈しており、援鋒が短くなり、戦国後期時代の特徴を示している。したがって、短劍 C1 類→短劍 C2 類→短劍 C3 類という相対的な変化が認められる。

第3-1表 草原地帯東部における青銅短剣の諸型式の共伴関係

地 域	番 号	短 剣				一括遺物	炭素年代	文 献
		A	B		C	D		
			a	b				
新疆	莫呼查汗 I 号墓地 101 号墓	1 (1)				A 類刀子		新疆維吾爾自治區文物考古研究所 2016
新疆	石門子 4 号墓	2 (1)				I1 類鏃		新疆文物考古研究所 2013
トゥバ	Казановка-2, курган 5					A 類刀子	900—790BC	Г. И. Зайцевой 2005
Ural	Гумарово, курган 1, могила 3					I1 類鏃	前 7 世紀初	Р.Б. Исмагилов 1988
河北	平泉東南溝 6 号墓		○ (1)			戈		河北省博物館ほか、1977
遼寧	瓦房中 791 号		○ (1)			戈		寧城県文化館ほか、1985
遼寧	南山根 101 号墓			○ (4)		鼎・簋・簠・戈等		遼寧省昭烏達盟文物工作隊ほか、1973
トゥバ	アルジャン 1 号墳				1 (2)	A 類鏃	822—791BC	М.П. Грязнов 1980
Minusinsk	Батени, курган III, могила 21				1 (1)	A 類鏃		Н.Л. Членова 1967
トゥバ	Тигир Тайджан-4, погребения 1 курган 1				1 (1)	A 類鏃	1000—830BC	Г. И. Зайцевой 2005
トゥバ	アルジャン 2 号墳 5 号墓				2 (2) (鉄製)		619—608BC	Chugunov et.al. 2010
河北	北辛堡 1 号墓				2 (1)	鼎・戈等		河北省文化局文物工作隊 1966
甘肅	庄浪邵坪村				2 (2)	戈		庄浪県博物館 2005
寧夏	撤門村 3 号墓				2 (1)	戈		羅豊・韓孔樂 1990
内蒙古	范家窑子				2 (1)	戈		李逸友 1959
アルタイ	ヴェルホ・カルディン II				3 (1)	挿入式の轡 (Cb 型銜)		福岡市博物館ほか、2005
寧夏	王大戸 1 号墓				3 (1)	戈		寧夏文物考古研究所ほか、2016

甘肅	寧県袁家村				3(1)		戈		劉得禎・許俊臣 1988
甘肅	紅岩				3(1)		戈		劉得禎・許俊臣 1988
北京	玉皇廟 250 号墓					1(1)	銅・戈等		北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 156 号墓					2(1)	銅		北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 171 号墓					2(1)	銅		北京市文物研究所 2007

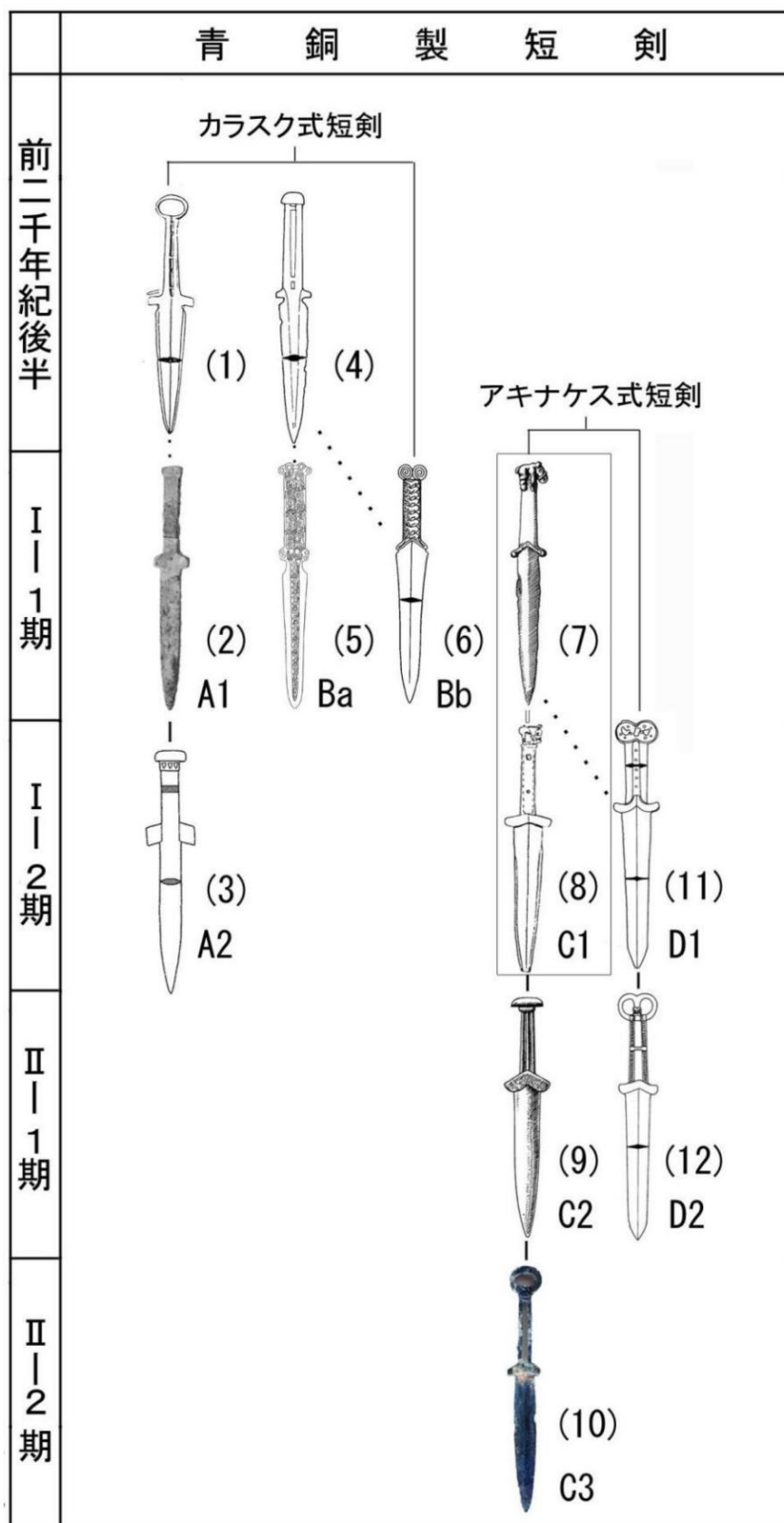
- [凡例]
- ・短剣の型式の欄の数字は型式
 - ・括弧の内の数字は短剣の型式の数

2. 時期の設定

第3-5図に示すのが、草原地帯東部の青銅短剣の各型式の消長を配列するものである。これらの型式の変遷図からみると、短剣D類の開始の年代はほかの型式の青銅短剣と時期差が存在するが、本章の第3節の分布状況に述べたように、草原地帯東部の青銅短剣の変遷とともに、短剣D類の分布域の中心として北京・河北北部の地域的差異も浮かび上がってきた。したがって、短剣D類の出現を草原地帯東部全体の時期設定の指標とすることが困難になった。ここでは、青銅短剣の各型式の系譜関係と分布状況から草原地帯東部の青銅短剣の展開様相を2期4段階に大きく区分できる（第3-5図）。

第I期はカラス式銅剣が紀元前2千年紀後半から引き継ぎ、アキナケ式銅剣が草原地帯東部で出現する時期である。短剣D類の開始の年代差により、第I期を2段階に細分することができる。1段階は短剣A類～短剣C類を指標とする時期である。相対年代については、ミヌシンスク盆地のタガール文化の最初段階としてのバイノヴォ文化期に併行している。2段階は短剣D類が出現する時期である。タガール文化のボドゴルノエ文化期に併行している。

第II期はアキナケ式銅剣が草原地帯東部で拡張する時期である。この時期に短剣C類の拡散は、前段階に類例のない長城地帯における出現を考える上で、重要な時期になることができる。このように、短剣C類の変異の年代差を考慮するなら、短剣C2類から短剣C3類へ変化する過程を二つの段階に分け得る可能性がある。1段階は短剣C2類を指標とする時期である。相対年代はタガール文化のサラガシュ文化期に併行している。2段階は短剣C3類を指標とする時期である。相対年代はアルタイ山脈のパジリク文化に併行している。



第3-5図 青銅短剣の編年図（縮尺不同）

1. ミヌシンスク採集 2. 莫呼査汗 I 号墓地 101 号墓 3. 石門子 4 号墓 4. 白浮 3 号墓 5. 小黒石溝採集 6. 小黒石溝 85NDXA13 号墓 7. ミヌシンスク採集 8. ミヌシンスク採集 9. ミヌシンスク採集 10. 王大戸 PW6 号墓 11. 玉皇廟 142 号墓 12. 玉皇廟 171 号墓

第3節 分布状況

以下、各型式の青銅短剣の分布状況を量的な方面に概観してみよう。第3-6図～第3-9図は時期ごとに各型式の青銅短剣の分布域を示したものである。採集品であつたり収集品であつたりする遊離資料が大半であるため、多数の青銅短剣の詳細な出土地点が不明である。それより、以下の分布図にはこれらの遊離資料を一括し、その検出された大まかな地理範囲を示す。

1. 第 I 期

(1) 第 I - 1 期 (第3-6図)

第3-6図からは、カラスク式銅剣がアルタイ山脈・天山～長城地帯の全域に、アキナケス式銅剣がミヌシンスク盆地～トゥバ地域を中心に分布していることが看取される。詳しくいえば、短剣 A 類がアルタイ山脈～天山山脈に、短剣 B 類が長城地帯の東部をおもに、そして短剣 C 類がミヌシンスク盆地～トゥバ地域を中心に分布していることも看取される。長城地帯の遼西地域においては紀元前2千年紀後半から引き続いたカラスク式銅剣の出土例がみられるが、ミヌシンスク盆地～トゥバ地域においては最も早い型式のアキナケス式銅剣が集中する。

(2) 第 I - 2 期 (第3-7図)

アルタイ山脈・天山においては第 I - 1 期から引き続いたカラスク式銅剣が知られるが、長城地帯東部（玉皇廟文化）においてはミヌシンスク盆地～トゥバ地域のアキナケス式銅剣の影響を受けた短剣が集中する。これらのアキナケス式銅剣の影響は第 I - 1 期に長城地帯東部に入らなかった。第3-7図からは、短剣 C 類がミヌシンスク盆地～トゥバ地域をおもに分布し、短剣 C 類の鐔形態の影響を受けた短剣 D 類が長城地帯東部を中心に分布していることが知られる。短剣 A 類については例数が稀少であるためその分布を明確に知り得ない。

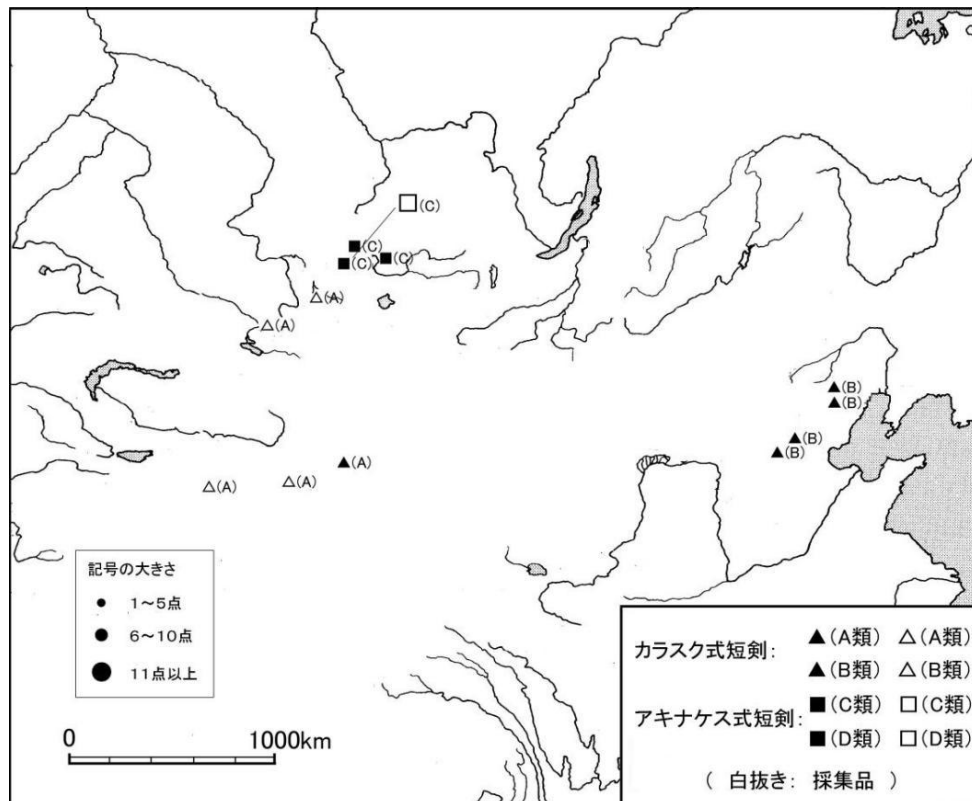
2. 第 II 期

(1) 第 II - 1 期 (第 3-8 図)

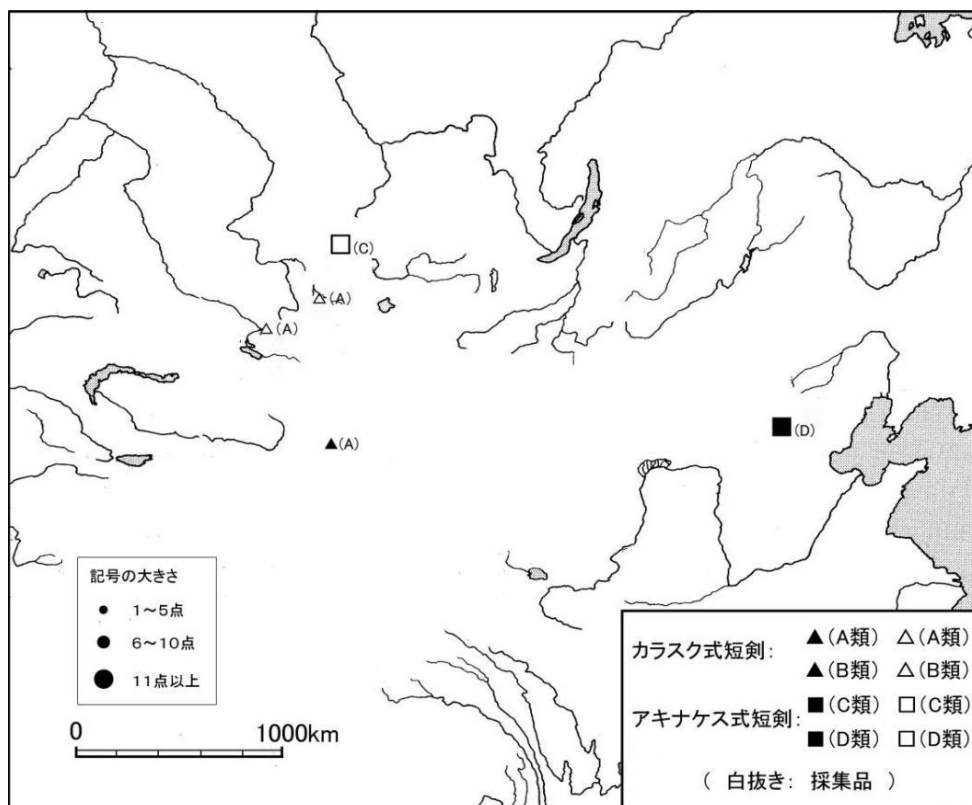
紀元前 2 千年紀から引き続いたカラス式銅剣はこの時期に衰えてなくなってしまった。第 I 期からミヌシンスク盆地～トゥバ地域を中心に分布するアキナクス式銅剣はこの時期に長城地帯へ直接に広がり始まる。また、長城地帯東部においては第 I - 2 期から引き続いた、アキナクス式銅剣の影響を受けた短剣がみられる。第 3-8 図からは、短剣 C 類が南シベリア～長城地帯の全域に広く分布を示すこと、短剣 D 類がおもに長城地帯東部に分布していることが看取される。

(2) 第 II - 2 期 (第 3-9 図)

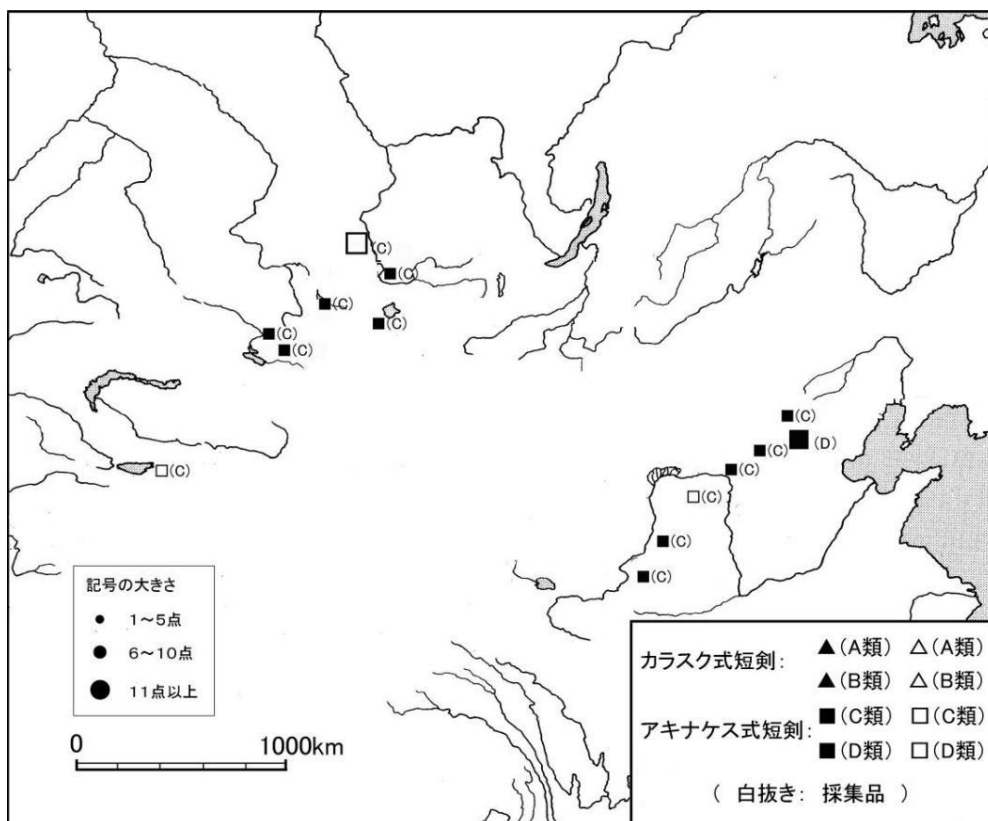
長城地帯東部においてはアキナクス式銅剣の影響を受けた短剣が衰えてなくなってしまった。南シベリア～長城地帯の全域においては典型的なアキナクス式銅剣が広く分布していることが知られる。第 3-9 図からは、短剣 C 類がミヌシンスク盆地～アルタイ山脈～甘粛・寧夏に分布していることが看取される。



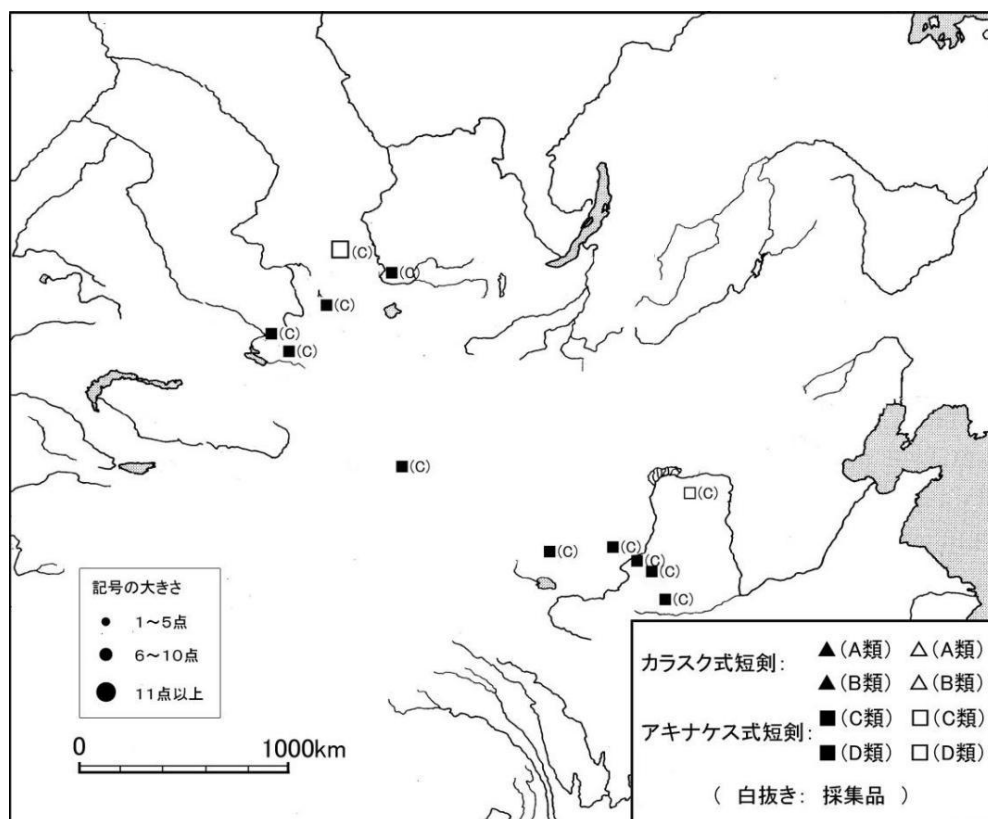
第3-6図 第I-1期における青銅短剣の分布状況



第3-7図 第I-2期における青銅短剣の分布状況



第3-8図 第Ⅱ-1期における青銅短剣の分布状況



第3-9図 第Ⅱ-2期における青銅短剣の分布状況

第4節 青銅短剣の展開と地域間関係

以上の分布の検討により、時期を通じた青銅短剣の展開様相が明らかとなった。これらの考古学的現象をまとめると、草原地帯東部においては、カラス式短剣が盛行してから衰えてなくなってしまい、アキナケ式短剣が南シベリアで成立してから長城地帯へ拡散していくようになる。

第一、第Ⅰ期第1段階においては、カラス式短剣（A類・B類）が南シベリア～長城地帯のほぼ全域で盛行する（第3-10図）。系譜関係および分布状況から考慮すると、A類・B類は、紀元前2千年紀後半の典型的なカラス式短剣から引き続いており、アルタイ～天山、長城地帯でそれぞれ出現すると考えられる。すなわち、第Ⅰ期第1段階においては、カラス式短剣が形態的情報を共有しておりながら、南シベリア・長城地帯といった地域的な特徴が漸く明瞭化していく[松本圭太 2013]。第Ⅰ期第2段階にはきわめてすくないA類がアルタイ～天山でずっと存続するが、アルタイ～天山に関しては評価が難しい。

第二、分布状況から考慮すると、アキナケ式短剣（C類・D類）の展開様相は発生と拡散の2時期に区分できる。

第Ⅰ期第1段階には、C類がミヌシンスク盆地～トゥバ地域で発生したと考えられる。C類に型式として比較できるのは、ユーラシア草原地帯西部にも存在しない。第Ⅰ期第2段階に至ると、D類はその分布中心である長城地帯の東部でC類から発生したと考えられる。しかし、D類の祖型であるC1類は型式として長城地帯には存在しない。C1類を有する南シベリアからの大きな影響を見込むことができる。したがって、D類の発生は長城地帯が南シベリア的要素を受容する結果と見なせる。第Ⅰ期第2段階以降にはD類が長城地帯でずっと存続する。動物文様から考慮するなら、D2類は鹿、馬、山羊などの草食獣の脚を前後から折りたたむ草原地帯の要素と夔龍文などの燕国青銅器の文様が並び立って存在することが明らかになった（第3-4図：8）。それにより、D2類も燕国系的要素を同様に受容したと考えられる。短剣以外の文化要素に考慮するなら、燕国または中原地域は燕山山脈の埋葬制度、副葬品などの方面に影響をより強め、青銅器容器や武器、車馬具などの中原系の器物は階層性の高い墓で多く出現する。第Ⅱ期第2段階に至り、長城地帯の東部は中原要素を受容するとともに、完全に燕国の直接支配地となる。

第Ⅱ期第1段階には、C類が南シベリアで成立した後、長城地帯へ拡散したと考えられ

る（第3-11図）。この場合の南シベリアから長城地帯への影響は、前のD類発生時における長城地帯への影響とは異なることが考えられる。以上からわかるように、南シベリアに固有であったC類は要素ではなくて直接に拡散する形で長城地帯へ広がっていったと考えられる。まず、分布域から考慮するなら、拡散したC類が長城地帯に固有であったD類と長城地帯において地域差は存在している。とりわけ、第Ⅱ期第2段階には、C類は新疆を介した流入経路沿いに長城地帯の西部へ拡散したことが明らかとなった。また、長城地帯の東部においても、青銅短剣は大部分の墓から一人の被葬者に1点ずつ出土しており、C類がD類と一緒に検出されることは存在しない。なお、青銅短剣以外の墓葬構造も配慮に入れると、内蒙古中南部と寧夏南部、甘肅東部との大きな差異を見出せる。すなわち、内蒙古中南部には竪穴土坑墓が分布しており、寧夏南部、甘肅東部にはおもに洞室墓が分布している[許成・李進増 1993、宮本一夫 1999、2002]。それにより、第Ⅱ期第1段階以降において、南シベリアで発生したC類が長城地帯へ拡散したのとともに、長城地帯の西部は燕国または中原地域の影響を漸く受容した長城地帯東部と並び立って存在する東西差は存在するということがいえるだろう。

ところが、先行研究が既に指摘したように、アキナケス式短剣が草原地帯西部においても検出されたことも知られる[高浜秀 1982、八木聡 2014、Rawson 2017]（第3-11図）。古式アキナケス式短剣としたC類が南シベリアで発生したとすれば、ウラル山脈や黒海北岸で検出するアキナケス式短剣についても、草原地帯東部において長城地帯へ拡散することよりも、南シベリアから草原地帯西部への拡散を含めたさらに広い展開様相で考える必要がある。

本章では、鏢部の形態によって青銅短剣の分類を行い、系譜関係、編年、分布状況を整理し、草原地帯東部における青銅短剣の展開と地域間交流を明らかにした。本章で得られた結果をまとめると、第Ⅰ期においては、カラスク式短剣は形態的情報を共有し、地域的な特徴が顕著になり、次第に衰えてなくなってしまう、第Ⅱ期においては、アキナケス式短剣は南シベリアで成立した後、長城地帯へ拡散してき、それとともに長城地帯内部の東西差が形成する、という2点が指摘できる。



第3-10図 カラスク式短剣の展開の模式図



第3-11図 アキナケス式短剣の展開の模式図

第三章 青銅刀子の展開と地域間関係

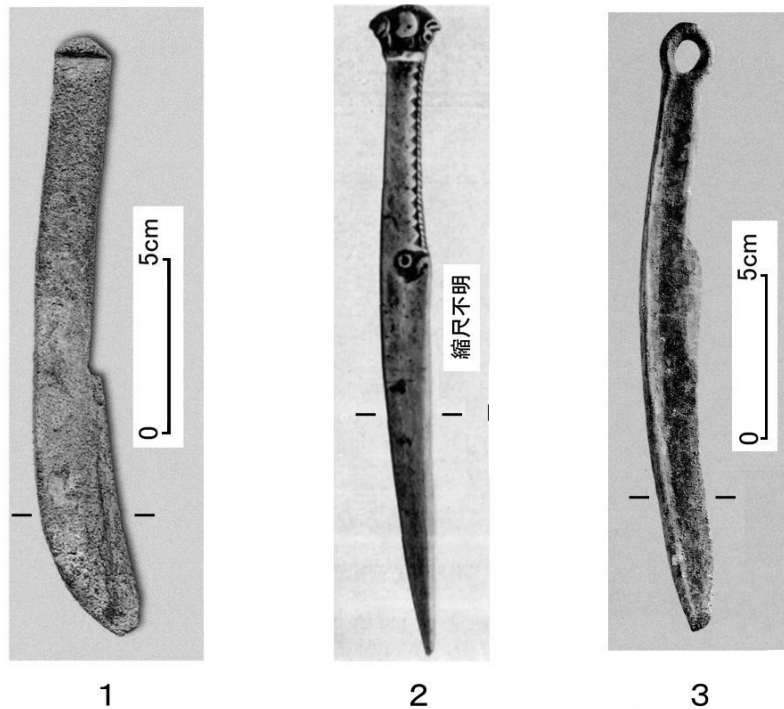
草原地帯東部における地域間関係の実態を解明するため、本章では紀元前一千年紀以降に長城地帯を含む草原地帯東部で青銅短剣とともに検出する青銅刀子の変遷とその具体像について検討したい。第二章の分析を踏まえつつ、まずここでは、青銅刀子の形態の変遷および形態の変遷に伴う地理的展開の様相を整理し、それをもとに草原地帯東部における地域間関係の具体像を明らかにしたい。

分析の手順は、草原地帯の固有の青銅刀子の型式分類から始め、変化の方向性の想定の上で、型式の序列の順番を確定していくという手順を踏まえて行う。その際、型式間の共伴関係があれば、型式間の一括遺物によって先の型式の序列の想定を検証する作業が重要であるが、今回対象とする地域の青銅刀子に対して、墓葬単位から複数出土した事例がきわめて少ないため、型式間の共伴関係の検証がほとんど不可能である。ただし、対象とする地域においては、青銅刀子は前章に検討された青銅短剣をはじめほかの遺物群と墓葬単位で共伴する例があることから、型式の序列の想定を検証や型式の年代的位置の確定はこれらの一括遺物の編年や年代観を踏まえざるを得ない。

第1節 型式分類

1. 型式分類

従来の大別分類では柄頭の属性が重視されてきたが、ここでは刀身の断面に注目し刀身の形態を対象とした型式分類を試みたい。青銅短剣の検討と同じ、刀子の大別分類では、一組列に含まれる型式群からなる通時的な様式を見出すことができる。ここでは刀身の断面によって青銅刀子はカラス式・タガール式・玉皇廟式に分けることができる（第4-1図）。すなわち、カラス式刀子は刀身の断面形が圭頭形となるものである。刀身の下端に刃部の表面が低くなり、刃部と刀身の分かれ目が明らかに工夫される。タガール式刀子は刀身の断面形が三角形となるものである。刀身と刃部の分かれ目が明確ではない。玉皇廟式刀子は刀身の断面形がT字形となるものである。刀身の上端に突起の稜がある。そのうちで更に具体的な刀身の形状から細分し、A類～F類の6型式に分ける。



第4-1図 青銅刀子の大別分類

1. カラスク式（圭頭形） 2. タガル式（三角形） 3. 玉皇廟式（T字形）

A類：刀身の断面が圭頭形を呈し、背部が単純な弧形をなし、刀身が短い楕円形に近いもの（第4-2図：1-2）。柄部に文様がないものが多い。柄頭は、半円形の環が付いたり、突帯が付いたり、あるいは1～3個の孔が開くものもある。刀身の部分が柄部より短い。カラスク式刀子として**A類**を典型的なカラスク式刀子と積極的に結び付ける例はミヌシンスク盆地の採集品があげられる（第4-5図：1）。こうした点からみると、**A類**は典型的なカラスク式刀子から引き続けるものと考えられる。

B類：刀身の断面が圭頭形を呈し、背部が単純な弧形をなし、刀身の下縁が内湾し、細い刀身をもったもの（第4-2図：3-6）。**B類**の変異は極めて多いものの、形態的特徴で細分する手立ては見つかっていない。柄と刀身の分かれ目のところに鳥頭の文様が付けられるものがある。こうした鳥頭の嘴は細長くなって下に曲がっている。柄に文様がないものがあるが、スタンプ文様による動物を施すものもある。柄頭に猛獣の体を丸める文様が付けられるものがあるが、柄頭に突帯が付いており、突帯の下に孔が開いているものもある。また、刀身の形態からみると、**B類**が典型的なカラスク式刀子と類似する例は存在している（第4-5図：3）。先行研究でも**B類**が後期カラスク青銅器様式の存続と考えら

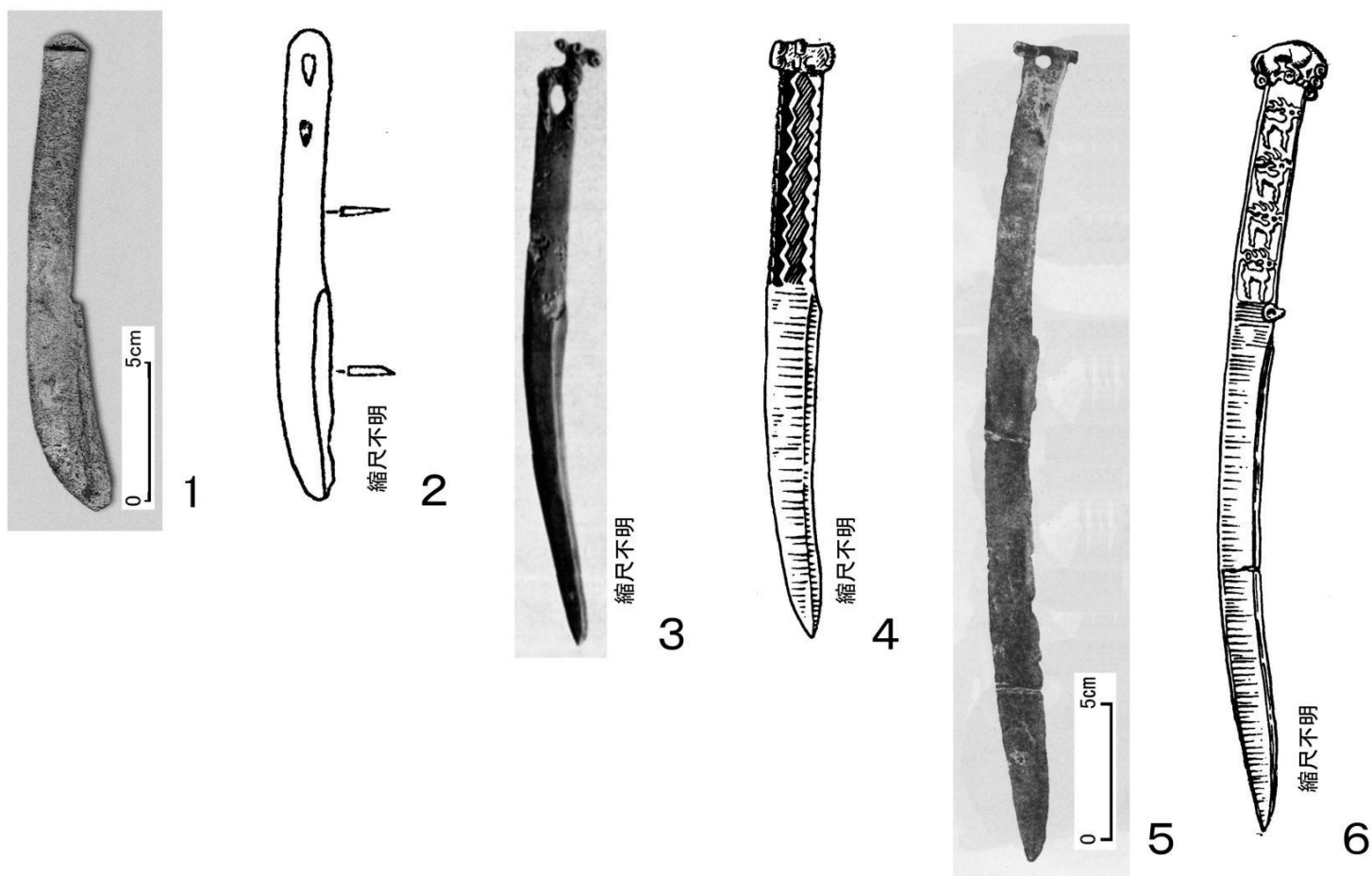
れる[松本圭太 2013]。

C 類：刀身の断面が三角形を呈し、背部が単純な弧形をなし、下縁がまっすぐで広い刀身をもったもの（第 4-3 図：1-4）。柄と刀身の分かれ目の場所には鳥頭や半円形の文様が付けられるものが多い。柄は、断面が扁平なものになり、あるいは中空で端に装飾の付く錐が差し込まれる工夫になるものである。錐の装飾は脚を垂直に伸ばして爪先立つ猪を主とする。柄の断面が扁平なものになる場合は、柄頭には突帯が付いて下に小さい孔が開くものが多い。

D 類：刀身の断面が三角形を呈し、背部が角度をなして折れたような形をなし、下縁がまっすぐで細い刀身をもったもの（第 4-3 図：5-6）。柄には文様がない。柄頭には、動物の文様（鳥頭）や三角形などの透かしの装飾が付けられる。あるいは単純な大環が付けられる。

E 類：刀身の断面が三角形を呈し、背部がまっすぐになり、刀身の下縁がやや外へ湾曲するもの（第 4-4 図：1-4）。柄と柄頭には文様がない。多数の柄頭は大きな環が付いたり三角形の孔や単純な小孔が開いたりするものである。あるいは狼などの猛獣の頭が付くものもある。

F 類：刀身の断面が T 字形を呈し、背部が単純な弧形をなし、刀身の下縁が内湾し、広い刀身をもったもの（第 4-4 図：5-6）。柄にはジグザグ文、珠文、ジグザグ文と珠文を合わせた文様を施すものが多いが、文様がないものもある。柄頭は環頭になるものがほとんどである。



第4-2図 カラスク式刀子の型式分類

1~2. A類 3~6. B類



1



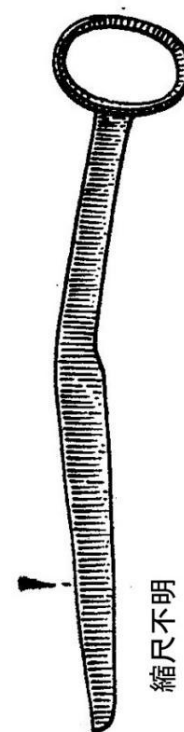
2



3



4



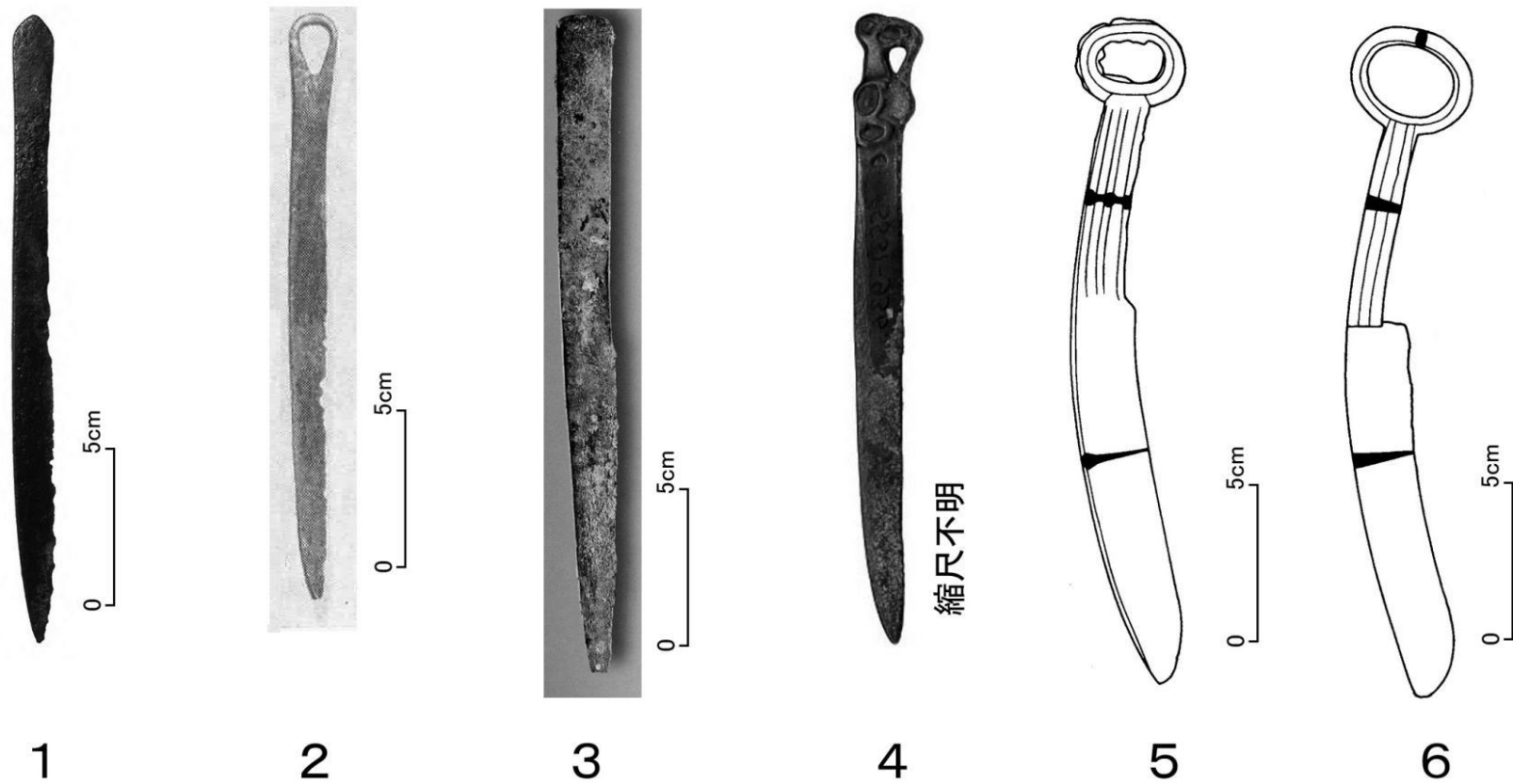
5



6

第4-3図 タガール式刀子の型式分類

1~2. C1 類 3~4. C2 類 5~6. D 類



第4-4図 タガール式と玉皇廟式刀子の型式分類

1~4. E類 5. F1類 6. F2類

2. 型式変化

以上の6型式に、諸属性の変化で型式を設定できるものはC類、F類がある。

C類：刀身の幅、柄と刀身の分かれ目の形状から、さらにC1類・C2類に分類できる。C1類は刀身の幅が比較的広く、柄と刀身の分かれ目の場所に大きな段差があるものである（第4-3図：1-3）。C2類は刀身の幅がC1類より細くなり、段差の幅が小さくなり、ないし消えてきたものである（第4-3図：4）。ここでは、刀身の幅が広くて柄と刀身の分かれ目の段差があるもの（C1類）から、刀身の幅が細くて柄と刀身の分かれ目の段差がないもの（C2類）へ変化する細身化の過程を想定できる。

F類：柄頭の環、柄の形状から、さらにF1類・F2類に分類できる。F1類は柄部が広く、柄頭の環が比較的に小さい環になるものである（第4-4図：5）。F2類は柄部が細くなり、柄頭の環が大きくなって楕円形になるものである（第4-4図：6）。F2類はF1類より柄部が細くなりながら柄頭の環が大きくなる傾向があるから、変化の方向はF1類→F2類が考えられる。また、F2類以降にはF類が燕系の青銅器としてずっと存続する可能性がある。F2類を燕系の青銅器と積極的に結び付けるのは北京通県中趙甫出土の青銅刀子があげられる（第4-5図：12）。F2類を燕系青銅器へ変化する中間形態として、F1類→F2類→燕系の青銅刀子の変化は柄部の細身化および、柄頭の環が大きくなりつつ扁平の楕円形へ変わっていく過程ととらえることができる。

第2節 編年

1. 墓葬一括遺物での検討

青銅刀子の編年の作業が容易ではない。墓葬単位から複数出土した例が非常に少ないため、型式間の相互の関係の検証が困難である。また、ほかの遺物群の情報が認められるが、大半の遺物の編年や年代観が明確できない。ただ、青銅刀子が本論の第二章で検討した青銅短剣と墓葬単位から一緒に検出された情報は存在している。長城地帯においては、青銅刀子が一定量の燕国系あるいは中原系の青銅容器や武器と共伴する場合もある。したがって、これらの一括遺物の編年や年代観により、青銅刀子の年代的位置を決め、型式変化の方向性を検証していくという手順が妥当な分析の方法であると考えられる。また、数が少ないが、炭素年代測定の結果も参考とする。

第4-1表は草原地帯東部における諸型式の共伴関係を示すものである。まず、A類がA1類短剣やC1類短剣と新疆・ミヌシンスク盆地から一緒に出土した例はある。本論の第二章に既に述べたように、A1類短剣・C1類短剣の年代が紀元前9～前8世紀と編年された。また炭素年代測定の結果により、A類はBC900-790と編年されたカザノフカ（Казановка）-II墓地5号墓から出土した例も存在している。ティギル=タイドゼン（Тигир Тайджэн）-IV墓地1号墳1号墓からの炭素年代測定の結果により、青銅短剣との共伴関係から得る青銅刀子の年代観は¹⁴C年代と矛盾なく対応することができる。したがってA類が紀元前10～前8世紀初に位置付けられるのは妥当であるだろう。

次に、C類に関する型式変化の方向性の検証にあたっては資料的な困難が多く、それは採集資料や購入資料などの遊離資料が殆どであることに起因する。ただ、型式学的変化から考慮するならば、刀身の細身化の過程により、C1類→C2類へ変化することが辿ることができるだろう。また、C2類がサルゴン=ウルス（Саргон улус）墓地II号墓群1号墓からD類刀子と一緒に検出された事例はある。したがってC2類の年代観はD類刀子の年代に下がる可能性があり、C1類の年代的な位置はD類刀子より古い年代に遡ることができる。

なお、第4-1表に示されたように、D類はE類刀子と共伴する事例が一定量に存在している。また、D類は紀元前6～前5世紀と編年されたC2類短剣と一緒に出土したという情報もみられる。D類・E類の年代観が近い可能性は高い。短剣以外の一括遺物から考慮するなら、E類は長城地帯において中原系の青銅武器の戈と一緒に検出された場合もある。こうした青銅戈は援鋒から胡へスムーズに転換するところが特徴であり、春秋後期～戦国前期の形態に一致している。炭素年代測定の結果からみると、アルジャン2号墳の¹⁴C年代はBC619-608であり、ダゴ=バイレ（Догээ-Баары）-II墓地15号墓の¹⁴C年代はBC520-400であり、一括遺物の年代観に矛盾なく対応することができる。したがって、D類の年代は前6～前5世紀とされる。

寧夏や甘粛・新疆においては、E類がC3類短剣や中原系の青銅戈と共伴する事例がみられる（第4-1表）。本論の第二章ではC3類短剣の年代が戦国後期とされ、紀元前4～前3世紀のものである。また、青銅戈の形態は戦国後期の形態的特徴を示している。このように、E類の年代的な位置が紀元前4～前3世紀に下がることは疑問がない。

ところが、長城地帯の東部においては、青銅刀子はいずれも1基の墓葬につき1点が出土し、1基の墓から複数出土した例はない。遼西や河北、内蒙古には、B類はB類短剣

とともに検出された例がみられる（第4-1表）。本論の第二章では、こうした**B**類短剣の年代は紀元前9～前8世紀とされ、春秋前期に併行するものである。同時、南山根101号墓や小黑石溝8501号墓の一括遺物からみれば、**B**類が中原系の鼎や戈と共伴するものも存在している。これらの一括遺物の形態が春秋前期の特徴を示すことが明確である。たとえば、小黑石溝8501号墓出土の戈の形態的特徴は山西侯馬上馬1287号墓から検出するものに類似すると思われる[山西省考古研究所侯馬工作隊1994]。この侯馬上馬1287号墓の年代は春秋前期と編年される。以上により、**B**類の年代は紀元前9～前8世紀に位置付けられる。

北京や河北の北部には、**F1**類は**D1**類短剣や中原系の青銅鼎・銅・戈とともに検出された例がみられる（第4-1表）。**D1**類短剣の年代が本論の第二章では前7世紀の春秋中期と編年できた。青銅銅の形態的特徴からみると、最大の胴部の直径が中部にあり、胴体の両側に双鈕を付く器物の年代は春秋中期頃と認められる[朱鳳瀚1995]。小黑石溝8501号墓出土の青銅戈に比べ、玉皇廟250号墓の青銅戈は、援部が短くなり、春秋中期の形態的特徴を示している。**F1**類の年代が前7世紀と編年されることは問題ない。**F2**類は北辛堡1号墓から中原系の青銅鼎・戈などとともに検出された例がみられる（第4-1表）。この北辛堡1号墓の青銅戈は、援部が細長くなり、戦国前期の形態的特徴を示している。また、**F2**類は中原系の青銅銅と共伴するものも存在している（第4-1表）。この青銅銅の形態的特徴からみると、最大の胴部の直径は中部にあるが、胴体には単鈕しかを付かない。こうした形態的特徴の年代は戦国前期と認められる[朱鳳瀚1995]。したがって**F2**類の年代は紀元前6～前5世紀に位置付けられる。

第4-1表 草原地帯東部における青銅刀子の諸型式の共伴関係

地域	番号	刀子						一括遺物		炭素年代	文献
		A	B	C	D	E	F	短剣	他の遺物		
新疆	莫呼査汗 I 号墓地 101 号墓	○(1)						A1			新疆文物考古研究所 2016
ミヌシンスク	Батени, курган III, могила 21	○(2)						C1			Н.Л. Членова1967
ミヌシンスク	Сыда, курган 6	○(2)						C1			Н.Л. Членова1967
ミヌシンスク	Тагарское оз., курган 32	○(1)						C1			Н.Л. Членова1967
ミヌシンスク	Откнин улус, курган 5	○(3)						C1			Н.Л. Членова1967
ミヌシンスク	Тигир Тайджен-4, погребения 1 курган 1	○(1)						C1		1000—830BC	Г. И. Зайцевой2005
ミヌシンスク	Казановка-2, курган 5	○(1)								900—790BC	Г. И. Зайцевой2005
内蒙古	小黑石溝 93NDXA II 17 号墓		○(1)					Ba			内蒙古自治区文物考古研究所ほか、2009
内蒙古	小黑石溝 98NDXA III 5 号墓		○(1)					Ba			内蒙古自治区文物考古研究所ほか、2009
遼寧	瓦房中 791 号墓		○(1)					Ba			寧城県文化館ほか、1985
河北	平泉東南溝 6 号墓		○(1)					Ba	戈		河北省博物館ほか、1977
遼寧	南山根 101 号墓		○(3)					Bb	鼎・戈等		遼寧省昭烏達盟文物工作所ほか、1973
内蒙古	小黑石溝 8501 号墓		○(4)						鼎・戈等		内蒙古自治区文物考古研究所ほか、2009
ミヌシンスク	Саргон улус, группа II, курган 1			2(2)	○(4)						Н.Л. Членова1967
トゥバ	アルジャン 2 号墳 5 号墓				○(4) (鉄)			C2 (鉄)		619—608BC	Chugunov et.al 2010
ミヌシンスク	Малая Иня, курган 5				○(3)	○(1)					Н.Л. Членова1967
トゥバ	アルジャン 2 号墳 13A 号墓				○(1)	○(1)				619—608BC	Chugunov et.al 2010
トゥバ	アルジャン 2 号墳 25 号墓				○(1)	○(1)				619—608BC	Chugunov et.al 2010

トゥバ	アルジャン 2 号墳 14 号墓				○ (1)	○ (1)				619—608BC	Chugunov et.al 2010
アルタイ	Догээ-Баары-2, курган 15					○ (1)		C2		520—400BC	Г. И. Зайцевой 2005
カザフスタン	Хемчик-Бом I, курган 6					○ (2)		C2			А.Д. Грач 1980
甘肅	庄浪邵坪村					○ (1)		C2	戈		庄浪県博物館 2005
内蒙古	范家窑子					○ (1)		C2	戈		李逸友 1959
寧夏	王大戸 1 号墓					○ (1)		C3	戈		寧夏文物考古研究所ほか、2016
甘肅	紅岩					○ (2)		C3	戈		劉得禎・許俊臣 1988
寧夏	王大戸 2 号墓					○ (1)		C3			寧夏文物考古研究所ほか、2016
寧夏	倪丁村 2 号墓					○ (2)		C3			寧夏回族自治区博物館 1987
新疆	托背梁 3 号墓					○ (1) (鉄)		C3 (鉄)			西北大学文保与考古研究中心ほか、2014
内蒙古	公蘇壕 1 号墓					○ (1)		C3			田広金 1976
寧夏	楊郎 I 地点 1 号墓					○ (1)			戈		寧夏文物考古研究所ほか、1993
北京	玉皇廟 2 号墓						1 (1)		鼎・銅等		北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 34 号墓						1 (1)		戈		北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 35 号墓						1 (1)		銅		北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 250 号墓						1 (1)	D1	戈・銅等		北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 46 号墓						1 (1)	D1			北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 51 号墓						1 (1)	D1			北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 71 号墓						1 (1)	D1			北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 117 号墓						1 (1)	D1			北京市文物研究所 2007
河北	小白陽 12 号墓						1 (1)	D1			張家口市文物事業管理所ほか、1987
北京	玉皇廟 171 号墓						2 (1)		銅		北京市文物研究所 2007
河北	北辛堡 1 号墓						2 (4)	C3	鼎・戈等		河北省文化局文物工作第隊 1966
北京	玉皇廟 122 号墓						2 (1)	D2			北京市文物研究所 2007

北京	玉皇廟 124 号墓						2 (1)	D2			北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 129 号墓						2 (1)	D2			北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 161 号墓						2 (1)	D2			北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 334 号墓						2 (1)	D2			北京市文物研究所 2007

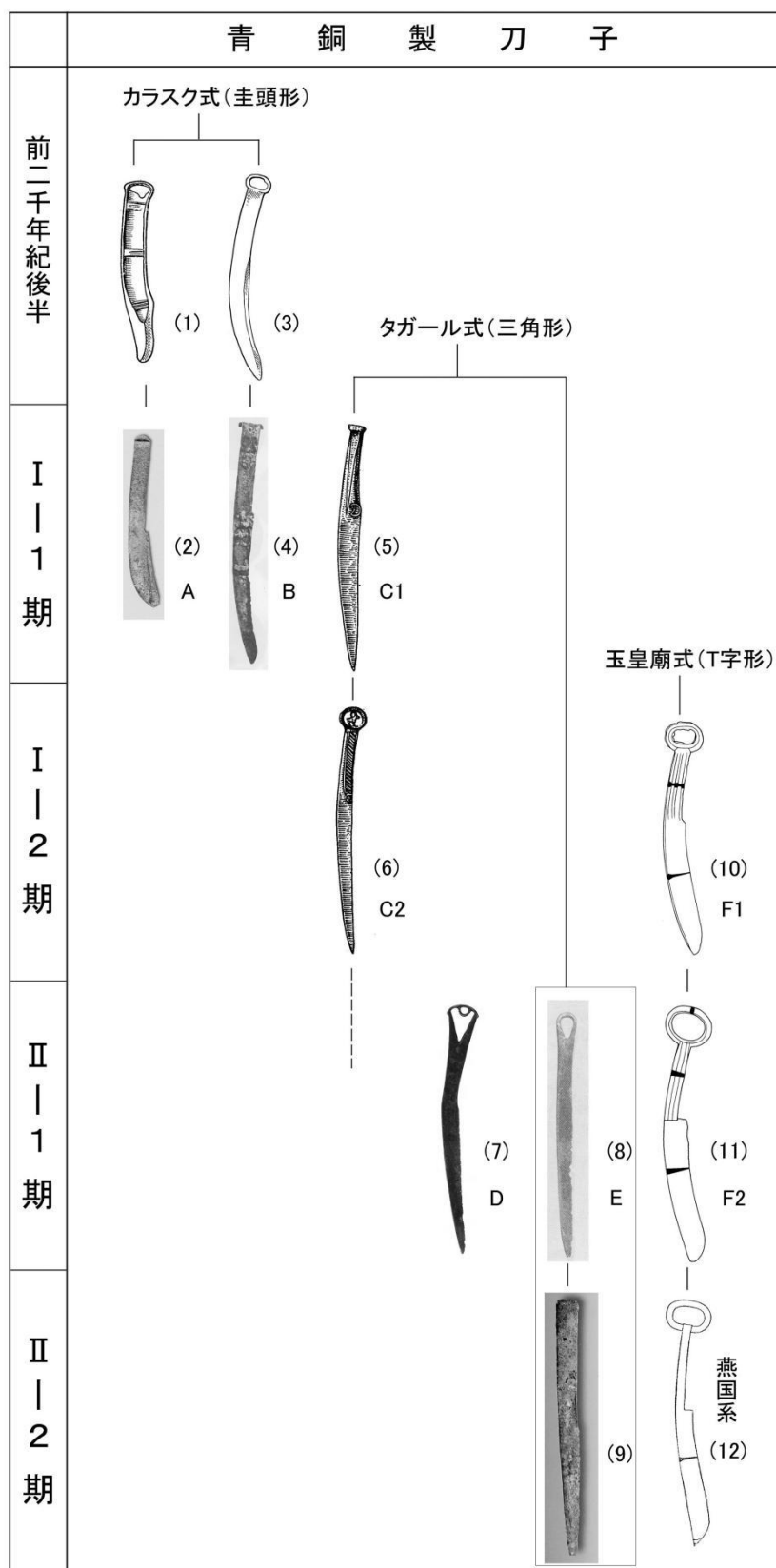
- 〔凡例〕
- ・ 刀子の型式の欄の数字は型式
 - ・ 括弧の内の数字は刀子の型式の数

2. 時期の設定

第4-5図に示すのが、草原地帯東部の青銅刀子の各型式の消長を配列するものである。これらの型式の変遷図からみると、玉皇廟式の出現はほかの型式の刀子と時期差が存在するが、本章の第3節の分布状況からみると、玉皇廟式の地域的差異も浮かび上がってきた。したがって、F類の出現を草原地帯東部全体の時期設定の指標とすることが困難になった。以上の検討に基づき、本章では草原地帯東部で広く分布するタガール式青銅器への転換により、草原地帯東部の青銅刀子の動態を2期4段階に大きく区分した（第4-5図）。それぞれの時期の指標、年代については次に示すとおりである。

第Ⅰ期はタガール式のC類の出現を指標とする時期であり、この間に玉皇廟式のF類の出現もみられる。玉皇廟式の出現により、第Ⅰ期を2段階に細分した。1段階は、刀身断面が三角形となるタガール式はこの地域で始まり、刀身断面が圭頭形となるカラスク式は紀元前二千年紀後半から存続する時期である。ミヌシンスクにおいてはタガール文化のバイノヴォ文化期に併行すると考えられる。2段階は、刀身断面がT字形となる玉皇廟式は出現し、カラスク式は衰えてなくなってしまった時期である。こうした時期は、タガール文化のボドゴルノエ文化期に併行すると考えられる。

第Ⅱ期はタガール式のD類・E類の出現を指標とする時期である。D類の消失により、第Ⅱ期を2段階に細分した。1段階はD類・E類の出現を指標としている。おおよその年代は、いわゆるタガール文化サラガシュ文化期に相当する。2段階はD類の消失を指標としている。年代については、アルタイ山脈のバジリク文化期に相当すると考える。



第4-5図 青銅刀子の編年図(縮尺不同)

1. ミヌシンスク 2. ミヌシンスク 3. 莫呼查汗I号墓地101号墓 4. 南山根101号墓 5. アルタイ 6. ミヌシンスク 7. ミヌシンスク 8. 玉皇廟260号墓 9. ミヌシンスク 10. アルジャン2号墳 11. アルジャン2号墳 12. アルジャン2号墳 13. トウバ

第3節 分布状況

以上、墓葬単位での一括遺物の検討により、各型式の消長を配列して時期の設定を行ってみてきた。ここでは青銅刀子の分布状況に対して検討を行いたい。草原地帯東部においては、相同の属性を共有する型式群に対しての検討は、単一の型式よりも空間的な分布単位としてさらに高い有効性をもつといえる。したがって、ここでは刀身の断面形態により、多様な型式をカラス式・タガール式・玉皇廟式といった型式群に一括し、具体的な型式にも留意しながら、各型式群の分布状況を時期の順に概観していきたい。

1. 第Ⅰ期

(1) 第Ⅰ－1期(第4－6図)

この段階はカラス式が草原地帯東部の広範囲に分布する時期である。この間にはタガール式の出現もみられる。第4－6図はそれぞれ具体的な型式にみられる型式群の分布状況を示したものである。第4－6図からは、カラス式が南シベリア・新疆～長城地帯のほぼ全域に、タガール式が南シベリアを中心に分布していることが知られる。具体的にいえば、第Ⅰ－1期においては、カラス式はミヌシンスク盆地から崑崙山脈や長城地帯へ広がる広い範囲に分布する。この型式群においては具体的な型式分布の地域差が存在する。第4－6図をみると、**A**類がミヌシンスク盆地～崑崙山脈をおもに、**B**類がミヌシンスク盆地～長城地帯をおもに分布していることが看取される。また、**C**類がミヌシンスク盆地を中心に分布していることも知られる。

(2) 第Ⅰ－2期(第4－7図)

この段階には、カラス式が衰えてなくなってしまう、タガール式がミヌシンスク盆地を中心に分布しているが、玉皇廟式の出現もみられる。第4－7図からは、**F**類が長城地帯を中心に分布していることが知られる。第Ⅰ－2期においては、玉皇廟式の**F**類は、前段階のカラス式の**B**類に入れ替わって北京や河北北部などの長城地帯東部において出現しながら、ほかの草原地帯の地域において見られない。

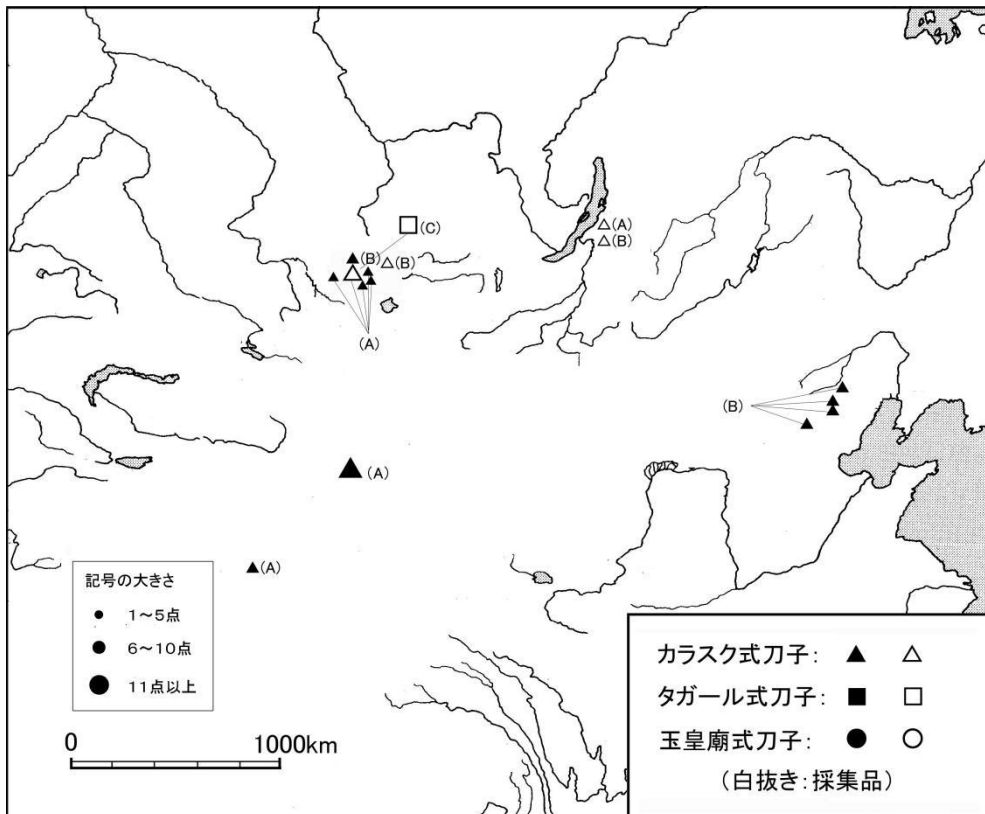
2. 第Ⅱ期

(1) 第Ⅱ－1期 (第4－8図)

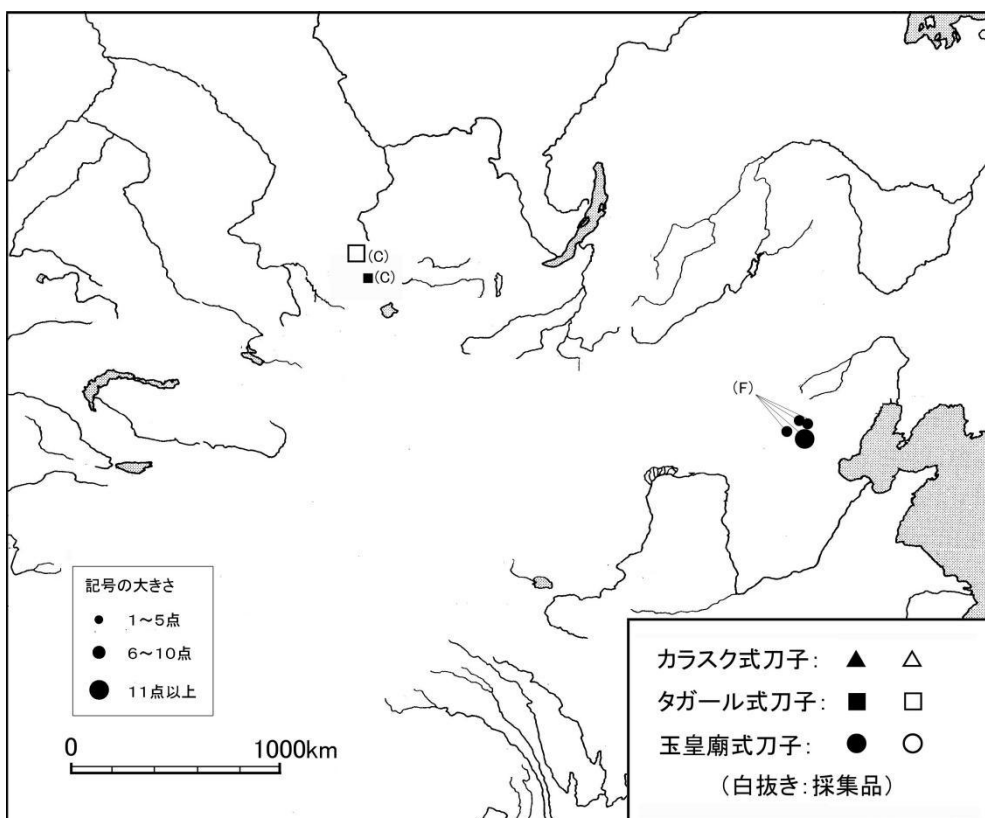
この段階はタガール式が草原地帯東部で広く分布する時期である。この間には玉皇廟式が長城地帯で普及していくこともみられる。第4－8図はそれぞれ具体的な型式にみられる型式群の分布状況を示したものである。第4－8図からはタガール式が南シベリア～長城地帯のほぼ全域に分布していることが知られる。具体的にいえば、第Ⅱ－1期においては、D類がミヌシンスク盆地・トゥバ地域をおもに、E類がミヌシンスク盆地・トゥバ地域～内蒙古中南部・寧夏のほぼ全域に分布する。また、第4－8図からみると、F類が前段階の北京や河北北部から内蒙古中南部へ拡散していくことも看取される。

(2) 第Ⅱ－2期 (第4－9図)

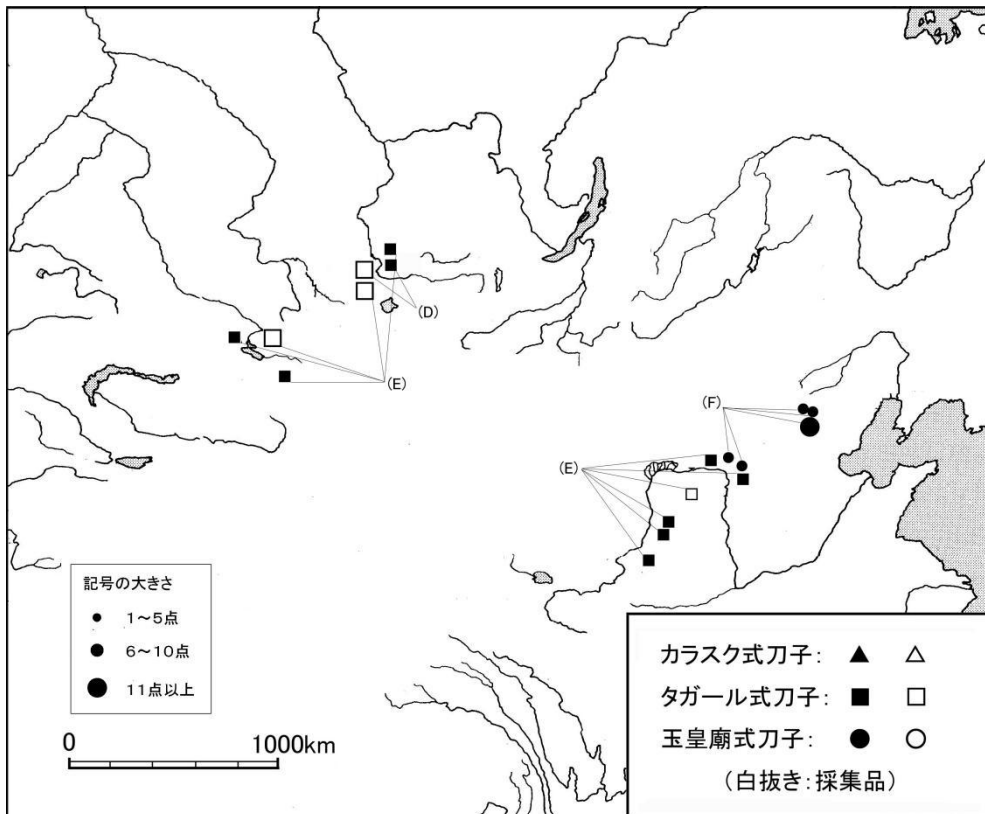
この段階には、タガール式は草原地帯東部で広く分布しておりつつ、玉皇廟式は長城地帯の東部で燕国青銅器へ転換していくこともみられる。第4－9図からは、前段階に同じ、タガール式が南シベリア～長城地帯のほぼ全域に分布していることが知られる。具体的にいえば、第Ⅱ－2期においては、E類がトゥバ地域・アルタイ山脈～寧夏・甘肅東部に分布する。また、第4－9図では、前段階の玉皇廟式のF類から引き続き、長城地帯の東部で出現する燕国系の青銅刀子の分布状況も示される。第4－9図からみると、この燕国系の青銅刀子が河北・遼西に分布していることが看取される。



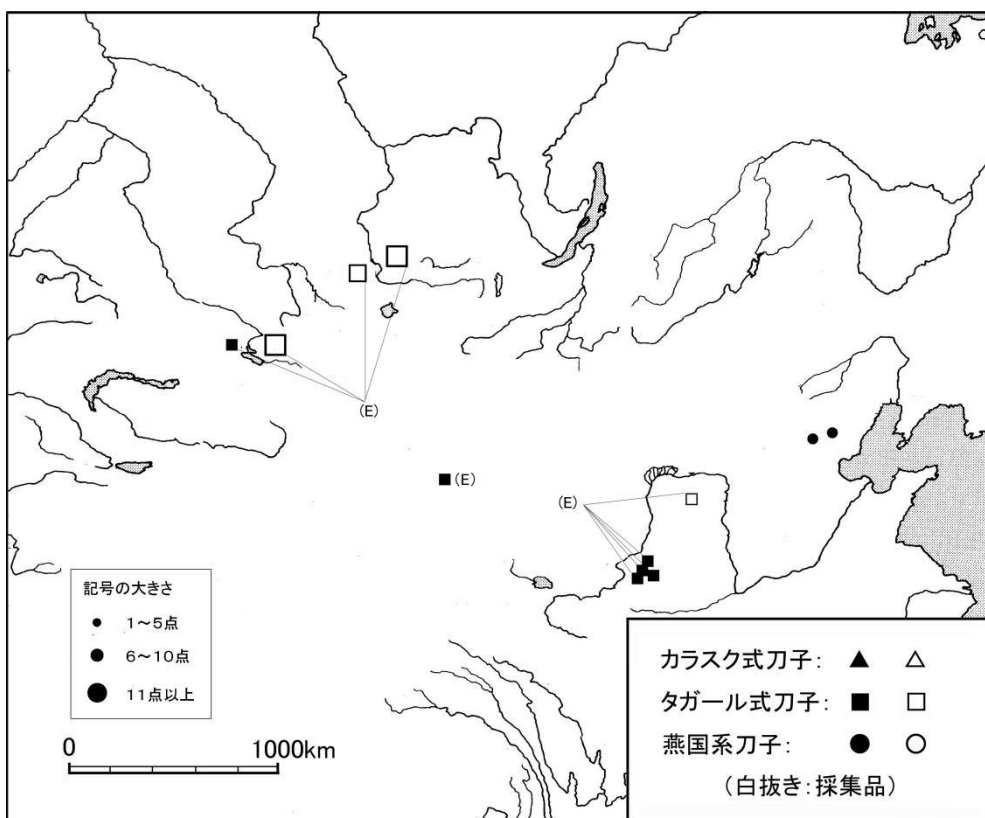
第4-6図 第I—1期における青銅刀子の分布状況



第4-7図 第I—2期における青銅刀子の分布状況



第4-8図 第Ⅱ-1期における青銅刀子の分布状況



第4-9図 第Ⅱ-2期における青銅刀子の分布状況

第4節 青銅刀子の展開と地域間関係

草原地帯東部における青銅刀子の展開様相は前章節で検討した青銅短剣の様相にほぼ一致するとはいえるだろう。これらの展開様相をまとめると、草原地帯東部においては、カラス式刀子が盛行してから衰えてなくなってしまう、タガール式刀子が南シベリアで成立してから長城地帯へ拡散していくようになる。また、以上の分布状況の検討により、玉皇廟式刀子の分布中心であった長城地帯において地域的差異が明らかとなった。

第Ⅰ期第1段階においては、カラス式刀子（A類・B類）が南シベリア～長城地帯のほぼ全域で盛行する（第4-10図）。系譜関係から考慮するなら、A類・B類は紀元前2千年紀後半に南シベリア～長城地帯で広く分布する典型的なカラス式刀子から引き続いたものと考えられる。分布状況から考慮するなら、これらのカラス式刀子が草原地帯東部において東西の分布差を見せる。すなわち、A類の分布域はミヌシンスク盆地～天山山脈に集中しており、B類の分布域はミヌシンスク盆地～長城地帯に集中している。このような東西の分布差は当該時期においてカラス式短剣（剣A類・剣B類）の地域的特徴の明瞭化とほぼ一致している。しかし、第Ⅰ時期第2段階に至ると、カラス式刀子が草原地帯東部で存続しなく、衰えてなくなった。

分布状況から考慮するなら、タガール式刀子（C類～E類）の展開様相は発生と拡散の2時期に区分できる。すなわち、第Ⅰ期には、C類がミヌシンスク盆地～トゥバ地域で発生したと考えられる。当該時期、C類はタガール式の型式として長城地帯には存在しない。第Ⅱ期には、D類・E類が南シベリアで発生し次第にE類が長城地帯へ拡散したと考えられる（第4-11図）。まず、C類はミヌシンスク盆地でD類・E類と一緒にきわめて少なく検出されたことから（第4-1表）、新しい型式であったE類は従来の南シベリアに固有であったC類を入れ替える形（排他的）で成立してから長城地帯へ拡散していったと考えられる。また、分布域から考慮するなら、拡散したE類が長城地帯の東部に固有であった玉皇廟式刀子（F類）と長城地帯において地域差は存在している。とりわけ、第Ⅱ期第2段階には、E類は新疆を介した流入経路沿いに内蒙古中南部～寧夏南部・甘粛東部といった長城地帯の西部へ拡散したことが明らかとなった。

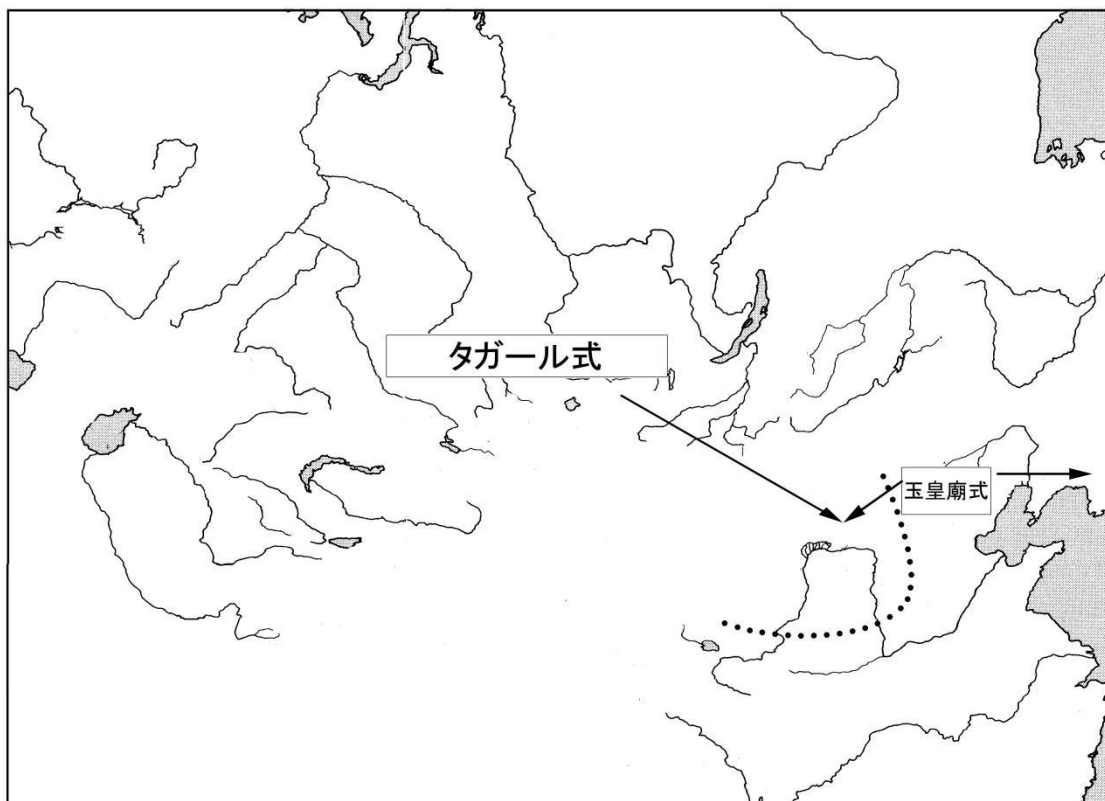
第Ⅰ期第2段階においては、玉皇廟式刀子（F類）が長城地帯の東部で発達する。玉皇廟式刀子といった地域色が強い特徴は長城地帯東部において強化する。系譜関係から考慮するなら、このように強い地域的特徴をもったF類は典型的な燕国系青銅器であった青

銅刀子の直接の祖形とすることができる。したがって、これらの燕国系青銅器の発生は第Ⅱ期第2段階において長城地帯的要素を受容する結果と見なせる。分布状況から考えるなら、F類が北京北部や河北北部といった地域で発生したとすれば、F類の分布域は、第Ⅰ期第2段階に比して、第Ⅱ期第1段階において内蒙古中南部へ拡大していることがみられる。この第Ⅱ期第1段階における分布域の変化の年代が、長城地帯へのタガール式刀子の拡散と凡そ同じであることは興味深い。ほかでは、分布の中心である北京北部や河北北部でF類から生まれた燕国系刀子の分布域は第Ⅱ期第2段階において燕国の領域の拡張と関連すると考えられる。先行研究が既に指摘したように、長城地帯の東部が完全に燕国の直接支配地となるのとともに、燕国は北京や河北、遼西に紀元前6～前5世紀に進出していく[宮本一夫 2007]。このような燕国の領域の拡張は、第4-9図で示すように、北京北部や河北北部に端を発する燕国系刀子の遼東への東進の原因となっている。

本章では、刀身の形態によって青銅刀子の分類を行い、編年に基づいて分布を整理し、草原地帯東部における青銅刀子の展開と地域間交流を明らかにした。結果をまとめると、おおむね青銅短剣と一致する3点の結論が得られた。すなわち、第一は、カラスク式刀子は第Ⅰ期第1段階に盛行しており、その分布域が東西の地域差を示しており、第Ⅰ期第2段階になると衰えてなくなったことである。第二に、南シベリアで生まれたタガール式刀子は第Ⅱ期において長城地帯へ拡散していったことである。第三、分布中心であった北京や河北で発生した北方系刀子の分布域は第Ⅱ期第1段階において西へ拡大していったことである。



第4-10図 青銅製刀子の展開の模式図(1)



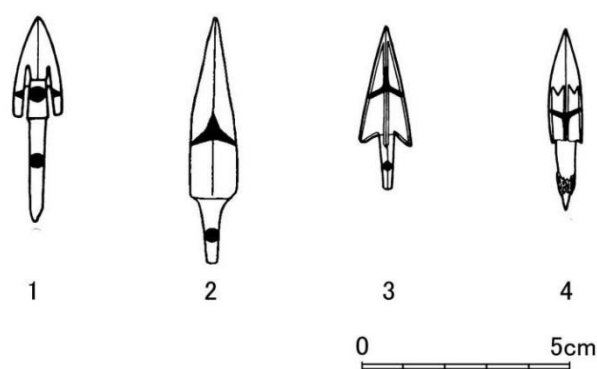
第4-11図 青銅製刀子の展開の模式図(2)

第四章 青銅鏃の変遷にみる武器の機能的変化

馬を乗りながら弓を射る騎馬遊牧集団にとってきわめて重要な銅鏃の変遷は草原地帯東部における基礎的な動態を把握する上で一つの指標になりうると考えられる。本章の目的は、草原地帯東部における騎馬遊牧集団の銅鏃を対象資料として、その系譜関係と形態変化の方向を明らかにしていく。型式学的な形態変化を示す武器としての機能変化を青銅短剣や刀子との連動の過程において把握する必要性も存在している。

草原地帯東部における銅鏃を概観するならば、草原から中原へ過渡する長城地帯東部においては、草原地帯の固有の銅鏃以外に、殷代や周代などの銅鏃および、これらの中原系の銅鏃に関連するものも存在している。こうした銅鏃は、鋌部が存在し、その鋌部の断面が円形を呈する有鋌銅鏃である（第5-1図）。これらの中原系の銅鏃との関係を示す有鋌鏃は長城地帯東部の遼西や北京、河北の北部にも認められるが、本章では草原地帯の固有の銅鏃を論じることから、ここでは触れないことにする。

本章の分析の手順は、草原地帯の銅鏃の型式分類から始め、機能的変化によって形態変化の方向性を想定する上で型式の順序を確定していくというものである。その際、墓葬単位の一括遺物があれば、銅鏃の型式間の共伴関係、中原系の青銅器の編年や年代により、型式の順序を検証する必要性が存在している。本章はその手順を分析の方法として、銅鏃の形態変化を考えていきたい。さらには、機能変化を示す銅鏃の型式変化を踏まえてその武器機能の変遷を考えていきたい。



第5-1図 草原地帯東部における中原系の銅鏃

1. 中原系の銅鏃（玉皇廟 52 号墓） 2～4. 中原系に関連する銅鏃（小黑石溝 85NDXAI10 号墓、玉皇廟 17 号墓、玉皇廟 18 号墓）

第1節 型式分類

1. 型式分類

銅鏃の型式分類は、矢柄との接続方式→鏃身部断面形→鏃身部平面形→銚部形態の順に設定した（第5-2図）。銅鏃は、矢柄との接続方式によって中空の銚部に矢柄を挿入する有銚式と、矢柄に扁平の銚部を挿入する有銚式に区分できる。さらに鏃身部の断面形から、両翼・三翼・断面円形・断面三角形とし、鏃身部の平面形や銚部の形態によりさらに細分を行う。便宜的に考慮するならば、鏃身部の断面形については三翼あるいは四翼を三翼に、三角形あるいは菱形を三角形に一括しておきたい。鏃身部の平面形については菱形あるいは柳葉形を木葉形に一括しておきたい。

（1）有銚式

A 類：両翼木葉形鏃。鏃身部の断面形が両翼で、平面形が木葉形を呈する。黒海北岸の先スキタイ文化から検出されたことから、スキタイ式銅鏃とも呼ばれる[Мелюкова 1964]。メリョコヴァ分類案の1類と相当する[Мелюкова 1964]。銚部の形態によって、銚部が長く伸びたものを **a 類**（第5-3図：1~2）、銚部をもったものを **b 類**（第5-3図：3~5）とする。

B 類：両翼三角形鏃。鏃身部の断面形が両翼で、平面形が三角形を呈する（第5-3図：6~7）。宮本一夫分類案の **AⅢ類**に当たる。

C 類：三翼紡錘形鏃。鏃身部の断面形が三翼で、平面形がずんぐりした三角形に近い紡錘形を呈する。銚部の形態によって、銚部が長く伸びたものを **a 類**（第5-3図：8~9）、銚部をもったものを **b 類**（第5-3図：10~11）とする。**a 類**は、ヴォルガ河から中央アジアで分布していることから、サカ式銅鏃とも呼ばれる[柳生俊樹 2005]。メリョコヴァ分類案の2類3型と相当する[Мелюкова 1964]。**b 類**は、後鋒の下端が下に長く延びるところが特徴である。鏃身部の表面には窪みが工夫され、あるいは長い小孔を開けてある。

D 類：三翼三角形鏃。鏃身部の断面形が三翼で、平面形が細い三角形を呈する。銚部の形態によって、**D 類**を銚部が伸びたものを **a 類**（第5-3図：12~13）、銚部をもったものを **b 類**（第5-3図：14~15）とする。宮本一夫分類案の **B 類**に当たる。

E 類：断面円形砲弾形鏃。鏃身部の断面形が円形で、平面形が砲弾形を呈する（第5-

3 図 : 16) 。アルジャン 1 号墳から検出されたことから、スキタイ式銅鏃と考えられる〔田中裕子 2011〕。

F 類：断面三角形圭頭形鏃。鏃身部の断面形が菱形で、平面形が圭頭形を呈する（第 5-3 図 : 17）。

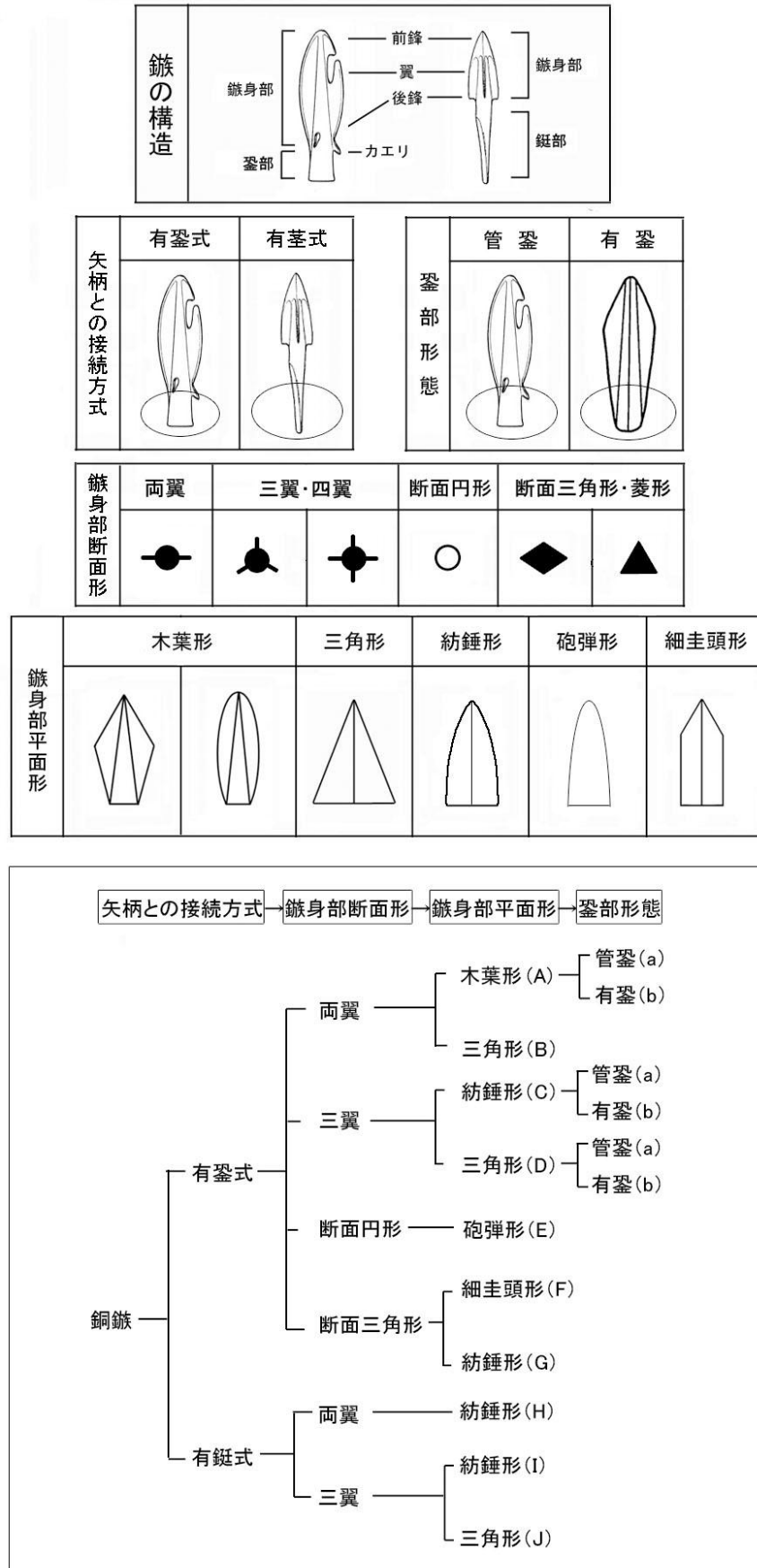
G 類：断面三角形紡錘形鏃。鏃身部の断面形が菱形で、平面形が紡錘形を呈する（第 5-3 図 : 18）。メリョコヴァ分類案の 3 類 9 型と相当する〔Мелюкова 1964〕。

（2）有鋌式

H 類：両翼紡錘形鏃。鏃身部の断面形が両翼で、平面形がずんぐりした三角形に近い紡錘形を呈する（第 5-3 図 : 19）。

I 類：三翼紡錘形鏃。鏃身部の断面形が三翼で、平面形がずんぐりした三角形に近い紡錘形を呈する（第 5-3 図 : 20～22）。

J 類：三翼三角形鏃。鏃身部の断面形が三翼で、平面形が長細い三角形を呈する（第 5-3 : 23～24）。



2. 型式変化

以上の10型式において、型式学的な形態変化、武器としての機能変化に基づき、型式の序列を設定できるのは有鋸両翼鏃 **Ab** 類、**B** 類、有鋸三翼鏃 **Ca** 類、**Da** 類、**Db** 類、有鋸三翼鏃 **I** 類がある。銅鏃の変遷は、前鋒断面の充実化、鏃身の細身化という視点で個体を系列的な変化の中に位置付けることができる。これらは武器に求められる鋭利さ、丈夫さの強化であり、武器の機能が重視された銅鏃の性格を物語るものである。ほかの銅鏃の個体間の変異があまり多くないことから、細分を行わない。

(1) 有鋸式

Ab 類：前鋒の断面によって、2型式に分類できる。すなわち、前鋒の断面が両翼形を呈する **b1** 類（第5-3図：3~4）、前鋒の断面が菱形を呈する **b2** 類である（第5-3図：5）。**b2** 類の翼部が退化し、前鋒から鏃身部の中部までの断面が菱形になったが、後鋒の下端では衰えた翼部の痕跡が見える。したがって、前鋒の断面が両翼形を呈する **b1** 類から前鋒の断面が菱形を呈する **b2** 類へ変化する過程が存在している。

B 類：翼部の幅によって、同じく2型式に分類できる。すなわち、翼部の幅が広く、平面形が三角形を呈する **B1** 類（第5-3図：6）、翼部の幅が細くなり、平面形が細長い三角形を呈する **B2** 類である（第5-3図：7）。先行研究においては、**B2** 類は **B1** 類より後鋒の下端が延びる見方があるが[宮本一夫 2013]、翼部の幅を考慮するなら、細長くなる傾向も存在する。これにより、**B1** 類→**B2** 類の変化が想定される。

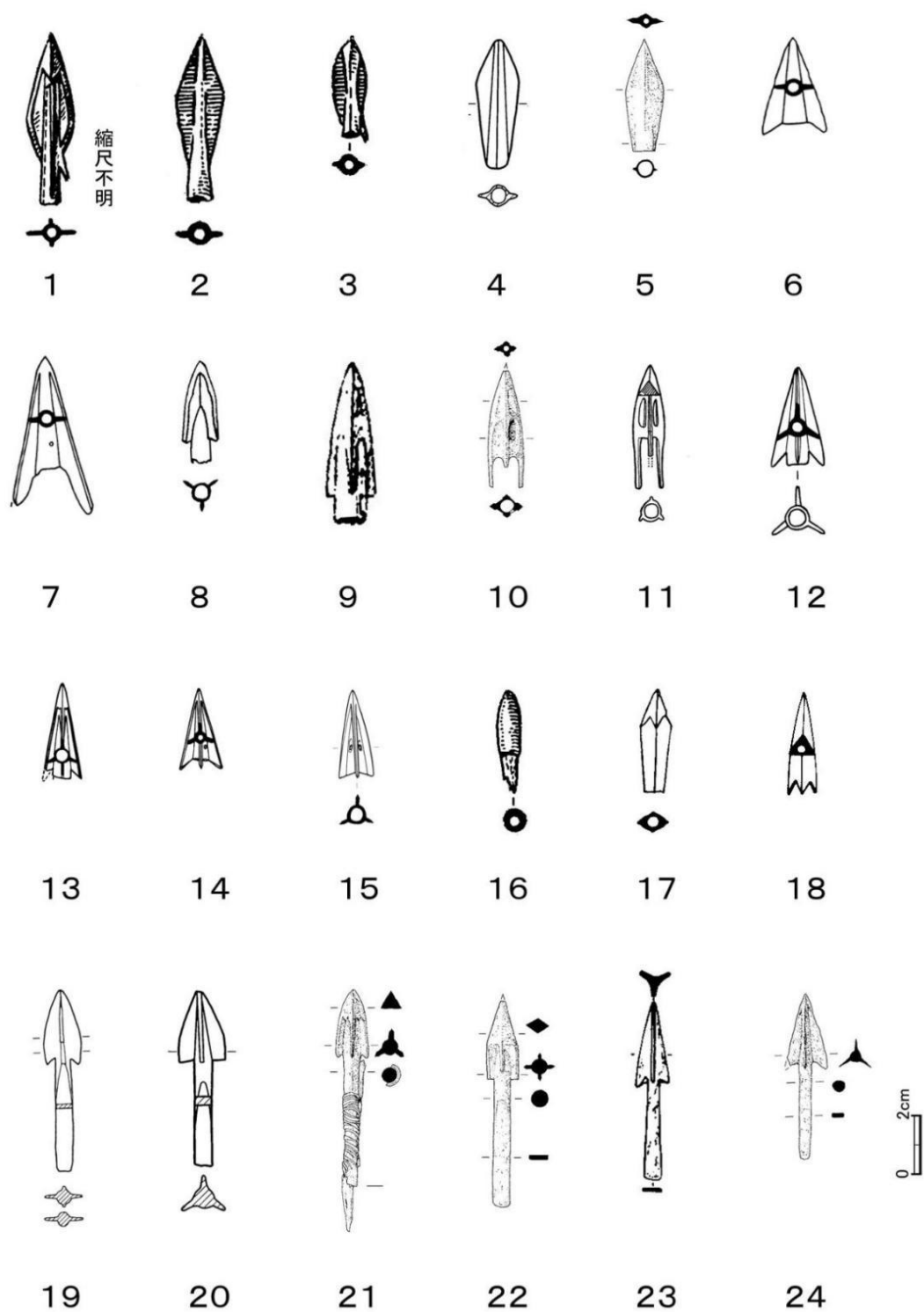
Ca 類：翼部の幅や前鋒の断面形によって、**a1** 類、**a2** 類に分類できる。**a1** 類は翼部の幅が広く、断面が三角形である前鋒は鏃身部の先端に位置するものである（第5-3図：8）。**a2** 類は翼部の幅が狭まり、断面が三角形である前鋒の部分は鏃身部の先端より下方に延びるものである（第5-3図：9）。このように、翼部の退化とともに鏃身部の平面形が細長くなる傾向が存在する可能性が高い。すなわち **a1** 類→**a2** 類という変化を想定する。

Da 類：翼部の幅によって、**a1** 類、**a2** 類に分類できる。**a1** 類は翼部の幅が広く、平面形が三角形を呈するものである（第5-3図：12）。**a2** 類は翼部の幅が狭くなり、平面形が細い三角形となるものである（第5-3図：13）。翼部の幅の変化とともに鏃身部の平面形が細長くなる傾向が存在する可能性が高いから、**a1** 類→**a2** 類の変化過程が想定される。

Db 類：翼部の幅によって、**b1 類**、**b2 類**に分類できる。すなわち、**b1 類**は翼部の幅が広く、鏃身部の平面形が三角形を呈するものである（第 5-3 図：14）。**b2 類**は翼部の幅が狭まり、鏃身部の平面形が細長い三角形となるものである（第 5-3 図：15）。**b2 類**の鏃部には、小さい孔が二ヶ所認められる。これらの小孔は鏃を矢に継ぎ合わせるために釘のようなものを打ち込むところであると考えられる。**b 類**は鏃身部の細長化の傾向により、**b1 類**→**b2 類**の変化過程が想定される。

（2）有鋌式

I 類：翼部の幅や前鋒の断面形に基づき、翼部の幅が広く断面が三角形である前鋒が鏃身部の先端のみに位置する **I1 類**（第 5-3 図：19～20）、翼部の幅が狭く断面が三角形である部分が鏃身部の先端より下方に延びる **I2 類**（第 5-3 図：21～22）という 2 型式に分類する。それにより、鏃身部の平面形が細長くなり、鏃身部の断面形が三翼から三角形に変わるの**は Ca 類**の変化の傾向に一致すると考えられる。よって、**I1 類**→**I2 類**という変化方向を想定する。



第5-3図 草原地帯東部出土の銅鏃

1~2. Aa 類 3~4. Ab1 類 5. Ab2 類 6. B1 類 7. B2 類 8. Ca1 類 9. Ca2 類 10~11. Cb 類 12. Da1 類 13. Da2 類 14. Db1 類 15. Db2 類 16. E 類 17. F 類 18. G 類 19. H 類 20. I1 類 21~22. I2 類 23~24. J 類

第2節 編年

1. 墓葬一括遺物での検討

以下、銅鏃の型式間の共伴関係、遺物の編年や年代観が明確できるほかの遺物群の一括遺物、炭素年代測定の結果により、先の型式の序列の設定を検証し、そして編年を行う。

墓葬単位における型式間の共伴関係を見てきたが、型式間で変異群に相関が認められた。これらを整理すると第5-1表～第5-2表のようになる。第5-1表～第5-2表からみると、B類とD類と組み合わせる例があるが、ほかの銅鏃と組み合わせないことが得られる。したがって、銅鏃はB類・D類の以外の鏃群①と、B類・D類の鏃群②といった二つの型式群に分けられる。鏃群①はおもに南シベリアや新疆から検出されながら、鏃群②は長城地帯から出土している。

第5-1表は南シベリアや新疆における銅鏃の諸型式の共伴関係を示すものである。これらの銅鏃の型式間の共伴関係を考慮するなら、墓葬単位での一括遺物における相対的な変化を示す資料の数量が少ないものの、ある程度に型式の構成が存在することがわかる。これらの共伴する型式の構成をパターン化すると、①-1) Aa類とAb類と組み合わせるが、少量のE類もある、①-2) Ab類とI1類と組み合わせるが、少量のCa1類とF類およびH類が共伴する、①-3) Cb類とI2類とJ類と組み合わせるが、少量のAb2類とCa2類もある、①-4) G類とJ類が共伴する、という4パターンに整理することができる。こうした型式の構成については、(①-1) → (①-2) → (①-3) → (①-4)の年代的な差異が存在する可能性が高い。これによって、型式の構成の組み合わせが先に想定した型式の序列の変化と矛盾なく対応していることが示された。さらに炭素年代を測定された墓葬の数量がきわめて少ないものの、これらの墓葬の被葬者ないし副葬動物の¹⁴C年代を提示し(第5-1表)、型式の構成の組み合わせにおける年代的な差異の推定との相関関係を論証することができる。

①-1)の代表的な墓葬は有名なトゥバのアルジャン1号墳である。この墓葬が盗掘されてしまったが、第5-1表に示されるように、BC822～BC791の年代値が示されている[Зайцевой 2005]。また、①-2)の墓葬として、Aa類が検出されたが、ウラルのグマロヴォ(Гумарово)1号墳3号墓は①-1)から①-2)へ転換する代表的な墓葬といえるであろう。この墓はアルジャン1号墳をはじめとする南シベリア騎馬遊牧文化の黒海北岸へ

の拡散を示し、黒海北岸の先スキタイ文化と明らかに接触していることから、紀元前7世紀初頭に編年されている[Исмагилов 1988, 雪嶋宏一 2008]。したがって、第5-1表に示されるように、①-1) は紀元前9～前8世紀にあり、①-2) は紀元前7世紀を中心としており、相対的な年代差が示されるとともに、①-1) → ①-2) の変化を証明できた。なお、①-3) の代表的な墓葬はトゥバのアルジャン2号墳やセミレーチェのベスシャトル(Besshatyr) 25号墓をあげられる。炭素年代測定の結果によってアルジャン2号墳の年代値がBC619～BC608と示されている[Chugunov et.al 2010]。ベスシャトル25号墓は紀元前5世紀に編年されている[Акишев, Кушаев 1963]。したがって、第5-1表に示されるように、①-3) は紀元前7世紀末～前5世紀にあり、Ab1類・Ca1類・I1類からAb2類・Ca2類・I2類へ転換するとともに、①-2) → ①-3) という年代的变化の可能性が高い。最後、①-4) の¹⁴C年代測定の数値がないものの、①-4) は新疆の二塘溝7号墓から青銅製の帯飾板と一緒に検出された。この青銅製の帯飾板は宮本分類案の中の3式帯飾板に当てることができる。宮本分類案の3式帯飾板は紀元前5世紀後半～前4世紀に編年されている[宮本一夫 2014]。したがって①-4) は①-3) との年代的差異が示される。以上、これらの銅鏃群の年代は、炭素年代で示されたように、(①-1) → (①-2) → (①-3) → (①-4) という相対的な変化を認めることができる。

第5-2表は長城地帯における銅鏃の諸型式の共伴関係を示すものである。銅鏃群①のように、銅鏃群②の型式の構成をパターン化することが難しいが、第5-2表に示されたように、Da類とDb類と組み合って少量のB類と共伴することが存在している。こうした型式間の共伴関係は型式の変化方向の推定と矛盾なく組み合わせられていることが確認できた。さらに、炭素年代測定の結果は欠けているが、墓葬単位におけるほかの遺物群との共伴関係、たとえば年代的序列が明確できる中原系(燕国系)の青銅器の編年や年代観により(第5-2表)、銅鏃②群における型式間の年代的な差異を検証することができる。年代的序列が明確できる中原系(燕国系)の青銅器について、ここでは青銅礼器の銅や鼎と青銅武器の戈をあげられる。青銅製礼器の編年は林巳奈夫氏[林巳奈夫 1989]、朱鳳瀚氏[朱鳳瀚 1995]の研究成果を基礎とする。そして青銅製武器に関しては林巳奈夫氏[林巳奈夫 1972]、宮本一夫氏[宮本一夫 1985]の編年をおもに参考する。

第5-2表に示されたように、Da1類とDb1類は玉皇廟18号墓で青銅礼器の銅と共伴しており、Da2類とDb1類は同様玉皇廟156号墓から青銅礼器の銅と一緒に出土している[北京市文物考古研究所 2007]。玉皇廟18号墓出土の青銅銅の特徴は中原地域の洛陽中

州路 2415 号墓の副葬品と類似する[中国科学院考古研究所 1957]。洛陽中州路 2415 号墓の相対年代は春秋中期前半にほぼ併行する。いっぽう、156 号墓出土の青銅劍の特徴は胴部形態の方面で 18 号墓のものと相違する。156 号墓出土の青銅劍は長治分水嶺 269 号墓と類似する[山西省文物工作委员会晋東南工作組 1974]。この墓の相対年代は春秋晩期と考えられた。したがって、**Da1** 類と **Da2** 類の年代的差異が示され、**Db1** 類の存続時間が **Da1** 類との併行期から **Da2** 類との併行期に延びたことが明らかになった。また、**Db1** 類は玉皇廟 18 号墓で青銅戈と共伴する。この青銅戈は、援の下端の側線が短くなり、胡に向ってなだらかに移行するという春秋前期から中期へ転換する特徴をもっている。このような戈は同じく洛陽中州路 2415 号墓から出土した例もある。**Db2** 類は馬家塬 1 号墓で鼎、壺、戈とともに出土する[甘肅省文物考古研究所ほか 2008]。馬家塬 1 号墓出土の青銅戈は援鋒から顕著な境界なしに援に移行する側線などの方面に春秋晩期と変わっていないが、この青銅鼎の形態特徴は、胴部、足部などを考慮するなら、戦国時期の洛陽中州路 2717 号墓から出土したものと一致すると考えられる[朱鳳瀚 1995]。したがって、**Db1** 類と **Db2** 類との年代的差異を認めることができる。最後、**B1** 類は玉皇廟 300 号墓から秦式劍と一緒に検出された。この秦式劍は楊建華分類案の中の 1 式秦式劍（花格劍とも呼ばれる）に当てることができる。この分類案の 1 式秦式劍は春秋前期に編年されている[楊建華 2013]。また、**B2** 類は、年代的序列が明確できる青銅器と共伴することはないが、形態的な変化から考えるならば、**B1** 類より **B2** 類の年代観がやや下がる可能性が高い。したがって **B2** 類の年代は **B1** 類より春秋後期～戦国前期に下がる年代観が与えられるであろう。

第5-1表 南シベリア・新疆における銅鏃の諸型式の共伴関係

鏃群	地域	墓 葬 名	型 式												一括遺物	年代	文献
			A		B	C		D		E	F	G	H	I	J		
			a	b		a	b	a	b								
①-1	トゥバ	アルジャン 1 号墳	○(2)	1(3)						○(3)						822-791BC	М.П. Грязнов1980
	ミヌシンスク	Бузунова, курган 5	○(1)	1(1)													Н.Л. Членова1967
	ミヌシンスク	Бузунова, курган 6	○(1)	1(2)													Н.Л. Членова1967
	ミヌシンスク	Батени, курган III, могила 21	○(5)	1(2)													Н.Л. Членова1967
	ミヌシンスク	Оглахты, курган 4	○(3)	1(2)													Н.Л. Членова1967
	ミヌシンスク	Аешина, курган 9	○(1)	1(1)													Н.Л. Членова1967
	ミヌシンスク	Тигир Тайджан-4, погребения 1 курган 1	○(3)	1(5)							○(2)					1000-830BC	Г. И. Зайцевой2005
①-2	ウラル	Гумарово, курган 1, могила 3	○(28)	1(27)		1(14)					○(2)			1(17)		前 7 世紀初	Р.Б. Исмагилов 1988
	新疆	石門子 4 号墓		1(2)							○(1)		○(10)	1(2)			新疆文物考古研究所 2013
	新疆	薩恩薩伊 19 号墓									○(1)			1(1)			新疆文物考古研究所 2013
	新疆	薩爾布拉克 3 号墓									○(2)			1(2)			新疆文物考古研究所 2015
	新疆	石門子 3 号墓		1(4)									○(2)	1(8)			新疆文物考古研究所 2013
	新疆	薩恩薩伊 3 号墓		1(1)										1(1)			新疆文物考古研究所 2013
	新疆	薩恩薩伊 22 号墓		1(1)										1(1)			新疆文物考古研究所 2013
①-3	新疆	阿勒騰也木勒水庫 35 号墓		1・2										2(7)		619-608BC 前 5 世紀	新疆文物考古研究所 2012
	トゥバ	アルジャン 2 号墳 2B 号ホート		2(1)			○(3)							2(1)			Cugunov et.al 2010
	セミレーチェ	ベスシャトル 25 号墓				2(6)	○(5)							2(1)			К.А. Акишев1963
	新疆	東塔勒德 II 区 5 号墓				2(4)	○(4)										新疆文物考古研究所 2013

	ミスシンスク	Кочергино, курган 1				2 (1)							2 (1)				Н.Л. Членова1967
	トウバ	Саглы-Бажи II, курган 3											2 (1)	○ (6)			А.Д. Грач1980
	トウバ	アルジャン 2 号墳 25 号墓					○ (9)						2 (3)	○ (1)	619-608BC		Chugunov et.al 2010
	トウバ	アルジャン 2 号墳 26 号墓					○ (1)						2 (3)	○ (3)	619-608BC		Chugunov et.al 2010
	トウバ	アルジャン 2 号墳 20 号墓					○ (6)							○ (5)	619-608BC		Chugunov et.al 2010
	トウバ	Куйлуг-Хем I, курган 9					○ (4)							○ (10)			А.Д. Грач1980
①-4	新疆	柴窩堡林場 II 号地点 9 号墓									○ (5)			○ (1)			新疆文物考古研究所ほか 2003
	新疆	阿依托汗 I 号墓群 20 号墓									○ (3)			○ (3)			新疆文物考古研究所 2017
	新疆	二塘溝 7 号墓									○ (1)			○ (16)	3 式帯飾板		新疆文物考古研究所 2012

[凡例] ・ 鍬の型式の欄の数字は細別型式
・ 括弧の内の数字は鍬の型式の数

第5-2表 長城地帯における銅鏃の諸型式の共伴関係

鏃群	地域	墓 葬 名	型 式												一括遺物	文 献
			A		B	C		D		E	F	G	H	I	J	
			a	b		a	b	a	b							
②-1	河北	虎什哈炮台山 28 号墓			1(1)			1(1)								敦・疊・銅・戈 1 式秦式劍
	内蒙古	井溝子 51 号墓						1(1)	1(1)							
	北京	玉皇廟 18 号墓						1(4)	1(14)							
	北京	玉皇廟 233 号墓						1(1)	1(1)							
	北京	玉皇廟 300 号墓			1(1)											
②-2	北京	玉皇廟 156 号墓						1・2	1(1)							銅 戈 戈 銅 戈・疊・銅
	北京	玉皇廟 151 号墓						2(1)	1(8)							
	北京	玉皇廟 303 号墓			2(1)				1(1)							
	河北	甘子堡 3 号墓							1(1)							
	北京	玉皇廟 34 号墓							1(2)							
	北京	玉皇廟 174 号墓							1(1)							
	北京	玉皇廟 250 号墓							1(1)							
②-3	寧夏	寧県袁家村							2(2)							戈 戈 鼎・壺・戈
	河北	北辛堡 2 号墓							2(1)							
	甘肅	馬家塬 1 号墓							2(9)							

[凡例] ・鏃の型式の欄の数字は細別型式
・括弧の内の数字は鏃の型式の数

2. 時期の設定

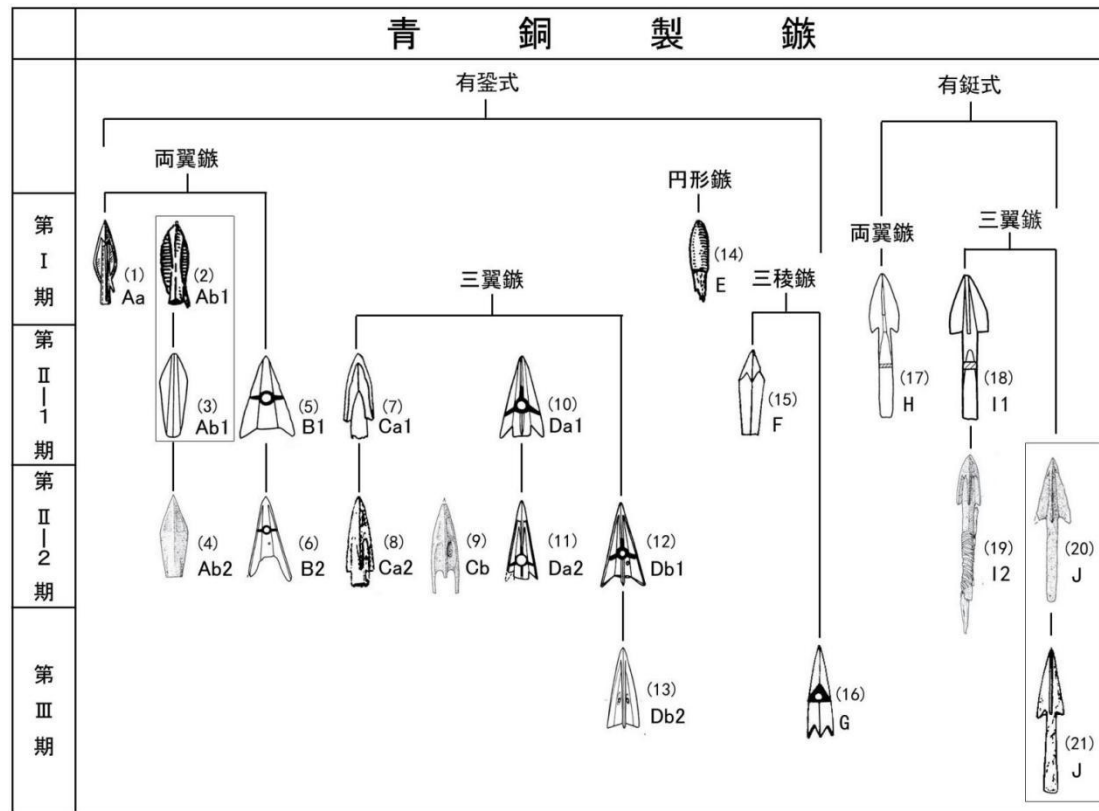
第 5-5 図は銅鏃の各型式の年代的位置と型式変化の方向性を示すものである。本章では草原地帯東部の銅鏃の展開過程を 3 時期・4 段階に大きく区分した。

それぞれの時期の指標、年代については次に示すとおりである。第Ⅰ期は銅鏃群①の中の両翼鏃 A 類がこの地域で始まった時期である。少量の銅鏃 E 類もみられる。相対年代としては、アルジャン 1 号墳に併行する。

第Ⅱ期は、銅鏃群①の中の三翼鏃の出現を指標としており、この間に三翼鏃の型式の変遷がみられる。銅鏃 Ca 類と銅鏃 I 類の型式の変遷により、第Ⅱ期を 2 段階に細分する。

1 段階は銅鏃 Ca1 類と銅鏃 I1 類の出現を指標としており、有蓋式の三翼鏃・断面三角形や有鋌式の両翼鏃・三翼鏃などの銅鏃の種類が増加する。草原地帯東部の銅鏃の型式を概観するならば、銅鏃の型式は両翼鏃から三翼鏃へ変わってきた過程もみられる。相対年代はグマロヴォ 1 号墳 3 号墓に相当している。2 段階は銅鏃 Ca2 類と銅鏃 I2 類の出現を指標としている。相対年代はアルジャン 2 号墳に併行すると考えられる。

第Ⅲ期は、銅鏃群①の中の有蓋断面三角形 G 類の出現を指標としている。銅鏃型式の種類が減少しており、銅鏃の型式は三翼鏃から断面三角形鏃へ変わってきた過程もみられる。相対年代はアルタイ山脈のパジリク文化に併行している。



第5-4図 銅鏃の編年図（縮尺不同）

1. ミヌシンスク 2. ミヌシンスク 3. 石門子3号墓 4. アルジャン2号墳 5. 玉皇廟233号墓 6. 玉皇廟303号墓 7. グマロヴォ1号墳3号墓 8. ベスシャトル25号墳 9. アルジャン2号墳 10. 玉皇廟18号墓 11. 玉皇廟18号墓 12. 玉皇廟227号墓 13. 陝西綏徳 14. アルジャン1号墳 15. グマロヴォ1号墳3号墓 16. 阿依托汗20号墓 17. 石門子3号墓 18. 石門子4号墓 19. アルジャン2号墳25号墓 20. アルジャン2号墳20号墓1号人骨 21. 阿依托汗20号墓

第3節 分布状況

以上、墓葬単位における型式間の共伴関係をみてきたが、これら銅鏃の型式群は、単一型式よりも、地理的な分類単位としてさらに高い有効性をもつといえる。ここでは、前述の章節で時期の設定をもとにして、時期ごとに鏃群の分布状況を検討していく。こうした鏃群の中では具体的な銅鏃の型式が時期によって変わっていたが、本節ではこれらの具体的な銅鏃の型式を各自の鏃群に一括して検討を行う。単一の型式が遺跡から検出された場合にも、これらの銅鏃を対応する鏃群として扱う。しかしながら、分布状況の分析にあたっては資料的な困難が相変わらず多くあり、これは出土地点が未発表であったり未公開であったりする収集資料が大半であることに起因する。ここではこれらの具体的な出土地点が明確できない資料を一つのポイントにまとめ、分布図上では大まかな出土地域を示す。

1. 第Ⅰ期（第5-5図）

この段階は鏃群①が広範に使用され始めた時期である。鏃群①はミヌシンスク盆地から南のタクラマカン砂漠南縁の崑崙山脈・遼西にも及ぶ広い範囲において分布する。ただし、南のタクラマカン砂漠南縁の崑崙山脈や遼西には銅鏃群①が稀薄である。

2. 第Ⅱ期

（1）第Ⅱ-1期（第5-6図）

この段階は鏃群①の中の三翼鏃の出現を指標とする時期である。具体的にいえば、鏃群①はミヌシンスク盆地・トゥバ地域・アルタイ山脈・天山山脈・中央カザフスタンから天山山脈・アラル海沿岸までの地域に分布する。こうした分布範囲の内部ではある程度地域の差異が存在することがある。すなわち、今後資料が増加する可能性があるものの、有銚三翼鏃 Ca 類の分布範囲はウラル山脈周辺、アラル海沿岸に限られるということがある。いっぽう、鏃群②是北京、河北北部などの長城地帯東部において現れ始め、ほかの草原地帯においてあまりみられない。

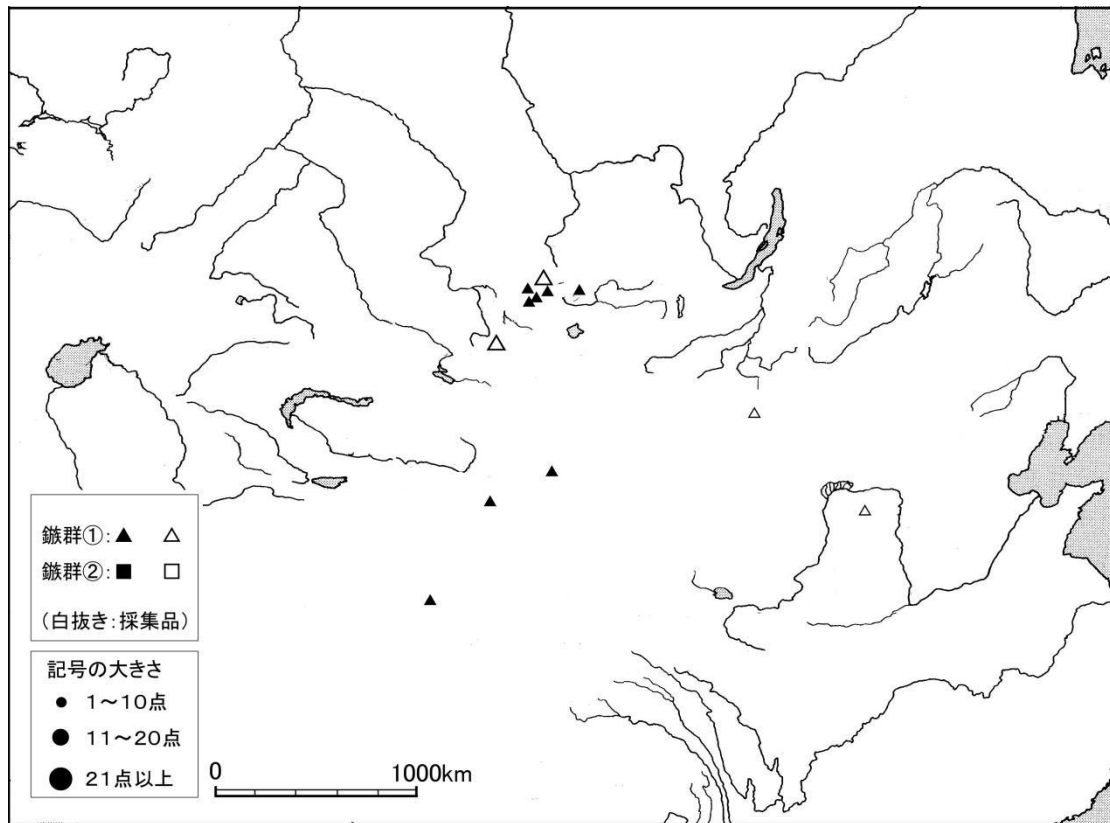
（2）第Ⅱ-2期（第5-7図）

この段階は鏃群①の中の三翼鏃の型式の変化がみられる時期である。鏃群①はミヌシ

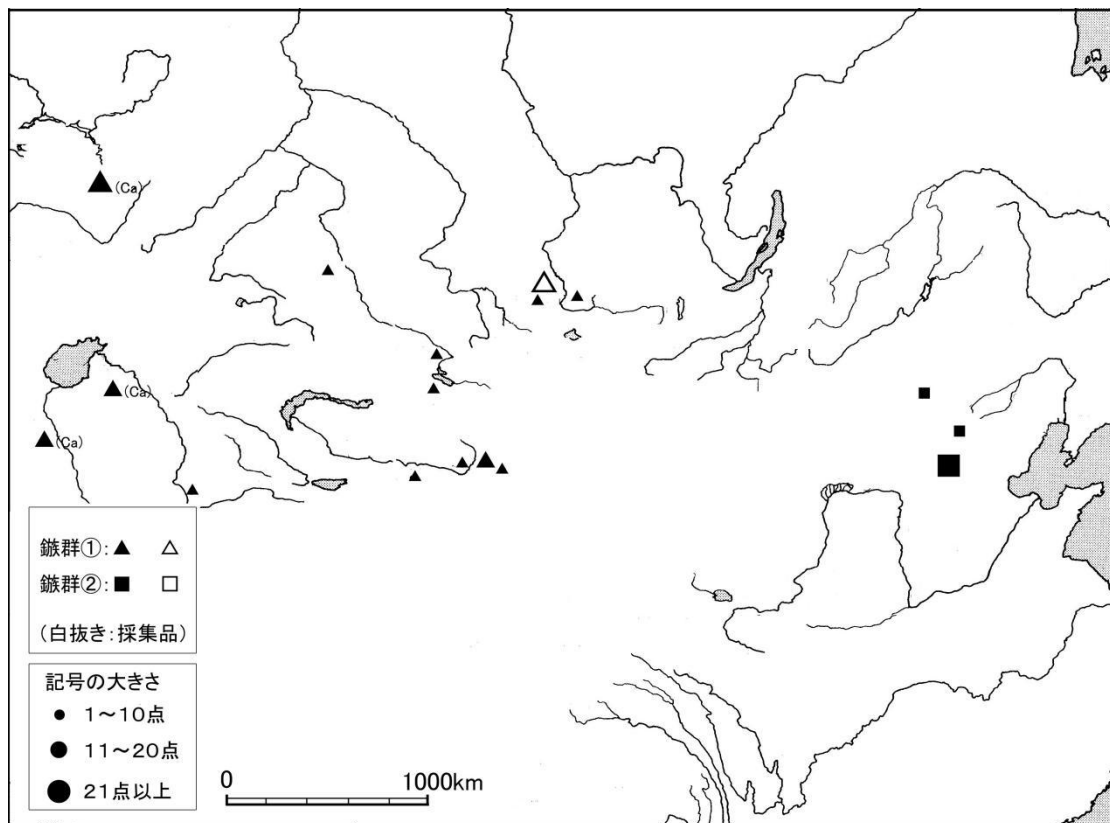
スク盆地～長城地帯に広範に分布するが、内蒙古中南部の長城地帯において具体的な出土地点が不明瞭である収集品が主要である。また、鏃群①の中では、有銚三翼鏃 **Ca** 類の分布範囲はアラル海沿岸から東の天山山脈まで広がる。いっぽう、鏃群②は長城地帯東部に分布しており、ほかの草原地帯においてあまりみられない。

3. 第Ⅲ期（第 5—8 図）

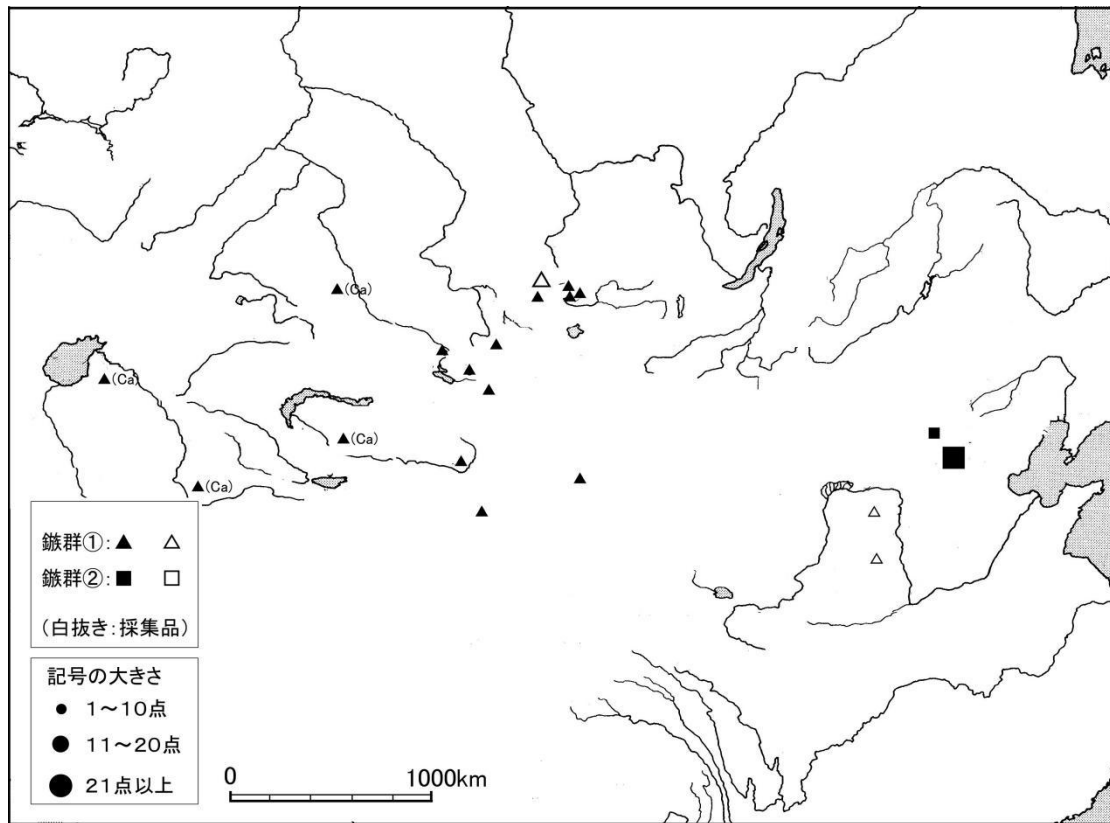
この段階は銅鏃型式の種類が減り始めた時期である。鏃群①はミヌシンスク盆地・トゥバ地域～長城地帯に分布する。ただし、長城地帯には鏃群①が採集資料や購入資料などの遊離資料を主とし、稀薄に分布する。鏃群②は甘粛東部・寧夏南部・内蒙古中南部といった長城地帯西部に広範に分布する。第Ⅱ期において、鏃群②是北京、河北北部などの長城地帯東部に分布するが、本段階に至ると、鏃群②は長城地帯西部に広く分布するようになった。したがって、鏃群②は長城地帯東部から長城地帯西部へ移動してきたことが看取できるだろう。



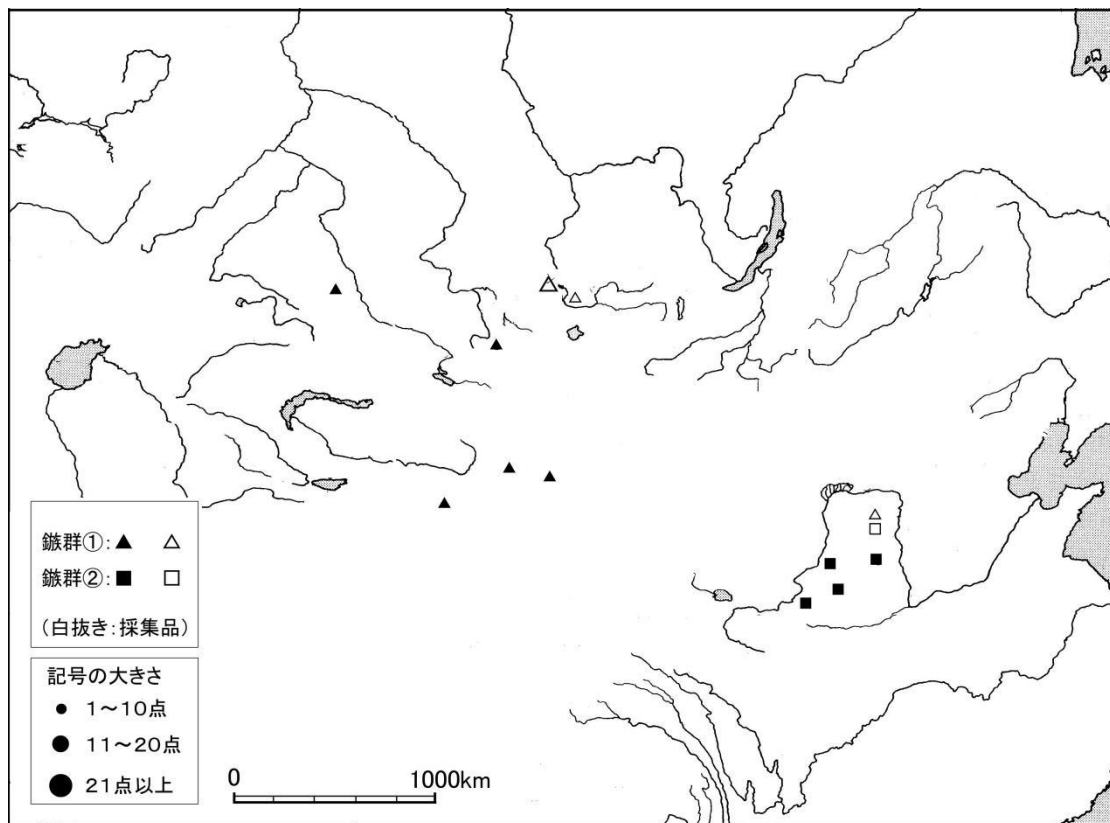
第 5-5 図 第 I 期における銅鉄の分布状況



第 5-6 図 第 II-1 期における銅鉄の分布状況



第5-7図 第Ⅱ期における銅鉄の分布状況



第5-8図 第Ⅲ期における銅鉄の分布状況

第4節 青銅鏃の地域性と変遷

分布状況の検討から、鏃群①はミヌシンスク盆地～天山山脈に分布し、鏃群②は長城地帯に偏る地域差がある。この地域差は第Ⅱ期から浮かび上がり始めることが明らかになった（第5-10図～第5-11図）。鏃群①は第Ⅱ期第2段階以降に南シベリア～長城地帯に分布するようになったが、長城地帯において具体的な出土地点が不明瞭である収集品は主要であることから、鏃群①は長城地帯へ拡散していったといった評価が難しい。

系譜関係から検討すると、銅鏃の変遷については次のような状況が見出せることになる。

現象1：型式間には両翼鏃→三翼鏃→断面三角形鏃の変化がある。南シベリアにおいては、第Ⅰ期に両翼鏃は盛行し、第Ⅱ期に三翼鏃は型式的变化に伴って存続していき、第Ⅲ期に断面三角形鏃は型式群の主体となる。長城地帯においては、両翼鏃や三翼鏃が第Ⅱ期に型式変化しながら続けて存在するが、とくに発達するのが北京や河北の三翼鏃である。この三翼鏃は第Ⅲ期から東の北京や河北から西の内蒙古中南部や寧夏南部、甘肅東部へ拡散していった。したがって、型式間の変化の方向性を概観するならば、両翼鏃→三翼鏃→断面三角形鏃へ変化していく過程が理解できる。

現象2：型式組列には鏃身の細身化あるいは前鋒の断面の充実化といった傾向がある。南シベリアにおいては、第Ⅱ期第1段階～第Ⅱ期第2段階に銅鏃の鏃身部が細長くなりながら、前鋒の断面が充実へ変わってきた傾向が存在する。長城地帯東部においては、鏃身部が広いものから細長いものへ変わってきた細身化の過程を示す。この型式組列の変遷の方向性は前述の章節において型式間の共伴関係やほかの遺物群の一括遺物に検証された。したがって、銅鏃は両翼鏃→三翼鏃→断面三角形鏃へ変化しつつ、鏃身部の細身化に伴って前鋒断面の充実化といった形態的な変化がみられる。

第5節 青銅鏃の変遷にみる武器の機能的変化

以上の検討より、銅鏃の形態には顕著な転換や変化が生じることが認められる。すなわち、銅鏃の変遷は、(現象1) 型式間において両翼鏃→三翼鏃→断面三角形鏃への変化を示しており、(現象2) 型式組列において鏃身の細身化あるいは前鋒の断面の充実化といった傾向が存在するものである。ここでは、銅鏃の形態に変わる部分が重視されている状況が窺われた点において銅鏃の性格を考える上で重要である。すなわち、これらの形態的な変化は実戦的な必要性から選択された結果であった可能性が高い。したがって、第4節に検討した現象1・現象2といった変化の傾向は実戦で使用する武器の機能性の重視という視点において説明することができる。

実戦的な刺突武器である銅鏃の機能性の評価は単に形態的变化のみにとどまるものではなく、弓の構造、弦、射技、矢の構造、羽の種類・長短・枚数などすべてが関連している[戸田智 1976]。しかし、すべての原理を理解することが難しいことから、本節では弓などの内容のみを簡単に触れることにする。また、武器の機能を銅鏃の形態的变化において単純化するならば、人間の体内に突き刺さる効力を問題とし、現象1・現象2といった変化の原因は貫通力に対する機能的変革を意図したものであると考えることができる。

第一、現象1が起きた原因はなんであるか。まず、原報告で詳しく記載されていないため、銅鏃の重量を測ることは不可能であるが、現象1から考慮するなら、サイズの方面で大きな変化が起きないことから、翼部の衰退とともに両翼鏃や三翼鏃に比して断面三角形鏃の重量が第Ⅱ期第2段階から増加したことが想定できる。次に、銅鏃だけが重くなり、矢の重心が前に偏ってしまうことになる。また、弓力と矢の重心の位置とは相関があり、矢先だけ重い矢だと飛ばせば矢がすぐ落ち、落ちるから上向けると貫通力が殺滅されることから、弓力と矢の重心の位置が貫通に大きく作用すると考えられる[戸田智 1976]。それにより、断面三角形鏃の盛行は弓の材料・構造などの発展による弓力強化という機能的な要求から起因したと考えられる。すなわち、この現象1の発生は複合弓の構造が草原地帯においてスキタイの弓から匈奴ーフンの弓へ変わってきた過程に一致している。匈奴ーフンの弓の長さはスキタイの弓より長い。スキタイの弓の長さは0.6m～0.8mであった。匈奴ーフンの弓は長さが1.2m～1.6mであった。また、匈奴式の弓はスキタイ式の弓と類似するが、両端と中央がたわまなく、長い肩部が大きな弾力性をもつように更に工夫されている[高濱秀 2010]。したがって、現象1の推移は貫通力に対して銅鏃の機能的性格を強化する結果といえる。

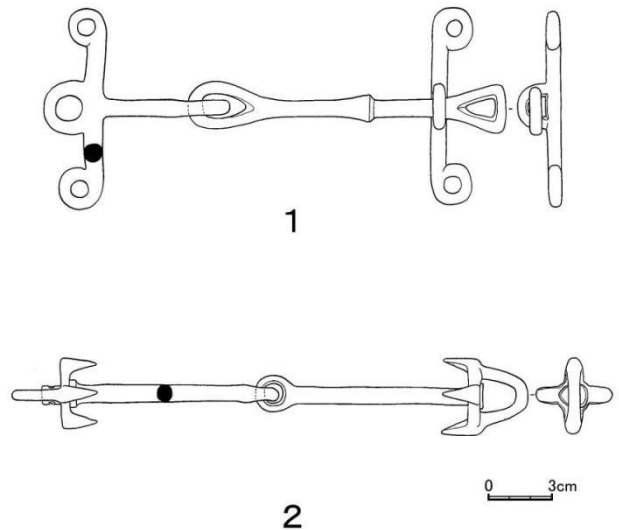
第二、現象 2 が起きた原因はなんであるか。まず、実験考古学では、長細い鏃は貫通力に優れ、とくに強い弓力で放たれた場合、金属製の細長いものは金属板を射抜き、金属の鎧を貫通する力があると考えられる[Pope 1974]。このように、細身化の型式組列の変化傾向からみると、細長い銅鏃は第Ⅱ期第 2 段階から深く突き刺さることを目的として貫通力の方面で明らかに強化したものと考えられる。次に、銅鏃の前鋒は防衛性の武具や身体を射抜くため工夫される[Jane Friis-Hansen 1990]。すなわち、銅鏃の刃部が鋭いものの、前鋒で防衛性の武具（鎧）や身体を射抜かなければ殺傷の武器の機能を果たすことができない。それにより、現象 2 を前鋒の鋭利さや丈夫さと結び付けて対人殺傷力においてまさる高性能として解釈することが想定できる。したがって、現象 2 の推移は銅鏃が突刺武器の機能として貫通力の改革に伴い殺傷力が強化された結果が認められる。

第五章 青銅轡の変遷にみる馬具の機能的変革

騎馬技術は草原地帯の遊牧集団に軍事の方面で圧倒的な優勢を与えてきた。騎馬技術が普及すると、物質資料は遠くにも速く伝えられ、人間集団による長距離の短時間での移動も可能になった。草原地帯東部においては、先の章節に述べたような青銅武器の展開のみならず、紀元前一千年紀以降に金属製馬具の機能性の変遷という点でも大きな変化がみられる。本章は馬の制御に不可欠な金属轡を取り上げ、関連する機能的属性をもった諸型式の時間的・空間的展開の様相を明らかにするものである。さらに、こうした金属轡の展開の様相を明らかにすることにより、馬具の機能性の改良の過程も把握したい。

草原地帯東部における金属轡を概観するならば、長城地帯東部に位置する夏家店上層文化の小黒石溝遺跡から銜と鑣を合わせて一体にした金属製の轡が少量発見された（第6-1図）。銜と鑣を合わせて一体にした金属轡は紀元前二千年紀の西アジアに類例がある。草原地帯においても、こうした金属轡の銜の構造と類似する一枝銜がザラフシャン川ザルジャ・ハリーファ墓地から検出された〔雪嶋宏一 2014〕。ただ、銜と鑣に分離した金属轡に比べれば、銜と鑣を合わせて一体にした金属轡が草原地帯東部にきわめて少ない。分析の安定性から考慮するならば、本章ではこうした銜と鑣を合わせて一体した金属轡を触れないことにする。また、孔の数とその方向からみると、中央の一孔と両側の二孔が垂直に異なる方向に開けられている骨角製の鑣は草原地帯やヨーロッパで紀元前二千年紀末のものとして知られているが、不明確な点が多いため、こうした骨角製の鑣の一種についても除外した。

具体的な分析としては、川又正智氏の研究を参考しつつ、銜の分類は鑣との連結方式・外環の形状・銜枝の形態という機能的属性の相関を踏まえて型式を設定し、工夫・改良の跡を辿りながらより改良された型式ほど新しい型式と考え、型式の変遷の順序を想定した。鑣の分類は銜との連結方式、形状全体から行う。以上のように分類した銜と鑣の諸型式を設けたうえで、これらと連結方式との関係を調べ、銜と鑣の部品の組み合わせからなる轡の型式を設定する。そのうえで相対年代が明確である中原系の青銅器といった一括遺物や炭素年代測定の結果によって、金属製轡のセットの年代を推定する。さらに以上の編年に基づいて各時期の轡のセットの分布を検討し、金属製轡の展開の様相を把握する。



第 6-1 図 銜と鑣を合わせて一体にした金属轡

1. 小黒石溝遺跡採集 85ZJ:1

2. 小黒石溝遺跡採集 85ZJ:2

第 1 節 型式分類

1. 銜の型式分類

(1) 属性変異の提示

銜は銜枝を馬の口中に食ませて馬の頬側に出る外環を鑣で頭絡に結び、手綱と繋いで馬をコントロールする道具である[末崎真澄 2004] (第 6-2 図)。つまり銜の基本的な機能は外環で鑣に結んで固定し、銜枝で人間の合図を伝えるようにするものである。したがって金属製銜が有する属性の中から機能的目的に関連する連結方式・外環形状・銜枝形態という三つの属性を取り上げている (第 6-3 図)。

① 連結方式

鑣との連結方式を以下の三つに分類する。

結合式 棒状の鑣と革紐で緊縛するもの

嵌入式 銜の外環を鑣の中央の方環に通すもの

挿入式 棒状の鑣を銜の外環に通すもの

銜と鑣の連結方式は銜と鑣が連結している出土状況で推定した。結合式は有機物製の革紐で鑣に結ぶものであるため、嵌入式と挿入式より結合式の有機物製の革紐は銜の外環と

よく擦れ合うことになるから、壊れやすくなるということが想定できる。したがって銜と鑣の連結方式については、その改良によって結合式→嵌入式、挿入式という時間的な前後関係を考えることもできる。ところが、アルタイでは鑣の中央に付いた突起や枝状を銜の外環に差し込んで使用する連結方式も存在するが〔Кирюшин, Тишкин 1998〕、結合式・嵌入式・挿入式の方が草原地帯東部で主体であることが、川又正智や張允禎が行った連結方式の分類においても示される〔川又正智 1994, 2006, 張允禎 2008〕。したがってここではこの種のアルタイの連結方式を触れないことにする。

② 外環形状

鐙形 1 鐙形の環だけのもの

鐙形 2 鐙形の環の内側に小さい円環があるもの

凸字形 1 凸字形の環だけのもの

凸字形 2 円形の環の外側に小さい方形環があるもの

方形 方形の環の下部に突起があるもの

円形 円形の環だけのもの

これらの変異は鐙形（鐙形 1～鐙形 2）・凸字形（凸字形 1～凸字形 2）・方形・円形という四類に大別される。これらの大別の変異間には鐙形（鐙形 1）→凸字形（凸字形 1）・方形という型式学的な前後関係を考えることができる。また、鐙形については、アムザラコフ氏によって鐙形 1→鐙形 2 という型式学的な組列が想定されている〔Amzarakov 2011〕。鐙形 1 の結び方は革紐を銜枝に巻き付けてから、革紐の両端を鐙形の環に通って抜けて鑣と連結するものである。そのため有機質製の革紐と金属製の外環はよく擦れ合うことになるから壊れやすくなる。鐙形 2 の結び方は革紐を銜枝に巻き付けてから、革紐の両端を小さい環に通して鑣と連結するものである。革紐と外環との摩擦が少なくなることから壊れにくくなると考えることができるならば、鐙形 1→鐙形 2 という想定が可能であろう（第 6-4 図）。なお、凸字形については、邵会秋氏によって凸字形 1→凸字形 2 という型式学的な組列が想定されている〔邵会秋 2004〕。両者の連結方式はいずれも鑣を銜の外環に差し込むものだが、凸字形 2 は凸字形 1 よりもしっかり手綱に繋がるため連結の安定性が増すと考えることができるならば、凸字形 1→凸字形 2 という想定も可能である。

③ 銜枝形態

I-1 無紋で断面が円形であるもの

I-2 無紋で断面が方形あるいは半月形であるもの

II 條振じりがある断面が円形であるもの

III 細かい方形突起がある断面が方形あるいは半月形であるもの

これらの変異は銜枝の表面の文様によって無紋のもの（I-1～I-2）・條振じりがあるもの（II）・細かい方形突起があるもの（III）という三者に大別される。それらの変異の間に直接的な型式学的変遷を想定することは難しいが、細かい方形突起がある銜枝は無紋の銜枝に比べて馬の口唇部により強い刺激を与えるものと考えられる。この場合、I→IIIという変化の傾向を想定することが可能となる。

（２） 型式設定

鑢との連結方式と外環形態の相関関係（第6-1表）については、革紐で緊縛する連結方式（結合式）の外環形状はおもに鐙形、銜を鑢に通す連結方式（嵌入式）の外環形状は方形、そして鑢を銜に通す連結方式（挿入式）と外環形状の鐙形・凸字形・円形とが対応するという関係が認められる。

鑢との連結方式と銜枝形態の相関関係（第6-1表）は、結合式・嵌入式の銜枝形態は無紋のもの（I-1～I-2）あるいは細かい方形の突起があるもの（III）となり、挿入式の銜枝形態はおもに無紋のもの（I-1）と対応するようである。

外環形状と鑢枝形態の相関関係（第6-1表）は、外環形状の鐙形・方形は無紋の銜枝（I-1～I-2）あるいは細かい方形の突起があるもの（III）と、外環形状の凸字形・円形は無紋の銜枝（I-1）と、それぞれ対応するようにみえる。

まず、鑢との連結方式で型式大別を設定する。革紐で緊縛するもの（結合式）をA型に（第6-5図：1～5）、銜を鑢に通すもの（嵌入式）をB型に（第6-5図：6～8）、鑢を銜に通すもの（挿入式）をC型に設定する（第6-5図：9～15）。

次に、A型・B型では銜枝の形態で型式細別を行う。A型・B型を無紋の銜枝（I-1～I-2）であるAa型（第6-5図：1～5）・Ba型（第6-5図：6）と、細かい方形の突起がある銜枝（III）であるAb型・Bb型（第6-5図：7～8）にそれぞれ分けられる。C型では條振じりがある銜枝の数は極めて少ないため、型式細別は外環の形態で行う。すなわ

ち、C 型を鐙形または凸字形の外環を付ける Ca 型に（第 6－5 図：9～12）、円形の外環を付ける Cb 型に分類する（第 6－6 図：13～15）。

さらに、外環の形状の変遷で型式変化を設定する。Aa 型・Ab 型を鐙形の環（鐙形 1）だけの Aa1 型（第 6－5 図：1～2）・Ab1 型に、鐙形の環の内側に小さい環（鐙形 2）がある Aa2 型（第 6－5 図：3～5）・Ab2 型に設定する。Ca 型を鐙形 1・凸字形 1 の環だけの 1 型（第 6－5：9～11）、円形の環の外側に小さい環（凸字形 2）がある 2 型に設定する（第 6－5 図：12）。

最後、型式の間の派生関係に関しては、B 型は銜枝の形態で A 型と細かい方形の突起がある銜枝（Ⅲ）という属性を共有し、C 型は外環の形状で A 型と鐙形の環（鐙形 1）という属性を共有することがみられる。したがって、結合式の A 型は最初の祖形として銜を嵌入式の B 型および、挿入式の C 型という二つの方向に分岐することが想定される。



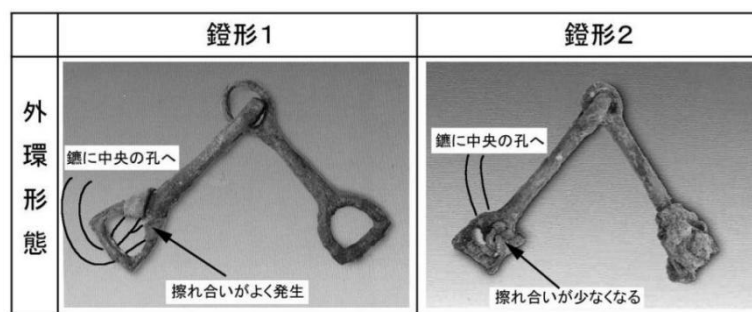
第 6－2 図 馬具および金属製銜の構造

	結合式	嵌入式	挿入式
連結方式	 複片式鞍轡	 0 2mm	 0 2mm

外環形態	鐙形1	鐙形2	凸字形1	凸字形2	方形	円形
						

銜枝形態	I－1	I－2	Ⅱ	Ⅲ
				

第 6－3 図 属性変異模式図（1）



第6-4図 属性変異模式図（2）

【連結方式 * 外環形態】

【連結方式 * 銜枝形態】

【外環形態 * 銜枝形態】

	結合式	嵌入式	挿入式
撥1	41		17
撥2	22		
凸1			24
凸2			64
方		13	
円	5		36

	結合式	嵌入式	挿入式
I-1	44	4	136
I-2	12	1	
II			5
III	12	8	

	撥1	撥2	凸1	凸2	方	円
I-1	46	11	24	64	4	35
I-2	4	8			1	
II						5
III	8	3			8	1

第6-1表 属性相関

2. 鑢の型式分類

鑢の型式分類として、まず、銜との連結方式に基づいて鑢を大きく分類し、さらに、全体の形状と材質をもとにそれぞれを細分する。

まず、鑢とは銜の端の環を鑢の中央の孔に縛りつける、もしくは鑢そのものを銜の端の環に通すかして用いられたものである。鑢の上下の二孔には革紐が通されて頭絡に結びつけ、頭絡全体を安定させるため用いられたものである[チャイルド 1976]（第6-2図）。この場合、銜の外環と頭絡の帯紐との連結方式は重要な機能的属性である。いっぽう、個体間の形態的変異は豊富であるが、個体間で共有される銜との連結方式の属性が存在するといえる。したがって全ての鑢が共有する銜との連結方式から同じく結合式・嵌入式・挿入式に分けることができる。順にA型・B型・C型とする。これは銜の連結方式の分類と一致している。A型は上下の二孔は頭絡の帯紐を通し、中央の孔は革紐で銜の端の環に結びつけるものである（第6-5図：1～5）。B型は上下の二孔（環）は頭絡の帯紐を通し、銜の端の環は中央の孔（環）に差し込んで外環の下部の突起に固定されるものである（第6-5図：6～8）。C型は上下の二孔は頭絡の帯紐を通し、鑢を銜の端の環に差し

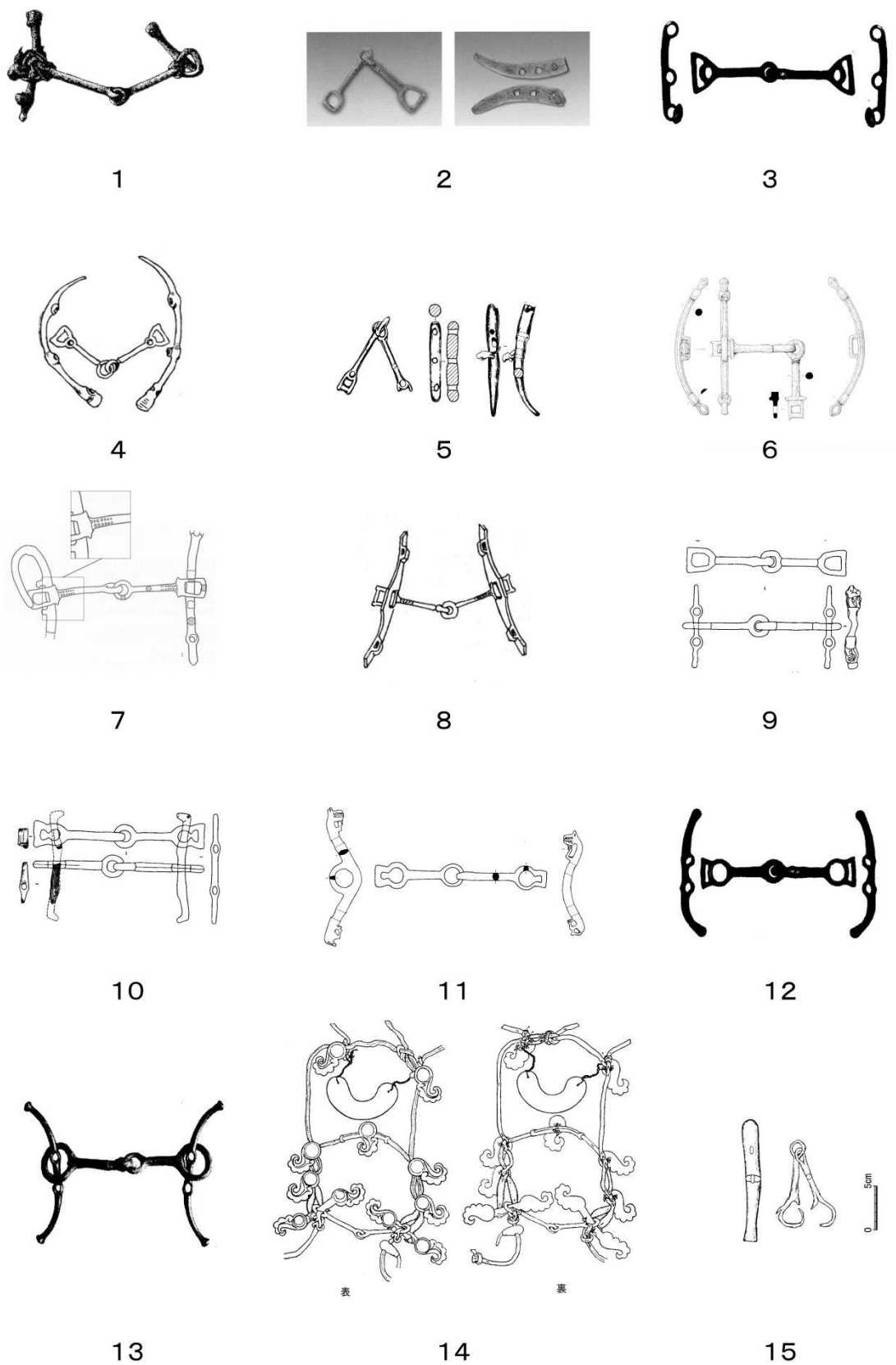
込んで使うものである（第6-5図：9～15）。

次に、材質からみると、青銅や鉄などからなる金属製鑣と、骨角や木などからなる有機物製鑣がある。さらにこれに全体の形態を加えて以上の鑣の型式細別を設定することが可能になる。金属製A型は全体の形態から両端にキノコ形を付けるa型と（第6-5図：1, 3）、両端に扁平の菱形を付けるb型に分けることができる（第6-5図：4）。これらの形態の以外の有機物製A型はc型とする（第6-5図：2, 5）。B型は基本的に金属製で、全体の形態から両端が扁平の菱形を付けるa型（第6-5図：6～7）、板状となるb型に細別する（第6-5図：8）。C型の金属製は全体の形態から獣形のa型（第6-5図：9～11）、C字形のb型（第6-5図：12～13）、S字形のc型に細別する（第6-5図：14）。これらの形態の以外の有機物製はd型としておく（第6-5図：15）。しかし、型式の内部では時間的な変化を表現する変異が乏しいから、型式の設定が困難である。

3. 銜と鑣との組み合わせ

銜と鑣の共伴関係が明確である資料が多いともいえない。原報告の記載が不明であるため、銜と鑣の共伴関係を把握できたものは59点のみである（第6-2表）。

銜Aa型はおもに鑣Aa・鑣Acと組み合わせるが、銜Ab型と鑣Aaと組み合わせる例はない。またアラル海沿岸のウイガラク墓地や新疆地域の多崗墓地では幾つかの銜Bb型と三孔鑣（鑣Ab）が組み合わせる例が存在しているものの、多くの銜B型は方孔鑣（鑣B）と組み合わせることがわかる。これに対し、玉皇廟墓地や甘子堡墓地などの長城地帯では銜Ca型は獣形の鑣Caと密接な関係があることがわかる。ミヌシンスク盆地のみでは銜Ca型とC字形の鑣Cbと対応する例がある。銜C型と組み合わせる二孔鑣は多様である。以上をまとめると、銜と鑣の繋がり方から、次の三セットの組み合わせがあったと考えられる。革紐で縛る銜A型は鑣Aに（第6-5図：1～5）、銜を鑣に通す銜B型は鑣Bに（第6-5図：6～8）、鑣を銜に通す銜C型は鑣Cに組み合わせる傾向が高いと言えよう（第6-5図：9～15）。銜と鑣の連結方式に基づき、これらの轡を順に結合式、嵌入式、挿入式とする。



第 6-5 図 金属製轡の型式分類

1～5. 結合式 6～8. 嵌入式 9～15. 挿入式

第2節 編年

1. 墓葬一括遺物での検討

これまで設定してきた銜の型式を軸に、銜の前後関係あるいは同時期の関係を判断する。異なる型式間の同時期性を検討するためには、共伴する型式を比較する必要があるが、金属製銜の型式間の共伴関係が欠如しているため、型式間の前後関係を検証することは簡単ではない。

まず、草原地帯東部の年代の定点となるものとして、アルジャン1号墓・アルジャン2号墳があげられる。炭素年代測定の結果により、銜 **Aa1** 型がアルジャン1号墳から出土しており、紀元前9～前8世紀に位置付けられる。銜 **Aa2** 型・銜 **Ba** 型がアルジャン2号墳から出土しており、前7世紀末に位置付けられる。これは先に銜 **Aa1** 型から銜 **Aa2** 型へ変化する型式の方向性の想定に矛盾なく対応することができる。ただ、銜 **Aa2** 型は銜 **Aa1** 型とよく組み合う鏃 **Aa** と共伴する例があることから、銜 **Aa2** 型の出現はアルジャン2号墓の年代より早い可能性が存在している。また、第6-2表に示されたように銜 **Ab** 型が銜 **Aa1** 型とよく組み合う鏃 **Aa** と共伴する例はない。銜 **Aa1** 型と銜 **Ab** 型の間には年代差がある可能性が高い。銜 **Ab1** 型はタスモラ墓地5号墳3号墓から出土しており、その墓が紀元前7～前6世紀に編年されている[雪嶋宏一 1995]。銜 **Ab2** 型の年代は銜 **Aa1** 型よりやや遅い紀元前7世紀と考えるほうが妥当ではなかろうか。また、銜 **Ab2** 型はセミレチェのビジェー一括埋納物から銜 **Bb** 型と一緒に検出されたことから、銜 **Ab2** 型の年代は銜 **Bb** 型に近い可能性がある。炭素年代測定の結果により、銜 **Bb** 型が新疆の多崗墓地107号墓から出土しており、紀元前7～前6世紀に位置付けられる。

次に、長城地帯においては、中原系の容器や武器などの墓葬単位の一括遺物により、先に想定した銜 **C** 型の型式変化の方向性を検証することが可能になる。年代の定点となるものとして、北京の玉皇廟墓地があげられる。玉皇廟墓地においては、銜 **Ca1** 型が18号墓から銅劔や銅戈と一緒に検出され、銜 **Ca2** 型が156号墓から銅劔と共伴している。朱鳳瀚氏の編年を参照するなら[朱鳳瀚 1995]、18号墓の銅劔を前7世紀の春秋中期に、156号墓の銅劔を紀元前6～前5世紀の春秋晩期に位置付けることができる。これは先に想定した銜 **C** 型の型式変化の方向性と矛盾しない。また、銜 **Cb** 型は陝西の寨頭河墓地7号墓で銅鼎・銅戈と共伴している。ここでは鼎の編年は先の朱鳳瀚氏の編年を参考とする[朱鳳瀚 1995]。このように寨頭河墓地7号墓の銅鼎の足部が広く短く、それは戦国時代の型

式的特徴に一致している。戈については、林巳奈夫や宮本一夫の編年を参考する[林巳奈夫 1972、宮本一夫 1985]。このように寨頭河墓地 7 号墓の銅戈は、援鋒から戈身部へスムーズに過渡してきたことから、紀元前 4 世紀以降の戦国時代後期と編年される。したがって、銜 **Cb** 型が紀元前 4 世紀以降に位置付けられる。

第6-2表 銜と鑣の共伴関係

時期	地域	番号	銜			鑣			轡	車具	一括遺物	炭素年代	出典文献
			A	B	C	A	B	C					
第I期	トゥバ	アルジャン1号墳	a1			a			結合式			822-791BC	М.П. Грязнов1980 新疆维吾尔自治区文物考古研究所 2016 P. Amzarakov 2011 新疆文物考古研究所 2013 内蒙古自治区文物考古研究所ほか 2009 新疆吐鲁番学研究院ほか 2011 新疆吐鲁番学研究院ほか 2011
	新疆	莫呼查汗I号墓地54号墓	a1			a			結合式				
	ミヌシンスク	地点不明	a1			a			結合式				
	新疆	薩恩薩伊22号墓	a1			c			結合式				
	内蒙古	小黑石溝II11号墓	a1			c			結合式				
	新疆	洋海I5号墓	a1			c			結合式				
	新疆	洋海I189号墓	a1			c			結合式				
第II期	ミヌシンスク	地点不明	a2			a			結合式			619-608BC	P. Amzarakov 2011 М.Г. Мошкова1992 Chugunov et.al.2010 新疆吐鲁番学研究院ほか 2011 М.Г. Мошкова1992 М.Г. Мошкова1992 東京新聞 1981
	アラル海	タギスケン40号墓	a2			b			結合式				
	トゥバ	アルジャン2号墳16号墓1号馬	a2			b			結合式				
	新疆	洋海II14号墓	a2			c			結合式				
	アラル海	タギスケン45号墓	b1			c			結合式				
	カザフスタン	タスモラ5号墳3号墓	b1			c			結合式				
				b		c			結合式				
	セミレーチェ	ビジェー一括埋納遺物	b2			b			結合式				
				b			a		嵌入式				
	トゥバ	アルジャン2号墳16号墓2号馬	a				a		嵌入式			619-608BC	Chugunov et.al.2010
	トゥバ	アルジャン2号墳16号墓3号馬	a				a		嵌入式			619-608BC	Chugunov et.al.2010

	トゥバ	アルジャン 2 号墳 16 号墓 4 号馬	a		a	嵌入式		619-608BC	Chugunov et.al.2010
	トゥバ	アルジャン 2 号墳 16 号墓 5 号馬	a		a	嵌入式		619-608BC	Chugunov et.al.2010
	トゥバ	アルジャン 2 号墳 16 号墓 6 号馬	a		a	嵌入式		619-608BC	Chugunov et.al.2010
	トゥバ	アルジャン 2 号墳 16 号墓 7 号馬	a		a	嵌入式		619-608BC	Chugunov et.al.2010
	トゥバ	アルジャン 2 号墳 16 号墓 8 号馬	a		a	嵌入式		619-608BC	Chugunov et.al.2010
	トゥバ	アルジャン 2 号墳 16 号墓 9 号馬	a		a	嵌入式		619-608BC	Chugunov et.al.2010
	トゥバ	アルジャン 2 号墳 16 号墓 10 号馬	a		a	嵌入式		619-608BC	Chugunov et.al.2010
	トゥバ	アルジャン 2 号墳 16 号墓 13 号馬	a		a	嵌入式		619-608BC	Chugunov et.al.2010
	トゥバ	アルジャン 2 号墳 16 号墓 14 号馬	a		a	嵌入式		619-608BC	Chugunov et.al.2010
	トゥバ	アルジャン 2 号墳 3 号ホート	a		a	嵌入式		619-608BC	Chugunov et.al.2010
新疆	石門子 6 号墓		b		a	嵌入式			新疆文物考古研究所 2013
アラル海	タギスケン 44 号墓		b		a	嵌入式			М.Г.Мошкова1992
アラル海	ウイガラク 35 号墓		b		a	嵌入式			М.Г.Мошкова1992
アラル海	ウイガラク 30 号墓		b		b	嵌入式			М.Г.Мошкова1992
カザフスタン	タスモラ 1 号墓 19 号墳		b		b	嵌入式			М.Г.Мошкова1992
新疆	多崗 107 号墓		b	b		嵌入式		前 7 ～ 6 前世紀	中国社会科学院考古研究所 2014
アラル海	ウイガラク 50 号墓		b	b		嵌入式			М.Г.Мошкова1992
アラル海	ウイガラク 14 号墓		b	b		嵌入式			М.Г.Мошкова1992
北京	玉皇廟 18 号墓		a1		a	挿入式	敦・罍・銅・戈等		北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 250 号墓		a1		a	挿入式	罍・銅・戈等		北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 2 号墓		a1		a	挿入式	鼎・敦・罍・銅等		北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 52 号墓		a1			挿入式			北京市文物研究所 2007
北京	玉皇廟 300 号墓		a1			挿入式			北京市文物研究所 2007

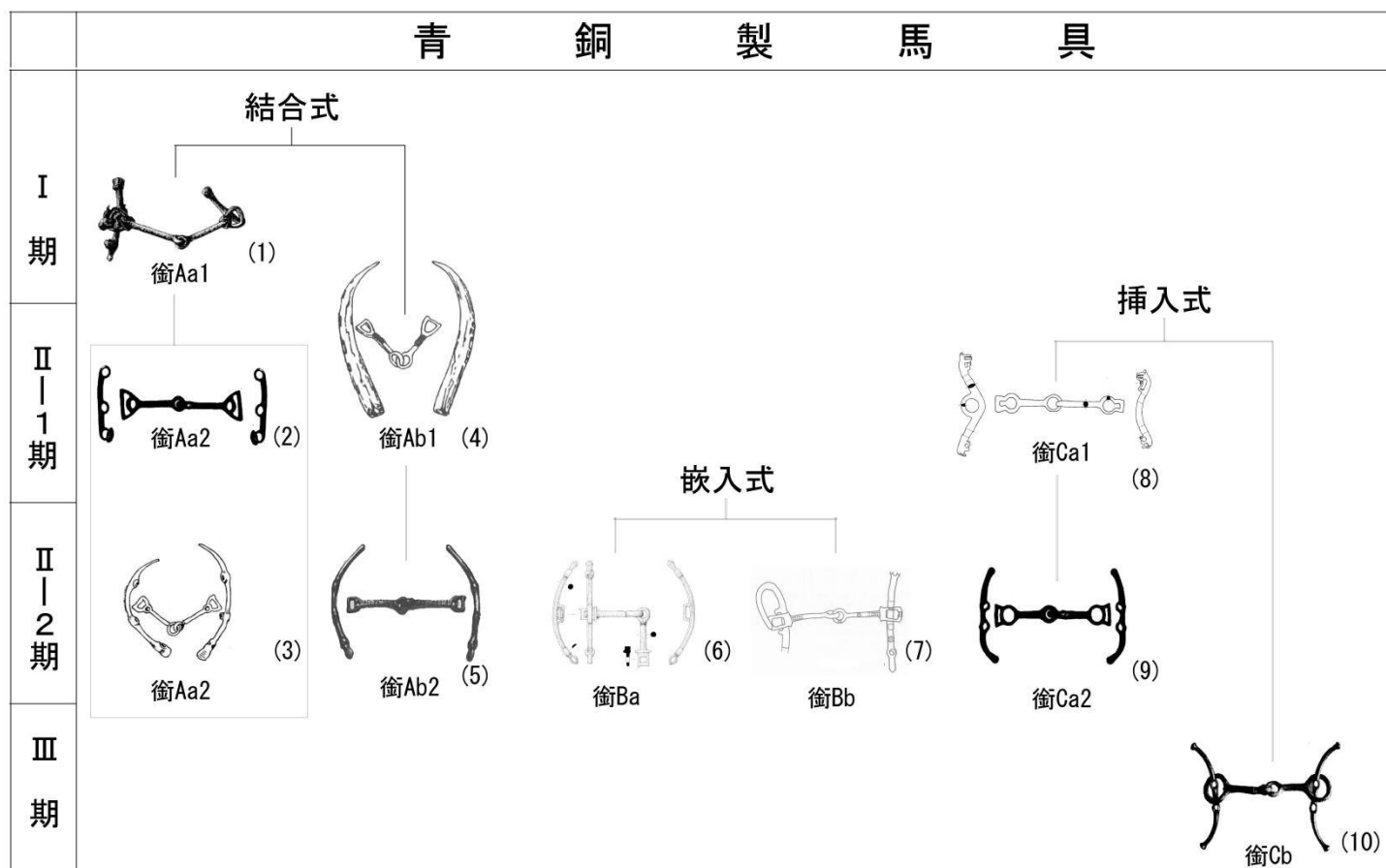
第 III 期	北京	玉皇廟 156 号墓		a1		a	挿入式	銅 ○ 鼎・戈等 銅 戈 短剣 C3 類 鼎・戈 戈		北京市文物研究所 2007
				a2		a	挿入式			
	河北	甘子堡 5 号墓		a2		a	挿入式			賀勇・劉建中 1993
	河北	北辛堡 1 号墓		a2		a	挿入式			河北省文化局文物工作隊 1966
	ミヌシンスク	地点不明		a2		b	挿入式			P. Amzarakov 2011
	北京	玉皇廟 174 号墓		a2			挿入式			北京市文物研究所 2007
	河北	甘子堡 3 号墓		a2			挿入式			賀勇・劉建中 1993
	北京	玉皇廟 151 号墓		a2			挿入式			北京市文物研究所 2007
	北京	玉皇廟 230 号墓		a2			挿入式			北京市文物研究所 2007
	寧夏	倪丁村 2 号墓		a2			挿入式			寧夏回族自治区博物館考古隊 1987
	アルタイ	バジリク 3 号墓		b		c	挿入式			S. I. Rudenko 1970
	新疆	洋海 87CVP 採集品		b		c	挿入式			新疆文物考古研究所 1989
				a2		d	挿入式			
	寧夏	楊郎 I 地点 2 号墓		b		d	挿入式			寧夏文物考古研究所ほか 1993
	アルタイ	Verkh-kaldjin II		b		c	挿入式			福岡市博物館ほか 2005
	アルタイ	Ak-Alakha III		b		c	挿入式			福岡市博物館ほか 2005
	新疆	洋海 III 1 号墓		b		d	挿入式			新疆文物考古研究所ほか 2004
	陝西	寨頭河 7 号墓		b		d	挿入式			陝西省考古研究院ほか 2012
	新疆	蘇貝希 I 号墓地 10 号墓		b		d	挿入式			新疆文物考古研究所 1993
期	カザフスタン	Кок-су I		b		d	挿入式			М.Г.Мошкова1992
	アルタイ	Аймырлыг		b		d	挿入式			М.Г.Мошкова1992
	カザフスタン	Кула Журга		b(鉄)		d	挿入式			М.Г.Мошкова1992
	寧夏	王大戸 1 号墓		b(鉄)			挿入式			寧夏文物考古研究所ほか 2016

	カザフスタン	Сағлы-Бажи II, курган 1			b(鉄)			挿入式				А.Д. Грач1980
--	--------	-------------------------	--	--	------	--	--	-----	--	--	--	---------------

- [凡例] ・銜の型式の欄と鑢の型式の欄ではアルファベットや数字は本論の型式と示している。
- ・具体的な出土地点は不明であるから墓葬名の欄の一部分は地点不明のみと書いている。

2. 時期の設定

以上より、第6-6図は轡を構成する銜と鑣の各型式の消長を配列したものである。鑣の各型式細別の配列は銜と鑣の共伴関係の通りに行った。したがって、本稿では金属製轡の出現から匈奴勃興併行期までを全体で3時期、4段階に区分した。各段階の実年代は放射性炭素年代測定結果[Zaitseva et al. 2007, Beisenov et al. 2016]や中原系青銅器の相対年代を参考とするものである。それぞれの時期の指標、年代については次に示すとおりである。第Ⅰ期は結合式の轡の使用がこの地域で始まった時期である。相対年代としては、ミヌシンスク盆地のガール文化バイノヴォ文化期あるいは中原地域の西周後期～春秋前期に併行すると考えられる。第Ⅱ期は嵌入式と挿入式の轡の出現を指標としている。具体的にいえば、嵌入式と挿入式の轡の出現の年代差からみると、嵌入式・挿入式の轡の自体が各自段階の開始の指標となり、第Ⅱ期を第Ⅱ-1段階・第Ⅱ-2段階に区分することができる。第Ⅱ-1期の年代は、タガール文化ポドゴルノエ文化期あるいは春秋中期に相当する。第Ⅱ-2期の年代は、タガール文化サラガシュ文化期あるいは春秋後期～戦国前期に併行すると考えられる。第Ⅲ期は挿入式の轡の拡散を指標としている。この時期はアルタイ山脈のバジリク文化あるいは中原地域の戦国後期に併行するとみられる。



第 6-6 図 金属製轡の編年図

1. アルジャン 1 号墳 2・3 号室間の羨道 2. ミヌシンスク採集 3. タギスケン 40 号墳 4. タギスケン 45 号墓 5. ビジェー括埋納遺物
6. アルジャン 2 号墳 16 号墓 7. 石門子 6 号墓 8. 玉皇廟 15 号墓 9. ミヌシンスク採集 10. ミヌシンスク採集

第3節 分布状況

1. 第Ⅰ期（第6—7図）

この段階は金属製轡の使用が広く始まる時期である。これらの轡は基本的に革紐で緊縛する結合式の轡である。銜の型式は **Aa** 型のみで、すなわち無紋の銜枝で鐙形の外環を付けるものである。次いで三孔の鑣 **A** が主体となる。出土事例の数量が限られているが、分布の範囲は草原地帯東部の大部分に及んでおり、タクラマカン砂漠南縁の流水墓地でも結合式の轡がいくつかみられる。この時期は、研究史で指摘されたように、騎馬遊牧の文化要素が草原地帯東部から黒海沿岸へ広がるという騎馬遊牧の開始段階に位置付けられる。

2. 第Ⅱ期

（1） 第Ⅱ－1期（第6—8図）

Ⅱ－1期に入ると、鑣を銜に通す挿入式の轡は結合式の轡を祖形として長城地帯で新たに登場する。轡の型式は、無紋の銜枝で凸字形の外環を付ける銜 **C** 型が二孔の鑣 **C** とセットになるものである。南シベリア、カザフスタンにおいては、結合式の轡の種類は増え始め、銜の型式から見て細かい方形の突起がある銜 **Ab** 型が出現する。今後、資料の数量は増加する可能性があるが、銜 **Ab** 型の分布範囲から見てある程度の地域差を認めることができる。ミヌシンスク盆地・トアバ地区や天山山脈東部の銜 **Aa** 型に対して、銜 **Ab** 型の分布範囲はアラル海沿岸に集中する。

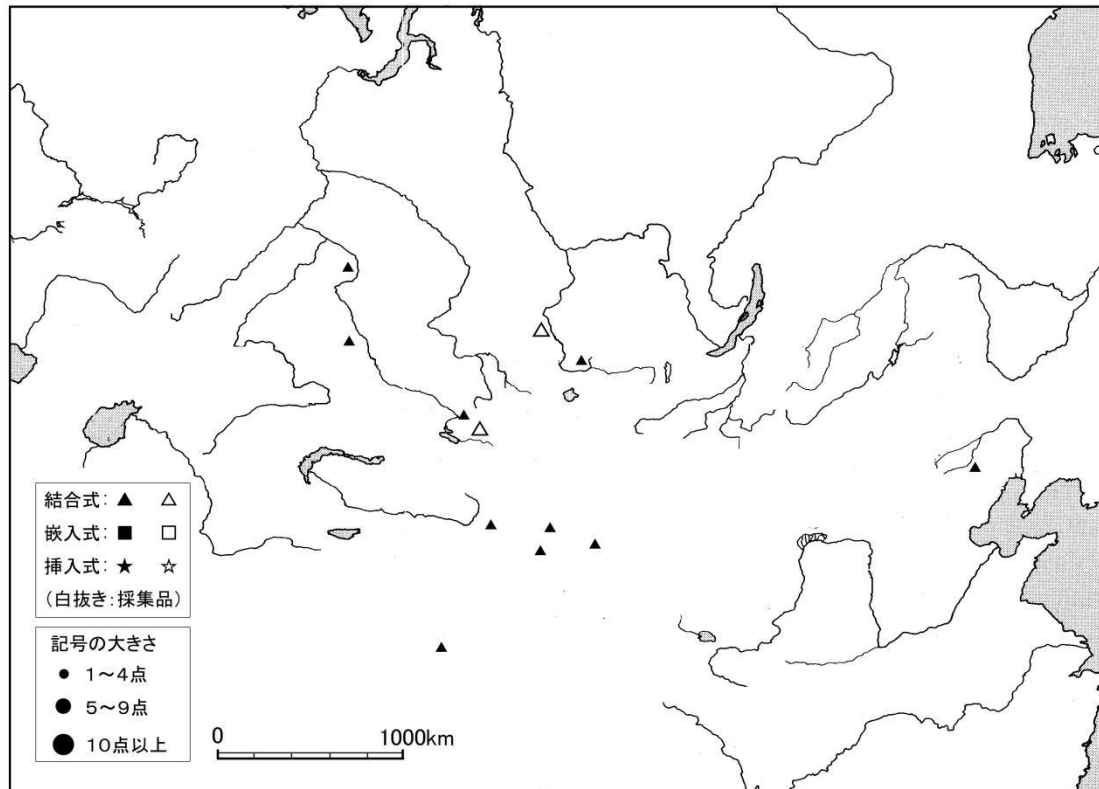
（2） 第Ⅱ－2期（第6—9図）

Ⅱ－2期に引き続き、同じく結合式の轡を祖形として、銜を鑣に通す嵌入式の轡という新しい轡が登場し、南シベリア、中央カザフスタンでは結合式の轡と徐々に入れ替わっていく。銜の型式は無紋の銜 **Ba** 型と細かい方形の突起がある銜 **Bb** 型を含め、方環の鑣 **B** とセットになる。前者の数量は極めて少なく、その分布地域はトアバ地区のみに集中する。後者の数量も多くなく、南シベリア、カザフスタンの多数の地域に散在している。いっぽう、長城地帯では挿入式の轡の分布範囲が内蒙古中南部・寧夏などの地域へ広がり、とく

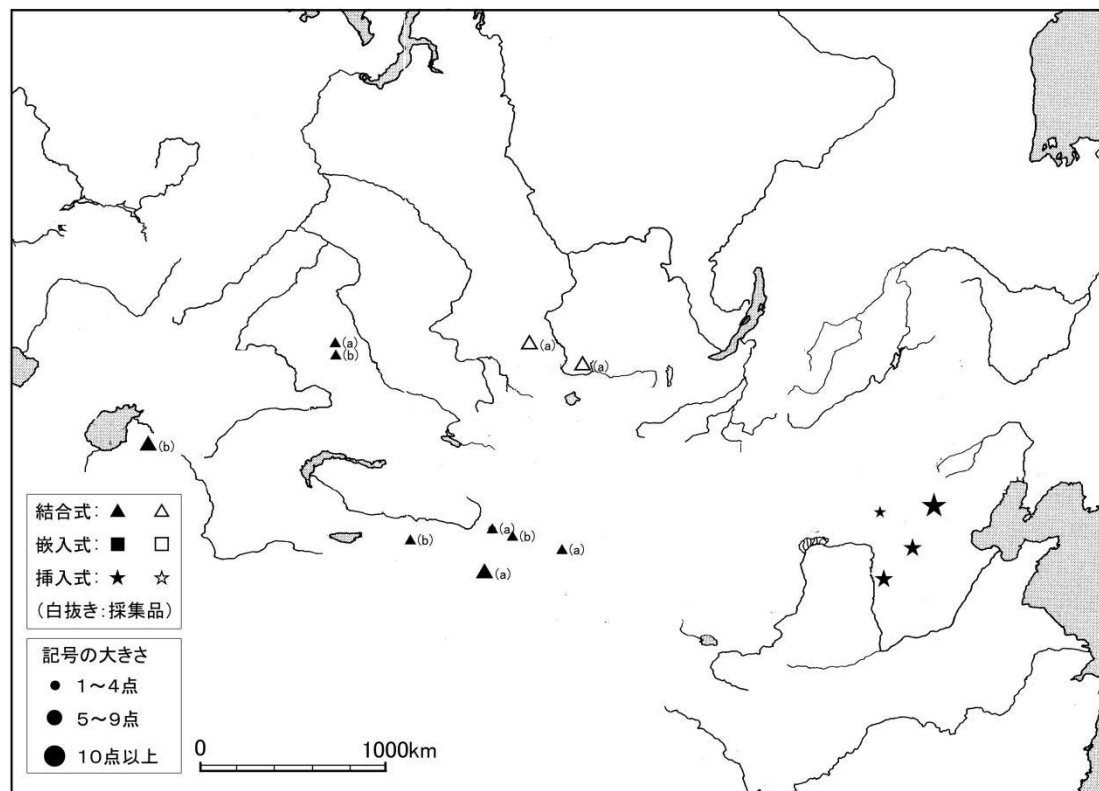
に寧夏の中衛や固原の採集資料が豊富である。

3. 第Ⅲ期（第 6—10 図）

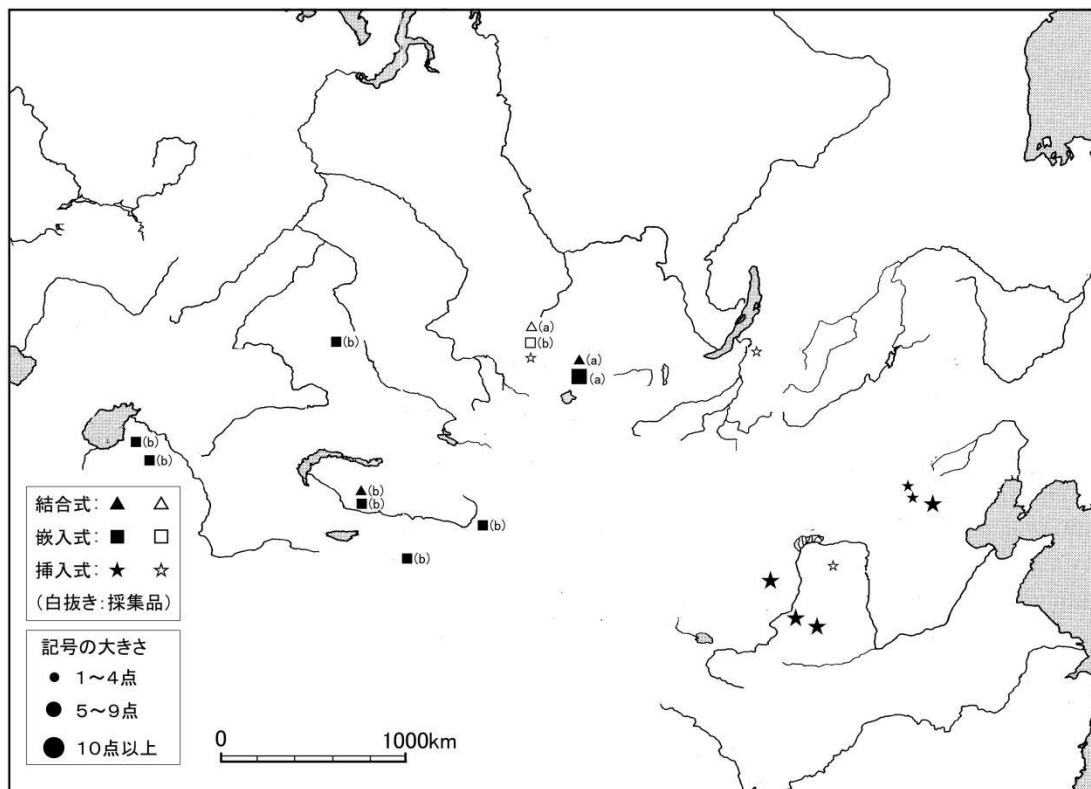
これは鑣を銜に通す挿入式の轡は、前段階に類例のない南シベリア、カザフスタンにおいて盛行する段階である。銜の型式は無紋で円形の外環だけを付け、材質は青銅製や鉄製などからなるものであり、そして二孔の鑣 C とセットになる。前段階に比べて挿入式の轡の分布範囲が広く、南シベリアから長城地帯に及んでおり、地域性の消滅に伴って斉一性が顕著になり始めた段階といえる。



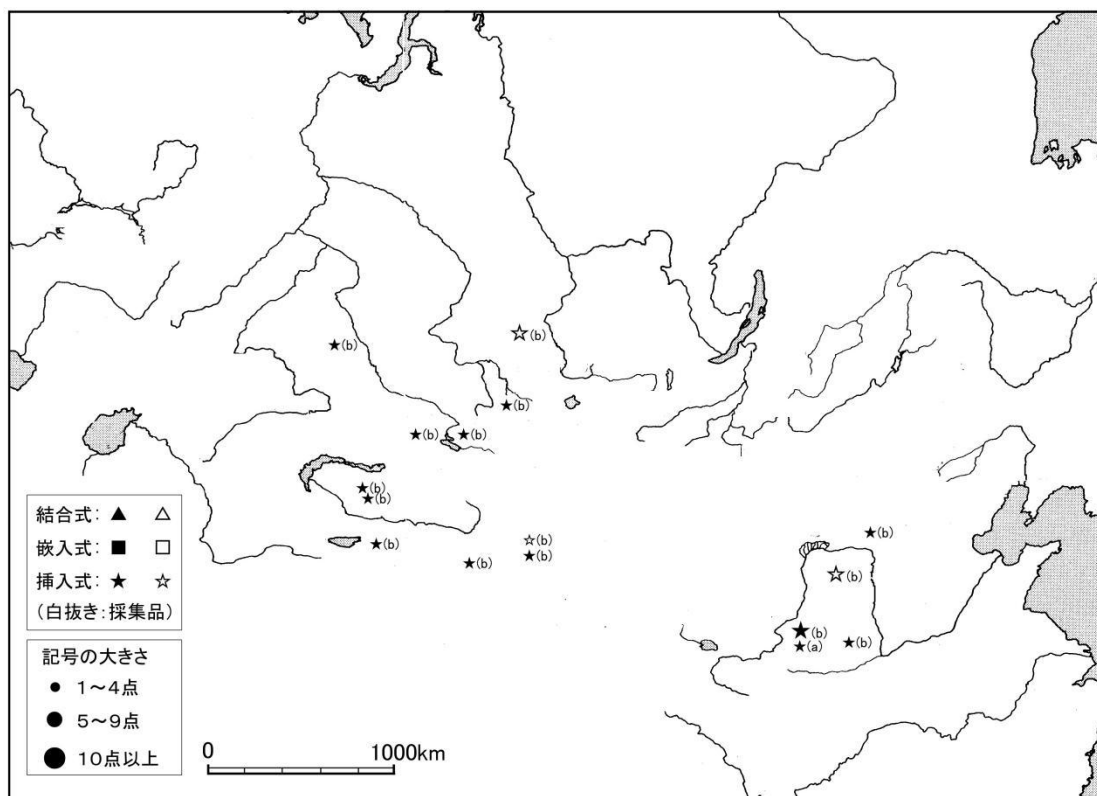
第6-7図 第I期における金属製銜と鑣の分布状況



第6-8図 第II-1期における金属製銜と鑣の分布状況



第6-9図 第Ⅱ-2期における金属製銜と鑣の分布状況



第6-10図 第Ⅲ期における金属製銜と鑣の分布状況

第4節 青銅轡の地域性と変遷

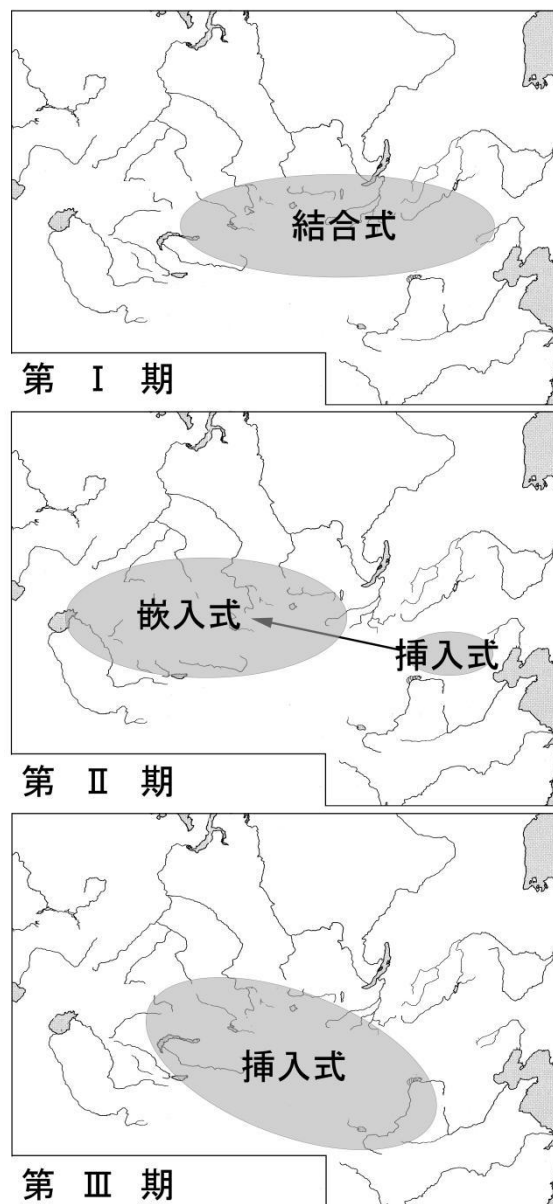
紀元前一年紀前半（Ⅰ期～Ⅱ期）、草原地帯東部における金属製轡は、外環・銜枝を始めとする共有要素を持ちながら、地域的に漸移的变化に伴ってアルタイ山脈を中心に大きく東西に二分する安定的な分布圏を形成していたのである。詳しくいえば、当該時期の金属製轡は、Ⅰ期で結合式の轡から始まり、Ⅱ期になると、長城地帯では結合式の轡が在地化して挿入式の轡が成立、中央カザフスタン、南シベリアでは結合式の轡から嵌入式の轡が派生して併存する展開の様相を示している（第5-11図）。

銜と鑣の連結方式から考慮するなら、中原地域では、青銅製轡の編年を踏まえ、棒状の青銅製鑣を銜の外環の中に挿入する連結方式は遅くとも紀元前800年頃から多く現れ始めていく[呉曉筠 2002, 高濱秀 2014]。このことから、長城地帯では、挿入式の轡は外環形態において直前の結合式の轡との類似点をもっておりながら、別様式からの連結方式の情報の多くを導入したと考えられる。

いっぽう、草原地帯西部の黒海北岸では、先スキタイ時代（紀元前9～前7世紀中葉）の編年をめぐる最も大きな問題はノヴォチェルカスク型とチェルノゴロフカ型の青銅製轡との関係をどのように考えるかというものである[高濱秀 1979, 雪嶋宏一 2008]。ここでは両型の青銅製轡の関係を踏まえて黒海北岸のスキタイの起源の問題に触れるわけではないが、二つの外環が付いて銜枝が小さい方形の突起があるノヴォチェルカスク型の青銅製轡は注意すべきであろう。この黒海北岸のノヴォチェルカスク型と本論の南シベリアの嵌入式の轡の間には小さない年代的・地理的な断絶が存在するが、嵌入式の轡は黒海北岸ないしはギリシャから銜枝の形態に関する要素を受容したことは疑いようがない。その上、円形の外環が付いて銜枝が小さい方形の突起があるものは新疆和静県の莫呼査汗墓地54号墓から銜Aa1型とともに1点しか出土していないものの、ある程度、両者の年代上の隙間を埋めるものであると考えられる。また、分布状況を検討する部分で述べたように、Ⅱ-1期からⅡ-2期へ移行する時期、すなわち銜B型が銜Ab型から派生する時期には、外環の形態において類似点を持ちながら銜枝の形態の差異を示す、黒海北岸に近い南シベリア、カザフスタンの内部の小地域も存在する。

なお、紀元前1千年紀末期以降（Ⅲ期）になると、草原地帯東部における金属製轡は、先行する多様なレベル情報の伝播の背景の下で文化的な斉一性が顕著化になり始めたのである（第5-11図）。詳しくいえば、当該時期の金属製轡は、Ⅲ期になると長城地帯で

普及した挿入式の轡が逆に南シベリアにも影響を与えつつ、拡散していた展開の様相を示している。



第 6-11 図 金属製轡の展開の模式図

第5節 青銅轡の変遷にみる馬具の機能的変革

ここでは、以上に述べた金属製轡の展開の様相に基づいて技術的変革を手がかりとして紀元前1千年紀以降に騎馬遊牧社会にどのような変化が起きたのかということを解明したい。

まず、騎馬遊牧社会は短時間に形成したものではなく数千年の時間を経て社会経済システムとして徐々に発展してきたものである[雪嶋宏一 1999]。このプロセスは、紀元前四千年紀以降に馬の家畜化と、搾乳、運搬、騎乗などの馬の利用を嚆矢とするものである。こうして、この「二次的生産物革命 (Secondary Products Revolution)」と呼ばれる動物的な生産物の利用は人間社会の経済基盤に影響を深く与えていた[Anthony, Brown 2011]。ただし、これらを直接に反映しうる草原地帯の馬具は紀元前2千年紀にいたっても相変わらず皮革製、植物製の紐縄あるいは骨製、木製の棒状のものを使用していた可能性が高い。

紀元前1千年紀に入ってから、結合式の青銅製の轡は本論に述べたように草原地帯の広域で登場する。その後、これらの結合式の轡は地域性の属性の受容とともに型式変化の方向を異にして時間的変化が進行し、南シベリア、カザフスタンにおいては嵌入式の轡に、長城地帯においては挿入式の轡に分岐するという状況が出現する。このように、青銅製の轡は漸移的な変化と一定の地域性とを同時に看取することができる。ただし、南シベリア、カザフスタンの嵌入式の轡でも、長城地帯の挿入式の轡でも、いずれにしても銜と鑣の連結方式で認められたように、有機物製の革紐で緊縛する結合式の轡に比べれば、銜と鑣の連結の安定性を増強する傾向が指摘できる。

この安定性の増加の傾向は馬の制御の技術的変革に関係があると考えられる。この時期には、銜の両端と手綱との間に介在する引手が検出されていなかったことから、乗手の意志を馬に伝達する手綱が銜の外環に直接結び付けたものを想定することができる。このように、銜の外環とは、唇の端で止まり、騎手の合図を伝わって馬を制御することを第一の目的とするものである。ここでは、銜枝は馬の歯列の隙間に入れて臼歯の方へずれるものであり、銜の外環は手綱に繋いで馬に乗る人からの合図を受け取るものである。具体的に言えば、左に曲がる命令を伝えたい場合、馬に乗る人は左側の手綱を引いて左側の銜の外環と鑣の連結の場所に力を入れる。そうすると銜は急に左方へ移動し、右側の銜の外環は馬の右側の口角や歯、舌などの敏感な部分に刺激を与える。そして馬は右側の刺激から脱却するため、正反対の左側に曲がることになる[Littauer 1969]。逆に、右に曲がる命令を

伝えたい場合は右側の手綱を引くことになる。したがって、紀元前7世紀以降の草原地帯では、形態の変化とともに、轡の連結の安定性が増加し、馬の行為を制御する技術的变化が起きたことととらえられる。

草原地帯の遊牧社会の形成を支える基盤は騎馬にあった[後藤富男 1970, Ute Luise Dietz 2003]。轡の技術的な変革は草原地帯における遊牧社会の変化を反映する。紀元前600年頃から、馬具の連結の安定性の増加とともに、草原地帯の遊牧集団は、騎馬という機動力をより有効に獲得し、快速な移動が可能になった。技術的な変革に伴い、遊牧集団と家畜群の移動を背景として、物質の交流と技術の拡散など、さまざまな情報の伝達は草原地帯でより頻繁に発生する可能性があるだろう。

第六章 考察 ―初期騎馬遊牧文化の展開過程―

本論の目的は、青銅器の考古学的研究の立場から草原地帯東部における初期騎馬遊牧文化の展開過程を考察することである。この目的を遂げるため、具体的な検討の課題としてあげられるのは、まずに諸型式の青銅器の展開様相を指標として草原地帯東部の全体規模の地域間関係に関する具体像の考察である。次の課題として、こうした全体規模の地域間関係の背景と形成要因について総合的な検討があげられる。以上の章節では、遊牧集団に重要な道具と考えられる青銅武器と馬具を中心に、機能的変化に重点をおいた諸型式の編年と分布の検討を行ってきたが、上述の検討を受け、以下、まず草原地帯東部の全体規模の地域間関係の具体像を考察し、次に各時期の青銅武器と馬具の展開様相の差異を読み取ることによって、環境変動と社会変化の表現としての地域間関係の形成要因を推測してみたい。

第1節 青銅器の型式相互の時間的關係

初期騎馬遊牧文化についての先行研究には、物質文化の要素の相似性に主眼をおき、地域間の関係を検討するものはあるが、青銅器の形態を体系的にとらえて本格的に型式学的・機能的な分析から草原地帯東部の全体規模における初期騎馬遊牧文化の展開過程の考察を行うことは、課題として残されているといえよう。本節では、以上の章節で行った青銅武器と馬具の分類・編年・分布の成果を踏まえつつ、とくに型式間の共伴関係を対象として、墓葬単位における型式全体とその組み合わせというより大きな観点での青銅器全体の展開の時間軸の検討を行い、この草原地帯東部の初期騎馬遊牧文化の展開過程について考えてみたい。

具体的にいえば、本節では、青銅器全体の編年体系の検討は、以上の第二章～第五章で検討した青銅器の型式の組列を踏まえつつ、型式間の一括遺物と放射性炭素年代測定の結果に基づいて行う。分布中心であった南シベリアでは墓葬単位の一括遺物の情報が明確にできるものが多いとはいえないが、数がきわめて少なくても、一定量の青銅武器と馬具は長城地帯において共伴する場合がある。ただし、少量の複数型式の共伴の情報のみから青銅武器と馬具の編年体系を判断するのは困難である。そこで、一括遺物としての中原系(燕国系)の青銅器や放射性炭素年代測定の結果をもとにした墓葬の相対編年を用いて、青銅

器の時間的関係を把握する。

1. 複数型式の一括遺物の検討

前述の青銅器の分類と編年の分析に基づいて、本節の目的は、本論で分析したおもな青銅武器と馬具を主体に各地域で発見された墓葬の一括遺物を中心に検討し、必要に応じて本論で検討されていない中原系（燕国系）の青銅器にも触れたい。また部分の例は時期が判明する一括遺物がないので、正確な時間的関係は確言できないが、形状特徴と系譜関係などの要素から、これらの時期が判明する一括遺物がない器物の同時期性は明確にすることができる。

（1）南シベリア・新疆・内蒙古中南部以西

以上の第二章～第五章で分類した青銅武器と馬具の諸型式の共伴関係からみると、次のようになる。

まず、複数の型式が共伴する例を調べてみると、一括遺物として新疆地域においては天山中部の和静県莫呼查汗墓地[新疆文物研究所 2016]があげられる。莫呼查汗墓地では、I 区 101 号墓の短剣 A1 類と刀子 A 類とが共伴し、I 区 54 号墓の刀子 A 類と結合式の轡（銜 Aa1 型）とが共伴する[新疆文物研究所 2016]。南シベリアにおいては、短剣 C1 類と、刀子 A 類/B 類と、銅鏃群①-1 と、結合式の轡（銜 Aa1 型）とが共伴する。短剣 C1 類と刀子 A 類を含む出土資料としてあげられるのはミヌシンスク盆地バデニ（Батени）3 号墳 21 号墓の出土品[Членова1967]、短剣 C1 類 1 点、刀子 A 類 1 点、銅鏃 A 類、銅戈 1 点が出土している。短剣 C1 類と刀子 B 類を含む出土資料としてあげられるのはトゥバ地域のティギル＝タイダゼン（Тигир Тайджэн）-IV 号墓地 1 号墳 1 号墓の出土品[Зайцевой, Боковенко 2005]、短剣 C1 類 1 点、刀子 B 類 1 点、銅鏃 A 類・F 類、銅戈 1 点、銅鏡 1 点が出土している。また、結合式の轡（銜 Aa1 類）は有力者の副葬としてのアルジャン 1 号墳に短剣 C1 類と銅鏃 A 類・E 類と組み合う場合がある[Грязнов 1980]。放射性炭素年代測定の結果によってアルジャン 1 号墳の年代は 95.4% の確率で前 822-前 791 年の範囲内であると考えられる。いっぽう、刀子 C 類については不明な点が多いが、柄部の形態から考慮すると、短剣 C1 類と刀子 C1 類には中空で端に装飾の付く錐が差し込まれている点で共通するものがあることから、同一の範疇でとらえる可能性があると考えられる。

次に、現時点では、新疆呼図壁県の石門子 4 号墓[新疆文物考古研究所 2013d]の短剣 A2 類と銅鏃群①-2 の I1 類とが共伴する 1 例のである。複数の型式の一括遺物のみから型式間の時間的關係を判断するのは難しいが、以上の第二章～第三章で検討した青銅器の系譜關係から考慮すると、短剣 A2 類は短剣 A1 類から、刀子 C2 類は刀子 C1 類から変化をしながら、武器の銅鏃群①-2 と結合式の轡（銜 Aa2・銜 Ab1）が加わって青銅器の組み合わせとなる可能性が高い。

また、短剣 C2 類と刀子 D 類を含む出土資料としてあげられるのはトゥバ地域のアルジャン 2 号墳 5 号墓の出土品[Chugunov et.al 2010]、アルジャン 2 号墳の墓主人夫婦の副葬品として短剣 C2 類 2 点、刀子 D 類 4 点が出土している。アルジャン 2 号墳 20 号墓・25 号墓・26 号墓の銅鏃 Cb 類は銅鏃 I2 類・銅鏃 J 類と銅鏃群①-3 となる。また、墓主人夫婦の副葬馬とされる 16 号墓から嵌入式の轡（銜 Ba 型）が出土している。よって、アルジャン 2 号墳には、短剣 C2 類・刀子 D 類は銅鏃群①-3 と嵌入式の轡（銜 Ba 型）と同一の青銅器の組み合わせとなる可能性がある。放射性炭素年代測定の結果によって、この墓葬の年代は前 619～前 608 年、すなわち紀元前 7 世紀末と考えられる。いっぽう、短剣 C2 類はアルタイ山脈のドゲル＝バル（Догээ-Баары）-II 号墓地 15 号墓[Зайцевой 2005]とカザフスタンのヘミク＝ボム（Хемчик-Бом）-I 号墓地 6 号墓[Грач 1980]で刀子 E 類とともに検出されたことがわかる。

なお、短剣 C3 類と刀子 E 類とが共伴する墓葬としては、寧夏の王大戸 1 号墓、同 2 号墓[寧夏文物考古研究所ほか 2016]、倪丁村 2 号墓[寧夏回族自治区博物館 1987]、甘肅の紅岩[劉得禎・許俊臣 1988]、内蒙古の公蘇壕 1 号墓[田広金 1976]、新疆の托背梁 3 号墓[西北大学文保与考古研究中心ほか 2014]などがあげられる。短剣 C3 類と挿入式の轡（銜 Cb 型）とが共伴する墓葬としては、アルタイ山脈のヴェルホ・カルディン-II [福岡市博物館ほか 2005]があげられる。また青銅器の系譜關係から考慮すると、短剣 C2 類と銅鏃群（①-3）と同一の青銅器の組み合わせとなる可能性があり、短剣 C3 類と銅鏃群（①-4）は短剣 C2 類と銅鏃群（①-3）から変化してきたもので、これらは同一の範疇でとらえることができる。

（2）遼西・燕山地域

以上の第二章～第五章で検討した青銅武器・馬具の複数型式の一括遺物と、中原系（燕

国系)などのほかの共伴遺物(中原系・燕国系)をもとにした遺物の相対編年を用いて、青銅武器と馬具の時間的関係を整理すると次のようになる。

まず、複数の型式が共伴する例を調べてみると、一括遺物としてあげられるのは小黒石溝[内蒙古自治区文物考古研究所ほか 2009]、瓦房中[寧城県文化館ほか 1985]、平泉東南溝[河北省博物館ほか 1977]、南山根[遼寧省昭烏達盟文物工作隊ほか 1973]など、遼西を中心とする墓葬である。これらの墓葬には短剣 B 類と刀子 B 類が共伴している。たとえば内蒙古自治区寧城県の小黒石溝 93NDXAⅡ17 号墓・同 98NDXAⅢ5 号墓では、墓葬主人が仰身直肢の姿勢で埋葬されており、短剣 Ba 類と刀子 B 類が莫呼查汗墓地と同じく腰部に置かれていた。遼寧省の南山根 101 号墓からは、短剣 Bb 類・刀子 B 類とともに、西周後期～春秋前期の青銅鼎と青銅戈など検出された。また小黒石溝Ⅱ11 号墓からは結合式の轡(銜 Aa1 型)が検出された。

次に、複数の型式の一括遺物を出土した墓葬としてあげられるのは、北京北部の玉皇廟墓地[北京市文物研究所 2007]と葫芦溝・西梁堖墓地[北京市文物研究所 2010]である。このうち、玉皇廟 18 号墓からは秦式剣、刀子 F1 類、銅鏃群(②-1)(B1 類・Da1 類・Db1 類)、挿入式の轡(銜 Ca1 類)が、同 250 号墓からは短剣 D1 類、刀子 F1 類、銅鏃群(②-1)(D1 類)、挿入式の轡(銜 Ca1 類)、青銅戈、青銅鋸など発見された。これらの青銅戈と青銅鋸が春秋中期～春秋後期の特徴をもっていると考えられる。また短剣 D1 類と刀子 F1 類と共伴した例は玉皇廟 46 号墓・同 51 号墓・同 71 号墓・同 117 号墓および、河北北部の小白陽 12 号墓[張家口市文物事業管理所ほか 1987]があげられる。

なお、短剣 D2 類と刀子 F2 類と共伴した例は玉皇廟 122 号墓・同 124 号墓・同 129 号墓などがあげられる。いっぽう、銅鏃群(②-2)(Da2 類・Db1 類)と挿入式の轡(銜 Ca2)が玉皇廟 151 号墓から発見されている。河北北部では、南シベリアのアキナケス式短剣と考えられる短剣 C3 類が刀子 F2 類、挿入式の轡(銜 Ca2)、青銅鼎、青銅戈とともに北辛堡 1 号墓[河北省文化局文物工作第隊 1966]から検出されている。これらの青銅鼎と青銅戈は、春秋後期～戦国前期すなわち、紀元前 6～前 5 世紀と推定されている。

2. 時期の設定

これまで以上の第二章～第五章で検討してきた青銅武器と馬具の型式を軸に、一括遺物の同時期性や共伴する青銅器の年代観および、放射性炭素年代測定の結果を踏まえ、青銅器の編年体系を 2 時期 4 段階に区分した。

第Ⅰ期はカラス文化の終末期とタガール文化の形成期である。この時期区分は、本節の第1部分で述べたものと同様であるが、さらに説明すると、第Ⅰ期第1段階には、南シベリアのアルジャン1号墳の短剣C1類と銅鏃群(①-1)は遼寧西部の小黒石溝Ⅱ11号墓にも発見された結合式の轡(銜Aa1型)と共伴するものである。放射性炭素年代測定の結果によってアルジャン1号墳の年代は紀元前9世紀頃、共伴する青銅器の年代観によって小黒石溝墓地の年代は西周後期～春秋前期と考えられる。このように、第Ⅰ期第1段階はおおむね紀元前9～前8世紀に遡るといわれる。第Ⅰ期第2段階には、南シベリアにおける青銅器は前段階の諸型式から直接に引き続きながら、燕山地域の青銅器は玉皇廟250号墓で中原系の青銅戈と青銅劔と共伴する。これらの青銅戈と青銅劔は春秋中期の特徴をもっていると考えられる。したがって共伴する青銅器の年代観によって第Ⅰ期第2段階の年代は紀元前7世紀とされる。

第Ⅱ期はタガール文化の拡張期である。第Ⅱ期第1段階には、短剣C2類と刀子D類は南シベリアのアルジャン2号墳において銅鏃群(①-3)と嵌入式の轡(銜Ba型)と共伴する可能性がある。このうち短剣C2類は燕山地域の北辛堡1号墓にも青銅鼎と青銅戈とともに発見された。放射性炭素年代測定の結果によってアルジャン2号墳の年代は紀元前7世紀末頃、共伴する青銅器の年代観によって北辛堡1号墓の年代は戦国前期と考えられる。このように、第Ⅱ期第1段階の絶対年代は紀元前6～前5世紀にあたると考えられる。第Ⅱ期第2段階には、青銅武器と馬具が第1段階の諸型式から引き続き、第1段階の年代よりも第2段階の年代が紀元前4～前3世紀に下がっていると考えられる。

			青銅短剣		青銅刀子			青銅鏃		青銅轡		
			カラス式	アキナケ式	カラス式	タガール式	玉皇廟式	有鏃式	有鏃式	結合式	嵌入式	挿入式
第Ⅰ期	第Ⅰ段階	前9～8世紀	A1 Ba Bb 2	C1 D1	A B C1	2	F1	Aa Ab1 B1 Ca1 Da1 E F	H I1	銜 Aa1 2 Ab1		銜 Ca1
	第Ⅱ段階	前7世紀		2 2		D	E 2	2 2 2 Cb 2 Db1 2 G	2 J	2	銜 Ba Bb	2
第Ⅱ期	第Ⅰ段階	前6～5世紀		3								銜 Cb
	第Ⅱ段階	前4～3世紀										

第7-1図 青銅武器と馬具の編年対応図

第2節 青銅武器と馬具の展開過程

先行研究においては、紀元前1000年頃の物質文化の相似性を草原地帯の遊牧文化の普及と理解するものがあるが、これは個々の地域を専門とする研究者によってそれぞれ行われることが多い。紀元前1000年頃から紀元前3世紀にかけて、草原地帯東部の全体規模の初期騎馬遊牧文化の展開過程を、一つの連続な歴史的視座からの考察は、これまでのところは不足といえる。草原地帯東部の初期騎馬遊牧文化の展開過程を通時的に考察するため、検討の課題は青銅武器と馬具の分布状況の整理があげられる。したがって本節では、第1節で設定した時期と段階の変遷に沿って、青銅武器と馬具の複数の型式の組み合わせの分布状況を通時的に整理したい。

1. 第Ⅰ期—カラス文化の終末期とタガール文化の形成期—

紀元前11～前9世紀には中空柄の銅剣の成立に伴ってミヌシンスク盆地のカラス文化が後半期へ移行していく。こうした中空柄の銅剣に示される後期カラス文化は南シベリアに認められ、その影響も長城地帯、新疆ないしは草原地帯西部の黒海北岸へと及ぶ。本論第Ⅰ期（紀元前9～前7世紀）になると、ミヌシンスク盆地と新疆では後期カラス文化がカラス—タガール文化移行期とされるバイノヴォ期の遺存へと変化してい

く。遼西地域を中心とした長城地帯東部では、長城地帯に広く分布していた後期カラス文化から地域的に分岐した夏家店上層文化が生み出される。それらは本論に検討したカラス文化系譜の青銅器に対応している。草原地帯西部では東方の文化の遺物が流入しており、後期カラス文化の銅剣が先スキタイ時代の銅剣の祖型と考えられている。いっぽう、典型的なタガール文化とされるポドゴルノエ期の遺存は本論第Ⅰ期（紀元前9～前7世紀）のミヌシンスク盆地とトゥバ地域であられる。それは本論に検討するタガール文化系譜の青銅器に対応している。

（1）第1段階（紀元前9～前8世紀）（第7-2図）

まず、第1段階はカラス文化系譜の青銅器が草原地帯東部で盛行する時期である。この時期には、青銅武器のうち、カラス文化の系譜と関連した短剣A、B類および、刀子A類、B類が存在する。そのなかで、短剣A類の数が少ない。短剣A類と刀子A類のすべてが検出された分布域はアルタイと天山地域（新疆和静県莫呼查汗墓地）のみに限られる。刀子A類は新疆南部の崑崙山脈（于田県流水墓地）で検出され、新疆南部がカラス文化系譜の青銅器の限界であると考えられる。東部では、短剣A類が見られないが、バイカル湖に刀子A類の発見が確認できる。いっぽう、短剣B類と刀子B類のすべてが検出された分布域は遼西を中心とした長城地帯東部である。西部では、ミヌシンスク盆地でも刀子B類の存在が知られる。したがって、カラス文化系譜の青銅器の広がりミヌシンスク盆地を境として諸型式の分布の東西差があるといえよう。つまり、ミヌシンスク盆地以西では主として短剣A類と刀子A類を、東では短剣B類と刀子B類を使用されていたという大きな違いがあったと推測されるのである。

次に、第1段階はタガール文化系譜の青銅器が南シベリアで出現する時期である。青銅武器のうち、タガール文化の系譜と関連した短剣C類と刀子C類が存在する。そのなかで、短剣C類と刀子C類のすべてが検出された分布域はミヌシンスク盆地とトゥバ地域のみに限られる。これらの青銅器の型式について、その形態の系譜にカラス文化系譜の青銅器の型式には連続的様相を示さない。

いっぽう、草原地帯東部においては、青銅武器としての短剣と刀子以外に、銅鏃群①-1と結合式の轡（銜Aa1型）の出土例が知られている。銅鏃群①-1の分布をみると、いまままで公開された資料によるかぎり、ミヌシンスク盆地とトゥバ地域といった南シベリアと

新疆に集中し、遼西地域ではまだその例が知られていないという地域的偏在がある。これらの銅鏃群①-1の存在する時期については、フェルガナ盆地のチュスト（Chust）遺跡[Chernykh 1992]と甘肅酒泉の干骨涯遺跡[甘肅省文物考古研究所ほか 2016]の例との比較によって、紀元前 1500 年頃以前に遡る可能性があると考えられる。すなわち、ここで取り扱っている銅鏃群①-1は紀元前 1000 年頃以前から引き続いたものである。いっぽう、結合式の青銅轡（銜 Aa1 型）は南シベリアと遼西地域を含めて草原地帯東部に散在している。その分布の状況をみると、ミヌシンスク盆地とトゥバ地域といった南シベリアと新疆に集中し、遼西地域ではその例が数少なく存在する地域的偏在もある。また、青銅轡の存在する時期については、いままで報告された資料によるかぎり、紀元前 1000 年頃以前の南シベリアではまだその例が知られていない。すなわち、ここで取り扱っている結合式の青銅轡（銜 Aa1 型）は紀元前 1000 年頃から草原地帯東部に現れる。

（2）第 2 段階（紀元前 7 世紀）（第 7-3 図）

第 2 段階には、タガール文化系譜の青銅器は継続して存在しており、多様な青銅武器と馬具が共存する。出土例が少なく、やや不確実であるが、短剣 A 類、C 類、刀子 C 類および、銅鏃群①、結合式の轡という青銅武器と馬具を出土した南シベリアにおいては、その大部分が前段階から変化していることが知られる。

いっぽう、燕山地域においては、独自性をもった青銅武器と馬具の出現がさきに述べた前段階における分布状況（第 7-2 図）と対照的である。すなわち、燕山地域では、短剣 D 類、刀子 F 類、鏃群②、挿入式の轡（銜 Ca1）という青銅武器と馬具の新型式が登場するようである。

これらの青銅武器と馬具は、独自性をもってはいるが、前段階における南シベリアからの形態的要素を受容して成立したものである。たとえば、八字形の鏑部をもった短剣 D 類は第 1 段階の燕山地域には存在していなかった。第 2 段階になると、南シベリアの短剣 C1 類の鏑部を基礎とし、独自性をもった型式が燕山地域において成立した。その以外に、刀子 F1 類は内湾する背部の形態の点で南シベリアの刀子 C 類と一致している。挿入式轡の銜 Ca1 型も結合式轡の銜 Aa1 の鐙形の外環を取り込んで成立したものである。銅鏃群②の銅鏃 B・D 類は有釜鏃という矢柄との接続方式で銅鏃群①の銅鏃 A 類と一致している。しかしながら、これらの青銅器の型式について、その形態の系譜に南シベリアの

青銅器の型式とは連続的な様相を示さない。これらの青銅器の分布域も燕山地域を中心とした長城地帯東部にほぼ限定されており、南シベリアの青銅器の分布の位置と異なっている。

2. 第Ⅱ期—タガール文化の拡張期—

本論第Ⅱ期（紀元前6～前3世紀）には典型的な心葉形鏑の銅剣の成立に伴って前期タガール文化がポドゴルノエ期からサラガシュ期の遺存を代表とした後半期へ変化していく。こうした心葉形鏑の銅剣に示される後期タガール文化はまず南シベリアに認められ、さらにそれは内蒙古中南部を中心とする長城地帯、新疆ないしは草原地帯西部の黒海北岸へと影響を及ぼしている。内蒙古中南部ではいわゆるオルドス式青銅器文化がサラガシュ期のタガール文化と同じ範疇の青銅器文化と考えられる〔宮本一夫 2016b〕。これらは本論第Ⅱ期（紀元前6～前3世紀）のタガール文化系譜の青銅器に対応している。また草原地帯全体を横断する青銅器文化として草原地帯東部の後期タガール文化の要素は中期スキタイ時代の黒海北岸にも検出される。いっぽう、燕山地域を中心とした長城地帯では紀元前7世紀から南シベリアのタガール文化の要素を受容した玉皇廟文化が生み出される。これは本論に検討した玉皇廟文化系譜の青銅器に対応している。また、紀元前6世紀後半には春秋戦国時代の燕国の青銅器が燕山地域を越えて遼西に流入し始める。紀元前4世紀になると遼西では在地的な青銅器文化は消え、燕国の戦国時代の土器を副葬する典型的な燕国墓が出現する〔石川岳彦 2011, 2017〕。このような燕国の東方の進出は玉皇廟文化系譜の青銅器が長城地帯で拡散して終焉する背景となっている。

（1）第1段階（紀元前6～前5世紀）（第7—4図）

第1段階には、カラスク文化系譜の青銅器はこの時期に消失しており、タガール文化系譜の青銅器は南シベリアから拡散している。南シベリアの短剣C2類は前段階の諸型式から継続しながら、刀子D・E類は刀子C類を入れ替えて南シベリアの刀子の主体となり、これらの青銅器の型式の分布は南シベリアの青銅器の拡散の様相を示している。たとえば、短剣C類と刀子E類がすべて検出された地域は南シベリアと長城地帯がある。第Ⅰ期第2段階にはこれらの青銅器の分布域が南シベリアに限られ、第Ⅱ期第1段階に至ると長城地帯でもこれらの青銅器が検出される。南シベリアに生まれた青銅武器と馬具は第Ⅱ期第

1 段階から長城地帯へと広がったことが明らかになった。詳しく南シベリア～新疆から観察すると、第Ⅰ期第2段階に短剣 C1 類と刀子 C 類の分布域はミヌシンスク～トゥバのみに限られる。第Ⅱ期第1段階になると短剣 C2 類と刀子 E 類の分布域はミヌシンスク盆地を越えてアルタイにまで拡散する。しかし、青銅器群全体としては、アルタイを越えて新疆の天山に広がることはない。長城地帯においては、短剣 C 類と刀子 E 類がすべて発見される地域はおもに内蒙古中南部と寧夏南部がある。第Ⅱ期第1段階には短剣 C2 類と刀子 E 類が内蒙古中南部を中心として分布する。

内蒙古中南部の出土例がきわめて少ないから、第Ⅱ期第1段階になると、銅鏃群①-3の分布はミヌシンスク盆地とトゥバ地域といった南シベリアと新疆に集中し、前段階と同様な分布状況を呈している。しかし、第Ⅰ期第2段階と対照的なのは嵌入式の轡の登場である。すなわち、第Ⅱ期第1段階の嵌入式の轡は結合式の轡と入れ替わってミヌシンスク盆地とトゥバ地域といった南シベリアと新疆で盛行する。

いっぽう、燕山地域の青銅器はこの時期に継続して存在しており、燕山地域から西へ拡散している。第Ⅱ期第1段階における燕山地域の刀子 F2 類は前段階の刀子 F1 類から直接に引き続いたものであり、その分布の状況は燕山地域の青銅器の拡散を示すことができる。第Ⅰ期第2段階には刀子 F1 類が燕山地域のみに限られて出現し、第Ⅱ期第1段階になると刀子 F2 類の分布域は燕山地域から内蒙古中南部に広がった。しかしながら、その分布域が内蒙古中南部を越えて西に広がることはない。また、燕山地域の青銅器の拡散を示す指標としては挿入式の轡（銜 Ca2 型）もあげられる。第Ⅰ期第1段階には燕山地域の挿入式の轡（銜 Ca1 型）の分布域が北京北部と河北北部といった燕山地域に限られ（第7-3図）、第Ⅱ期第1段階になると前段階に発見されなかった寧夏と甘肅東部といった内蒙古中南部以西にもこれらの挿入式の轡（銜 Ca2 型）が検出された。燕山地域に生まれた挿入式の轡はこの時期に燕山地域から西へと広がったことが明らかになった。すなわち、燕山地域の青銅器は、第Ⅱ期第1段階に長城地帯を沿て内蒙古中南部にまで及んでいる。こうした第Ⅱ期第1段階の変化は春秋戦国時代の燕国の遺物の分布状況と合致している。この時期には燕国の青銅礼器と副葬土器が燕山地域を越えて遼西に流入し始め、代表的な遺跡として遼寧省東大杖子遺跡、遼寧省孤山子遺跡などをあげられる〔宮本一夫 2000, 石川岳彦 2016〕。また燕山地域では燕国の遺物が流入する遺跡として河北省北辛堡墓1号墓・2号墓をあげることができる。北辛堡墓1号墓には短剣 C 類と共伴する青銅鼎、壺、缶、戈などがあり、これらは燕国や周辺地域の特徴を示している。第Ⅱ期第1段階に

は燕国の遺物の流入に伴い、燕山地域の玉皇廟文化系譜の青銅器が終焉に向かって燕国と一体化しているといえよう。

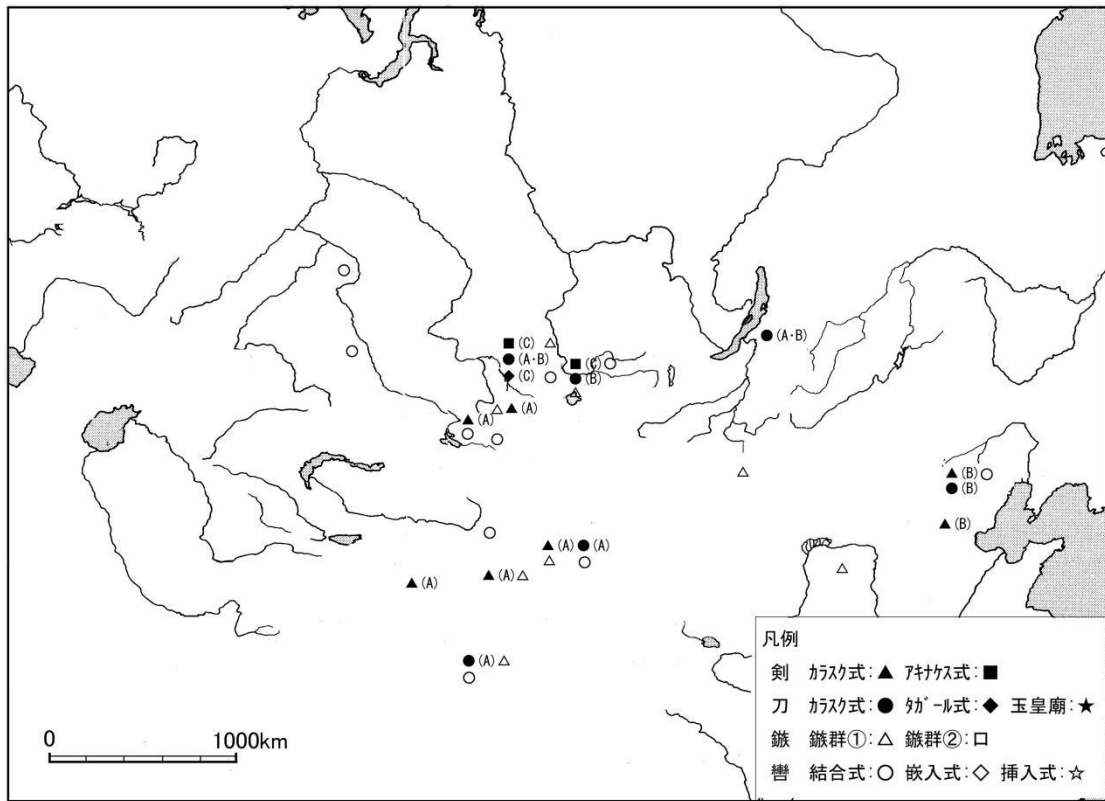
（２）第２段階（紀元前４～前３世紀）（第７－５図）

第２段階には、南シベリアで主流となるのは、依然としてタガール文化系譜の青銅器であるが、前段階の刀子 E 類も残しつつ、新たな型式の短剣 C3 類が中心となっている。これらの青銅器の型式の分布は南シベリアの青銅器の拡散を示している。短剣 C 類と刀子 E 類がすべて検出された地域は南シベリアと長城地帯がある。南シベリアにおいては、短剣 C3 類と刀子 E 類の分布がアルタイを越えて南に広がることはないが、新疆の東部でも発見された。長城地帯においては、その分布域は内蒙古中南部と寧夏南部に集中する。すなわち、南シベリアの青銅器はアルタイと新疆の東部に沿てミヌシンスク盆地とトゥバ地域から内蒙古中南部と寧夏南部を中心とした長城地帯へと広がっていることがわかる。

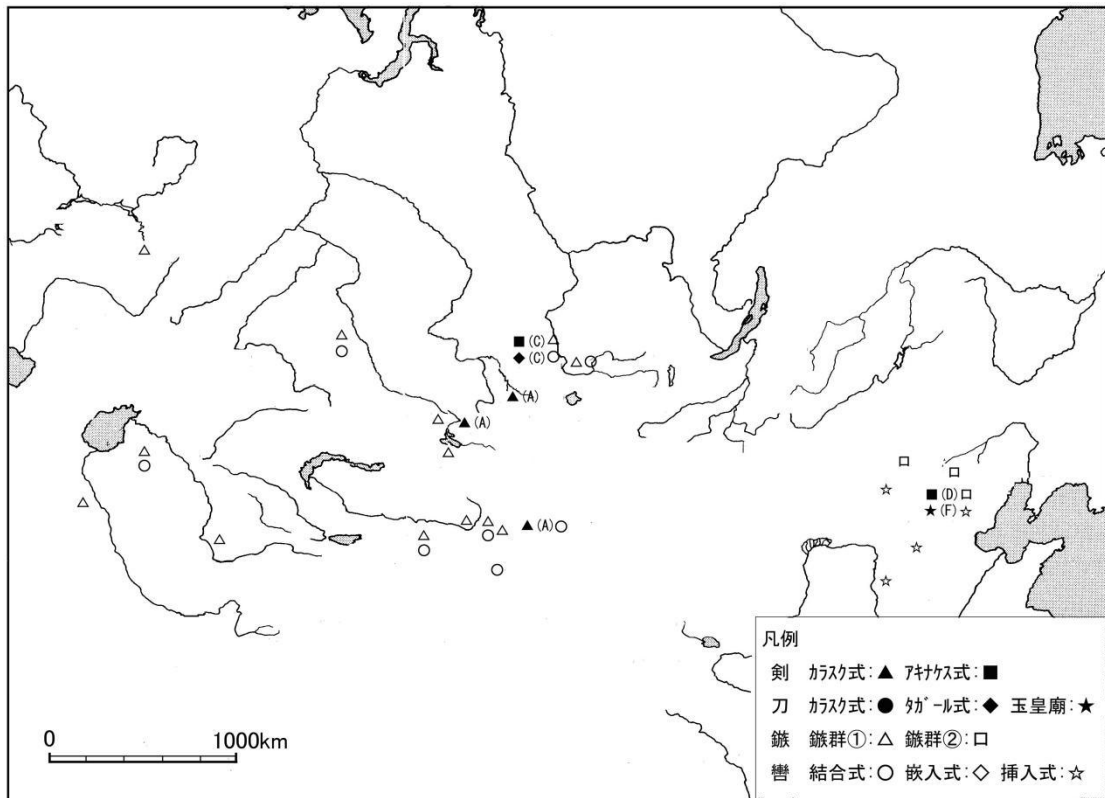
第Ⅱ期第１段階に比べ、青銅鏃の型式が減少するが、銅鏃群①-4 の分布は依然としてミヌシンスク盆地とトゥバ地域といった南シベリアと新疆に集中し、前段階と同様な分布の状況を呈している。

いっぽう、第Ⅱ期第２段階に至ると、銅鏃群②と挿入式の轡（銜 Cb 型）の分布の状況も燕山地域の青銅器の拡散が証明できる。銅鏃群②について、鏃 Db2 類は第Ⅱ期第１段階の鏃 Db1 類から直接出現し、その分布域は燕山地域から内蒙古中南部を越えて寧夏南部と甘肅東部に広がった。挿入式の轡（銜 Cb 型）について、銜 Cb 型は銜 Ca 型と銜と鏃の連結方式の点で一致している。第Ⅱ期第１段階に銜 Ca 型の分布域は燕山地域に限られ、第２段階になると銜 Cb 型は内蒙古中南部を越えて寧夏南部と甘肅東部に現れ、さらに南シベリアと新疆へ広がった。すなわち、燕山地域の青銅器は、第Ⅱ期第２段階に寧夏南部と甘肅東部といった内蒙古中南部以西と南シベリアにまで拡散する。このような第Ⅱ期第２段階の変化は、紀元前４世紀から燕国墓は燕山地域を越えて遼西で出現する現象と一致している。こうした戦国時代の燕国と全く同じ器種組成の副葬土器が出土する燕国墓は個別的に燕国の青銅礼器と土器が副葬される紀元前６～前５世紀の状況と異なり、紀元前４世紀から在地の遼寧式青銅短剣文化の消失に伴って遼西で出現する〔石川岳彦 2016〕。いっぽう、第Ⅱ期第２段階には玉皇廟文化系譜の青銅器は燕山地域で消え、そして燕山地域から内蒙古中南部を越えて寧夏南部と甘肅南部に広がり、かわって燕国系の刀子は燕山

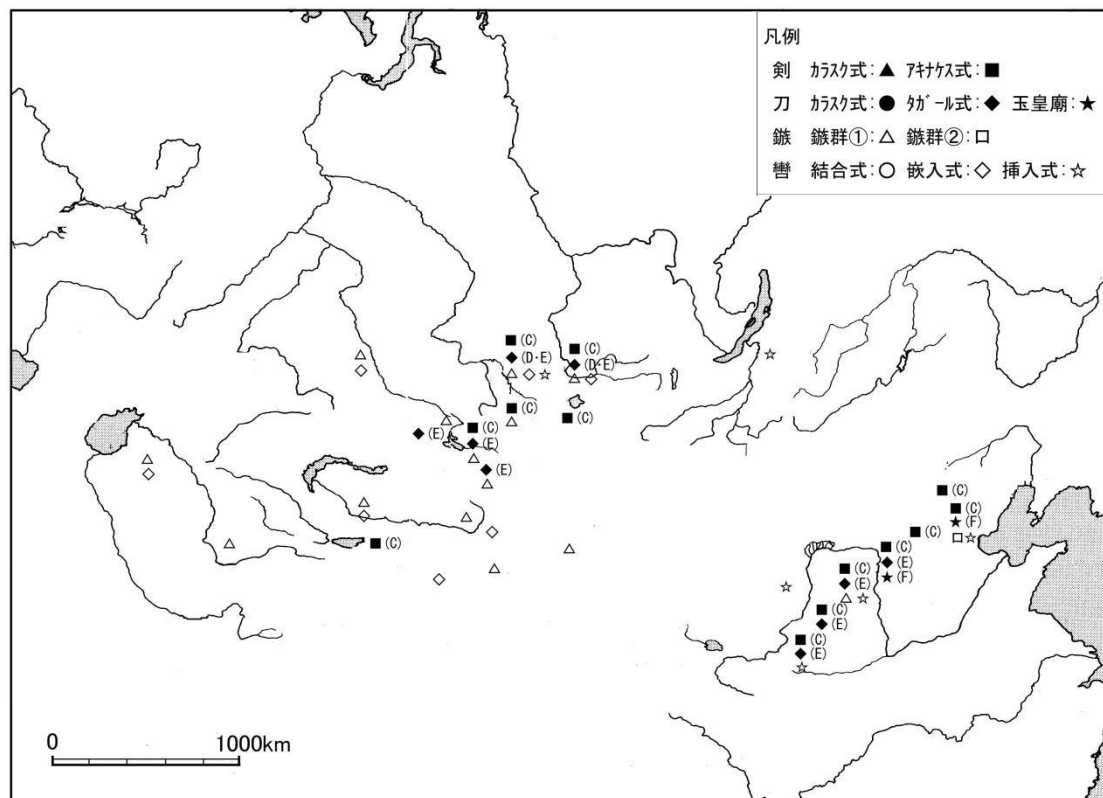
地域で出現する。したがって紀元前4世紀以降の燕国墓の分布域の拡大は第Ⅱ期第2段階の燕山地域の青銅器が燕山地域から内蒙古中南部以西へと拡散する要因となる可能性がある。



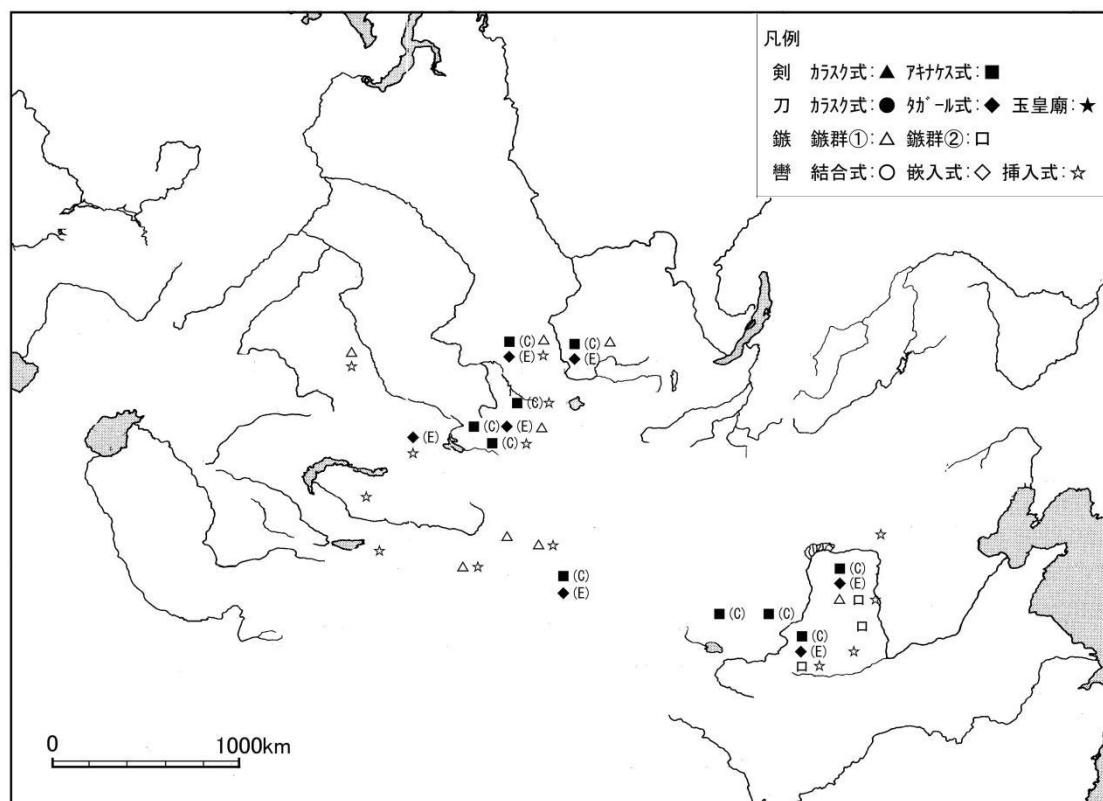
第7-2図 青銅武器と馬具の分布状況（第I期第1段階）



第7-3図 青銅武器と馬具の分布状況（第I期第2段階）



第7-4図 青銅武器と馬具の分布状況（第Ⅱ期第1段階）



第7-5図 青銅武器と馬具の分布状況（第Ⅱ期第2段階）

第3節 青銅武器と馬具にみる地域間関係

先行研究においては、草原地帯東部の地域間関係に関わる問題の検討はあるが、青銅武器と馬具の形態を体系的にとらえて本格的な型式学的と機能的な考察を行うことは、課題として残されている。この課題を解決するため、本章の第1節では、第二章～第五章で検討した青銅武器と馬具の型式・編年と分布状況を踏まえつつ、墓葬単位の一括遺物と放射性炭素年代測定の結果によって青銅武器と馬具の時間的關係を詳しく把握した。本章の第2節では、第1節で設定した青銅武器と馬具の展開の時間軸に沿って、青銅器の組み合わせの分布状況を整理した。本節では、草原地帯東部の青銅武器と馬具の展開過程を、青銅武器と馬具と関連した、多様な考古学的現象をみながら、詳しくみてきた。また、本論の第一章で指摘したように、草原地帯東部の物質資料の拡散という問題をめぐって、先行研究においては、物質資料が生成し展開する経済的、社会的な変化を追求する視点は乏しかった。よって本節では、青銅武器と馬具の階層性の検討を加味しながら、青銅器の副葬と墓葬構造を整理することによって、どのような背景で地域間の関係が具体的に展開しているかを読み取りたい。

1. 第I期（紀元前9～前7世紀）

第1段階は、本章の第2節で述べたように、ミヌシンスク盆地以西では短剣A類と刀子A類を、東では短剣B類と刀子B類を使用されているという大きな違いがあったことをまず指摘しておきたい。また遼西地域では結合式の轡（銜Aa1型）の出土数が少ないが、ミヌシンスク盆地以西ではその出土数が多く、銅鏃群①がミヌシンスク盆地以西に集中するという地域的偏在もある。次の第2段階になると、燕山地域では、短剣D類、刀子F類、鏃群②、挿入式の轡（銜Ca1型）という青銅武器と馬具の新型式が登場する。すると、この時期には草原地帯東部ではミヌシンスク盆地を挟んで青銅武器と馬具の諸型式の東西差が存在するといえるだろう。

ひとつの考え方として、こうした文化的な東西差は墓葬構造と密接に関連したと考えられる[松本圭太 2018]。墓葬構造については、まずツヴィクトロフ氏によれば、板石墓はモンゴル高原の東部を中心に、ヘレクスールはモンゴル高原の西部を中心に分布し、両者がモンゴル高原中央部で交錯した分布をなすという[Цыбиктаров 1998]。この枠組みの中においては、板石墓がモンゴル高原の東部から中部にかけて広がり、ヘレクスールがモン

ゴル高原の西部から中部にかけて広がり、両者を相対して拡散とする[Cybiktarov 2003]。また宮本一夫氏によれば、モンゴル高原西北部を中心として分布するヘレクスール文化墓葬Ⅳ類（四隅立石をもった方形の積石塚）は、紀元前9～前8世紀においてミヌシンスクのタガル文化バイノヴォ期に連続するいっぽうで、モンゴル高原西部から東部へ広がりながら、板石墓文化墓葬Ⅱa式（典型的板石墓）に変化していった[宮本一夫 2016a、2018]。なお、松本圭太氏によれば、こうした文化的な東西差を示している墓葬構造は紀元前1500年頃からの青銅器様式（型式群）の変化の背景として、鹿石や動物紋の動態と軌を一にするものと考えられる[松本圭太 2018]。

このような墓葬構造の東西差を青銅器の諸型式の変化の背景とする研究と異なり、ここでは、特定型式の青銅武器と馬具の副葬の組成や意味の違いを注目し、墓葬構造という文化的な東西差の枠組みのなかで、各地域に青銅器の階層性を検討したい。

（1）南シベリア・新疆

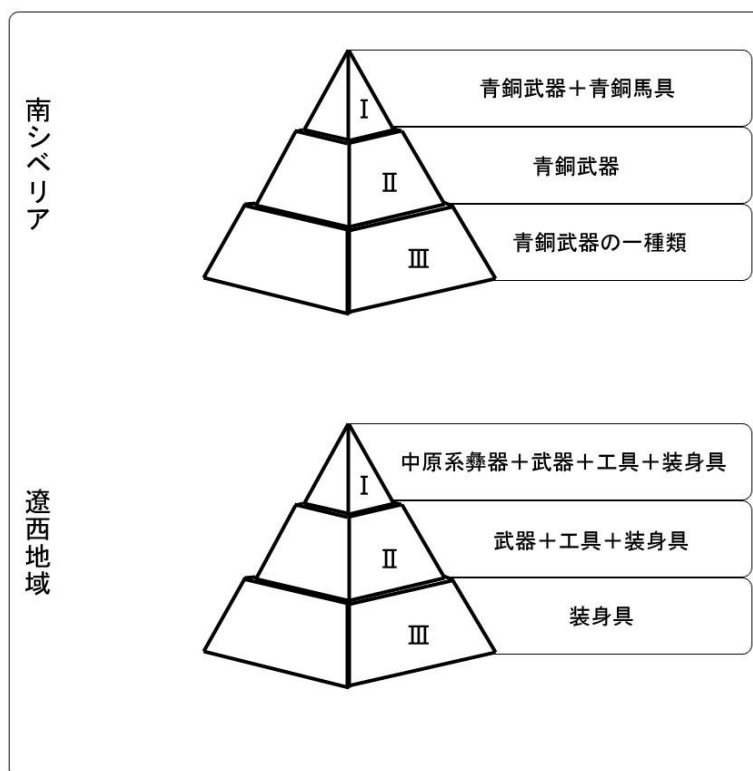
南シベリアでは第Ⅰ期第1段階に相当する墓葬はあまり多く調査されていないが、そのような状況のなかで盗掘されてしまったトゥバ地域のアルジャン1号墳は青銅武器と馬具の副葬に関する重要な情報を与えてくれた。アルジャン1号墳は、直径が120mである円形の積石塚の墳丘と、その周りを囲む小さい円形の石堆からなっている。石積みの下には地上に丸太で組まれた構築物がある。墓主人と思われる中央の墓室から放射状に取り囲む空間には大量の馬が副葬されていた。墓葬のまわりには小さい円状の石堆があり、これらの石積から犠牲として羊、牛、馬の骨が発見された。中央の墓室の遺物は、短剣C1類3点、銅鏃A類5点、銅鏃E類4点、銅戈1点および、結合式の轡などが発見されている[Грязнов 1980]。いままで公開された資料によるかぎり、きわめて少ないが、トゥバでは第Ⅰ期第1段階にあたる墓葬はティギル＝タイダゼン（Тигир Тайджен）-Ⅳ号墓地1号墳1号墓もある。遺物は短剣C1類1点、刀子B類1点、銅鏃A類6点、銅鏃F類4点、銅戈1点、銅鏡1点が発見されている[Зайцевой, Боковенко 2005]。いっぽう、新疆では、第Ⅰ期第1段階を代表する墓葬は和静県の莫呼査汗墓地があげられる[新疆維吾爾自治区文物考古研究所 2016]。莫呼査汗墓地の墓葬は竪穴土坑とそのまわりを囲む馬鐙形の石列による囲みからなるものである。多くの竪穴土坑は長さが1.5mぐらいのものである。遺物は、101号墓からは短剣A類1点、刀子A類1点、土器1点が発見されている。54

号墓からは刀子 A 類 1 点、結合式の轡（銜 3 点、鑣 1 点）、土器 1 点が発見されている。46 号墓からは結合式の轡（銜 1 点、鑣 1 点）が発見されている。しかし、多くの墓葬からは刀子 A 類 1 点と土器 1 点のみが出土している。これらを整理すると、まず馬具とともに短剣、銅鏃などの青銅武器が共伴している例として、アルジャン 1 号墓が知られ、その墓葬主人のランクが最も高いことが想定される。また、ほかの例をみると、多様な青銅武器と馬具が共伴することがあるが、武器と馬具の種類には差異がみられる（第 7-6 図）。やや不確実であるが、階層の分化が想定できる。

（2）遼西地域

遼西地域では、青銅武器と馬具が出土する墓葬群として内蒙古寧城県の小黑石溝遺跡があげられる[内蒙古自治区文物考古研究所ほか 2009]。これらの墓葬の年代は第 I 期第 1 段階に属している。このうち、8501 号墓は堅穴土坑墓であり、こうした堅穴土坑が小石で囲まれている。残念なのは盗掘されてしまったから詳しい状況は不明瞭でなる。8501 号墓からは、鼎・簋・壺などの中原系青銅礼器、中原系青銅武器に関連した青銅戈・青銅鏃、遼寧式短剣、刀子 B 類、空首斧などの工具、虎形の帯飾板などの装身具が発見されている。85NDXAIM2 号墓は堅穴土坑墓であり、墓葬の中央に木棺が置かれた。遺物は、遼寧式短剣、刀子 B 類、青銅戈、青銅斧、および帯飾板、連珠形装身具などが検出されている。85NDXAIM2 号墓には中原系青銅礼器がみられない。また、ほかの墓葬からみると、85NDXAIM5 号墓・85NDXAIM6 号墓などの多くの墓葬には銅釦のみが発見されている。青銅器の副葬の組成を具体的にみると、第 1 段階に青銅武器と馬具をもつ墓葬は、先述した南シベリアと異なり、中原系の青銅礼器も確認され、最も高いランクとして想定される（第 7-6 図）。これらの中原系の青銅礼器が少数の墓葬に集中する現象は燕山以南の地域との交流や略奪品の可能性を示している[宮本一夫 2000]。文献記載には北方の勢力が春秋中期の前に華北地域の燕国と斉国をしばしば攻撃することが認められる。これは遼西が中原地域と拮抗した軍事的な接触と交流を示しているといえる。

したがって青銅武器、馬具、墓葬構造などの分布状況から地域間関係の具体像を整理すると、第 I 期の草原地帯東部では、これらの物質文化の要素が文化的な東西差を示している。こうした文化的な東西差は、遼西地域を中心とした長城地帯は、南シベリアと異なり、その最も高い階層が中原地域と接触する結果と考えられるだろう。



第7-6図 紀元前9～前7世紀における墓葬の中の青銅器組成と階層性

2. 第Ⅱ期第1段階（紀元前6～前5世紀）－東漸説の再検討－

第Ⅰ期とは分布の様相が異なり、第Ⅱ期第1段階になると、前段階に分布域が南シベリアのみに限られた短剣C類と刀子E類は内蒙古中南部以西を中心とした長城地帯でも認められる。これらの青銅器の分布の変化は南シベリアの青銅器が長城地帯へと広がったことを示している。先行研究においてもこの西から東への文化の伝播が注目された。すなわち、向い合った鳥頭形の装飾が付けられる青銅短剣と鶴嘴形の青銅斧など、スキタイ文化要素は南シベリアから中国北方の太行山一線へ影響を与えていったことを指摘した[楊建華・邵会秋 2015, 楊建華・邵会秋・潘玲 2016]。しかしながら、現時点では、類似する形態の特徴によって文化要素の拡散の方向が単純に指摘される段階にとどまるといえる。これらの論文のなかでは青銅器全体の形態を体系的にとらえて本格的な型式学的な考察を行うことは課題として残されている。以上の章節では本論の第二章～第五章で行った青銅武器と馬具の分類・編年の結果を踏まえつつ、青銅武器と馬具の展開の時間軸に沿って、青銅武器と馬具の複数の型式と組み合わせの分布をより詳しい視点で通時的に検討した。ここでは、広い範囲の地域間関係を数少ない資料で検討するのは容易ではないが、長城地

帯に南シベリアの青銅武器と馬具が拡散することの意味は、各地域における青銅武器と馬具の副葬の組成と墓葬構造を検討することから始めなければならないだろう。以下の2地域が考えられる。

(1) 南シベリア・新疆

南シベリアにおいては、長城地帯まで広がる短剣 C 類と刀子 E 類は木槨墓から出土したものである。木槨墓の動態について、紀元前 9 ～前 8 世紀には木槨墓はトゥバ地域に限定され、紀元前 6 ～前 5 世紀に至るとアルタイ山脈に沿って新疆東部とモンゴル高原西部へと広がることがわかる[高浜秀 2003, 宮本一夫 2018]。しかしながら、新疆東部を越えて南へ内蒙古中南部と寧夏南部にまで広がる傾向はみられない。副葬品の出土状況が明確にできる木槨墓がきわめて少ないが、木槨墓の規模（墳丘の規模、墓室の大小）は個人の権力の誇示として社会内部の階層差を示すと考えられる[Takahama et al.2006,Hayashi 2010]。

そのうち、大型の木槨墓の事例はトゥバ地域のアルジャン 2 号墳があげられる。アルジャン 2 号墳は平面円形の積石塚の墳丘とその周りを囲む小さい円形の石堆からなっている。墳丘は直径が 80m、高さが 2m ある。墳丘の下には堅穴墓壙と堅穴の副葬馬壙がある。そのうち西北部の 5 号墓は墓主人夫婦を葬る墓葬である。墓主人夫婦が左横臥屈肢の姿勢で丸太を井桁に組んだ木槨の床板の上に葬られた。2 号墓には墓主人のための金製装飾付の馬具が埋葬された。墳丘の周りの小石堆は墳丘の北と西北に集中しており、三重か四重になってめぐっており、200 基以上ある。小石堆の中には獣骨が埋置されている。

副葬品に関しても、短剣 C 類と刀子 E 類を出土する墓葬には特徴的な傾向が認められる。まず、墓主人夫婦を葬るアルジャン 2 号墳 5 号墓には大量の金製品が埋葬された。馬形装飾を飾った冠飾り、衣服に付けた細かな獣形飾り、墓主人夫婦の右側の腰に吊る金製の短剣 C 類と刀子 D 類、男性墓主人の左側の腰に吊る金製の装飾を付けた有機物製の鏃が入ったゴリュトスがある。

小型の木槨墓の事例はトゥバ地域のサゴル＝バゼ（Саглы-Бажи）墓葬群があげられる。16 基の墓葬が発掘調査され、ほとんど直径 10m 以下の小型墓葬であり、木槨墓を伴い単純な堅穴土坑墓もあることが知られている。この 16 基を武器（短剣・刀子・銅鏃・銅戈）の有無によって分類すると、武器のすべてを出土している墓葬が 2 基、短剣あるいは銅鏃を欠くものが 2 基、短剣と刀子あるいは銅鏃と銅戈を欠くものが 2 基、一種類のみを出土

しているものが3基、何も出土しない墓葬が4基がある。

このうち、サゴル＝バゼ（Саглы-Бажи）-II号墓群8号墓葬には北向きの成年男性四人を合葬した。左からI号人骨の年齢が20～25歳、II号人骨の年齢が50～55歳、III号人骨の年齢が約50歳、IV号人骨の年齢が不明である。8号墓葬には土器と有機物製の辻金具のほか、大量の青銅製武器が副葬された。右腰に吊る青銅製の短剣C類と刀子D類、身体の左側に置いた鶴嘴状の銅戈、多種類の銅鏃の束が入ったゴリュトスがある。

武器（短剣・刀子・銅鏃）の型式から判断すると、サゴル＝バゼ（Саглы-Бажи）-II号墓群8号墓葬はアルジャン2号墳5号墓と時期差がないことがわかった。したがって、サゴル＝バゼ（Саглы-Бажи）-II号墓群8号墓葬から金製品を出土していないため、サゴル＝バゼ（Саглы-Бажи）-II号墓群8号墓葬の副葬品はアルジャン2号墳5号墓葬と階層的な傾向を反映していることがたしかであろう。すなわち、紀元前6～前3世紀には、高位の階層のみに限定される武器が現れた。サゴル＝バゼ（Саглы-Бажи）-II号墓群8号墓葬の青銅製の武器よりも、アルジャン2号墳5号墓の金製の武器は宝器・礼儀的色彩が強いシンボリックな性格をもった可能性が高い。武器と馬具の材質の多様性と量の多さから階層化が前段階より深化されたと想定される。

社会的階層差を反映できる指標として、ハザノフ（Хазанов）氏は墓葬規模と副葬品の多寡によってウラルを中心としたアルタイ山脈以西の墓葬を四つのグループに分けた。第一は、金製の武器と馬具をもった大型の墓葬であり、「王墓」に位置付けられる。第二は、青銅製の武器と馬具をもった中型の「騎兵墓」である。第三は、青銅製の武器のみをもった小型の「歩兵墓」である。第四は、副葬品を持たない「殉葬墓」である[Хазанов 1975]。本節では、ハザノフ氏の観点を念頭におきながら、遺物の組成によって、南シベリアの青銅武器と馬具の位置について改めて詳しく検討することにした。

前述のアルジャン2号墳、サゴル＝バゼ墓葬群の資料によって、墓葬を同じく四つのグループに分けることができる。第一は、黄金の武器（短剣C類・刀子D類・銅鏃群①-3）と、嵌入式の青銅轡と馬の副葬をもつものである。第二は、青銅の武器（短剣C類・刀子E類・銅鏃群①-3など）をもつものである。第三は、青銅の武器の一種類を持ち、第四は武器を全く持たないものである。第7-7図はこのような武器と馬具の群を概念化したものである。副葬品の出土状況を明確できる情報があまり多くないが、このような区分にみられる青銅器は、おおむねこの時期の墓葬の一般的な在り方を表現しているものと考えられる。この結果を、厳密に社会内部の階層差に対応させることはあまり適当ではないが、

その概略を推察することは可能であろう。

(2) 内蒙古中南部

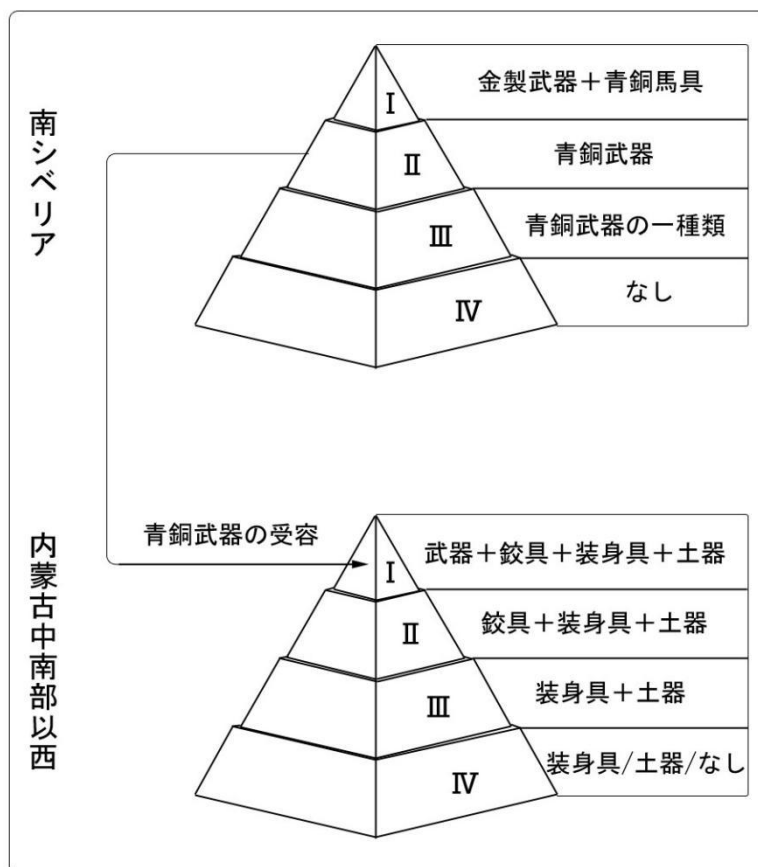
まず、墓葬構造では、南シベリアが竪穴木槨墓を主要とするのに対し、燕山山脈から内蒙古中南部にかけては竪穴土壙墓があり、寧夏南部・甘肅東部には竪穴偏洞墓であり、大きな違いが存在している。その青銅器の組成では、南シベリアに対して、内蒙古中南部から寧夏南部にかけては銅鏃群②や挿入式の轡、中原系の車具をもっている。墓葬構造と青銅器の組成から南シベリア、内蒙古中南部以西の長城地帯は地域的に異なっているということがいえよう。

また、短剣 C 類と刀子 E 類をもった墓葬が毛慶溝墓地の階層的な高位に位置づけられていることがわかった。宮本一夫氏の考え方によれば、資料的に豊富である涼城地域の毛慶溝墓地の早期段階（1・2 段階＝紀元前 6 世紀～前 5 世紀）では、副葬品の構成から武器（短剣 C 類を含む）・鉸具・装身具・土器/武器（短剣 C 類を含む）・装身具・土器を第Ⅰランク、鉸具・装身具・土器を第Ⅱランク、装身具・土器を第Ⅲランク、装身具のみ/土器のみ/副葬品なしを第Ⅳランクとした階層化の構造が可能であると考えられる[宮本一夫 1999]。短剣 C 類と刀子 E 類を出土する墓葬には特徴的な傾向が認められる。

しかしながら、毛慶溝墓地では短剣 C 類を出土した墓葬の数量が少なくないことから、高位の階層は決して王墓のような階層上位者ではなく、小集団の有力者的存在である可能性が高いと指摘される[宮本一夫 1999]。このような階層的高位に位置する墓葬の数量が少なくないことは『史記』卷一一〇匈奴列伝などの記載で「聚者百余戎」、「然莫能相一」に一致している。

ここでは、草原地帯全体の社会的階層差を念頭に置きながら、内蒙古中南部以西の長城地帯では、青銅短剣 C 類をもった小集団が南シベリアの王墓（アルジャン 2 号墳など）よりも階層的低位に位置づけられるだろう。このように、短剣 C 類と刀子 E 類を媒介として、王墓の分布中心であった南シベリアから内蒙古中南部以西の長城地帯にかけては広い範囲の地域間関係が形成した可能性がある。すなわち、地域集団の高い階層間の青銅器分配を起因として青銅短剣と刀子が拡散することにより、広域の範囲で地域間関係が形成される。しかしながら、広い範囲の地域間関係が形成されたものの、それは青銅武器の拡散によって統合された地域間のゆるやかな関係であり、墓葬構造からみると各地域の地域

的特質はそのまま維持されたと考えられる。



第7-7図 紀元前6～前5世紀における墓葬の中の青銅器組成と階層性

3. 第Ⅱ期第2段階（紀元前4～前3世紀）－西漸説の再検討－

燕山地域で出土した青銅武器と馬具は第Ⅱ期第2段階に衰退しているが、銅鏃群②の鏃 Db 類と挿入式の轡（銜 Cb 型）はこの時期に存続し、内蒙古中南部以西で発見されている。南シベリアにおいても挿入式の轡（銜 Cb 型）が多く検出されていることが知られる。これらの青銅武器と馬具の分布状況の変化は燕山地域の青銅器の拡散を示している。先行研究においても東から西への文化の伝播もみられる。前7世紀から燕山地域に生まれる青銅器（鳥形鉸具・虎形装身具）は陝西省北部でも出土（採集）されたことから、燕山地域から渭水流域へと伝わった方向性も明確にされた[八木聡 2015]。青銅鍔の拡散過程は不明な点が多いが、平面形が円形となる青銅鍔は、前7世紀以降に渭水流域から燕山地域へ

広がりながら[八木聡 2015]、前 5 ～前 4 世紀に至ると新疆の東部を経由してミヌシンスク盆地で出現したことが明確である[郭物 1999]。帯飾板の拡散過程について、宮本一夫氏の詳細な検討によれば、前 6 ～前 5 世紀に内蒙古中南部に生まれ、前 5 世紀から寧夏南部、さらに蒙古高原へと拡散することが指摘された[宮本一夫 2014]。これらの現象を整理すると、平面形が円形を呈する青銅鍔と青銅製の帯飾板などの拡散過程は第Ⅱ期第 2 段階に鍔 Db 類と挿入式の轡（銜 Cb 型）が内蒙古中南部を越えて寧夏南部と甘肅東部さらにミヌシンスクへと広がる動態と軌を一にしている。

しかしながら、先行研究においては、このように多様な物質文化の伝播の方向性が明確にされたが、物質文化が生成し展開する様相と意味を具体的に追求する視点は乏しかった。燕山地域の鍔 Db 類と挿入式の轡（銜 Cb 型）は、東から西への文化の伝播の枠組みのなかで、第Ⅱ期から内蒙古中南部以西に出現することは、この地域における青銅鍔と青銅轡の拡散の意味を解明しなければならない。

内蒙古中南部以西では、短剣 C 類と刀子 E 類をもった墓葬が階層的な高位に位置づけられることがわかったが、鍔 Db 類と挿入式の轡（銜 Cb 型）が有力者の権威を示す器物と想定されることがみとめられない。涼城地域の毛慶溝墓地では、第Ⅱ期第 2 段階に相当する資料がきわめて少ないが、前段階には副葬の青銅器の組成から武器（短剣）・鉸具・装身具を最も高いランク、ほかの短剣を欠く青銅器の組成をやや低いランクとした階層化の構造が想定された[宮本一夫 1999]。鍔 Db 類と挿入式の轡（銜 Cb 型）を出土する墓葬には特徴的な傾向がみとめられない。甘肅東部の馬家塬墓地では、鍔 Db 類と挿入式の轡（銜 Cb 型）をすべて出土した墓葬として 1 号墓があげられる。1 号墓からは、青銅製の鍔 Db 類 8 点、鉄製の挿入式の轡（銜 Cb 型）1 点を出土したが、儀礼的車両、青銅礼器、青銅戈など、多数を占める中原系の器物は検出されたことが知られる[甘肅省文物考古研究所ほか 2008]。この時期の馬家塬墓地には礼儀的車両と青銅礼器を階層化の必要な器物として中原社会の秩序を積極的に受容したことが認められる。したがって第Ⅱ期第 2 段階の内蒙古中南部以西では、燕山地域の鍔 Db 類と挿入式の轡は墓葬に副葬されたが、通常の道具として墓葬の階層性を示す器物と想定することができない。鍔 Db 類と挿入式の轡（銜 Cb 型）の拡散は単なる技術が東から西へと広がったことであるにすぎない。

第4節 初期騎馬遊牧文化の展開の要因

本章の第2節では、第1節で設定した複数の型式の時期に沿って、草原地帯東部の青銅武器と馬具の展開過程を検討した。紀元前6～前3世紀における青銅武器と馬具の分布様相は、紀元前9～前7世紀と異なり、南シベリアの短剣と刀子は内蒙古中南部以西へと広がり、燕山地域の鏃と轡は内蒙古中南部以西、南シベリアへと広がったことを示している。本章の第3節では、墓葬単位の青銅器の組成から、南シベリアの階層化は紀元前9～前8世紀より深化され、南シベリアの短剣と刀子は階層化の必要な器物として高い階層の間に内蒙古中南部以西へも拡散し、燕山地域の鏃と轡は通常の道具として単純に内蒙古中南部以西へ拡散したことを指摘した。ここまで、青銅武器と馬具の展開によって草原地帯東部で形成した広域の範囲での地域間関係の具体像が明らかになった。本節では、ここまでの考察の結果を踏まえ、青銅武器と馬具の展開過程を核心とする広域の範囲で地域間関係の実態を形成する要因を検討課題としておきたい。

先行研究では、物質文化の要素の拡散に表現される地域間の関係の形成は人間集団の移動と密接不可分の関係をもったと考えられる。このような文化要素の伝播と人間集団の移動という仮説は草原地帯東部において語られている。いわば人間集団の移動は、環境変動の影響と、集団の内部で技術が長期にわたって蓄積されてきた社会的発展に促されたといえる。しかしながら、本論の第一章で述べたように、先行研究では、人間集団の移動の研究は、紀元前1000年頃の湿潤化という気候変動が重視されるいっぽうで、物質資料が生成し展開する社会的な変革を追求する視点は乏しかった。本節では、広域の範囲で地域間関係の具体像を形成する要因の検討は、人間集団の移動を背景として、環境の変動に伴って本質的な社会の変化を考察したい。

1. 環境の変動の概観

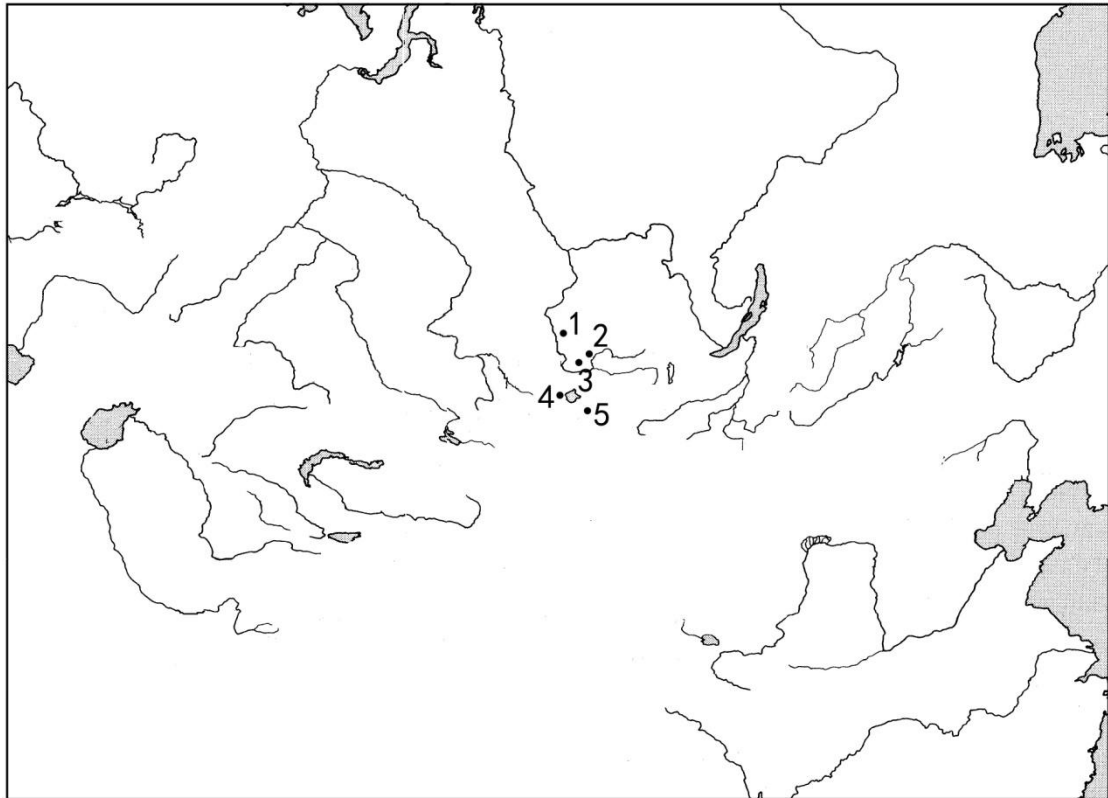
五十以上の地域の古気候記録の検討にもとづく氷河分布変化の分析によれば、完新世には少なくとも9000～8000年前、6000～5000年前、4200～3800年前、3500～2500年前、1200～1000年前、600～150年前の6回の氷河拡大、すなわち寒冷期を迎えたことがわかる[Mayewski etc al. 2004]。具体的に草原地帯の完新世の気候変動をみれば[Koryakova, Epimakhov 2007]、このうち全球規模の第4回の寒冷期は前1500～前500年頃であり、これは紀元前3000年～前1500のサブボレアル前期から紀元前500～紀元1000年のサブア

トランティック前期へ過渡する寒冷で湿潤なサブボレアル後期と一致している。この時期は青銅器時代後期から遊牧文化が草原地帯東部で形成された時期とほぼ同じ段階である。先行研究では、遊牧文化の要素の伝播と人間集団の移動が、気候変動とともに議論されることが多い。とりわけ、遊牧文化の始まりとされる紀元前 1 千年紀には遊牧文化が南シベリアから黒海北岸へ拡散した可能性がある[Bokovenko 1996]。遊牧文化の形成の時間は紀元前 1000 年頃であるが、より詳細な太陽活動の変動によって黒海北岸へ拡散する時間が紀元前 850 年頃という分析もある[Geel etc al. 2004]。しかしながら、気候変動の詳細な年代は、第 3 節の分析の結果としてタガール青銅器群が南シベリアから拡散する前 6 世紀と関連する可能性があり、詳細な検討も必要である。

南シベリアにおいて、湖面水位・植生・降水量の変化を含む過去数千年の気候変動の復元は、湖底堆積物の炭素年代分析と珪藻・花粉・化学分析から総合的に検討した結果である。これまでにミヌシンスク盆地～モンゴル高原西部において 5 湖（沼地）の湖底堆積物の調査が実施されたが（第 7－8 図）、ホワイト（White）湖の湖底堆積物の炭素年代測定の結果が極めて少ないため、以下はホワイト（White）湖の資料を除いてほかの 4 湖の前 1000 年以降の分析結果を整理する。

テルメン（Telmen）湖の湖底堆積物の化学分析の結果では、 ^{14}C 年代 2710 年－1260 年前に、 CaCO_3 比は減少し、気候の湿潤化が顕著になったことを示している[Peck etc al.2002]。さらにウス＝ノール（Uvs Nuur）湖の湖面水位の上昇・下降の分析結果[Grüner etc al.2000]でも ^{14}C 年代 3000 年－2000 年前にウス＝ノール（Uvs Nuur）湖の湖面水位が突然に上昇し、気候が明らかに湿潤化したことを示している。この範囲 3000 年前頃より南シベリアは著しい湿潤気候にみまわれるようになった。

クトゼコヴォ（Kutuzhekovo）湖の湖底堆積物の花粉層位の分析結果は第 7－9 図に示すとおりである。多様な花粉は各層位で出現の数量を基準とするダイアグラムで表示する。 ^{14}C 年代測定の結果から、湖底堆積物は ^{14}C 年代 4000 年前－2000 年前の気候変動の記録によることで明らかとなった。花粉帯 KTH-II の時代（ ^{14}C 年代紀元前 1390 年－前 1060 年）に入るとカヤツリグサ科（Cyperaceae）、赤松（Pinus sylvestris）の出現率が高くなる。それ以外の乾生植物（xerophitic taxa）、灌木（shrub birch）が減少する。紀元前 1390 年－前 1060 年は紀元前 3000 年頃の乾燥期から湿潤期へと変動する時期であり、最も湿潤な環境条件を示している[Zaitseva etc al.2004]。



第7-8図 堆積物の調査が実施される湖（沼地）分布図

(1. クトゼコヴォ湖 2. ルゴヴォエ沼地 3. ホワイト湖 4. ウス＝ノール湖 5. テルメン湖)

この ^{14}C 年代 3200 年前－2300 年前の湿潤期の存在を示す花粉分析の結果は、ルゴヴォエ（Lugovoe）沼地の堆積物の花粉分析結果（第7-10図）でも得られている。

^{14}C 校正年代 3200 年－2600 年前：この時期は花粉帯 Lmi-3 に相当し、紅松（*Pinus sibirica*）の花粉が非常に高い出現率を示す。それ以外の灌木の花粉の出現率が減少し、湿潤な環境条件を示している[Blyakharchuk 2013]。その変動はクトゼコヴォ（Kutuzhekovo）湖の紀元前 1390 年－前 1060 年の状態とよく似ている。

^{14}C 校正年代 2600 年－2300 年前：この花粉帯 Lmi-4 の時代になるとシベリアモミ（*Abies sibirica*）の花粉が最も高い出現率を示す。それに対して紅松（*Pinus sibirica*）の花粉が減少するが、赤松（*Pinus sylvestris*）の花粉が増加する。それ以外のアルテミシア（*Artemisia*）の花粉の出現率は低い。シベリアモミ（*Abies sibirica*）の花粉の高い出現率からみると、比較的に温度が高い湿潤な時期を示しており、森林草原は森林へと漸く変化している[Blyakharchuk 2013]。

以上の分析結果から、南シベリアの紀元前 1500 年－前 500 年は完新世の第4回の寒冷

期として寒冷な環境条件であったものが、紀元前 1500 年から湿潤化も顕著となり、テルメン (Telmen) 湖、ウス＝ノール (Uvs Nuur) 湖の湖面水位が上昇したことが明らかとなった。したがって紀元前 1500 年～前 500 年は乾燥から湿潤へと気候が大きく転換する変動期といえる。この環境激変期が本論第Ⅰ期 (紀元前 9～前 7 世紀) に相当している。次に紀元前 500 年以降は第 4 回の寒冷期が終り、温度が高く多湿な段階である。南シベリアの植物群は森林草原から森林へと変わっている。紀元前 500 年以降は寒冷から温暖へと気候が大きく転換する変動期といえる。この環境激変期が本論第Ⅱ期 (紀元前 6～前 3 世紀) に相当している。これらの環境激変期が青銅器の編年による初期騎馬遊牧文化の時期区分におおよそ対応していることは興味深い。

まず、紀元前 1500 年～前 500 年頃の湿潤の顕著化は遊牧集団にプラス影響として働いたのではなかろうか。この時代には、降水量の増加による土地条件の湿潤が牧草成長に良い影響を与え、牧草地の単位で養われる羊・山羊・馬等の数量が増加することは想定できる。動物性食糧 (肉・乳) を必要とする遊牧集団にとって、家畜群の数量の増大は同時に人口増加を意味する。しかしながら、紀元前 500 年頃には寒冷期が終り、前段階の湿潤条件と同じであっても、寒冷・温暖の変動はまったく逆であった。気候の温暖・湿潤の条件に伴い、南シベリアの森林の面積が増加し、人間が利用可能な牧草地は紀元前 500 年以前に比べて減少し、遊牧集団は前段階に人口密度の上限に達したため南シベリアから周辺の地域へと季節的に移動しなければならないようになった。このように、紀元前 500 年頃から顕著となる気候の温暖・湿潤化は、南シベリアにおいて牧草の成長条件のマイナスの要因として作用し、利用可能な牧草地の面積の減少に繋がったかもしれないが、食料不足によって遊牧集団を移動させる一つの要因となった可能性が高い。

いっぽう、北方の遊牧集団と異なり、地球規模の環境の変動として、紀元前 500 年頃から始まった温暖期は南方の農耕集団にプラス影響として働いた。この時期には、温度の上昇が中原地域の農作物に良い影響を与え、人間が利用可能な農耕地は紀元前 500 年頃以前の寒冷期に比べて拡大したことは想定できる。よって中原地域の農耕集団は人口を維持するために利用可能な農耕地の北限 (長城地帯) へ新たな農耕地を求めて移動しなければならない可能性がある。このように、紀元前 500 年から始まった温暖化は、中原地域において農耕活動のプラスの要因として作用し、利用可能な農耕地の面積の増加に関係があるかもしれないが、人口圧によって農耕集団を移動させる要因となった可能性も高い。

2. 社会の変革

草原地帯東部では、紀元前 1500 年頃から精製短剣などの非実用の青銅武器は副葬され、紐帯の指標となっており、その使用はある特定の社会的意味に束縛され、厳格な規範と規則の存在があらわれていることとみられる[松本圭太 2018]。本論第Ⅰ期（紀元前 9 ～ 前 7 世紀）に入り、南シベリアにおいて青銅器時代後期の武器に馬具を加える特定の青銅器の組成があらわれる。これは武器と馬具を副葬することによって有力者の権威をあらわすようである。やや不確実であるが、副葬青銅器の組成に差異がみられることから、ある程度の階層の分化が想定できる。これに対し、本論第Ⅱ期（紀元前 6 ～ 前 3 世紀）になると、金製の武器が少数の墓葬に副葬されるようになり、前段階に比べて武器と馬具の材質の多様性から階層化がより深化されたことが想定される。

以上のような紀元前 1000 年頃以降の騎馬遊牧社会の本質的な社会の変化は、経済や軍事などの側面の技術革新がかなり長い時間にわたって累積した結果とみられる。よって、技術革新は本質的な社会の変化を評価する中核になる。ここではこれらの技術の革新は鏃と轡の形態から推定した機能的な変化があげられる。

馬具について、本論の第五章が指摘したように、轡は紀元前 9 ～ 前 8 世紀に結合式から始まり、紀元前 7 世紀になると、長城地帯ではこの結合式の轡が在地化して挿入式が成立、南シベリア以西では結合式から嵌入式の轡へ派生して併存する展開の様相を示している。銜と鏃の連結方式からみると、挿入式と嵌入式の轡の安定性は有機物製の革紐で緊縛する結合式に比べて改良がみられる。また最も肝要な馬具の部品として、紀元前 600 年頃から轡の機能的な変化は騎馬技術の革新に関連していることが知られる。この騎馬技術の革新が機動力として遊牧集団の経済状況を反映している。なぜなら、先行研究の民族事例から考えると、徒歩より騎馬で家畜群を管理するやり方が効率的であると考えられる。たとえば、モンゴル高原において、徒歩一人では 150-200 頭の羊を飼育することが可能であるが、騎馬で管理すれば、一人で 500 頭が可能となる[Khazanov 1994]。したがって、騎馬技術の革新によって家畜群の規模が拡大し、個人財産の累積による階層的な社会格差がもっと深化されることが想定できる。

武器からみると、本論の第四章で検討したように、銅鏃は紀元前 500 年頃から顕著な形態的な変化が起きた。すなわち、銅鏃の変遷は、型式間において両翼鏃→三翼鏃→断面三角形鏃への変化を示しており、型式組列において鏃身の細身化あるいは前鋒の断面の充実

化といった傾向が存在するものである。これらの変化は実戦で使用する武器の機能性の改良という視点において証明することができる。このような脈絡からみると、武器の革新は遊牧集団の軍事と政治の状況を反映している。すなわち、その状況を地域間の軍事的関係の緊張化と政治的関係の統合化と考えてよいだろう。これは、ここまで言及してきた経済状況などの一連の変化に連動して発生するものである。すなわち、まず一部分の遊牧集団は、新たな牧草地を求めるため、周辺の地域へ移動しなければならない。移動とともに自然的条件のよい牧草の占有をめぐる集団間の衝突・抗争は避けられない。遊牧集団の内部の領域が拡大し、支配される人口が多くなるにつれて、軍隊の規模も大きくなり、政治的統合の強化も想定できる。軍事力を支えとする階層的な社会変化は紀元前 500 年頃から深化してきたことが認められる。

3. 環境・社会と人間集団の移動

本章の第 3 節が指摘したように、紀元前 500 年頃以降の物質文化の要素は、紀元前 1000 年頃と異なり、南シベリアの短剣と刀子は西から内蒙古中南部以西へと広がりつつ、燕山地域の鏃と轡は東から内蒙古中南部以西、南シベリアへと広がってきたといえる、単方面ではなくて複雑な拡散の様相を示している。こうした複雑な物質文化の要素の拡散には人間集団の移動が伴っている可能性が高い。

人間集団の移動の要因としては、自然環境の変動と本質的な社会変化が関連した相互作用から総合的に評価する必要がある[Frachetti 2011]。遊牧集団の移動を環境の変動と社会の変化とのかかわりでみてみると、遊牧集団の移動には、家畜群の拡大⇒人口の増加⇒気候の変動⇒家畜群の減少⇒人口の維持⇒集団の移動⇒技術の革新⇒社会の変革というプロセスが認められる。

紀元前 1000 年～前 500 年頃には、第 4 回の寒冷期として寒冷な環境であったものが、紀元前 1500 年頃から湿潤化も顕著となり、寒冷と湿潤という気候の条件を示している。このような気候の条件は牧草にプラス影響を与え、人口が増加することも想定される。武器に青銅の馬具が加わる特定の青銅器の組成が副葬され、これらの副葬の青銅器の組成の差異によって有力者の権威をあらわしている。これは本論第 I 期の紀元前 9～前 7 世紀と対応しており、草原地帯東部で後期カラス文化から前期タガール文化へと大きく文化的転換をなしとげた。いっぽう東部の文化の要素が草原地帯西部に流入していた。黒海北岸ではスキタイ集団は紀元前 7 世紀に西漸し、ついにキンメリオイ集団を駆逐し、西アジア

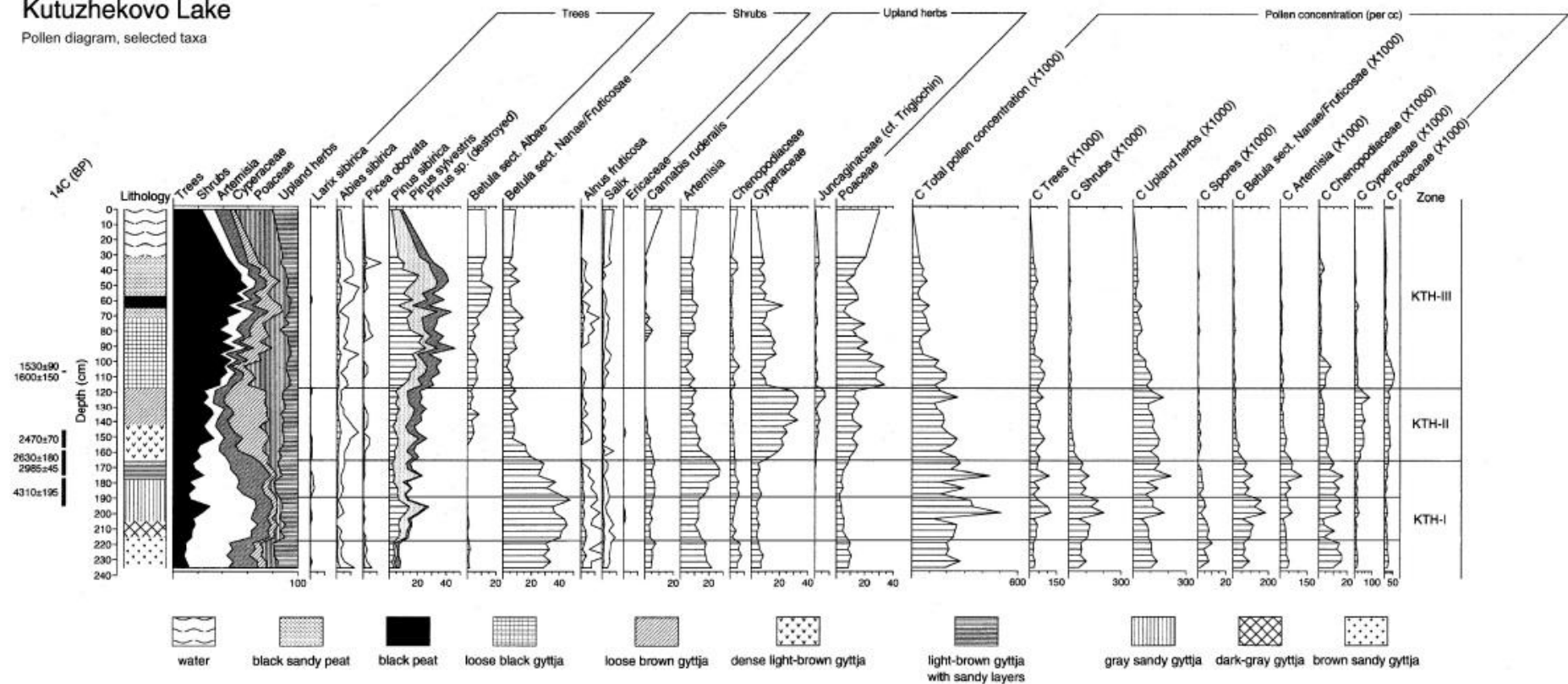
に進出してしまった。いっぽう、本論第Ⅱ期の紀元前6世紀になると、第4回の寒冷期が終わり、温暖化が顕著となり、温暖と湿潤という気候の条件を示している。こうした気候の条件は牧草にマイナス影響を与え、植物群は森林草原から森林へ変わる。騎馬遊牧社会は、人口の増加を維持するため、一部の遊牧集団が新たな牧草地を求めて広範囲に移動せざるを得ない[Geel etc al. 2004, Cybiktarov 2003]。また徒歩より騎馬で家畜群を飼育する方法がより効率的である。そのために、遊牧集団は騎馬技術に最も肝要な轡の連結の安定性を強化した。また、移動とともに、よい条件の牧草地の占有をめぐる集団間の衝突と戦争が起きる可能性はある。こうして、各地域の遊牧集団は実戦で使用される鏃の機能性の改良を進化させた。これらの武器と馬具の機能的変革は、財産の累積、政治の統合など、急激な社会的変化の指標として意味づけられ、遊牧集団の身分秩序の形成の過程で大きな役割を果たした。南シベリアでは、武器の材質の多様化により、紀元前500年頃以降、総括した被葬者の身分をあらわすものとして武器と馬具がわずかな王墓に副葬されるようになり、紀元前1000年頃より階層的な社会秩序の深化が想定される。いっぽう、遊牧集団の移動とともに、短剣と刀子は必要な器物として上位の階層の間に南シベリアから内蒙古中南部以西へ拡散し、ゆるやかな地域間関係が形成した。これは本論第Ⅱ期の紀元前6～前3世紀と対応しており、タガール文化の前半期から後半期へと大きく文化的転換をなした。草原地帯西部では心葉形鏃の銅剣がこの中期スキタイ文化に並行する時代に出現する。また文献記載によれば、サルマタイ集団は紀元前4世紀後半に東方のドン川から西方のドニエプル川まで進出し、スキタイ集団を駆逐したことがわかった[雪嶋宏一1996]。人間集団移動の波の中ではこれが草原地帯東部の遊牧集団の拡散と関連している可能性が高い。

ところが、遊牧 vs 農耕という二項対立の歴史の枠組みのなかにおいて、遊牧集団と同様に南方の農耕集団の動態も遊牧集団の移動を理解するに対して非常に重要なものと考えられる。草原地帯と異なり、紀元前6世紀頃から始まった地球規模の温暖化は農作物にプラス影響を与え、人間が利用可能な農耕地は紀元前6世紀頃以前より中原の南北へ拡大する。まず、この人間が利用可能な農耕地の拡大は農耕社会の技術的な変革としての中原地域の鑄造鉄器の開発と関連している。先行研究においては、鑄造鉄器は紀元前6～前5世紀に開発され、脱炭処理技術は紀元前5世紀に開発され、こうした鑄造鉄器の開発は鉄製の農耕具が中原社会において普及してきたことと関連しているとすでに指摘した[宮本一夫2015]。このように、農耕具の鉄器化は農耕地の拡大を促し、中原地域の農耕集団は

領域国家段階と考えられる紀元前 500 年頃に北方の草原地帯という新領域への移住が始まる。また、こうした農耕集団の移住の過程は春秋戦国時代の燕国と趙国の領域が遼東と北方へ広がっていく動きと合致している。たとえば燕国の領域は紀元前 6 ～前 5 世紀に燕国の青銅礼器と副葬土器の流入に伴って燕山地域を越えて遼西まで広がり、紀元前 4 世紀に郡県を設置する直接的な支配とともに遼東まで広がる〔宮本一夫 2016〕。あるいは、少なくとも文献で示されるように、趙国の武靈王は北方の胡と楼煩を破って長城を築き、遊牧民が居住していた内蒙古中南部で雲中、雁門、代郡を設置し、燕国は燕山以北から遼寧東部にかけて上谷、漁陽、右北平、遼西、遼東郡を設置した。このように農耕集団が北上して領域を広げる動きは草原地帯東部の物質文化の要素が東から西へ広がったこととおおむね同じであったといえよう。前述のとおり、紀元前 6 世紀頃以降の燕山地域の鏃と轡の分布状況は紀元前 6 世紀以前と異なり、これらの武器と馬具が燕山地域から内蒙古中南部以西ないしは南シベリアへと広がったことがみられる。北方辺境に位置する燕・趙・秦の三大国の領域が北方へ広がっていることとともに、農耕集団は、南方へ移動している遊牧集団と軍事的な衝突が発生する可能性が増加する。騎馬の匈奴の侵入を防ぐために、燕・趙・秦の三大国は北方の辺境で万里の長城を築き、新たな郡県都市の造営と開発を推進した。そして大量の中原農耕民が北方辺境に移住させられた。ところが、鉄製農具の普及と軍事技術の改良に伴い、農耕社会では政治体制の集権化が社会のあり方を根本的に変え、中央集権の領域国家が形成した。いっぽう、こうした農耕社会の領域国家の形成は草原地帯における政治統合と並行して進んでいる。遊牧社会では、遊牧集団の部族が紀元前 6 世紀に連合し、紀元前 3 世紀になると匈奴遊牧国家が草原地帯東部で形成する。農耕社会と遊牧社会が農耕牧畜境界地帯を挟んで対峙する二項対立がこの時期から生まれた。

Kutuzhekovo Lake

Pollen diagram, selected taxa



第7-9図 クトゼコヴォ湖にわたる湖底堆積物からみた気候変動

Figure 1 displays the stratigraphic distribution of pollen and spores from the Lamiaceae site, showing the percentage of various plant groups across a depth profile from 0 to 5000 cm. The groups are categorized into Trees, Shrubs, High elev., Dry soil, Ruderal, Mesophilous herbs + ferns, and Wetland taxa. The rightmost panel shows a detailed pollen count for various species, including Carex, Meesia, mosses, vascular plants, Menyanthes, other Carex, and Sphagnum. The depth profile is divided into zones Lmi-1a, Lmi-1b, Lmi-2, Lmi-3, Lmi-4, Lmi-5, and Lmi-6. A dashed line at 4500 cm indicates the base of the Lamiaceae site.

第7-10図 ルゴヴォエ沼地にわける堆積物からみた気候変動

終 章 結 論 ―ユーラシア草原地帯東部における初期騎馬遊牧文化の変

遷過程―

以上の章節まで、草原地帯東部の青銅器に関連する考古学的諸現象を検討し、紀元前 1000 年以降の広地域の地域間関係の様相と形成要因の解明を本論の目的として議論を行った。本節では本論の検討の結果に対して簡単に整理を行いたい。

本論の目的を遂げるために、まず研究史から以下の 2 点の問題点を整理した。

問題点 1 型式学と編年学による草原地帯東部の全体規模の文化動態の検討の欠如

問題点 2 環境の変動と集団の移動に伴う本質的な社会変化の考察の不足

まず、草原地帯東部における型式学と編年学的な青銅武器と馬具に関しては、全体規模の検討の結果として、以下の結論があげられる。

青銅短剣の検討に関しては、草原地帯東部にカラス式とアキナケ式という二種類の青銅短剣がある。ミヌシンスク盆地のタガール文化の拡散を契機として、青銅短剣がカラス式からアキナケ式へと大きく転換したことを指摘した。具体的にいえば、短剣第Ⅰ期にはカラス式が南シベリアから長城地帯にかけて盛行しており、アキナケ式がミヌシンスク盆地に生まれる。短剣第Ⅱ期になるとカラス式が終焉してしまい、アキナケ式が南シベリアから内蒙古中南部以西・燕山地域・黒海北岸まで広がっていった。

青銅刀子の検討に関しては、草原地帯東部にカラス式とタガール式と玉皇廟式という三種類の青銅刀子がある。同じくタガール文化の拡散を契機として、青銅刀子がカラス式からタガール式へと転換したことを指摘した。刀子第Ⅰ期にはカラス式が草原地帯東部で盛行しているが、ミヌシンスク盆地を挟んである程度の東西の地域差も存在する。刀子第Ⅱ期になるとタガール式がミヌシンスク盆地から内蒙古中南部へと拡散することを指摘した。また燕山地域を中心とした長城地帯では第Ⅰ期に生まれた玉皇廟式が第Ⅱ期にな

ると燕山地域から内蒙古中南部へ拡大しながら燕国系の刀子へと大きく転換していくことも指摘した。

青銅鏃の基本的作業は型式分類から始まり、機能的変化によって形態変化の方向性を想定する上で型式の順序を確定し、さらに青銅鏃の型式間の共伴関係と中原系の青銅器の編年により、型式の順序を検証した。青銅鏃の形態変化の検討の結果として、型式の間には両翼鏃→三翼鏃→断面三角形鏃の変化があり、型式の組列には鏃身の細身化あるいは前鋒の断面の充実化といった傾向がある。こうした機能変化を示す青銅鏃の型式変化を踏まえ、変化の傾向は実戦で使用する武器の機能性の重視という視点において説明できると指摘した。

青銅馬具の具体的な検討としては、轡の型式学的な分析は、銜と鑣の連結方式という機能的属性の相関を踏まえて型式を設定し、工夫・改良の跡を辿りながらより改良された型式ほど新しい型式と考え、型式の変遷の順序を想定した。その上で相対年代が明確である中原系の青銅器といった一括遺物や炭素年代測定の結果によって、銜と鑣の部品の組み合わせからなる轡の年代を推定する。その結果として、青銅轡には革紐で緊縛する結合式→銜を鑣に通す嵌入式→鑣を銜に通す挿入式という変化があることが明らかになった。さらに以上の編年に基づいて各時期の分布状況を検討し、展開の様相を把握する。詳しくいえば、結合式は、馬具第Ⅰ期に、ミヌシンスクを中心に遼寧西部の草原地帯全体にも及び急激に広がるものである。馬具第Ⅱ期に至ると、馬具の展開の様相は、結合式を最初の祖形として、南シベリア以西において嵌入式、長城地帯において挿入式という二つの方向に向かって分岐するものである。馬具第Ⅲ期には、挿入式は草原地帯東部において拡散してきた。また、これらの形態の変化は銜と鑣からなる轡の連結の安定性の改良と関連することを指摘した。

次に、以上の分析結果を基に、本論では、通時的な草原地帯東部の騎馬遊牧文化の動態とその形成要因について、異なる物質文化の要素の総合的な検討から考察し、初期鉄器時

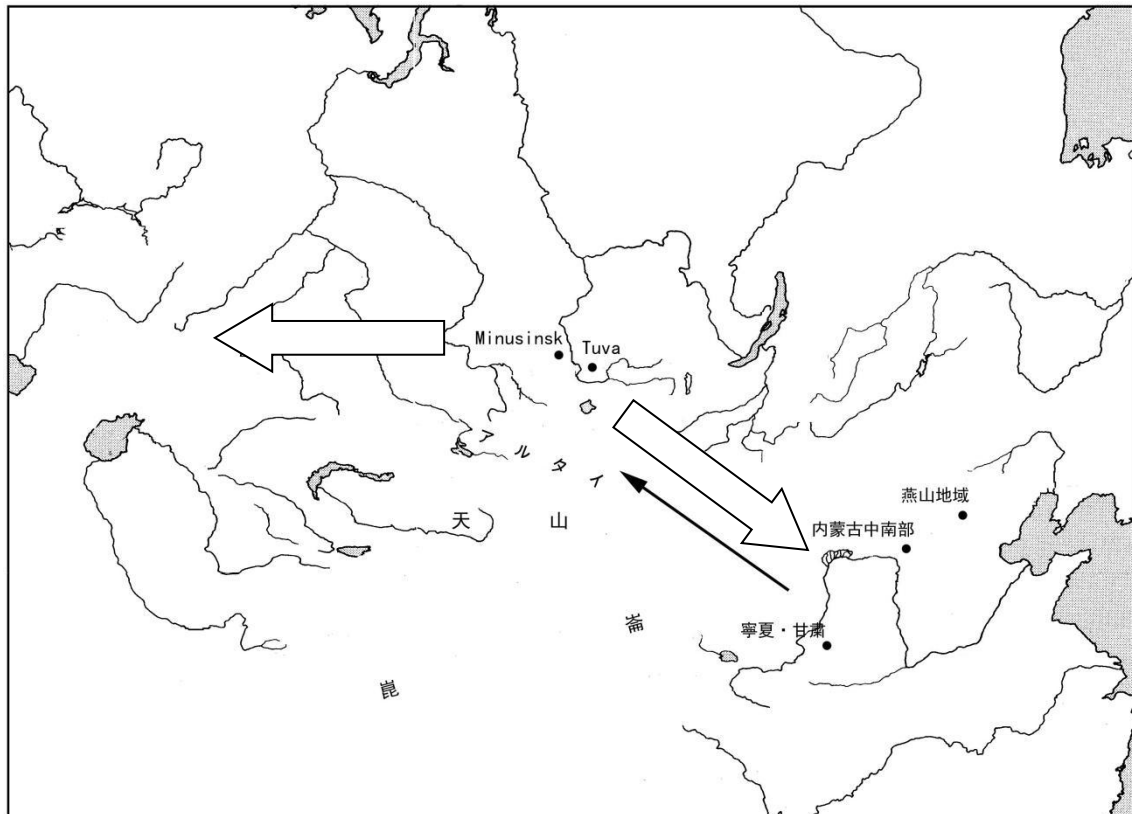
代の騎馬遊牧文化の展開過程を解明した。騎馬遊牧文化の動態の検討として、以下の結論が得られる。

第1点 本論第Ⅰ期（紀元前9～前7世紀）は後期カラスク文化の終末期と前期タガール文化の形成期である。この時期には、カラスク文化系譜の青銅器は草原地帯東部で盛行しながら、ミヌシンスク盆地を境として諸型式の分布の東西差が存在している。この分布の東西差の背景としては、墓葬単位における青銅器組成の差異によって、西は南シベリアの階層的社会の形成が想定され、中原系の青銅礼器が少数の大型墓葬に集中することによって、東は燕山以南の中原地域との交流や接触を示している。

第2点 本論第Ⅱ期（紀元前6～前3世紀）は前期タガール文化から後期タガール文化へと移行する時期である。この時期には、南シベリアのタガール文化系譜の青銅武器が内蒙古中南部以西、黒海北岸へ広がってきたことがみられる（第8-1図）。詳しくみると、南シベリアにおいては青銅武器の副葬は比較的高位な階層のみに限定される。また金製の武器が強い礼儀的性格をもっている。武器の材質の多様性から階層化が前段階より深化されていることが想定される。内蒙古中南部以西においては、南シベリアの青銅武器が最も高い階層の墓葬に副葬される。以上の検証から、南シベリアの青銅武器を媒介物として王墓の分布中心であった南シベリアから従属する内蒙古中南部以西にかけては広地域間の関係が形成されていることがわかる。

第3点 本論第Ⅱ期（紀元前6～前3世紀）には、燕山地域の玉皇廟文化系譜の青銅武器と馬具が内蒙古中南部以西ないし南シベリアへ広がっていることがみられる（第8-1図）。草原地帯東部における青銅武器と馬具の広がりとは複雑な拡散動態を示している。このような燕山地域の青銅武器と馬具の拡散は春秋戦国時代の燕国の文化要素の東漸と関連してい

ると考えられる。しかしながら、これらの青銅武器と馬具を内蒙古中南部以西において墓葬の階層性を示す器物と想定することが難しい。したがって燕山地域の青銅武器と馬具の拡散はたんなる物質文化の要素が東から西へと広がってきた可能性が高い。



第8-1図 草原地帯東部の騎馬遊牧文化の展開過程

以上の分析の結果から、地域集団の高い階層間の青銅器の普及を起因として、南シベリアの青銅器の拡散により、西から東への地域間関係が形成される実態がわかる。いっぽう、燕山地域の青銅器の拡散により、東から西への動態も看取される。複雑な地域間関係の形成要因として、たんなる物質文化の要素の拡散ではなく、人間集団の移動も想定される。以下、環境の変動と社会の変化の2点の要因が得られる。

第1点 タガール文化が前半期から後半期へと大きく転換した時期には、温暖と湿潤の気候変動に伴って草原地帯の遊牧集団が西の南シベリアから東の長城地帯へと移動する可能性がある。この環境の変動は完新世の第4回の寒冷期が終わり、紀元前6世紀頃から始める気候の温暖化があげられる。温度が高い多湿な気候は家畜群と遊牧集団の人口維持にマイナスの影響として働いたことが認められる。遊牧集団は食料不足によって南シベリアから周辺部へと移動しなければならないようになった。草原地帯東部においてはこれが紀元前6～前3世紀の南シベリアの遊牧集団の動態と対応している。南シベリアの遊牧集団の移動とともに、草原地帯東部では西から東への青銅武器の拡散に伴ってその地域間関係が形成した。

ところが、遊牧集団の内部では銅鏃と銅轡の機能的な改良に基づいて、弓を射ることを有効な軍事的な手段として、馬に乗ることを快速な移動の機動力として、その社会の階層性の深化と政治的な統合が想定される。紀元前7世紀から轡の連結方式の安定性の増強に伴い、騎馬の技術は移動手段として家畜群の有効な飼育を可能にさせる。紀元前6～前5世紀に銅鏃の武器機能の強化から、政治的統合を支える軍事力が認められる。経済、政治などの側面の変化から、個人の財産の累積と政治的統合による階層的社会の深化の過程が想定できる。遊牧社会はこの大変動期に大きな転換をとげた。

第2点 温暖と湿潤という気候の条件は農耕集団にプラスの影響を与えたことが推定される。したがって農耕社会の大変動も紀元前7世紀頃から始まる。鉄製農具の普及とともに、社会のあり方を根本的に変えた、政治体制を集権化する農耕社会が新たな農耕地を求めて北の草原地帯へと移動してきた。たとえば長城地帯においては春秋戦国時代の燕山や趙国が北方へ領域を拡大している。こうした農耕集団の移動とともに、東から西への青銅馬具と武器の拡散はこの頃に引き起こされたのである。

以上の視点から、本論は草原地帯東部の青銅器の動向について検討を行ってきたが、騎馬遊牧文化の展開過程という問題を論じる上で、ほかの種類の青銅器・鉄器・土器などの型式学と編年学的研究、また墓制・鹿石などの諸要素の展開様相との比較、そして体質人類学の研究成果も含めて総合的に検討を行う必要性がある。それに加え、現在の資料の増加とともに検討した青銅器に対しての理解を深める必要性も存在する。また、草原地帯における騎馬遊牧文化は農耕社会の歴史に影響を与えてきたものである。そのため、遊牧と農耕という二項対立の人類歴史の枠組みの中において、遊牧社会は農耕社会を形成する過程を理解する上で重要なものといえる。したがって、今後は遊牧文化の展開と農耕文化の動態と連動して詳しく検討する課題が重要である。

図版出典

第 1-1 図 成美堂出版編集部 2017 をもとに筆者作成.

第 1-2 図 筆者作成.

第 1-3 図 筆者作成.

第 2-1 図 筆者作成.

第 2-2 図 成美堂出版編集部 2017, Bokovenko 1996, Fig.19 をもとに筆者作成.

第 2-3 図 Ludmila Koryakova 2010, Fig.2.

第 2-4 図 筆者作成.

第 2-5 図 筆者作成.

第 3-1 図 1: 内蒙古自治区文物考古研究所・寧城県遼中京博物館 2009, 図二〇九、2: 北京市文物考古研究所 2007, 図五八二、3: 北京市文物考古研究所 2007, 図五八二、4: 北京市文物考古研究所 2007, 図五七八.

第 3-2 図 1: 内蒙古自治区文物考古研究所・寧城県遼中京博物館 2009, 図版一五、2: Грач А.Д. 1980, Рис.31.

第 3-3 図 1: 新疆維吾爾自治区文物考古研究所 2016, 図版七一、2: Мошкова М.Г. 1992, Таблица. 61、3: 新疆文物考古研究所 2013d, 図二八、4: 内蒙古自治区文物考古研究所・寧城県遼中京博物館 2009, 図三二〇、5: 町田章 2006, 図 4、6: 内蒙古自治区文物考古研究所・寧城県遼中京博物館 2009, 図三二八.

第 3-4 図 1: Мошкова М.Г. 1992, Таблица.72、2: Членова Н.Л.1967, Таблица.4、3: Мошкова М.Г. 1992, Таблица.84 4: 田広金・郭素新編 1986, 図版二九、5: 寧夏文物考古研究所・彭陽県文物管理所 2016, 図版 2-114、6: 北京市文物考古研究所 2007, 図五八〇、7: 北京市文物考古研究所 2007, 図五九九、8: 町田章 2006, 図 17.

第 3-5 図 1: Членова Н.Л.1967, Таблица.3、2: 新疆維吾爾自治区文物考古研究所 2016, 図版七一、3: 新疆文物考古研究所 2013d, 図二八、4: 町田章 2006, 図 3、5: 内蒙古自治区文物考古研究所・寧城県遼中京博物館 2009, 図三二〇、6: 内蒙古自治区文物考古研究所・寧城県遼中京博物館 2009, 図三二八、7: Мошкова М.Г. 1992, Таблица.72、8: Членова Н.Л.1967, Таблица.4、9: Мошкова М.Г. 1992, Таблица.84、10: 寧夏文物考古研究所・彭陽県文物管理所 2016, 図版 2-114、11: 北京市文物考古研究所 2007, 図五八〇、12: 北京市文物考古研究所 2007, 図五九九.

第 3-6 図 筆者作成.

第 3-7 図 筆者作成.

第 3-8 図 筆者作成.

第 3-9 図 筆者作成.

第 3-10 図 筆者作成.

第 3-11 図 筆者作成.

第 4-1 図 1: 新疆維吾爾自治區文物考古研究所 2016, 図版七一、2: Членова Н.Л.1972, Таблица.23、3: 北京市文物考古研究所 2007, 図版二九六.

第 4-2 図 1: 新疆維吾爾自治區文物考古研究所 2016, 図版七一、2: Членова Н.Л.1967, Таблица.38、3: Членова Н.Л.1972, Таблица.28、4: Мошкова М.Г. 1992, Таблица.72、5: 遼寧省昭烏達盟文物工作隊・中国科学院考古研究所東北工作隊 1973, 図版九、6: Мошкова М.Г. 1992, Таблица.72.

第 4-3 図 1: Членова Н.Л.1972, Таблица.22、2: Мошкова М.Г. 1992, Таблица.86、3: Членова Н.Л.1972, Таблица.23、4: Мошкова М.Г. 1992, Таблица.86、5: Мошкова М.Г. 1992, Таблица.86、6: Von Konstantin V. Cugunov, Hermann Parzinger und Anatoli Nagler 2010, Tafel.114.

第 4-4 図 1: Von Konstantin V. Cugunov, Hermann Parzinger und Anatoli Nagler 2010, Tafel.111、2: Грач А.Д. 1980, Рис.112、3: 寧夏文物考古研究所・彭陽県文物管理所 2016, 図版 2-5、4: 新疆文物考古研究所 2017、5: 北京市文物考古研究所 2007, 図六二五、6: 北京市文物考古研究所 2007, 図六一三.

第 4-5 図 1: Членова Н.Л.1972, Таблица.6、2: 新疆維吾爾自治區文物考古研究所 2016, 図版七一、3: Членова Н.Л.1972, Таблица.7、4: 遼寧省昭烏達盟文物工作隊・中国科学院考古研究所東北工作隊 1973, 図版九、5: Мошкова М.Г. 1992, Таблица.86、6: Мошкова М.Г. 1992, Таблица.86、7: Von Konstantin V. Cugunov, Hermann Parzinger und Anatoli Nagler 2010, Tafel.114、8: Грач А.Д. 1980, Рис.112、9: 寧夏文物考古研究所・彭陽県文物管理所 2016, 図版 2-5、10: 北京市文物考古研究所 2007, 図六二五、11: 北京市文物考古研究所 2007, 図六一三、12: 程長新 1985, 図一三.

第 4-6 図 筆者作成.

第 4-7 図 筆者作成.

第 4-8 図 筆者作成.

第 4-9 図 筆者作成.

第 4-10 図 筆者作成.

第 4-11 図 筆者作成.

第 5-1 図 1: 北京市文物考古研究所 2007, 図六〇七、2: 內蒙古自治區文物考古研究所・寧城縣遼中京博物館 2009, 図三二八、3: 北京市文物考古研究所 2007, 図六〇五、4: 北京市文物考古研究所 2007, 図六〇七.

第 5-2 図 筆者作成.

第 5-3 図 1: Мошкова М.Г. 1992, Таблица.84、2: Мошкова М.Г. 1992, Таблица.72、3: Мошкова

М.Г. 1992, Таблица.72、4:新疆文物考古研究所 2013d, 図二五、5:Чугунов К.В. 2011,Рис.29、6:北京市文物考古研究所 2007, 図六〇六、7:北京市文物考古研究所 2007, 図六〇六、8:雪嶋広一 2008, 図 11-2、9:藤川繁彦編 1999, 図 13、10:Чугунов К.В. 2011,Рис.29、11:田広金・郭素新 1986, 図三〇、12:北京市文物考古研究所 2007, 図六〇五、13:北京市文物考古研究所 2007, 図六〇五、14:北京市文物考古研究所 2007, 図六〇四、15:陝西省考古研究院 2009, 綏徳 392-39、16:Мошкова М.Г. 1992, Таблица.72、17:雪嶋広一 2008, 図 11-1、18:新疆文物考古研究所 2017, 図六四、19:新疆文物考古研究所 2013d, 図二四、20:新疆文物考古研究所 2013d, 図二五、21:Чугунов К.В. 2011,Рис.29、22:Чугунов К.В. 2011,Рис.29、23:新疆文物考古研究所 2017, 図六四、24:Чугунов К.В. 2011,Рис.29

第 5-4 図 1:Мошкова М.Г. 1992, Таблица.84、2:Мошкова М.Г. 1992, Таблица.72、3:新疆文物考古研究所 2013d, 図二五、4:Чугунов К.В. 2011,Рис.29、5:北京市文物考古研究所 2007, 図六〇六、6:北京市文物考古研究所 2007, 図六〇六、7:雪嶋広一 2008, 図 11-2、8:藤川繁彦編 1999, 図 13、9:Чугунов К.В. 2011,Рис.29、10:北京市文物考古研究所 2007, 図六〇五、11:北京市文物考古研究所 2007, 図六〇五、12:北京市文物考古研究所 2007, 図六〇四、13:陝西省考古研究院 2009, 綏徳 392-39、14:Мошкова М.Г. 1992, Таблица.72、15:雪嶋広一 2008, 図 11-1、16:新疆文物考古研究所 2017, 図六四、17:新疆文物考古研究所 2013d, 図二四、18:新疆文物考古研究所 2013d, 図二五、19:Чугунов К.В. 2011,Рис.29、20:Чугунов К.В. 2011,Рис.29、21:新疆文物考古研究所 2017, 図六四。

第 5-5 図 筆者作成。

第 5-6 図 筆者作成。

第 5-7 図 筆者作成。

第 5-8 図 筆者作成。

第 6-1 図 1:内蒙古自治区文物考古研究所・寧城県遼中京博物館 2009, 図三二一、2:内蒙古自治区文物考古研究所・寧城県遼中京博物館 2009, 図三二二。

第 6-2 図 川又正智 2006, 図 42、陝西省考古研究院 2009, 綏徳 371 をもとに筆者作成。

第 6-3 図 М.П. Грязнов 1980,Рис.14、新疆文物考古研究所 2013d, 図版、北京市文物考古研究所 2007, 図版三三一をもとに筆者作成。

第 6-4 図 新疆文物考古研究所 2013f, 図版七、新疆文物考古研究所 2013f, 図版六七をもとに筆者作成。

第 6-5 図 1:М.П. Грязнов 1980,Рис.14、2:新疆文物考古研究所 2013f, 図版二〇、3:Amzarakov P.2011, Fig.1、4:Мошкова М.Г. 1992, Таблица.4、5:新疆吐魯番学研究院・新疆文物考古研究所 2011, 図二九、6:Cugunov, Parzinger und Nagler 2010, Tafel.139、7:新疆文物考古研究所 2013d, 図三〇、8:Мошкова М.Г. 1992, Таблица.4、9:北京市文物考古研究所 2007, 図六七四、10:北京市文物考古研究所 2007, 図六七五、11:北京市文物考古研究所 2007, 図六七六～六七七、12:Amzarakov P.2011, Fig.1、13:Amzarakov P.2011, Fig.1、14:Sergei I. Rudenko

1970, Fig. 57、15:新疆吐鲁番学研究院・新疆文物考古研究所 2011, 图四〇。

第 6-6 图 1:М.П. Грязнов 1980,Рис.14、2:Amzarakov P.2011,Fig.1、3:Мошкова М.Г. 1992, Таблица.4、4:Мошкова М.Г. 1992, Таблица.4、5:藤川繁彦編 1999, 第 3 章图 11、6:Cugunov, Parzinger und Nagler 2010,Tafel.139、7:新疆文物考古研究所 2013d, 图三〇、8:北京市文物考古研究所 2007, 图六七六~六七七、9:Amzarakov P.2011,Fig.1、10:Amzarakov P.2011,Fig.1.

第 6-7 图 筆者作成.

第 6-8 图 筆者作成.

第 6-9 图 筆者作成.

第 6-10 图 筆者作成.

第 6-11 图 筆者作成.

第 7-1 图 筆者作成.

第 7-2 图 筆者作成.

第 7-3 图 筆者作成.

第 7-4 图 筆者作成.

第 7-5 图 筆者作成.

第 7-6 图 筆者作成.

第 7-7 图 筆者作成.

第 7-8 图 筆者作成.

第 7-9 图 G.I. Zaitseva, K.V. Chugunov, A.Yu Alekseev, V.A. Dergachev, S.S. Vasiliev, A.A. Sementsov, G. Cook, E.M. Scott, J van der Plicht, H. Parzinger, A. Nagler, H. Jungner, E. Sonninen, N.D. Bourova 2007, Fig.3.

第 7-10 图 Tatiana A. Blyakharchuk, Natalia A. Chernova 2013, Fig.3.

第 8-1 图 筆者作成.

表出典

第 2-1 表 筆者作成.
第 2-2 表 筆者作成.
第 3-1 表 筆者作成.
第 4-1 表 筆者作成.
第 5-1 表 筆者作成.
第 5-2 表 筆者作成.
第 6-1 表 筆者作成.
第 6-2 表 筆者作成.

参考文献

簡報・報告書

中国語【著者名 ピンイン順】

巴爾采娃著・張良仁・李明華訳 2012『斯基泰時期的有色金属加工業—第聶伯河左岸森林草原地帶』蘭州大学出版社, pp. 51-74
北京大学考古文博学院・甘肅省文物考古研究所 2016『酒泉干骨崖』文物出版社, pp. 185
北京市文物研究所山戎文化考古隊 1989「北京延慶軍都山東周山戎部落墓地發掘紀略」『文物』1989 年第 8 期, pp. 17-35
北京市文物考古研究所 1994「龍慶峽別墅工程發見的春秋時期墓葬」『北京文物与考古』第四輯, pp. 32-45
北京市文物考古研究所 2007『軍都山墓地 玉皇廟』文物出版社
北京市文物考古研究所 2009『軍都山墓地 葫蘆溝与西梁垆』文物出版社
昌吉回族自治州文管所 1994「吉木薩爾県大龍口大型石堆墓調查簡記」『新疆文物』1994 年第 3 期, pp. 36-37
程長新 1985「北京市通県中趙甫出土一組戦国青銅器」『考古』1985 年第 8 期
承德地区文物保護管理所・灤平県文物保護管理所「河北省灤平県梨樹溝門墓群清理發掘簡報」『文物春秋』1994 年第 2 期, pp. 15-30
甘肅省文物考古研究所・張家川回族自治県博物館 2008「2006 年度甘肅張家川回族自治県馬家塬戦国墓地發掘簡報」『文物』2008 年第 9 期, pp. 4-28
固原博物館「寧夏固原呂坪村發見一座東周墓」『考古』1992 年第 5 期, pp. 469-470
河北省文化局文物工作隊 1966「河北懷来北辛堡戦国墓」『考古』1966 年第 5

期, pp. 231-247, 270

河北省博物館, 文物管理处 1977「河北平泉東南溝夏家店上層文化墓葬」『考古』1977年第1期, pp. 51-55

賀 勇・劉建中 1993「河北懷來甘子堡發見的春秋墓群」『文物春秋』1993年第2期, pp. 23-40

靳楓毅 1991「軍都山山戎文化墓地葬制与主要器物特徵」『遼海文物學刊』1991年第1期, pp. 61-73

康寧武 2013「綏德縣文管所藏銅刀与銅鏃」『考古与文物』2013年第6期, pp. 32-43

李逸友 1959「內蒙古昭烏達盟出土的銅器調查」『考古』1959年第6期, pp. 276-277

遼寧省昭烏達盟文物工作隊・中国科学院考古研究所東北工作隊 1973「寧城縣南山根的石椁墓」『考古學報』1973年第2期, pp. 27-39

劉得禎・許俊臣 1988「甘肅慶陽春秋戰国墓葬的清理」『考古』1988年第5期, pp. 413-424

羅 豐 1983「寧夏固原石喇叭村發見一座戰国墓」『考古學集刊』第3輯, pp. 130-131, 142

羅 豐・韓孔樂 1990「寧夏固原近年發見的北方系青銅器」『考古』1990年第5期, pp. 403-418

羅 豐・延世忠 1993「1988年固原出土的北方系青銅器」『考古与文物』1993年第4期, pp. 17-21

內蒙古自治區文物考古研究所・寧城縣遼中京博物館 2009『小黑石溝—夏家店上層文化遺跡發掘報告』科學出版社

內蒙古文物考古研究所・包頭市文物管理处 1991「包頭西園春秋墓地」『內蒙古文物考古』1991年第1期, pp. 13-24

內蒙古文物工作隊 1986「毛慶溝墓地」『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社, pp. 227-315

寧城縣文化館・中国社会科学院研究生院考古系東北考古專業 1985「寧城縣新發見的夏家店上層文化墓葬及其相關遺物的研究」『文物資料叢刊』第9輯, pp. 23-58

寧夏回族自治区博物館考古隊 1987「寧夏中寧縣青銅短劍墓清理簡報」『考古』1987年第9期, pp. 773-777

寧夏回族自治区文物考古研究所・彭陽縣文物隊 2002「寧夏彭陽縣張街村春秋戰国墓地」『考古』2002年第8期, pp. 14-24

寧夏文物考古研究所・寧夏固原博物館 1993「寧夏固原楊郎青銅文化墓地」『考古學報』1993年第1期, pp. 13-56

寧夏文物考古研究所 1995「寧夏彭堡于家莊墓地」『考古學報』1995年第1期, pp. 79-107

寧夏文物考古研究所・彭陽縣文物管理所 2016『王大戶与九龍山：北方青銅文化墓地（上）（下）』文物出版社

秦安縣文化館 1986「秦安縣歷年出土的北方系青銅器」『文物』1986年第2期, pp. 40-43

邵国田 1993「內蒙古敖漢旗發見的青銅器及有関遺物」『北方文物』1993年第1期, pp. 18-25

山西省考古研究所侯馬工作隊 1994「山西侯馬上馬墓地3号車馬坑發掘簡報」『文物』1988年第3期, pp. 35-49

山西省文物工作委員會晉東南工作組・山西省長治市博物館 1974「長治分水嶺 269・270号東周墓」『考古學報』1974年第2期, pp. 63-85

- 塔拉·梁京明 1980「呼魯斯太匈奴墓」『文物』1980年第7期, pp. 11-12
- 田広金 1976「桃紅巴拉的匈奴墓」『考古學報』1976年第1期, pp. 131-143
- 田広金・郭素新 1986「鄂爾多斯式青銅器研究」內蒙古文物工作隊 田広金・郭素新編『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社, pp. 3-199
- 吐魯番地区文物局 1998「鄯善洋海墓地出土文物」『新疆文物』1998年第3期, pp. 28-40, 44
- 王炳華 1986「新疆東部發見的幾批銅器」『考古』1986年第10期, pp. 887-890
- 王立新・塔拉・朱永剛 2010『林西井溝子—晚期青銅時代墓地的發掘与綜合研究』科学出版社, pp. 15-18
- 西北大学文化遺產保護与考古学研究中心・新疆文物考古研究所・哈密地区文物局 2014「2009年新疆伊吾县托背梁墓地發掘簡報」『考古与文物』2014年第4期, pp. 24-36
- 新疆維吾爾自治区文物考古研究所 2010「阿勒泰市、布爾津县古墓葬考古發掘簡報」『新疆文物』2010年第1期, pp. 47-54
- 新疆維吾爾自治区文化厅文物处・新疆大学歷史系文博干部專修班 1989「新疆哈密焉不拉克墓地」『考古學報』1989年第3期, pp. 325-362
- 新疆維吾爾自治区文物普查辦公室・伊犁地区文物普查隊 1990「伊犁地区文物普查報告」『新疆文物』1990年第2期, pp. 1-65
- 新疆文物考古研究所 1993「鄯善蘇貝希墓群一号墓地發掘簡報」『新疆文物』1993年第4期, pp. 1-13
- 新疆文物考古研究所 1989「鄯善古墓被盜案中部分文物之紹介」『新疆文物』1989年第4期, pp. 31-41
- 新疆文物考古研究所 1999a『新疆察吾呼大型氏族墓地發掘報告』東方出版社
- 新疆文物考古研究所 1999b「拜城县克孜爾吐爾水庫墓地第一次發掘」『新疆文物』1999年第3-4期, pp. 1-18
- 新疆文物考古研究所 2002「新疆拜城县克孜爾吐爾墓地第一次發掘」『考古』2002年第6期, pp. 14-29
- 新疆文物考古研究所 2010「2009年阿勒泰市克孜加爾墓地考古發掘簡報」『新疆文物』2010年第1期, pp. 35-46
- 新疆文物考古研究所 2012a「阜康市臭煤溝墓地考古發掘簡報」『新疆文物』2012年第1期, pp. 25-46
- 新疆文物考古研究所 2012b「阜康市優派能源墓群考古發掘報告」『新疆文物』2012年第1期, pp. 47-51
- 新疆文物考古研究所 2012c「木垒县干溝墓地考古發掘報告」『新疆文物』2012年第1期, pp. 56-74
- 新疆文物考古研究所 2012「鄯善县二塘溝墓地考古發掘簡報」『新疆文物』2012年第1期, pp. 92-99
- 新疆文物考古研究所 2012d「尼勒克县一級電駅墓地考古發掘簡報」『新疆文物』2012年第2

期, pp. 30-50

新疆文物考古研究所 2012e 「特克斯縣闊克蘇西 2 号墓群考古發掘簡報」『新疆文物』2012 年第 2 期, pp. 51-67

新疆文物考古研究所 2012f 「新源縣別斯托別墓地考古發掘報告」『新疆文物』2012 年第 2 期, pp. 68-75

新疆文物考古研究所 2012g 「塔城白楊河墓地考古發掘簡報」『新疆文物』2012 年第 2 期, pp. 76-83

新疆文物考古研究所 2012h 「裕民縣阿勒騰也木勒水庫墓地考古發掘報告」『新疆文物』2012 年 3-4 期, pp. 41-75

新疆文物考古研究所 2013a 「哈巴河縣東塔勒德墓地考古發掘簡報」『新疆文物』2013 年第 1 期, pp. 10-20

新疆文物考古研究所 2013b 「和靜縣莫呼查漢墓地考古發掘簡報」『新疆文物』2013 年第 1 期, pp. 33-58

新疆文物考古研究所 2013c 「和靜縣阿爾夏一號墓地考古發掘報告」『新疆文物』2013 年第 2 期, pp. 71-78

新疆文物考古研究所 2013d 「呼圖壁縣石門子墓地考古發掘簡報」『新疆文物』2013 年第 2 期, pp. 85-102

新疆文物考古研究所 2013e 「昌吉市努爾加墓地考古發掘簡報」『新疆文物』2013 年第 3-4 期, pp. 75-87

新疆文物考古研究所 2013f 『新疆薩恩薩伊墓地』文物出版社

新疆文物考古研究所 2017 「哈巴河縣阿依托汗一號墓群考古發掘報告」『新疆文物』2017 年第 2 期

新疆文物考古研究所・昌吉回族自治州文管所・吉木薩爾縣文物管理所 1994 「吉木薩爾縣大龍口古墓葬」『新疆文物』1994 年第 4 期, pp. 1-11

新疆文物考古研究所・哈密地區文管所 1994 「哈密-巴里坤公路改線考古調查」『新疆文物』1994 年第 1 期, pp. 5-11

新疆文物考古研究所・石河子市博物館 1994 「石河子市古墓」『新疆文物』1994 年第 4 期, pp. 12-19

新疆文物考古研究所・吐魯番地區博物館 2002 「新疆鄯善縣蘇貝希遺址及墓地」『考古』2002 年第 6 期, pp. 42-57

新疆文物考古研究所・吐魯番地區博物館 1994 「鄯善縣蘇貝希墓群三號墓地」『新疆文物』1994 年第 2 期, pp. 1-20

新疆文物考古研究所・吐魯番地區文物局 2004a 「鄯善縣洋海一號墓地發掘簡報」『新疆文物』2004 年第 1 期, pp. 1-27

新疆文物考古研究所・吐魯番地區文物局 2004b 「鄯善縣洋海二號墓地發掘簡報」『新疆文物』2004 年第 1 期, pp. 28-49

- 新疆文物考古研究所・吐魯番地区文物局 2004c「鄯善县洋海三号墓地发掘简报」『新疆文物』2004 年第 1 期, pp. 50-68
- 新疆文物考古研究所・乌鲁木齐市文物保护管理所 2003「乌鲁木齐市柴窝堡林场 II 号地点墓葬的发掘」『考古』2003 年第 3 期, pp. 27-37
- 新疆文物考古研究所・乌鲁木齐市文物管理所 2010「乌鲁木齐市萨恩萨伊墓地发掘简报」『新疆文物』2010 年第 2 期, pp. 1-24
- 新疆文物考古研究所・西北大学文化遗产与考古学研究中心 2009「新疆巴里坤县东黑沟遗址 2006~2007 年发掘简报」『考古』2009 年第 1 期, pp. 3-27
- 新疆维吾尔自治区博物馆・巴音郭楞蒙古自治州文物管理所・且末县文物管理所 2003「新疆且末扎滚鲁克一号墓地发掘报告」『考古学报』2003 年第 1 期, pp. 89-136
- 新疆维吾尔自治区文物考古研究所 2016『新疆莫呼查汗墓地』科学出版社
- 新疆吐鲁番学研究院・新疆文物考古研究所 2011「新疆鄯善洋海墓地发掘报告」『考古学报』2011 年第 1 期, pp. 99-150
- 延世忠 1994「宁夏固原出土青铜器」『文物』1994 年第 9 期, pp. 94-96
- 延世忠・李怀仁 1992「宁夏西吉发现一座青铜时代墓葬」『考古』1992 年第 6 期, pp. 573-575
- 杨宁国・祁悦章 1999「宁夏彭阳县近年出土的北方系青铜器」『考古』1999 年第 12 期, pp. 28-37
- 伊克昭盟文物工作队・内蒙古文物工作队 1986「西沟畔战国墓」『鄂尔多斯式青铜器』文物出版社, pp. 351-371
- 张家口市文物事业管理所, 宣化县文化馆 1987「河北宣化县小白阳墓地发掘报告」『文物』1987 年第 5 期, pp. 41-51
- 郑绍宗 1984「中国北方青铜短剑的分期及形制研究」『文物』1984 年第 2 期, pp. 37-49
- 郑绍宗 1994「长城地带发现的北方式青铜刀子及其有关问题」『文物春秋』1994 年第 4 期, pp. 28-48
- 周兴华 1989「宁夏中卫县狼窝子坑的青铜短剑墓群」『考古』1989 年第 11 期, pp. 971-980
- 庄浪县博物馆 2005「庄浪县邵平村出土一批青铜器」『文物』2005 年第 3 期, pp. 43-46
- 中国科学院考古研究所 1957『洛阳中州路』科学出版社
- 中国科学院考古研究所 1959『上村岭虢国墓地』科学出版社
- 中国社会科学院考古研究所・新疆维吾尔自治区阿克苏地区文物局・拜城县文物局 2014『拜城多岗墓地』文物出版社
- 中国社会科学院考古研究所新疆队 2006「新疆于田县流水青铜时代墓地」『考古』2006 年第 7 期, pp. 31-38
- 中国社会科学院考古研究所新疆队 2016「新疆于田县流水青铜时代墓地发掘简报」『考古』2016 年第 12 期, pp. 19-36
- 中国社会科学院考古研究所新疆队・新疆巴音郭楞蒙古自治州文管所 1987「新疆轮台群巴克墓葬第一次发掘简报」『考古』1987 年第 11 期, pp. 987-996
- 中国社会科学院考古研究所新疆工作队・新疆巴音郭楞蒙古自治州文管所 1991「新疆轮台群

巴克墓葬第二、三次發掘簡報」『考古』1991年第8期, pp. 684-703

英語【著者名 アルファベット順】

Kungurova N. Yu., Oborin Yu. V. 2013 A hoard found on the Uibat River, Minusinsk Basin, *Archaeology Ethnology & Anthropology of Eurasia*, vol.41, no.2, pp.126-136.

Rudenko S. I. 1970 *Frozen tombs of Siberia: the Pazyryk Burials of Iron Age Horsemen*, University of California, pp.117-120.

ドイツ語【著者名 アルファベット順】

Cugunov Von K. V., Parzinger H., Nagler A. 2010 *Der skythenzeitliche Furstenkurgan Arzan 2 in Tuva*, Verlag Philipp Von Zabern・Mainz.

論文・図録

中国語【著者名 ピンイン順】

艾克拜爾＝尼牙孜 2014「新疆出土的青銅至早期鉄器時代馬鐙的研究」『吐魯番學研究』第1期, pp. 108-124

郭 物 1999「青銅鍍在歐亞大陸的初伝」『歐亞學刊』第一輯, 中華書局, pp. 122-150

郭 物 2012「歐亞草原東部的考古發見与斯基泰的早期歷史文化」『考古』2012年第4期, pp. 56-69

郭 物 2012『新疆史前晚期社会的考古学研究』上海古籍出版社

韓建業 2007『新疆的青銅時代和早期鉄器時代文化』文物出版社

韓建業 2008『中国西北地区先秦時期的自然環境与文化發展』文物出版社, pp. 285-333, 381-440

井中偉 2011『早期中国青銅戈・戟研究』科学出版社, pp. 67-126

李 剛 2011『中国北方青銅器的欧亞草原文化因素』文物出版社, pp. 44-74

林 濤 2008「中国北方長城地帶遊牧文化帶的形成過程」『林濤學術文集（二）』, 科学出版社, pp. 39-75

呂學明 2010『中国北方地区出土的先秦時期銅刀研究』科学出版社, pp. 95-221

陝西省考古研究院 2009『陝北出土青銅器』第四卷 巴蜀書社, pp. 610-616, 642-689

单月英 2015「東周秦代中国北方地区考古学文化格局-兼論戎、狄、胡与華夏之間的互動-」『考古學報』第3期, pp. 303-343

邵会秋 2004「先秦時期北方地区金属馬銜研究」『边疆考古研究』第3輯, pp. 96-113

邵会秋 2007『新疆史前時期文化格局的演進及其与周隣地区文化的關係』吉林大学博士学位論文

- 邵会秋・楊建華 2013 「欧亜草原与中国新疆和北方地区的有銎戰斧」『考古』2013 年第 1 期, pp. 69-86
- 邵会秋・楊建華 2015 「从夏家店上層文化青銅器看草原金属之路」『考古』2015 年第 10 期, pp. 85-99
- 水 涛 2001 「論新疆地区發見的早期騎馬民族文化遺存」『中国西北地区青銅時代考古論集』科学出版社, pp. 87-98
- 田広金・郭素新編 1986 『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社, pp. 3-36
- 許 成・李進增 1993 「東周時期的戎狄」『考古學報』1993 年第 1 期, pp. 1-12
- 温泉県人民政府編 2008 『温泉古代草原文明』新疆電子音像出版社, pp. 25
- 烏恩岳斯図 2007 『北方草原 考古学文化研究—青銅時代至早期鉄器時代』科学出版社
- 烏恩岳斯図 2008 『北方草原 考古学文化比較研究—青銅時代至早期匈奴時期』科学出版社
- 吳曉筠 2002 「商至春秋時期中原地区青銅車馬器形式研究」『古代文明』第 1 卷, 文物出版社, pp. 180-277
- 楊建華 2009 「中国北方東周時期兩種文化遺存辨析—兼論戎狄与胡的關係—」『考古學報』第 2 期, pp. 155-183
- 楊建華 2011 「內蒙古先秦時代草原游牧文化研究的幾個問題」『草原文物』2011 年第 1 期, pp. 50-54
- 楊建華 2013 「略論秦文化与北方文化的關係」『考古与文物』2013 年第 1 期, pp. 45-51
- 楊建華・邵会秋・潘玲 2016 『欧亜草原東部的金属之路：絲綢之路与匈奴聯盟的孕育過程』上海古籍出版社, pp. 216-457
- 楊建華・包曙光 2014 「俄羅斯図瓦和阿爾泰地区的早期游牧文化」『西域研究』2014 年第 2 期, pp. 75-84
- 楊建華・邵会秋 2014 「商文化对中国北方以及欧亜草原東部地区的影響」『考古与文物』2014 年第 3 期, pp. 45-57
- 楊建華・邵会秋 2015 「匈奴聯盟与絲綢之路的孕育過程—青銅時代和早期鉄器時代中国北方与欧亜草原的文化交往—」『吉林大学社会科学學報』第 55 卷第 1 期, pp. 154-176
- 楊建華・張 盟 2012 「阿爾然大墓在欧亜草原早期鉄器時代的作用—兼論中東部文化的分界」『边疆考古研究』第 12 輯, pp. 221-234
- 翟德芳 1984 「北方地区出土之馬銜和馬鑣略論」『內蒙古文物考古』1984 年第 3 期, pp. 33-38
- 翟德芳 1988 「中国北方地区青銅短劍分群研究」『考古學報』1988 年第 3 期, pp. 277-300
- 朱鳳瀚 1995 『古代中国青銅器』南開大学出版社, pp. 125

日本語【著者名 五十音順】

- 諫早直人 2005 「朝鮮半島南部三国時代における轡製作技術の展開」『古文化談叢』第 54 集, 九州古文化研究会
- 諫早直人 2012 『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣

- 石川岳彦 2011 「青銅器と鉄器普及の歴史的背景」 設楽博己、藤尾慎一郎、松木武彦編『弥生時代の考古学 3 多様化する弥生文化』同成社
- 石川岳彦 2016 「東北アジア青銅器時代の年代」『季刊考古学』第 135 号
- 石川岳彦 2017 『春秋戦国時代 燕国の考古学』雄山閣
- 五木寛之・NHK 取材班編著 1989『エルミタージュ美術館 4 スキタイとシルクロードの文化』, 日本放送出版協会, pp. 23
- 江上波夫・水野清一 1935 「綏遠青銅器」『内蒙古・長城地帯』（東方考古学叢刊乙種第一冊）東亜考古学会, pp. 24-36, 38-47
- 艾克拜爾＝尼牙孜・田中裕子 2011 「トルファン盆地洋海墓地における墓と出土馬具の分析」『中国考古学』第 11 号, pp. 189-202
- エルミタージュ博物館・レニングラード 1969『スキタイとシルクロード美術展』, 日本経済新聞社, pp. 13-21
- 小田木治太郎 2005 「北方系長方形帯飾板の展開－西安北郊秦墓出土鑄型の分析から－」『中国考古学』第 5 号, pp. 79-94
- 小田木治太郎 2012 「燕山地域の北方青銅器文化墓の編年」『考古学雑誌』第 96 巻, 第 2 号, pp. 1-35
- 加藤九祚 1976 「スキト・シベリア文化の原郷－とくにアルジャン墓葬の発掘に関連して－」『江上波夫教授古稀記念論集 考古・美術編』山川出版社, pp. 265-280
- 川又正智 1994 『ウマ駆ける古代アジア』講談社, pp. 61-63, 99
- 川又正智 2006 「銜の発明」『漢代以前のシルクロード』雄山閣, pp. 84-100
- 後藤富男 1970 『騎馬遊牧民』近藤出版社, pp. 85
- 小林青樹 2014 「ユーラシア東部における青銅器文化－弥生青銅器の起源をめぐって－」『国立歴史民俗博物館報告』第 185 集, pp. 213-238
- 末崎真澄 2004 『ハミの発明と歴史』神奈川新聞社, pp. 3
- 杉山正明 1997 『遊牧民からみた世界史』日本経済新聞社, pp. 96-106
- 成美堂出版編集部 2017 『世界地図』成美堂出版
- 戴 珣 2016 「中央ユーラシア東部における青銅短剣の展開と地域間の関係」『中国考古学』第 16 号, pp. 175-195
- 高浜 秀 1979 「ソ連における先スキタイ文化の研究」『オリエント』第 22 巻第 2 号, pp. 100-158
- 高濱 秀 1980 「東京国立博物館保管 北方系の刀子」『MUSEUM』356
- 高浜 秀 1982 「オルドス青銅短剣の型式分類」『東京国立博物館紀要』18, pp. 94-130
- 高浜 秀 1993 「オルドス青銅器竿頭飾について」『MUSEUM』No. 513, pp. 4-19
- 高浜 秀 2003 「第一章 ユーラシア草原地帯東部における王権の成立」『古代王権の誕生 III 中央ユーラシア・西アジア・北アフリカ編』角川書店, pp. 13-27
- 高濱 秀 2010 「中央ユーラシアの複合弓－匈奴勃興以前の草原地帯東部を中心として－」『金

沢大学考古学紀要』31, pp.31-43

高濱 秀 2011「西周時代の骨角製の鏤の一種について」『金沢大学考古学紀要』32, pp. 1-12

高濱 秀 2014「中国初期のくつわをめぐって」『金沢大学考古学紀要』35, pp. 25-44

高濱 秀 2015「中国出土の竿頭飾新資料」『金沢大学考古学紀要』37, pp. 61-66

田中良之・松永幸男 1984「広域土器分布圏の諸相-縄文時代後期西日本における類似様式の並立-」『古文化談叢』第14集, pp. 81-117

田中良之・松永幸男 1992「土器文様の伝播と相位差」『Museum Kyushu』39, pp. 33-42

田中裕子 2011「新疆出土鏤の分類と編年」『中国考古学』第11号, pp. 155-170

チャイルド.V.G 著・近藤義郎・木村祀子訳 1976『考古学とは何か』岩波新書, pp. 187

張 允禎 2008「「鏤轡」からみた東アジアの馬具の系譜」『古代馬具からみた韓半島と日本』同成社, pp. 88-109

東京国立博物館 1997『大草原の騎馬民族-中国北方の青銅器』東京国立博物館, pp. 35-120

東京国立博物館 2005『中国北方系青銅器-東京国立博物館所蔵-』竹林舎, pp. 229-311

戸田智 1976「古墳時代の鉄鏤および弓の機能的分析」『古代学研究』1976年第79号

長谷川敦章 2013「テル型遺跡における住居の定住性・非定住性の検討に向けて-ユーフラテス河中流域テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の成果を中心に-」大沼克彦編『ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民』六一書房, pp. 126-136

林 俊雄 1996「2. 遊牧騎馬民族スキタイの侵入」『講座 文明と環境 第5巻 文明の危機-民族移動の世紀』朝倉書店, pp. 35-48

林 俊雄 2000「第一章 草原世界の展開」小松久男編『中央ユーラシア史』山川出版社, pp. 15-88

林 俊雄 2003「第三章 中央ユーラシア遊牧民の墓葬から見た王権の成立と発展」『古代王権の誕生Ⅲ 中央ユーラシア・西アジア・北アフリカ編』角川書店, pp. 46-69

林 俊雄 2006『グリヒインの飛翔-聖獣からみた文化交流-』雄山閣, pp. 178-219

林 俊雄 2007『スキタイと匈奴遊牧の文明』講談社

林 俊雄 2012「ユーラシアにおける人間集団の移動と文化の伝播」窪田順平監修 奈良間千之編『中央ユーラシア環境史1 環境変動と人間』臨川書店, pp. 164-208

林巳奈夫 1972『中国殷周時代の武器』京都大学人文科学研究所, pp. 3-96

林巳奈夫 1989『春秋戦国時代青銅器の研究-殷周青銅器綜覧三-』吉川弘文館, pp. 1-75

福岡市博物館・西日本新聞社 2005『アルタイの至宝展』西日本新聞社

藤川繁彦編 1999『中央ユーラシアの考古学』同成社, pp. 4

町田 章 2006『中国古代の銅剣』奈良文化財研究所 pp. 9-49, 77-162

松井 健 2001『遊牧という文化-移動の生活戦略』吉川弘文館, pp. 6-15

松田寿男 1975「シルクロード論」松田寿男博士古稀記念出版委員会編『東西文化交流史』雄山閣, pp. 27-44

松本圭太 2009「カラス式短剣の成立と展開」『古代文化』第61巻第1号, pp. 37-55

- 松本圭太 2011 「中国初期青銅器とセイマ・トルビノ青銅器群」 『中国考古学』 第 11 号, pp. 133-153
- 松本圭太 2012 「モンゴリアにおける青銅器様式の展開」 『中国考古学』 第 12 号, pp. 111-134
- 松本圭太 2013 「ユーラシア草原地帯東部における青銅器文化の研究」 九州大学大学院比較社会文化学府博士論文
- 松本圭太 2016 「初期遊牧民文化」 動物紋出現の意義」 『中国考古学』 第 16 号, pp. 151-174
- 宮本一夫 1985 「七国武器考ー戈・戟・矛を中心にしてー」 『古史春秋』 第二号 朋友書店
- 宮本一夫 1999a 「オルドス青銅器文化の地域性と展開（上）」 『古代文化』 第 51 巻 9 号, pp. 32-47
- 宮本一夫 1999b 「オルドス青銅器文化の地域性と展開（下）」 『古代文化』 第 51 巻 10 号, pp. 19-23
- 宮本一夫 2000 「中国古代北疆史の再構築」 『中国古代北疆史の考古学的研究』 中国書店, pp. 301-327
- 宮本一夫 2002 「隴山地域青銅器文化の変遷とその特徴」 『史淵』 139, pp. 143-174
- 宮本一夫 2005 『神話から歴史へー神話時代夏王朝ー』 講談社, p. 221
- 宮本一夫 2007 「漢と匈奴の国家形成と周辺地域ー農耕社会と遊牧社会の成立ー」 『東アジアと日本ー交流と変容ー統括ワークショップ報告書 九州大学 21 世紀 COE プログラム（人文科学）ー』, pp. 111-121
- 宮本一夫 2008a 「エルミタージュ美術館所蔵ミヌシンスク地方の青銅器」 『長城地帯青銅器文化の研究』 シルクロード学研究 vol. 29, pp. 141-156
- 宮本一夫 2008b 「外モンゴルの青銅器」 『長城地帯青銅器文化の研究』 シルクロード学研究 vol. 29, pp. 157-168
- 宮本一夫 2013 「有銕銅鏃の編年とその東北アジア青銅器文化における位置づけ」 岡内三真編『技術と交流の考古学』 同成社, pp. 130-323
- 宮本一夫 2014 「北方系帯飾板の出現と展開」 『ユーラシアの考古学 - 高濱秀先生退職記念論文集』 六一書房, pp. 49-63
- 宮本一夫 2015a 「中国鉄器生産開始の諸問題」 『中国考古学』 第 15 号, pp. 25-40
- 宮本一夫 2015b 「モンゴル高原の先史時代を探るー青銅器時代板石墓の発掘調査からー」 『東アジアの砂漠化進行地域における持続可能な環境保全』 花書院, pp. 101-134
- 宮本一夫 2016a 「モンゴル高原における青銅器時代板石墓の変遷と展開」 『史淵』 第 153 輯 九州大学大学院人文科学研究院, pp. 31-57
- 宮本一夫 2016b 「東アジア青銅器文化の潮流」 『季刊考古学』 第 135 号
- 宮本一夫 2018 「モンゴル青銅器時代墓制の展開ーヘレクスール文化の位置づけを中心にー」 『史淵』 第 155 輯
- 森安孝夫 2007 『シルクロードと唐帝国』 講談社, pp. 50-86
- 八木 聡 2014 「中国北方系青銅短剣の編年と地域間交流」 『ユーラシアの考古学 - 高濱秀

- 先生退職記念論文集』六一書房, pp. 129-143
- 柳生俊樹 2005 「レヴァント南部における青銅製袋穂鏃」 『オリエント』 第 48 巻第 1 号, pp. 117-139
- 安田喜憲 2004 『文明の環境史観』 中公叢書, pp. 103-143
- 山本忠尚 1970 「スキタイ動物意匠の起源と展開」 『古代学』 第 17 巻第 3 号
- 山本忠尚 1972 「スキタイ式轡の系譜」 『史林』 第 55 巻第 5 号
- 山本忠尚 1976 「アキナケース考」 『奈良国立文化財研究所 研究論集』 III, pp. 113-140
- 雪嶋宏一 1996 「コラム：サルマタイの西漸」 安田喜憲, 林俊雄編集『講座文明と環境第 5 巻 文明の危機ー民族移動の世紀』 朝倉書店
- 雪嶋宏一 1999 「ユーラシア草原の開発ー騎馬遊牧の起源と成立ー」 常木晃編『現代の考古学 3：食糧生産社会の考古学』 朝倉書店, pp. 216-237
- 雪嶋宏一 2006 「前 2 千年紀前半中央ユーラシアの円盤型鏃について」 『西アジア考古学』 7, pp. 21-34
- 雪嶋宏一 2008 『スキタイ騎馬遊牧国家の歴史と考古』 雄山閣, pp. 31-47
- 雪嶋宏一 2014 「黒海北岸草原地帯における青銅銜の始原について」 高濱秀先生退職記念論文編集委員会編『ユーラシアの考古学 高濱秀先生退職記念論文集』, pp. 249-262
- リン＝ホワイト著・内田星美訳 1985 「中世の技術と社会変動」 思索社
- 吉田順一 1975 「遊牧社会の発展に関する松田説とラティモア説」 松田寿男博士古稀記念出版委員会編『東西文化交流史』 雄山閣, pp. 186-200

英語【著者名 アルファベット順】

- Alekseev A. Yu, Bokovenko N. A., Boltrik Yu, Chugunov K. A., Cook G., Dergachev V. A., Kovalyukh N., Possnert G., Plicht J van der, Scott E. M., Sementsov A., Skripkin V., Vasiliev S., Zaitseva G. 2001 A chronology of the Scythian antiquities of Eurasia based on new archaeological and ¹⁴C data, *Radiocarbon*, vol.43, pp.1085-1107.
- Allard F., Erdenebaatar D. 2005 Khirigsuurs, ritual and mobility in the Bronze Age of Mongolia, *Antiquity*, vol.79, pp.547-563.
- Amzarakov P. 2011 A Scythian Epoch Horse Bridle in Minusinsk Hollow, *Himalayan and Central Studies*, vol.15 no.4, pp.16-19.
- Anthony, David W., Brown Dorcas R. 1991 The Origins of Horseback Riding, *Antiquity*, vol.65 no.246, pp.22-38.
- Anthony, David W., Vinogradov N. 1995 The birth of the chariot, *Archaeology*, vol.48 no.2, pp.36-41.
- Anthony, David W., Brown Dorcas R. 2011 The Secondary Products Revolution, Horse-Riding, and Mounted Warfare, *Journey of World Prehistory*, no.24, pp.131-160.
- Barfield T. 1992 *The Perilous Frontier: Nomadic Empires and China 221 BC to AD 1757*, Blackwell.

- ([美]巴菲爾德著・袁劍訳 2011 『危險的边疆:游牧帝国与中国』江蘇人民出版社, pp.1-40.)
- Barfield T. 2001 Steppe empires, China, and the Silk Route: Nomads as a force in international trade and politics. In Khazanov A., Wink A., *Nomads in the sedentary world*, Curzon, pp.234-249.
- Bashilov V. A., Yablonsky L.T. 2000 Some Current Problems Concerning the History of Early Iron Age Eurasian Steppe Nomadic Societies, In Jeannine Davis-Kimball, Eileen M. Murphy, Ludmila Koryakova, Leonid T. Yablonsky, *Kurgans, Ritual Sites, and Settlements Eurasian Bronze and Iron Age*, BAR International Series.
- Beisenov A. Z., Svyatko S. V., Kassenalin A. E., Zhambulatov K. A., Duisenbai D., Reimer P. J. 2016 First Radiocarbon Chronology for the Early Iron Age Sites of Central Kazakhstan (Tasmola Culture and Korgantas Period), *Radiocarbon*, vol.58, pp.1-13.
- Binford 1962 Archaeology as anthropology, *American Antiquity*, vol.28 no.2, pp.217-225.
- Binford 1965 Archaeological systematics and the study of culture process, *American Antiquity* vol.31 no.2, pp.203-210.
- Blyakharchuk T. A., Chernova N. A. 2013 Vegetation and climate in the Western Sayan Mts according to pollen data from Lugovoe Mire as a background for Prehistoric cultural change in southern Middle Siberia, *Quaternary Science Review*, no.75, pp.22-42.
- Bokovenko 1995 Scythian Culture in the Altai Mountains, *Nomads of the Eurasian Steppes in the Early Iron Age*, Zinat Press, pp.285-295.
- Bokovenko 1996 Asian influence on European Scythia, *Ancient Civilizations*, vol.3 no.1, pp.97-122.
- Bokovenko 2000 The origins of horse riding and the development of ancient central Asian nomadic riding harnesses, In Jeannine Davis-Kimball, Eileen M. Murphy, Ludmila Koryakova, Leonid T. Yablonsky, *Kurgans, Ritual Sites, and Settlements: Eurasian Bronze and Iron Age*, BAR International Series, pp.304-310.
- Bokovenko 2004 Migrations of early nomads of the Eurasian steppe in a context of climatic changes, In E.Marian Scott, Andrey Yu. Alekseev, Ganna Zaitseva, *Impact of the Environment on Human Migration in Eurasia*, NATO Science Series.
- Bokovenko 2005 The emergence of the Tagar culture, *Antiquity*, vol.80, pp.860-879.
- Chernykh 1992 *Ancient metallurgy in the USSR-The Early Metal Age*. Translated by Sarah Wright, Cambridge University press, pp.235-252.
- Christian D. 1998 *A history of Russia, Central Asia and Mongolia Volume I Inner Eurasia from Prehistory to the Mongol Empire*, Blackwell, pp.123-162.
- Chugunov K. V., Partsinger H., Nagler A. 2004 Chronology and Cultural Affinity of the Kurgan Arzhan-2 Complex According to Archaeological Data, *Impact of the Environment on Human Migration in Eurasia*, Earth and Environment Science vol.42, pp.1-7.
- Clarke D. L. 1978a Culture systems: the model, *Analytical Archaeology*, Routledge, pp.42-83.
- Clarke D. L. 1978b Material culture systems: attribute and artefact, *Analytical Archaeology*,

Routledge, p.149-204.

Clarke D. L. 1978c Cultural morphology and cultural ecology: the setting, *Analytical Archaeology*, Routledge, pp.84-148.

Cybiktarov A. D. 2003 Central Asia in the Bronze and Early Iron Ages (Problem of Ethno-Cultural history of Mongolia and the Southern Trans-Baikal Region in the Middle 2nd-Early 1st Millennia BC), *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 1 (13), pp.80-97.

Davis-Kimball J., Bashilov V. A., Yablonsky L. T. 1995 *Nomads of the Eurasian Steppes in the Early Iron Age*. Zinat Press.

Di Cosmo 2002 *Ancient China and its enemies: The rise of nomadic power in East Asian history*, Cambridge University Press.

Dietz U. L. 2003 Horseback Riding: Man's Access to Speed?, Edited by Marsha Levine, Colin Renfrew, Katie Boyle, *Prehistoric Steppe adaptation and the horse*, Short Run Press, pp.189-199.

Frachetti M. D. 2011 Migration concepts in central Eurasian Archaeology, *Annual Review of Anthropology*, vol.40, pp.195-212.

Frachetti M. D. 2012 Multiregional Emergence of Mobile Pastoralism and Nonuniform Institutional Complexity across Eurasia, *Current Anthropology*, vol.53 no.1, pp.2-38.

Friis-Hansen J. 1990 Mesolithic cutting arrows: functional analysis of arrows used in the hunting of large game, *Antiquity*, no.64.

Geel B. V., Bokovenko N. A., Burova N. D., Chugunov K. V., Dergachev V. A., Dirksen V. G., Kulkova M., Nagler A., Parzinger H., Plicht J. van der, Vasiliev S. S., Zaitseva G. I. 2004 Climate change and the expansion of the Scythian culture after 850 BC: a hypothesis, *Journal of Archaeological Science*, no.31, pp.1735-1742.

Gimbutas M. 1970 Proto-Indo-European culture: the Kurgan culture during the fifth, fourth, and third millennia B. C., Cardona G., Hoenigswald H., Scnn A., *Indo-European and Indo-Europeans*, Pennsylvania University Press, pp. 162-195.

Gruner J., Leehmkuhl F., Walther M. 2000 Paleoclimatic evolution of the Uvs Uur basin and adjacent areas (western Mongolia). *Quaternary International* no.65/66, pp.171-192.

Gryaznov 1969 *Southern Siberia*, Archaeologia Mundi, Geneva: Nagel Publishers.

Hanks B. 2002 The Eurasian steppe "Nomadic World" of the first millenium BC: inherent problems within the study of Iron Age nomadic groups, In Boyle K., Renfrew C., Levine M., *Ancient Interactions: East and West in Eurasia*, McDonald Inst. Monogr, pp.183-197.

Hanks B., Epimakhov A., Renfrew C. 2007 *Towards a refined chronology for the Bronze Age of the Southern Urals*, Russia: Antiquity, pp.333-367.

Hanks B. 2010 Archaeology of the Eurasian Steppes and Mongolia, *Annual Review of Anthropology* vol.39, pp.469-486.

Hayashi Toshio 2010 The origin of nomadic powers in the Eurasian Steppes, Academia Turfanica ed.

Essays on the Third International Conference on Turfan studies: The origins and migrations of Eurasian nomadic peoples, 上海古籍出版社, pp.346-352.

Honeychurch W. 2013 The nomad as State Builder: Historical Theory and Material Evidence from Mongolia, *Journey of World Prehistory*, no.26, pp.283-321.

Hsu Yiu-Kang, Bray P. J., Hommel P., Pollard A. M., Rawson J. 2016 Tracing the flows of copper and copper alloys in the Early Iron Age societies of the eastern Eurasian steppe, *Antiquity*, vol.90 no.350, pp.357-375.

Khazanov A. M. 1994 *Nomads and the Outside World*, the University of Wisconsin Press, pp.32.

Koryakova L., Epimakhov A. 2007 *The Urals and Western Siberia in the Bronze and Iron Ages*, Cambridge University Press, pp.178-184.

Koryakova L. 2010 The Eastern Factors in the Development of Eurasian Nomadic Culture, Academia Turfanica ed. *Essays on the Third International Conference on Turfan studies: The origins and migrations of Eurasian nomadic peoples*, 上海古籍出版社, pp.353-367.

Koulikova 2004 Application of geochemistry to paleoenvironmental reconstruction in Southern Siberia, *Impact of the Environment on Human Migration in Eurasia*, Kluwer Academic Publishers, pp. 255-274.

Kuzmin N. Yu. 2008 Prospects for correlating radiocarbon and archaeological chronologies of the Scythian and Hunno-Sarmatian age burials in the Sayan-Altai region, *Archaeology Ethnology & Anthropology of Eurasia*, no.35-3, pp.77-87.

Kuznetsov P. 2006 The emergence of Bronze Age chariots in Eastern Europe, *Antiquity*, vol.80 no.309, pp.638-645.

Lattimore O. 1940 *Inner Asian Frontiers of China*, Am. Geogr. Soc, pp.511-512.([美]拉铁摩爾著 · 唐曉峰譯 2005 『中国的亚洲内陆边疆』江蘇人民出版社, pp. 328-329).

Li Xiaoqiang, Zhou Weijian, An Zhisheng and John Dodson 2003 The vegetation and monsoon variations at the desert-loess transition belt at Midiwan in northern China for the last 13 ka, *The Holocene* no.13.5, pp.779-784.

Littauer M. A. 1969 Bits and Pieces, *Antiquity*, vol.43 no.172, pp.289-300.

Loehr M.1949 Ordos Daggers and Knives: New Material Classification and Chronology First Part: Daggers, *Artibus Asiae*, vol.12, pp.77-163.

Loehr M. 1951 Ordos Daggers and Knives: New Material Classification and Chronology Second Part: Knives, *Artibus Asiae*, vol.14, pp.77-162.

Mayewski P. A., Meeker L. D., Twickler M. S., Whitlow S., Yang Q., Lyons W.B., Prentice M. 2004 Holocene climate variability. *Quaternary Research*, no.62, pp.243-255.

Mei Jianjun 2000 *Copper and Bronze Metallurgy in Late Prehistoric Xinjiang*, BAR International Series 865.

Murphy E. M., Schulting R., Beer N., Chistov Y., Kasparov A., Pshenitsyna M. 2013 Iron Age

pastoral nomadism and agriculture in the eastern Eurasian steppe: implication from dental palaeopathology and stable carbon and nitrogen isotopes, *Journal of Archaeological Science*, no.40, pp.2547-2560.

Olsen S. 2003 The exploitation of horses at Botai, Kazakhstan, In M. Levine, C. Renfrew, & K. Boyle, *Prehistoric steppe adaptation and the horse*, Cambridge: McDonald Institute Monographs, pp. 83-104.

Outram, A. K., Stear, N. A., Bendrey, R., Olsen, S., Kasparov, A., Zaibert, V., et al. 2009 The earliest horse harnessing and milking, *Science*, no.323, pp.1332–1335.

Peck J. A., Khosbayar P., Fowell S. J., Pearce R. B., Ariunbileg S., Hansen B. C. S., Soninkhishig 2002 Mid to date Holocene climate change in north central Mongolia as recorded in the sediments of lake telmen, *Palaeogeography Palaeoclimatology Palaeoecology*, no.183, pp.135-153.

Pope 1974 *Bows and Arrows*, University of California Press.

Rawson J. 2017 China and the steppe: reception and resistance, *Antiquity*, vol.91 no.356, pp.375-388.

Samashevich S. Z., Serikovich Z. R. 2015 A Horse In A Burial-Memorial Ceremony of Ancient Nomads in Kazakh Altay Region, *European Journal of Science and Theology*, vol.11 no.4, pp.243-256.

Sinor D. 1990 *The Cambridge History of Early Inner Asia*, Cambridge University Press, pp.1-18.

Svyatko S. V., Mallory J. P., Murphy E. M., Polyakov A. V., Reimer P. J., Schulting R. J. 2009 New Radiocarbon Dates and A Review of The Chronology of Prehistoric Populations from the Minusinsk Basin Southern Siberia Russia, *Radiocarbon*, vol.51, pp.243-273.

Taylor W. T. T., Bayarsaikhan J., Tuvshinjargal T. 2015 Equine cranial morphology and the identification of riding and chariotry in late Bronze Age Mongolia, *Antiquity*, vol.89 no.346, pp.854-871.

Topal D., Golec M. 2017 Vekerzug culture and new finds of Scythian akinakai in Moravia, *Tyragetia* vol.11(26) nr.1, pp.7-22.

Tsagaan Törbat, Pierre-Henri Giscard, Dunbüree Batsükh 2009 First Excavation of Pazyryk Kurgans in Mongolian Altai, *Current Archaeological Research in Mongolia*. Vor-und Frühgeschichtliche Archäologie Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität Bonn, pp.221-230.

Travis J. 2008 Third international symposium on biomolecular archaeology: Trail of mare's milk leads to first tamed horses. *Science*, no.3229(5900), p.368.

Unterlander M., Palstra F., Lazaridis L., Pilipenko A., Hofmanova Z., Grob M., Sell C., Blocher J., Kirsanow K., Rohland N., Rieger B., Kaiser E., Schier W., Pozdniakov D., Khokhlov A., Georges M., Wilde S., Powell A., Heyer E., Currat M., Reich D., Samashev Z., Parzinger H., Molodin V. I., Burger J. 2017 Ancestry and demography and descendants of Iron Age nomads of the Eurasian Steppe, *Nature Communications* DOI10.1038/ncomms14615.

- Wagner M., Wu Xinhua, Tarasov P., Aisha A., Ramsey C. B., Schultz M., Schultz T., Gresky J. 2011 Radiocarbon-dated archaeological record of early first millennium B.C. mounted pastoralists in the Kunlun Mountains, China, *PNAS*, vol.108 no.38 pp.15733-15738.
- Watson W. 1971 *Cultural Frontiers in Ancient East Asia*, EDINGURGH, pp.122.
- Zaitseva G. I., Chugunov K. V., Alekseev A. Yu, Dergachev V. A., Vasiliev S. S., Sementsov A. A., Cook G., Scott E. M., Plicht J van der, Parzinger H., Nagler A., Jungner H., Sonninen E., Bourova N. D. 2007 Chronology of key barrows belonging to different stages of the Scythian Period in Tuva (Arzhan-1 and Arzhan-2 Barrows), *Radiocarbon*, vol. 49, pp.645-658.
- Zaitseva G. I., Geel B. van, Bokovenko N. A., Chugunov K. V., Dergachev V. A., Dirksen V. G., Koulikova M. A., Nagler A., Parzinger G., Plicht J van der, Bourova N. D., Lebedeva L. M. 2004 Chronology and possible links between climatic and cultural change during the first millennium BC in southern Siberia and central Asia, *Radiocarbon*, vol.48 nr 1, pp.259-276.
- Zdanovich G., Zdanovich D. 2002 The "country of towns" of Southern Trans-Urals and some aspects of steppe assimilation in the Bronze Age. In Boyle K., Renfrew C., Levine M., *Ancient Interactions: East and West in Eurasia*, McDonald Inst. Monogr. pp.249-263.

ロシア語【著者名 アルファベット順】

- Акишев К. А., Кушаев Г.А. 1963 Древняя культура саков и усуней долины реки Или. АЛМА-АТА.
- Грязнов М. П. 1947 Памятники майэмирского этапа эпохи ранних кочевников на Алтае, *КСИИМК* Вып18, pp.9-17.
- Грязнов М. П. 1968 Тагарская культура. *История Сибири*. Л. Наука.
- Грязнов М. П. 1980 *Аржан Царский курган раннескифского времени*. Наука.
- Грушин С. П., Папин Д. В., Позднякова О. А., Тюрина Е. А., Федорук А. С., Хаврин С. В. 2009 *Алтай в системе металлургических провинций энеолита и бронзового века*. Издательство Алтайского государственного университета.
- Грач А. Д. 1980 *Древние кочевники в центре Азии*, Наука.
- Зайцевой Г. И., Боковенко Н. А., Алексеева А. Ю., Чугунова К. В., Скотт Е. М. 2005 *Евразия в скифскую эпоху, Радиоуглеродная и археологическая хронология*. Санкт-Петербург.
- Исмагилов Р. Б. 1988 Погребение Большого Гумаровского кургана в Южном Приуралье и Приуралье и проблема происхождения скифской культуры. *Археологический сборник* 29, pp.29-47.
- Иессен А. А. 1953 К вопросу о памятниках VIII-VII вв. До н. э. на юге Европейской части СССР. *Советская Археология* 18
- Итина М. А., Полонский Л. Т. 1997 *Саки Нижней Сырдарьи*, Росспэи.

- Кадырбаев М. К. 1966 Памятники тасмолинской культуры. *Древняя культура Центрального Казахстана*.
- Кирюшин Ю. Ф., Тишкин А. А. 1997 *Скифская эпоха Горного Алтая. Часть I. Культура населения в раннескифское время*. Издательство Алтайского государственного университета. Барнаул.
- Кирюшин Ю. Ф., Тишкин А. А. (ред.) 1998 *Снаряжение верхового коня на Алтае в раннем железном веке и средневековье*. Барнаул.
- Лазаретов И. П. 2007 Памятники баиновского типа и тагарская культура. *Археологические Вести* 14 Наука pp.93-105.
- Мелюкова А. И. 1964 *Вооружение Скифов*, Наука.
- Мошкова М. Г. 1992 *Степная полоса Азиатской части СССР в Скифо-Сарматское Время*, Наука.
- Тереножкин А. И. 1965 Предскифский период на Днепровском Правобережье (1961). Основы хронологии предскифского периода. *Советская Археология* 1
- Тереножкин А. И. 1975 Киммерийские мечи и кинжалы. *Скифский мир*.
- Тереножкин А. И. 1976 Киммерийцы. Наукова думка. Киев.
- Хазанов А. М. 1975 Социальная история скифов: основные проблемы развития древних кочевников евразийских степей. Москва: Наука.
- Новгородова Э. А. 1970. *Центральная Азия и карасукская проблема*. Наука.
- Цыбиктаров А. Д. 1998 Куптура плиточных могил монголии и забайкалья. Издательство бурятского госуниверситета. Улан-Уде, pp.126-128.
- Членова Н. Л. 1967 *Происхождение и Ранняя История Племен Тагарской Культуры*, Наука.
- Членова Н. Л. 1972 *Хронология памятников карасукской эпохи*. Наука.
- Чугунов К. В. 2011 Аржан-2: реконструкция этапов функционирования погребально-поминального комплекса и некоторые вопросы его хронологии, *Российский Археологический Ежегодник*.
- Вишневская О. А. 1973 Культура сакских племён низовьев Сырдарьи в VII-V вв. до н.э. По материалам Уйгарака.